朝酌川河川改修工事に伴う

タテチョウ遺跡発掘調査報告書

— I —

昭和54年3月

教育委員会

タテチョウ遺跡周辺の航空写真

序

島根県教育委員会は、島根県土木部の委託を受け、昭和52年度朝酌川の河川改修工事に伴い、松江市西川津町所在のタテチョウ遺跡の発掘調査を実施し、翌昭和53年に出土遺物等の整理、検討を行ないました。

この報告書は、その二ケ年にわたる調査結果をとりまとめたものであります。本遺跡で県下では稀にみる大規模な低湿地性遺跡で、各種厖大な量の出土遺物をみ、かつそれらは、各時代のものが混在した状況で集積するという、これまで私共の経験したことのない遺跡であり、調査は大変難渋をきわめました。それらを限られた期間内に整理し、印刷に付さなければならないということで、内容に不備な点が多少あると思いますが、本報告を通して多少なりとも、広く一般の埋蔵文化財に対する理解と関心が高まれば、幸いに存じます。

なお、本書には自然科学の方面からの専門的なご教示もいただきました。

本書の刊行にあたり、ご協力をいただいた関係各位に衷心よりお礼を申しあげます。

昭和54年3月

島根県教育委員会
教育長　水　津　卓　夫

例　　言

1　本書は、昭和52年度、昭和53年度の２カ年にわたって島根県教育委員会が県土木部の委託を受けて実施した、朝酌川の河川改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　調査地点は、島根県松江市西川津町大字橋本字竪町で、次のような調査組織、構成で調査を行った。

事　務　局　　遠藤　豊（文化課課長）、藤間　亨（文化課課長補佐）、森山敏夫（文化課課長補佐）、京谷　昇（文化振興係係長）、

発掘調査員　　蓮岡法暲（昭和52年度埋蔵文化財係係長）、勝部　昭（昭和53年度埋蔵文化財係係長）、前島己基（文化課主事）、川原和人（同）、卜部吉博（同）、松本岩雄（同）、三宅博士（同嘱託）、西尾克己（同）

調査補助員　　平野芳英（熊本大学研究生）、田口琢磨・角　真二（島根大学学生）

調査協力者　　村上　勇（島根県立博物館学芸員）、内田律雄（青山学院大学学生）、柳浦俊一・片岡詩子(国学院大学学生)、永見　英（明治大学学生）、田根裕美子

なお、遺物整理には、上記の者のほかに次の者が参加した。

竹内信枝、桑原京美（相模女子大学学生）、広江耕史（駒沢大学学生）

3　調査および整理にあたっては、次の方々からご指導、ご助言をいただいた。（敬称略・順不同）

山本　　清（島根大学名誉教授）

小島清兵衛（島根県文化財保護審議会委員）

勝部　正郊（　　〃　　）

町田　　章（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部）

佐原　　真（　　〃　　）

西　　弘海（　　〃　　）

間壁　忠彦（倉敷考古館）

間壁　葭子（　　〃　　）

藤田　憲司（　　〃　　）

大西　郁夫（島根大学理学部）

宍道　正年（平田市立久多美小学校）

4　自然遺物の同定および分析は、次の方々のご協力をいただき、その結果を収録した。（敬称略・順不同）

獣骨同定

金子　浩昌（早稲田大学考古学研究室）

骨角器同定

牛沢百合子（早稲田大学考古学研究室）

植物種子同定

粉川　昭平（大阪市立大学理学部）

花粉分析

大西郁夫（島根大学理学部）

5　掲載図面は石井悠・前島己基・卜部吉博・松本岩雄（文化課主事）、三宅博士（現八雲立つ風土記の丘）、西尾克己・熊野高裕（文化課嘱託）、小原明美、村上紀美子、林原里江、柳浦俊一、余村達也、山口耕、奥村忠孝、広江耕史、桑原京美の作図・製図にかかり、写真は、三宅博士、松本岩雄、有限会社井上松影堂によったものである。

6　報告書の作成は、調査および遺物整理に携った者の集団討議をもとに、各章を分担して執筆し（各章ごとに執筆者を記す）、全体の編集は前島己基、平野芳英、松本岩雄がこれを行なった。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　調査の経過……2

Ⅲ　位置と歴史的環境……4

Ⅳ　遺跡の概要……6

(1)　第Ⅰ調査区……7

(2)　第Ⅱ調査区……7

(3)　第Ⅲ調査区……9

(4)　第Ⅳ調査区……10

Ⅴ　出土遺物の考古学的観察……11

(1)　縄文式土器……11

(2)　弥生式土器……40

(3)　土師器……99

(4)　須恵器……125

(5)　石　器……135

(6)　木製品……143

(7)　土製品……167

(8)　鹿角製品及び鹿角加工品……牛沢百合子……170

(9)　特殊遺物……174

Ⅵ　出土遺物の自然科学的観察……179

(1)　出土種子類の観察……粉川　昭平……180

(2)　花粉の分析……大西　郁夫……188

(3)　脊椎動物遺体……金子　浩昌……194

Ⅶ　総　括……200

挿　図　目　次

第１図　第Ⅰ調査区発掘風景……2
第２図　調査区配置図……2・3
第３図　第Ⅲ調査区発掘風景……3
第４図　遺跡の位置と周辺の遺跡……4・5
第５図　第Ⅰ調査区11～13ライン出土主要遺物の垂直分布……7
第６図　第Ⅱ調査区11～13ライン出土主要遺物の垂直分布……8
第７図　第Ⅲ調査区11～13ライン出土主要遺物の垂直分布……9
第８図　第Ⅰ・Ⅱ調査区土層図……10・11
第９図　第Ⅲ・Ⅳ調査区土層図……10・11
第10図　第Ⅲ調査区遺物等出土状態……10・11
第11図　縄文式土器拓影（早期）……12
第12図　縄文式土器拓影（前期１）……14
第13図　縄文式土器拓影（前期２）……15
第14図　縄文式土器拓影（後期１）……17
第15図　縄文式土器拓影（後期２）……18
第16図　縄文式土器拓影（晩期１）……21
第17図　縄文式土器拓影（晩期２－１）……22
第18図　縄文式土器拓影（晩期２－２）……23
第19図　縄文式土器拓影（晩期２－３）……24
第20図　縄文式土器拓影（時期不明）……26
第21図　弥生式土器実測図(1)……42
第22図　弥生式土器実測図(2)……43
第23図　弥生式土器実測図(3)……44
第24図　弥生式土器拓影(1)……45
第25図　弥生式土器実測図(4)……47
第26図　弥生式土器実測図(5)……48
第27図　弥生式土器実測図(6)……49
第28図　弥生式土器拓影(2)……50
第29図　弥生式土器実測図(7)……51
第30図　弥生式土器実測図(8)……52
第31図　弥生式土器実測図(9)……54
第32図　弥生式土器実測図(10)……55
第33図　弥生式土器拓影(3)……56
第34図　弥生式土器実測図(11)……59
第35図　弥生式土器実測図(12)……60

第36図　弥生式土器実測図(13)…… 63
第37図　弥生式土器実測図（ミニチュア土器）…… 64
第38図　土師器実測図(1)…… 101
第39図　土師器実測図(2)…… 102
第40図　土師器実測図(3)…… 104
第41図　土師器実測図(4)…… 105
第42図　土師器実測図（小型壷・手捏土器）…… 106
第43図　土師器実測図（高坏形土器）…… 108
第44図　土師器実測図（低脚坏）…… 109
第45図　土師器実測図（器台形土器）…… 109
第46図　土師器実測図（鉢・坏形土器）…… 110
第47図　土師器実測図（把手付壷形土器）…… 111
第48図　土師器・埴輪実測図…… 112
第49図　須恵器実測図(1)…… 126
第50図　須恵器実測図(2)…… 127
第51図　石器実測図(1)…… 135
第52図　石器実測図(2)…… 138
第53図　石器実測図(3)…… 139
第54図　石器実測図(4)…… 140
第55図　木製品実測図…… 145
第56図　曲物実測図…… 148
第57図　火鑽臼実測図…… 149
第58図　木製品実測図…… 151
第59図　木製品実測図…… 153
第60図　木製品実測図…… 155
第61図　田下駄実測図…… 156
第62図　鋤状木製品実測図…… 157
第63図　丸木弓・櫓状木製品実測図…… 158
第64図　木製品実測図…… 160
第65図　木製品実測図…… 161
第66図　紡錘車実測図…… 167
第67図　土錘・土玉実測図…… 167
第68図　土馬実測図…… 168
第69図　円板状土製品実測図…… 169
第70図　鹿角製釣針鈎先部分…… 170
第71図　小浜洞穴出土の釣針…… 171
第72図　長崎県脇岬遺跡出土の鈎先・軸実測図…… 171

第73図　鹿角切断品実測図及び写真……172
第74図　鹿角枝からの釣針作出模式図……173
第75図　鹿角の角尖部切断品……173
第76図　中空有孔の土製品（陶塤）実測図……175
第77図　銅鐸舌様の石製品実測図……176
第78図　磨製石剣、磨製石戈等実測図……177
第79図　第Ⅲ調査区北壁のスケッチ……188

表　目　次

表1　縄文式土器一覧表……29
表2　弥生式土器出土点数一覧……40
表3　弥生前期壷の文様構成……41
表4　弥生式土器一覧表……66
表5　土師器一覧表……114
表6　須恵器一覧表……130
表7　石鏃一覧表……142
表8　木製品一覧表……163
表9　第Ⅲ調査区北壁の花粉ダイヤグラム……190
表10　第Ⅱ調査区西壁の花粉ダイヤグラム……191
表11　主要花粉の消長とイネ科花粉の粒径分布およびＳＢ－１との対応……192
表12　出土獣骨のグリッド別出土量表……198

図　版　目　次

本文対照頁
巻頭図版　タテチョウ遺跡周辺の航空写真……4
図版１－１　遺　跡　遠　望……5
図版１－２　遺　跡　遠　望……5
図版２－１　第Ⅰ調査区発掘前の状況……6
図版２－２　第Ⅰ調査区の発掘……6
図版３－１　第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ調査区発掘前の状況……6
図版３－２　第Ⅲ調査区の発掘……9
図版４－１　第Ⅰ調査区西壁の土層……7
図版４－２　第Ⅲ調査区北壁の土層……8
図版５－１　第Ⅱ調査区北壁の土層……7

本文対照頁

図版５－２　第Ⅱ調査区西壁の土層……7
図版６－１　第Ⅱ調査区小杭列……7
図版６－２　第Ⅱ調査区小杭列……7
図版７－１　第Ⅲ調査区しがらみ状杭列遺構……9
図版７－２　第Ⅲ調査区しがらみ状杭列遺構……9
図版８　第Ⅲ調査区しがらみ状杭列遺構……9
図版９－１　第Ⅲ調査区しがらみ状杭列遺構細部……9
図版９－２　第Ⅲ調査区しがらみ状杭列遺構細部……9
図版10－１　第Ⅲ調査区杭列遺構……9
図版10－２　第Ⅲ調査区杭列遺構……9
図版11－１　第Ⅲ調査区の石礫散在状況……9
図版11－２　第Ⅲ調査区の石礫散在状況……9
図版12－１　第Ⅲ調査区木片集積状況……9
図版12－２　第Ⅲ調査区木片集積細部……9
図版13－１　第Ⅲ調査区南側拡張区……9
図版13－２　第Ⅲ調査区南側拡張区……9
図版14－１　第Ⅲ調査区南側拡張区……9
図版14－２　第Ⅲ調査区南側拡張区細部……9
図版15－１　第Ⅰ調査区遺物出土状況……7
図版15－２　第Ⅰ調査区遺物出土状況……7
図版16－１　第Ⅰ調査区遺物出土状況……7
図版16－２　第Ⅱ調査区遺物出土状況……7
図版17－１　縄文式土器出土状況……11
図版17－２　弥生式土器出土状況……40
図版18　弥生式土器出土状況……40
図版19－１　土師器出土状況（第Ⅰ調査区）……99
図版19－２　須恵器出土状況（第Ⅲ調査区）……125
図版20－１　須恵器出土状況（第Ⅲ調査区）……125
図版20－２　須恵器出土状況（第Ⅲ調査区）……125
図版21－１　杓文字状木製品出土状況（第Ⅰ調査区）……159
図版21－２　有歯板状木製品出土状況（第Ⅳ調査区）……158
図版21－３　加工木材出土状況（第Ⅱ調査区）……143
図版22－１　鋤状木製品出土状況（第Ⅰ調査区）……154
図版22－２　蓋、杭出土状況（第Ⅲ調査区）……147
図版23－１　櫓状木製品出土状況（第Ⅲ調査区）……156
図版23－２　荷ない棒状木製品出土状況（第Ⅲ調査区）……159
図版23－３　田下駄状木製品出土状況（第Ⅰ調査区）……152

本文対照頁

図版23—4　蓋出土状況（第Ⅲ調査区）…… 147
図版24—1　小判形木製品出土状況（第Ⅱ調査区）…… 158
図版24—2　楔状木製品出土状況（第Ⅲ調査区）…… 150
図版24—3　火鑽臼出土状況（第Ⅰ調査区）…… 149
図版24—4　框状木製品出土状況（第Ⅰ調査区）…… 152
図版25—1　土馬出土状況（第Ⅲ調査区）…… 168
図版25—2　黒漆地漆絵椀出土状況（第Ⅱ調査区）…… 144
図版26—1　中空有孔の土製品（陶塤）出土状況（第Ⅱ調査区）…… 174
図版26—2　銅鐸舌様の石製品出土状況（第Ⅲ調査区）…… 176
図版26—3　磨製石剣出土状況（第Ⅱ調査区）…… 176
図版27　縄文式土器（早期）…… 13
図版28　縄文式土器（前期）…… 13
図版29　縄文式土器（後期）…… 19
図版30　縄文式土器（晩期１、２）…… 20
図版31　縄文式土器…… 27
図版32　弥生式土器壷…… 41
図版33　弥生式土器壷…… 46
図版34—1　弥生式土器甕、壷、鉢…… 52
図版34—2　弥生式土器壷…… 46
図版35—1　弥生式土器壷…… 46
図版35—2　弥生式土器壷…… 46
図版36—1　弥生式土器壷…… 46
図版36—2　弥生式土器壷…… 46
図版37—1　弥生式土器壷…… 46
図版37—2　弥生式土器壷…… 46
図版38—1　弥生式土器壷（削り出し突帯）…… 46
図版38—2　弥生式土器壷（内面突帯）…… 46
図版39—1　弥生式土器甕…… 50
図版39—2　弥生式土器甕…… 50
図版40—1　弥生式土器甕…… 50
図版40—2　弥生式土器甕…… 50
図版41—1　弥生式土器甕…… 50
図版41—2　弥生式土器鉢…… 51
図版42—1　弥生式土器甕…… 50
図版42—2　弥生式土器蓋…… 51
図版43—1　弥生式土器底部…… 52
図版43—2　弥生式土器壷…… 53
図版44—1　弥生式土器壷…… 53

本文対照頁

図版44—2　弥生式土器壷……53
図版45—1　弥生式土器壷……53
図版45—2　弥生式土器壷……53
図版46—1　弥生式土器鉢、甕……57
図版46—2　弥生式土器甕……57
図版47—1　弥生式土器甕……57
図版47—2　弥生式土器甕、高坏……58
図版48—1　弥生式土器壷、甕……64
図版48—2　弥生式土器壷、甕……64
図版49—1　弥生式土器甕、器台……64
図版49—2　ミニチュア土器……65
図版50　土師器小型丸底坩、手捏土器、坏……106
図版51—1　土師器壷、甕……99
図版51—2　土師器壷、甕……99
図版52—1　土師器壷、甕……103
図版52—2　土師器壷、甕……103
図版53—1　土師器壷、甕……103
図版53—2　土師器甕……103
図版54—1　土師器高坏……109
図版54—2　土師器高坏……109
図版55—1　土師器低脚付坏、器台……109
図版55—2　土師器把手付壷他……111
図版56　須恵器高坏、蓋、短頸壷、坏……125
図版57　須恵器坏……125
図版58　須恵器坏……125
図版59　須恵器坏底部……125
図版60　石鏃、スクレイパー、石錘他……135
図版61　石庖丁、石鎌、石ノミ他……135
図版62—1　黒漆地漆絵椀……144
図版62—2　黒漆地漆絵椀底……144
図版62—3　黒漆塗皿……146
図版62—4　黒漆塗椀……146
図版63—1　杓文字状木製品……144
図版63—2　曲物容器蓋……147
図版64—1　火鑽臼……149
図版64—2　斧　柄……150
図版64—3　楔状木製品……150
図版65—1　把手状木製品……150

本文対照頁

図版65－2　把手状木製品……150
図版65－3　把手状木製品……150
図版65－4　円柱状木製品……150
図版66－1　田下駄状木製品……152
図版66－2　田下駄状木製品……152
図版66－3　框状木製品……152
図版66－4　船状木製品……154
図版66－5　櫓状木製品……156
図版66－6　丸木弓……156
図版67－1　鋤状木製品……154
図版67－2　櫂状木製品……154
図版67－3　有刻木製品……158
図版67－4　板状有刻木製品……158
図版68－1　有歯板状木製品……158
図版68－2　有歯板状木製品……158
図版69－1　荷ない棒状木製品……159
図版69－2　こけし形木製品……159
図版69－3　小判形木製品……158
図版69－4　軸状木製品……159
図版69－5　栓状木製品……158
図版69－6　杓文字状木製品……159
図版70　土馬、土錘、土玉、円板状土製品……167
図版71－1　磨製石戈他……176
図版71－2　銅鐸舌様石製品……176
図版71－3　中空有孔土製品（陶塤）……174
図版71－4　磨製石剣……176
図版72　種 子 類……180
図版73　イノシシ、ニホンジカの頭蓋骨……194
図版74　ニホンジカとイノシシの骨類……194
図版75　鹿　角……194
図版76　ニホンジカの骨類……194
図版77　ウマ、スズキ他の骨類……194

I　調査に至る経緯

本遺跡は、所在地の小字名竪町に因んで通称タテチョウとよんでいるもので、昭和9年に朝酌川で実施された堰と水門を造る工事の際、多量の土器片が発見されたのに端を発しその存在が明らかになったものである。そして、昭和24年3月山本清氏の手により一部試堀調査が行なわれ、その結果、弥生時代を中心に古墳時代にも及ぶ複合遺跡であることが確認された。当時、山陰地方では、類例の少なかった弥生前期の土器が多量に出土したということで、特に注目されていた遺跡である。

ところが、このタテチョウ遺跡が存在する朝酌川の中・下流域について、昭和47年度から河積拡大と、宍道湖・大橋川からの逆流を防ぐための河川改修計画が企画された。島根県教育委員会では昭和49年に県土木部の依頼を受け、工事予定地内における遺跡の範囲を確認するため、11月5日から16日までの12日間を費やして予備調査を実施した。

その結果、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、それに木製品等各種遺物を水田面下の砂礫層から検出し、遺跡の広がりは少なくとも南北300mに及んでいることが判明した。

また松江市教育委員会は、市が立案した松江圏都市計画の予定地内に当るタテチョウ遺跡の西側部分について、昭和49年11月11日から30日までの期間で試堀調査を実施し、引き続き12月3日から翌50年2月28日まで発堀調査を行なった。遺物は、県教委が実施した試堀調査と同様各種各時代のものを含み、遺構として北側部分より葬送儀礼に関係すると思われる箇所も検出された。

昭和52年に至って県土木部と県教委は、朝酌川河川改修工事予定地内に存在するこの遺跡の取り扱いについて調査結果をもとに協議を重ね、河川改修という事業の公共性をかんがみ、事前に遺跡の性格を捉える為の発掘調査を実施することとなった。

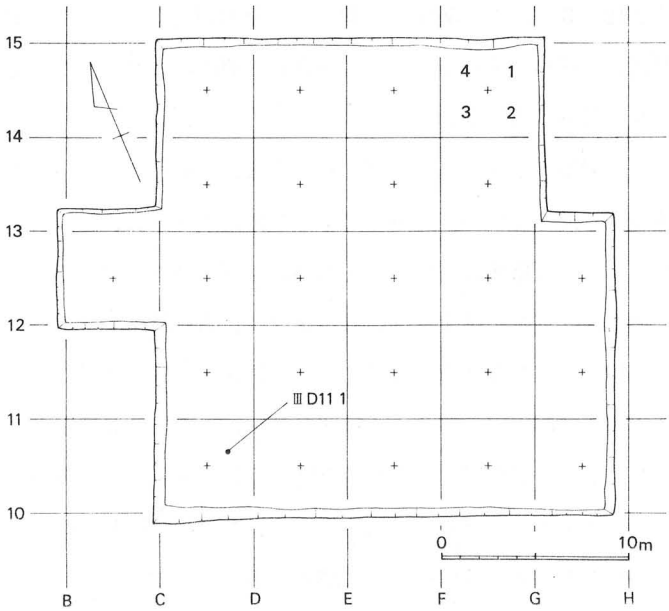
調査は県教委が県土木部の依頼を受け、昭和52年7月1日に発堀調査の委託契約を締結し、10月下旬から翌年3月下旬までの約5ケ月間を要してこれを実施した。調査期間中、特に冬期は終始雪のちらつく厳寒のなか、加えて低湿地性という遺跡の特殊性、さらに各種厖大な量の遺物出土があり調査は終始難渋することが多かった。そうした悪条件のなかいまふりかえってみると、種々の点で、充分な記録が保存されなかったことを自戒する。

なお調査結果の整理は、昭和53年度事業としてこれを行った。以下は発堀調査を含め、この2ケ年にわたる調査成果を報告しようとするものである。　　（川原和人）

Ⅱ 調 査 の 経 過

第１図　第Ⅰ調査区発掘風景

本遺跡は、試掘調査の際、特に遺物が集中的に包含されている区域について、一辺20m×20mの調査区を四ケ所設置した。すなわち朝酌川の東岸に一ケ所、西岸に20mの間隔をおいて三ケ所を設け、発掘調査を実施した。調査区名は朝酌川東岸のものを第Ⅰ調査区、西岸のものを南側から、第Ⅱ～第Ⅳ調査区とした。それぞれの調査区内で西壁をＣライン、東壁をＧラインとし、その間５mおきにＤ、Ｅ、Ｆライン、同様に南壁を10ラインとして北壁まで11～14のラインで方眼をひき、北東の交点を基準に、例えばＤ11のごとくこれを中グリッドとした。さらに、この中グリッド内を一辺2.5mで区分して四区を作り、北東区から右まわりに(1)～(4)の小グリッドを定め、これを遺物取り上げの最小区域とした。また、遺物取り上げの際は中グリッドを単位に個々の遺物に番号を付し、レベル測定の後遺物台帳に記入した。遺物は、土器、石器、木器、鹿角製品などの人工遺物および植物種子、獣骨などの自然遺物に分類しこれを採取した。



第Ⅲ　調査区グリッドの配置

調査は、第Ⅰ調査区を昭和52年10月下旬から始めたが、従前の試掘調査にしたがい無遺物包含層である耕作土と粘土層を重機により掘削し、遺物包含層の上部付近までこれを除去した。調査区が朝酌川の川岸近くであるた

諸田
橋本
橋本
薮崎
紺屋垣
前田
紺屋垣
紺屋垣
紺屋敷
茂平田
第Ⅳ調査区
エヒラ田
第Ⅲ調査区
第Ⅱ調査区
土歩尻
竪町
下原町
的場
井ノ尻
牛渡
第Ⅰ調査区
政所
横田
竪町
竪町
的均
0
100m

第2図 調査区配置図

め、湧水を考え東側に矢板を打ち壁の崩壊を防ぐと共に、ポンプによる排水の設備を整えた。だが湧水よりも遺物包含層にあたる砂礫層中に、各種各時代の遺物が全面、それこそ足の踏み場もないほど混在集積し、これが、調査員の手を大いに煩わした。この区の調査は、そうした遺物の大量出土で2ケ月をも費し12月末に終了した。

第3図　第Ⅲ調査区発掘風景

翌53年早々、降りしきる雪のなか、第Ⅱ、第Ⅲ調査区の発掘に取りかかった。ここでも第Ⅰ調査区同様、重機により遺物包含層上部まで排土したのち調査を行なった。遺物は、やはり同一の層中に各時代のものが雑多に包含され、第Ⅰ調査区ほどの濃密さはなかったが、種類はバラエティに富んでいた。この間、積雪30㎝近くに及ぶ日もあり作業は困難をきわめたが、第Ⅲ調査区では、しがらみ状遺構を思わせる杭列が姿を露わし、自然石の並びは、遺構存在の期待をも抱かせた。第Ⅱ調査区の東側に朝酌川の旧河道と思われる落ちこみが検出されたため、第Ⅲ調査区については西壁の一部分、南壁全体、南東隅の三ケ所を拡張し、第Ⅱ調査区の川跡とみられる落ちこみとのつながりを検索した。この一連の作業中に遺物包含層は第Ⅱ調査区が深く、第Ⅲ調査区では南側から北側にかけて次第に浅くなっていることが判明した。第Ⅳ調査区では遺物包含層は高位にあり、かつ層も薄く遺物の量も少なかった。

結局、第Ⅰ調査区～第Ⅳ調査区を通して各種厖大な量の遺物を検出したものの、明確な遺構は確認できなかった。なお、この間、山本清氏の御指導をいただき、島根大学理学部の大西郁夫氏には花粉分析用の土壌サンプリングをお願いし、あわせて土層の堆積状態についても所見をいただいた。調査は、なお小雪のちらつく3月下旬で終了し、並行して重機による埋め戻しを行った。出土した遺物は、昭和53年度事業で県教委文化課において一連の作業を経て整理作業を行った。

（前島己基）

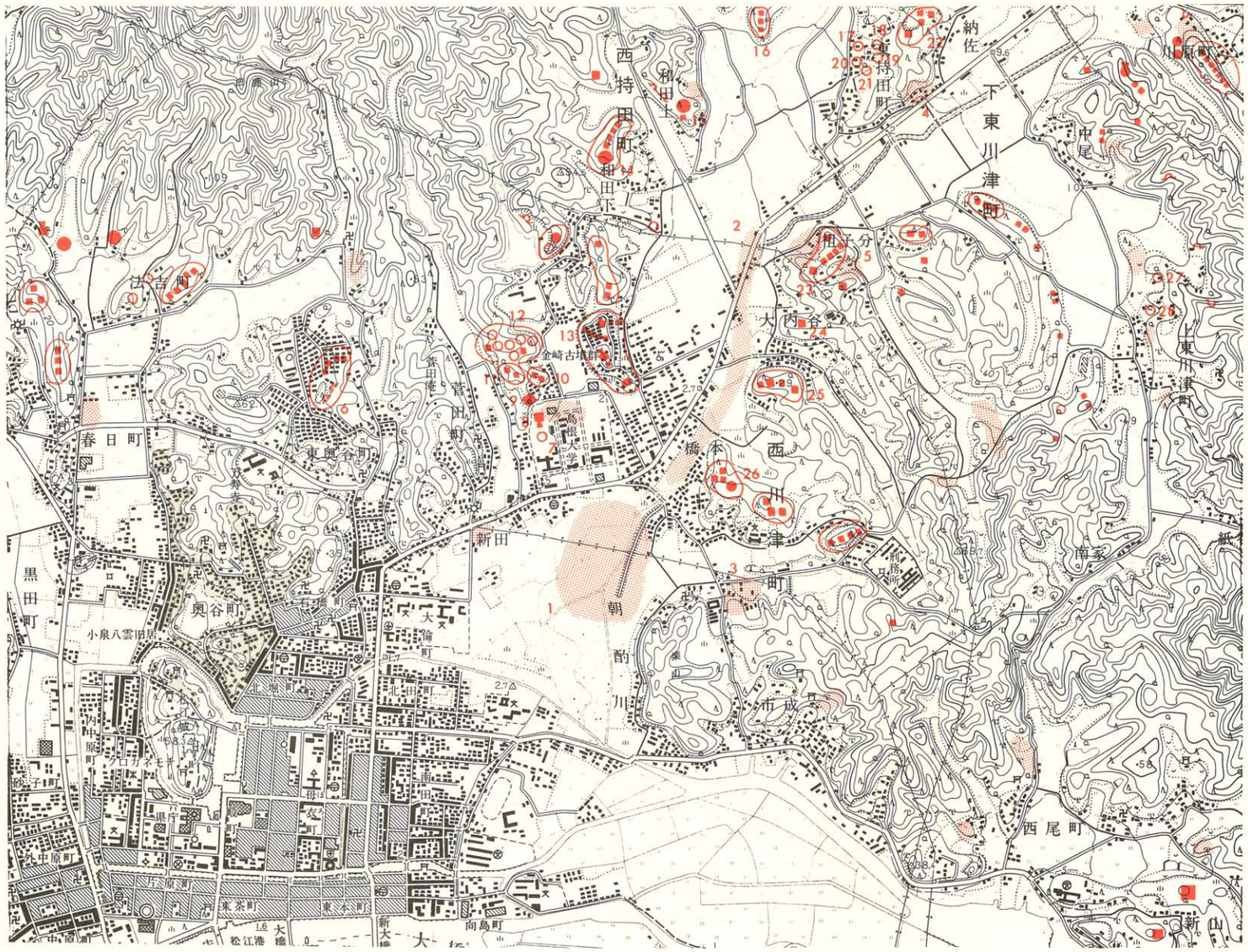
Ⅲ 位置と歴史的環境

本遺跡の所在する地籍は、松江市西川津町大字橋本の西側に広がる沖積地の低平な水田中にある。このあたりは松江市街地の北西部を占める川津・持田地区の一角にあたり、嵩山と和久羅山を頂点とする山塊と、澄水山、大平山、御嶽山、真山等を頂点とする一連の丘陵地帯にはさまれ、さほど広くはないが朝酌川に沿って東西に細長い美田地帯をひかえた所である。朝酌川は持田町の澄水山の麓に源を発し、この川津・持田平野を南流してやがて、橋本地区のあたりで大きく東に流路を変え、宍道湖と中海を結ぶ大橋川に注ぎ込む。

本遺跡は、ちょうどその流路の変換点あたりのかつて松江藩主松平氏の遊楽の地であった楽山の山裾から北西へ250mほど行った川津・持田平野の南水田中に広がり、主要部は、現在の河川敷を含んで東西南北約400～500mの範囲に及んでいるものと推定され、遺物を包含している砂礫層は、海抜0mから－0.4mを測りかなり低位にある。ちなみに現在の大橋川・宍道湖の平均水位は、海抜30cmを測るという。

さて本遺跡の所在する川津・持田平野周辺は、『出雲国風土記』の国引きの条にみる「闇見国」の一角にあたるとみられ、律令時代における行政区画で言うと、島根郡山口郷あるいは法吉郷あたりにあたる。

縄文時代の遺跡として遺物等の単独出土地が金崎遺跡など平野周辺地で点々と知られているが、発掘調査によってその内容が確認されているものは今のところ皆無である。弥生時代になると、これも詳細な内容が知られるものは少ないが、西川津町の島根大学構内遺跡、同西川津遺跡、同貝崎遺跡、同橋本遺跡などが散見され、それらには貝崎遺跡の様に弥生前期から始まり、古墳時代に至る歴代遺物の出土する規模の大きな遺跡もみられる。タテチョウ遺跡と同様に西川津・橋本遺跡なども水田面下に遺物が見出されることなどから、多くは平野・淵辺の水田面下に深く埋れているものと思われ、弥生時代の遺跡は現在周知されているものの数倍あるいは数十倍にも達するとみられる。それは、次の時代になってからの古墳の質量からも推察される。今のところ、このあたりにはめぼしい大型前期古墳は知られていないが、小規模なものについては、下東川津町の道仙古墳群で比較的古式様相の方墳5基が調査されている。その後中期後半になると、西川津町の島根大学構内及びその周辺の丘陵上に金崎古墳群、菅田ケ丘古墳、薬師山古墳などが形成される。金崎古墳群はすでに消滅したものを含め前方後方墳2基と9基の方墳が比較的短期間のうちに



第4図　遺跡の位置と周辺の遺跡　　1：25,000

1. タテチョウ遺跡　2. 西川津遺跡　3. 橋本遺跡　4. 納佐遺跡　5. 貝崎遺跡　6. ひのさん山古墳群　7. 薬師山古墳
8. 菅田丘古墳　9. 小丸山古墳　10. 宮田古墳群　11. 浜弓古墳　12. 上浜弓古墳　13. 金崎古墳群　14. 宮垣古墳群
15. 太源古墳　16. 小丸山古墳群　17. 佐々木浅市宅古墳　18. 佐々木亮畑中古墳　19. 野津真宅前古墳　20. 加美古墳
21. 加佐奈子古墳　22. 道仙古墳群　23. 貝崎古墳群　24. 古屋敷古墳　25. 空山古墳群　26. 馬込山古墳群
27. 葉佐馬古墳　28. 西宗寺古墳

遺物散布地　前方後方墳　方墳　前方後円墳　円墳　横穴　墳形不明

相ついで築造されたものと思われる。このうち、発掘調査のなされた1号墳は、全長35mの前方後方墳でやや細長い竪穴式石室を内蔵し、副葬品として、古式様相をそなえた各種須恵器などと共に、滑石製異形子持ち勾玉・碧玉製勾玉・同管玉・同棗玉・めのう勾玉・ガラス玉・滑石製小玉・仿製内行花文鏡・金環・直刀などの豊富な遺物が検出されている。これらは5世紀後半から6世紀前半という比較的短期間に集中的に営まれた方系墳のみによる古墳群として、この種の古墳群の成立過程を解明する上で注目されるとともに、この地に有力な地域勢力の存在があったことをうかがわせる。

他地域に比べると出雲には全般的に方系墳が多く、古くから注目されているところであるが、なかでもこの辺は大橋川対岸の意宇川下流平野と共に、最も多くその方系墳が分布するところとして注目されている。金崎古墳群と相前後しあるいはその後を受けて、丘陵の各所に馬込山古墳群、貝崎古墳群など多数の中小の方系墳が知られている。とりわけ坂本町の薄井原1号墳は全長50mの前方後方墳で、片袖式の割石積大型横穴式石室2基を内蔵し、6世紀後半の前方後方墳としては、今のところこのあたりで最も規模の大きいものである。また出雲の後期古墳の特徴の一つとされる石棺式石室も、意宇川下流平野より目立って多い傾向にある。そうした石棺式石室を内部主体とする古墳の著例として、東持田町の佐々木亮宅畑中古墳、同野津真宅前古墳、同加佐奈子神社古墳、同佐々木浅市宅裏古墳、同加美古墳、上東川津町西宗寺古墳、同葉佐馬古墳などがある。

また、律令制時代の島根郡家は現在の松江市上東川津町納佐あるいは坂本町坂本下辺りにあったと推定されている。また坂本下の北方約1.5kmのところに位置する坂本町別所の坊床廃寺は、平安時代初頭の瓦を出土している。タテチョウ遺跡は、ちょうど島根郡家から秋鹿郡家への道すじにもあたる。

タテチョウ遺跡は大略以上のような歴史的環境を持つ川津・持田平野の一角に営まれている。

（平野芳英）

Ⅳ 遺 跡 の 概 要

朝酌川の両岸水田中に設けた4つの調査区とも、その層序は、朝酌川によって堆積した土砂がかなりの厚みを持ち、一見岸辺のような堆積を示して予想以上に複雑な様相を呈していた。基本的な堆積土層は、上層より厚さ0.5mの粘土層、砂層、粘質土層、砂礫層と連なり、以下ヤマトシジミの死貝を含む砂混粘土層が灰色の最下層の無遺物層へと続く。このうち遺物を含むのは粘質土層の下に堆積する砂礫層で、大体海抜0mから$-0.4m$付近である。ただし細かくいうと、朝酌川東岸に設定した第Ⅰ調査区では、この砂礫層はやや標高が高く海抜0.2mで、この周囲は砂礫層が堆積した当時、中洲状になっていたとも考えられる。

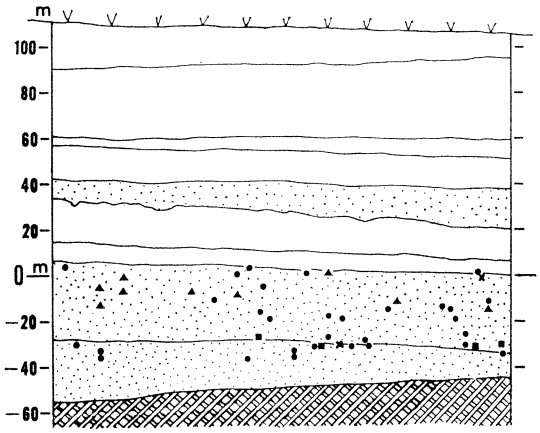
一方、第Ⅱ～第Ⅳ調査区を設定した西岸側は上流に行くにしたがい砂礫層が薄くなり、しかも砂礫層下端のレベルは下流側の第Ⅱ調査区が海抜0.6m、上流側の第Ⅳ調査区は海抜0mで上流に向ってやや高く、当時の地表面が緩傾斜をもっていたことをうかがわせた。遺物を含む砂礫層は、第Ⅰ調査区で1～2層、第Ⅱ調査区で3～4層、第Ⅲ調査区で2～3層、そして第Ⅳ調査区では1～2層に細別されるが、遺物は各時代のものが上下混在してみられ、砂礫層の層序自体も第Ⅱ・第Ⅲ調査区ではかなりの乱れがあった。

検出された遺物は、土器類を中心に木製品・石器類・自然遺物など、コンテナに500箱におよぶ。ただし、それらは大半破片の状態で各時代のものが混在して集積し、破片の多くは破面に摩滅痕がみられるほか第Ⅰ調査区と第Ⅲ調査区から出土した土器が、同一個体のものであったりして、その様相は、あたかも近傍の集落跡の生活空間から朝酌川の度重なる洪水害にあって押し流された状況を呈していた。

ただ、第Ⅲ調査区の砂礫層中には、流出したものとはみられない不自然な人頭大の石、礫の散在がみとめられ、第Ⅱ調査区では、わずかながら弥生前期前半の土器にほぼ完形を保つものがみられた。また第Ⅱ調査区では砂礫上層に、唯一の明らかな遺構としてしがらみを伴う奈良・平安時代頃と推測される杭列が検出された。こうしたことから調査によって検出された厖大な量の遺物は、大半付近から流出し、一見岸辺を思わせるこの地に、いく度も堆積をくり返しながら集積したものとみられるが、弥生前期の大半と奈良・平安時代には、一時的に安定した時期があって、実際にこの地が生活空間の一部として利用されていた可能性も考慮される。なお、最下層の暗茶褐色砂混粘土層にはヤマトシジミの死貝の堆積が認められた。

1　第Ⅰ調査区

この調査区は、朝酌川の東側に設けたもので、昭和51年松江市教育委員会が行なった調査区と朝酌川をはさんで相対する位置にあたる。調査区の東側10mの地点は、かつて水門工事が行なわれた際遺物が発見され、山本清氏が試掘調査されたところである。



第５図　第Ⅰ調査区11～13ライン出土主要遺物の垂直分布
▲縄文土器　●弥生土器　×土師器　■須恵器

この調査区の土層は、耕作土の下に灰色粘土層、黒色粘土層、黄褐色砂層、茶褐色粘砂層、暗褐色粘砂層、暗灰色砂層が続き、海抜０m前後から暗灰色砂礫層があり、その下に灰色荒砂層、灰色粘質砂層が存在する。これらの各土層はほぼ水平に堆積しており安定している。

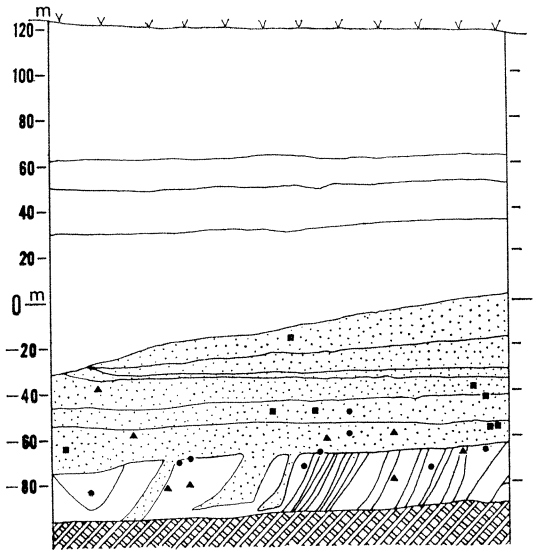
昭和49年に行なわれた試堀調査の結果では、砂礫層中に時期の異った各種の遺物が混在していることが知られていた。調査は一定のレベルで同一時期の遺物が存在している可能性を考え、西壁および南壁に沿った幅2.5mのＬ字形の区域について、遺物包含層を５cm単位に掘り下げ個々の遺物についてレベルと実測図をとった。検出された遺物は、大半が海抜０m～−40cm位の砂礫層中に各時代のものが混在し、やはり試堀調査と同様な遺物包含状態にあることが判明した。

出土遺物は、主に砂礫層とその上層にあたる茶褐色粘砂層に含まれ、若干ながら下層にあたる灰色粗砂層にも検出された。また茶褐色粘砂層の上部には、奈良・平安時代の新しい遺物がややまとまって出土した。それらの遺物は、調査区全体に濃密に存在していたが、北西隅、南東隅には量的にやや稀薄な部分がみられた。出土遺物の主体をなす土器類は、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器類で、それらは砂礫層中にぎっしりと詰まった状態で検出されたが、数点の小型のものを除き、ほとんどが小さな破片であった。石器類には、石庖丁のほかに、銅鐸の舌と考えられる棒状石製品が含まれている。木器類には、田下駄・鋤などがある。銅鐸舌様の石製品と共に、全国的にきわめて類例の稀な遺品としては、中国古代の陶塤の系統をひくものとみられる中空有孔土製品の破片が検出されている。

2　第Ⅱ調査区

この調査区は、朝酌川の西岸に設置した３つの調査区中最も南側、第Ⅰ調査区の北西100mの所に設けたものである。この調査区の堆積土層は、西壁と北壁では土層が比較的

水平に堆積しているのに対し、北壁はかなり乱れをみせ粘質土層中に砂礫層がレンズ状に入り込んでいた。西壁の土層は、地表下に淡黒色、淡灰色などの粘土層があり、その下に遺物包含層である砂礫層が現われてくる。この砂礫層は海抜0 *m*以下に、粘質土あるいは砂の層を介して3層に区分できる。第1、第2の砂礫層は、海抜0～－40*cm*、－50*cm*～－60*cm*に堆積し、西壁のほぼ中央部で第3砂礫層を削平している。第3砂礫層は海抜－60*cm*～－100*cm*に在り、西壁の南側ではかなり厚く堆積していたが、中央部から北側にかけては、青灰色の粗砂層と幅5*cm*内外の砂礫層が上流側に傾斜しながら相互に堆積していた。



第6図　第Ⅱ調査区11～13ライン出土主要遺物の垂直分布
▲縄文土器　●弥生土器　×土師器　■須恵器

次に北側のセクションでは層序が乱れているため、西壁に存在していた3つの砂礫層を北壁で相対的に捉えることはできなかった。なお北壁の東側には、海抜－40*cm*あたりから、砂礫層をカットした落ち込みがみられた。これは第Ⅲ調査区で検出された川跡状の落ち込みと連なり、朝酌川の旧河道と考えられる。また、中央部にも砂礫層の下層にあたる青灰色砂層および暗茶褐色粘土層中に、幅約1.4*m*、深さ20*cm*あまりの落ち込みがあった。これは水の流れによって削平されたものと思われ、調査区の南側によった地点で自然消滅していた。この堆積土層の観察によると、朝酌川の旧河道とみられる落ち込みなどは、これらが一時期表面であった後、厚さ約1*m*の淡灰色粘土質を主体にしながら、なかに黄褐色砂礫層と青灰色粘土層を含む土砂によって、西から東へと大きなうねりをもちながら一気に埋没したと推測される。

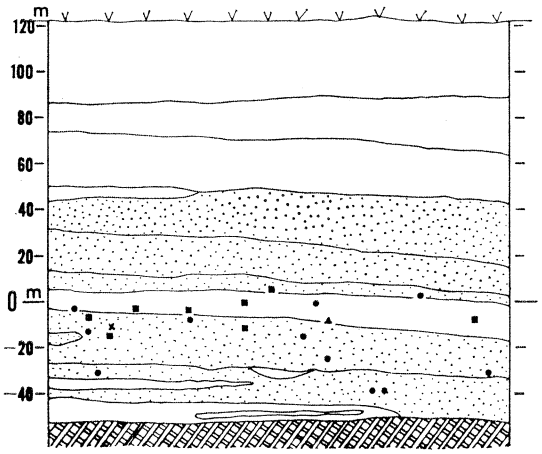
出土遺物は、縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器などの土器類が主体をなす。なかでも量的に最も多いのは弥生式土器であり、前期の土器が大多数を占める。それらは他の調査区同様、砂礫層に混在した状況で出土したが、僅少ながらこの調査区では完形を保つ弥生前期の土器が検出され注意をひいた。このほか、火鑽臼、漆器、曲物、杓文字状製品などの木製品、鉄剣形の石剣、石庖丁、石鏃などの石器、自然遺物など多種多量のもの

が含まれていたが、とりわけ注目を集めたのは、土笛とみられる完形を保つ中空有孔土製品の発見であった。

3　第Ⅲ調査区

この調査区は、朝酌川の西岸、三つの調査区の中間に設けたものである。当初、一辺20*m*の方形に調査区を設定していたが、しがらみ状の遺構が検出されたことと、第Ⅱ調査区の旧河道とみられる落ち込みを追認するため、南側と西側それに東南隅の一部を拡張した。

この区の土層はかなり乱れており、遺物を含む砂礫層は2～3層堆積している。まず北壁では全体的に東側が低く、中央部および東側で数層にわたって混然とした状態で層をなし、その様相は、南東隅の拡張区で検出した朝酌川の旧河道とみられる落ち込みに至る傾斜面にあった。またこの調査には、東半部の海抜－50*cm*～－80*cm*の砂礫層および暗茶褐色粘砂層中に、径20*cm*大の自然石が混在していた。規則性はみられず雑然とした配置であったが、大きく原位置を失ったものとは考えられない。



第7図　第Ⅲ調査区11～13ライン出土主要遺物の垂直分布
▲縄文土器　●弥生土器　×土師器　■須恵器

次に西壁のセクションでは、北側に砂礫層が帯状に上下2層あり、上層は安定した状態を示していた。南側の上層部は砂層がレンズ状に入り込み、下層ではそれが一層をなしかなり厚く堆積していた。遺構は調査区の西よりの部分で、杭列とそれにからんだ数多くの木片が検出できた。この杭列は「へ」の字形に配列されていたもので、北西に約5*m*、南西に2*m*残存していた。杭は径10*cm*内外の木材を用いて20*cm*～50*cm*の間隔に交互に打ちこまれ、北西に延びる一杭列は、まっすぐな木材を使用した痕跡がみられ、これに並行して約60*cm*北東側に2列の杭列が一部遺存していた。また、このしがらみ状の遺構は、砂礫層が東側に傾斜する変換点に設けられており、現存するしがらみ状の遺構の南端に長さ60*cm*、幅30*cm*の丸太を固定した踏台状のものが検出された。以上のことからこの遺構は、幅約60*cm*の間に雑木を置き、杭で固定した堤防的な性格をもつものと考えられる。なお北西へ延びる杭列の西側で、この遺構の時期を示すと考えられるほぼ完形を保つ土師器・須恵器が、ややまとまった状態で検出された。それらは奈良～平安時代

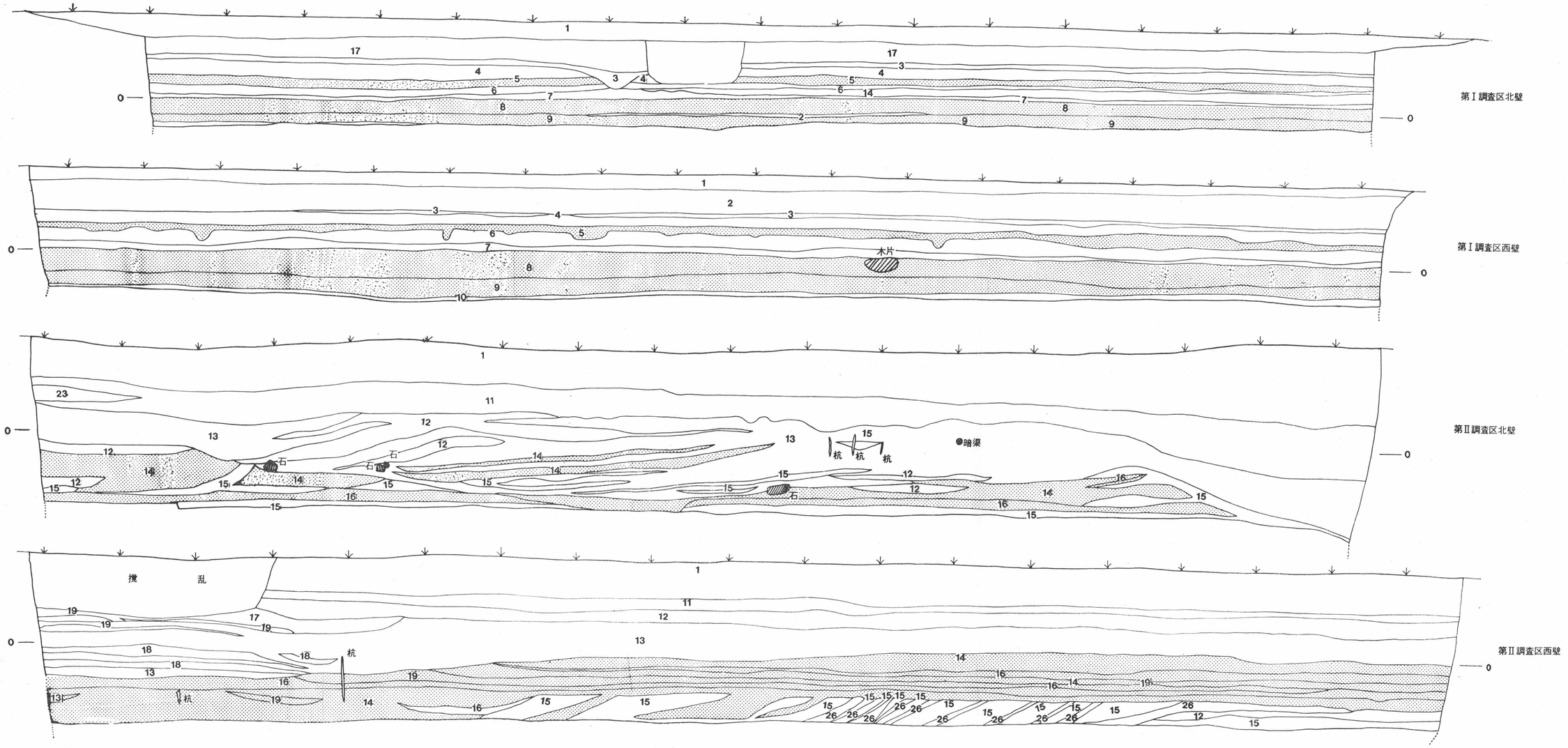
にかけてのものである。

このほか、調査区の中央付近に木片の集積箇所が認められた、この木片は北から南へと一定方向を向いているものが多く、その範囲は5 m四方におよぶ。この場所から北東側にかけての部分に、人頭大の自然石が多数検出できた。これは大きさからみて自然に流されてきたものとは考えられず、当初遺構が存在するのではないかと推測されたが、規則的に並ぶものは確認できなかった。

この区で出土した遺物は土器が圧倒的に多く、須恵器の完形品がしがらみ状遺構の南側で、まとまって検出された。なかに「驛」と記入された墨書のある須恵器も一点出土し、注目された。このほか火鑽臼、丸木弓、曲物といった木製品があり、特に曲物の多いことが目立った。石器は石庖丁、環状石斧の未製品、石戈の鋒部とみられる残欠、石鏃、石斧などがあり、また土製品として、陶質の土馬・土玉・土錘などが検出された。

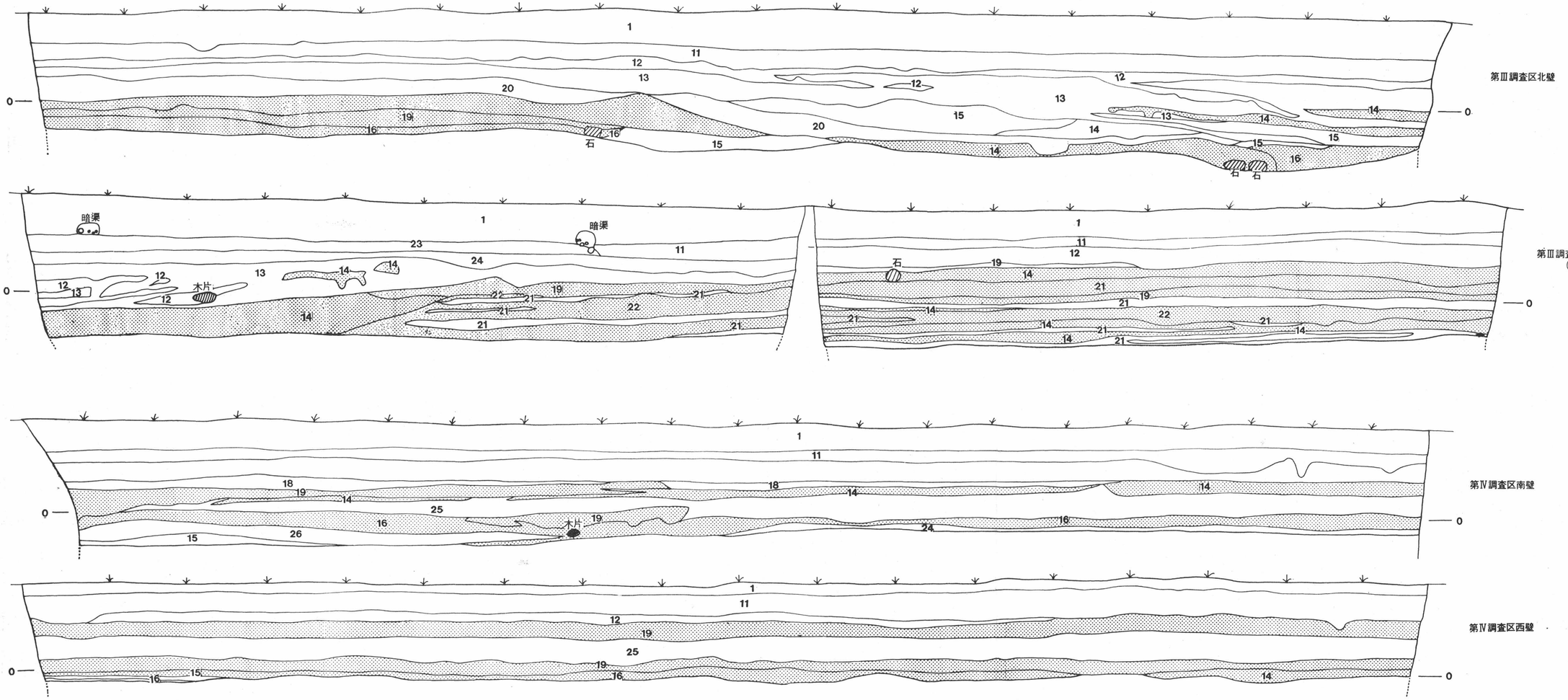
4　第Ⅳ調査区

この調査区は、朝酌川西岸最北に設置したものである。遺物包含層にあたる砂礫層は20 cm前後の厚みをもち、層位は各層とも安定した状態を示していた。すなわち上層から耕作土、淡黒粘土層、黄灰色砂層、灰色粘砂層、灰色粗砂混粘土層、灰色粘砂層、暗茶褐色砂混粘土層がそれぞれ水平に整然と堆積していた。他の3つの調査区に比べると遺物包含層が薄く遺物の量も少なかった。それらには、縄文式土器から須恵器など各時代の土器片と石庖丁・石錘・舟状木製品、斧柄、鹿角製の結合式釣針などがある。ここでは鹿角製結合せ式釣針の出土が注目をあつめた。　（川原和人）



1. 耕作土
2. 灰色粘土層
3. 黒色粘砂層
4. 黄褐色砂層
5. 茶褐色粘砂層
6. 暗褐色粘砂層
7. 暗灰色砂層
8. 暗灰色砂礫層
9. 灰色荒砂層
10. 灰色粘質砂層
11. 淡黒粘土
12. 黄灰色砂層
13. 淡灰色粘質土
14. 黄褐色砂礫層
15. 青灰色砂層
16. 暗茶褐色砂混粘土層
17. 灰色粘土層
18. 淡灰色砂層
19. 灰色粘砂層
20. 暗褐色粘土層
21. 灰色砂層
22. 灰色砂礫層
23. 黄灰色粘質土
24. 黄褐色粘土混砂層
25. 灰色粗砂混粘土層
26. 青砂礫層

第8図 第Ⅰ・Ⅱ調査区土層図



1. 耕作土
2. 灰色粘土層
3. 黒色粘砂層
4. 黄褐色砂層
5. 茶褐色粘砂層
6. 暗褐色粘砂層
7. 暗灰色砂層
8. 暗灰色砂礫層
9. 灰色荒砂層
10. 灰色粘質砂層
11. 淡黒粘土
12. 黄灰色砂層
13. 淡灰色粘質土
14. 黄褐色砂礫層
15. 青灰色砂層
16. 暗茶褐色砂混粘土層
17. 灰色粘土層
18. 淡灰色砂層
19. 灰色粘砂層
20. 暗褐色粘土層
21. 灰色砂層
22. 灰色砂礫層
23. 黄灰色粘質土
24. 黄褐色粘土混砂層
25. 灰色粗砂混粘土層
26. 青砂礫層

第9図　第Ⅲ・Ⅳ調査区土層図

第10図　第Ⅲ調査区遺物等出土状態

V　出土遺物の考古学的観察

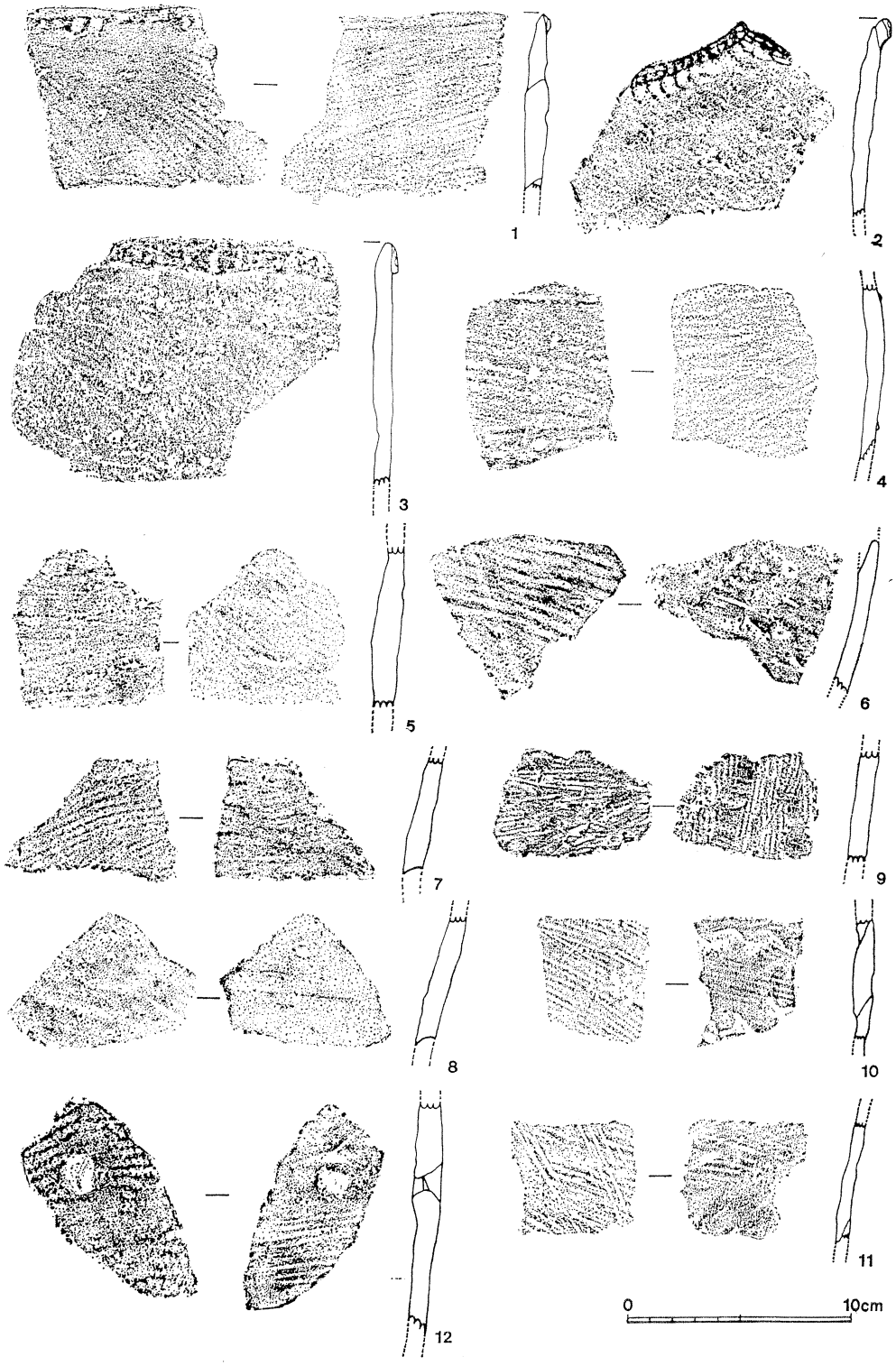
遺構に伴って出土したものはないが、各調査区いずれも堆積土中には各種多数の遺物が包含されていた。遺物は狭い調査区にもかかわらずコンテナ約500箱にのぼる膨大な量であるためその全てにわたって逐一報告できないが、以下、主要なものについて縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、石器、木製品、土製品、鹿角製品及び鹿角加工品、特殊遺物の順に項を分って説明することとする。

1　縄文式土器

本遺跡の遺物は前述したように、層位的に把え得る状況では出土しなかった。縄文式土器に於ても、弥生式土器・土師器・須恵器等と混在して検出されている。第Ⅰ調査区から第Ⅳ調査区までの縄文式土器の出土数量は370点で完形をなすものは皆無で、全形を窺い知ることのできるものはほんの二、三であった。この為、主に胎土・成形・施文方法・文様構成を中心として早期・前期・中期・後期・晩期の五時期に分類することとし、作業を進めたが大部分の土器が磨滅しており施文方法・文様構成の細部にわたっては不明の部分の多いことを断わっておきたい。また五時期分類のうち中期に該当するものについては抽出することができなかった。

調査区毎の土器出土量は第Ⅰ区が107点、第Ⅱ区が124点、第Ⅲ区104点、第Ⅳ区が27点、その他8点である。他の時代の遺物の出土も少なかった第Ⅳ区での出土が全縄文式土器出量の約7％とやはり少なかったが第Ⅰ区から第Ⅲ区では約28％～33％の比率を占め、これらの調査区ではほぼ均等な出土状況を示している。

次に時期毎の出土状況に目を転じると、早期12点、前期34点、後期45点、晩期244点、時期不明のもの35点と、圧倒的に晩期の土器の出土量が多く全体に占める割合は約66％である。時期と出土調査区の関係をみると、早期では第Ⅰ区が9点、第Ⅱ区が1点、第Ⅲ区が2点、前期では第Ⅰ区が22点、第Ⅱ区が5点、第Ⅲ区が4点、第Ⅳ区が2点、その他が1点、後期では第Ⅰ区が15点、第Ⅱ区が10点、第Ⅲ区が14点、第Ⅳ区が4点、その他が2点、晩期では第Ⅰ区が48点、第Ⅱ区が98点、第Ⅲ区が76点、第Ⅳ区が19点、その他が3点となっていて、早・前期ではⅠ区に集中し後期は第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区ともほぼ均等に、晩期では第Ⅱ・Ⅲ区で多く出土する傾向を示している。



第11図　縄文式土器拓影（早期）

早期の土器

この期の土器は総じて繊維を含み、厚手の土器で色調は褐色系を呈すものが多い。器形は全形を留めるものが存在しないが、概ね深鉢形をとるものと考えられる。文様構成、調整等からそれぞれの土器を検討すると、繊維を含む条痕地の土器で凸帯を有するA類、繊維を若干含む表裏条痕のB類、繊維を含み表面に縄文を施すC類、浅い格子状沈線を施すD類に大きく分類される。

A類土器（第11図1～4）は口縁部に刻目凸帯を施す土器（1～3）と胴部に断面三角形の凸帯を配す土器（4）との二種ある。2は波状口縁をなし、口縁に沿って貼付されている刻目凸帯は、波形の頂部で上下に重なっている。刻目はそれぞれ異っており、指で押えつけたり（1）、二枚貝の腹縁で刺突したり（3）、二単位からなる棒状工具で刺突したり（2）、している。地文はいずれも斜位の条痕文である。

器厚は概ね1㎝内外で厚く、胎土には繊維と砂粒を含んでいるがこのうち、4は雲母と考えられる金色の薄く分離する物質を随所に含んでいる。焼成はいずれのものもややもろく、やや粘りのある質感を与えている。

B類土器（第11図5～10）は繊維を若干含む表裏条痕文のものを一括した。すべて胴部破片である。色調が褐色系で原体のやや太く荒く施文された感じの斜位の条痕文を施すグループ（5～8）と色調が灰色系でより丁寧な条痕文を施すグループ（9～10）がある。

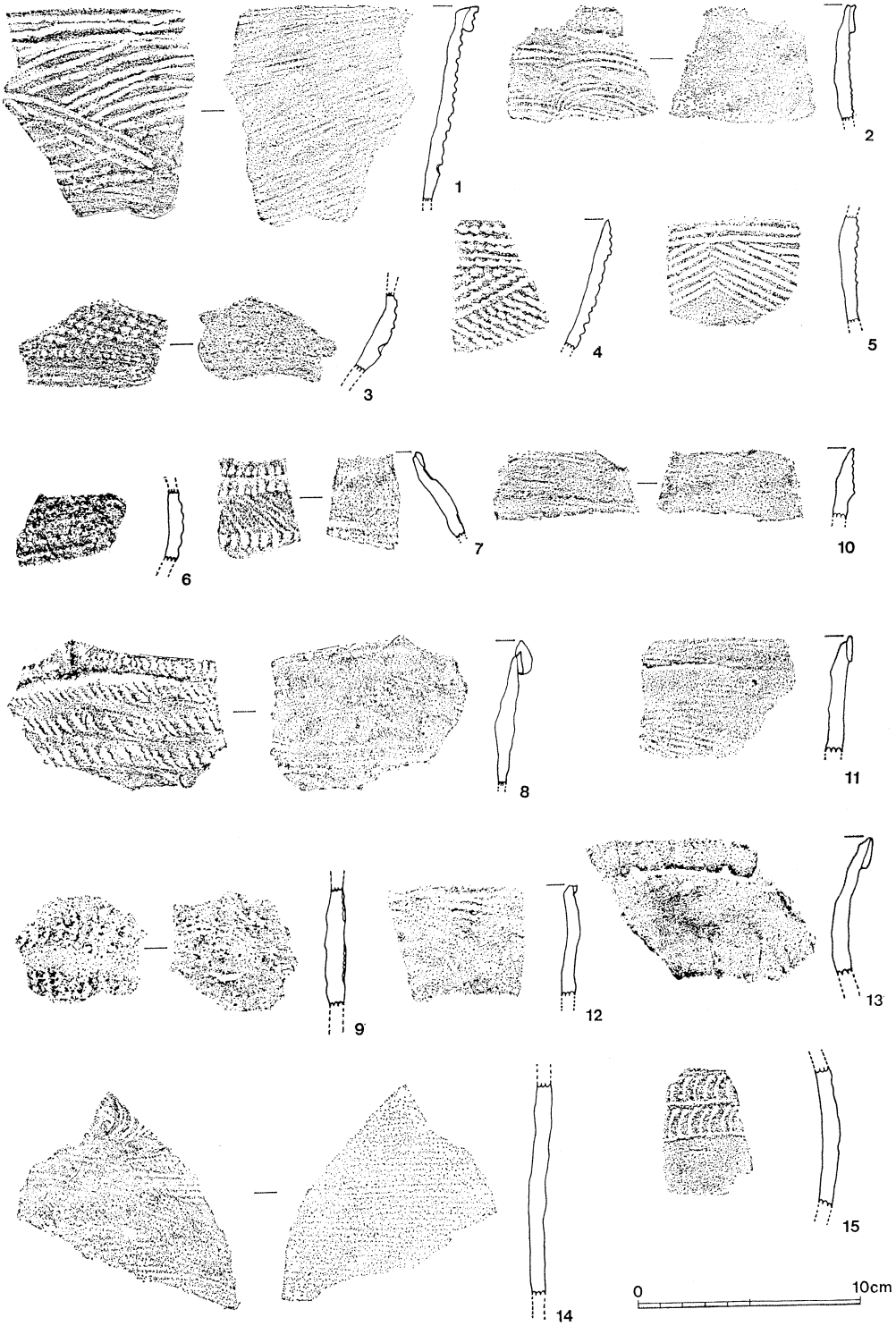
9は表面が横位、裏面が縦位の条痕文となっており、10は表裏とも斜位の条痕文であるがより横位置に近い。9は第11図4と同じく雲母と考えられる金色の物質を若干含んでいる。器厚は0.7㎝～1.3㎝と厚手である。焼成は良好で質感はA類に比して乾いた感じを与える。

C類土器（第11図12）は表面に太い単節縄文、裏面に太くて深い横位の条痕文を配する土器で若干の繊維と大粒の砂粒を含んでいる。器厚は1.2㎝と厚い。堅く焼き締った土器で色調は茶褐色を呈す。焼成後、所謂補修孔が穿たれている。

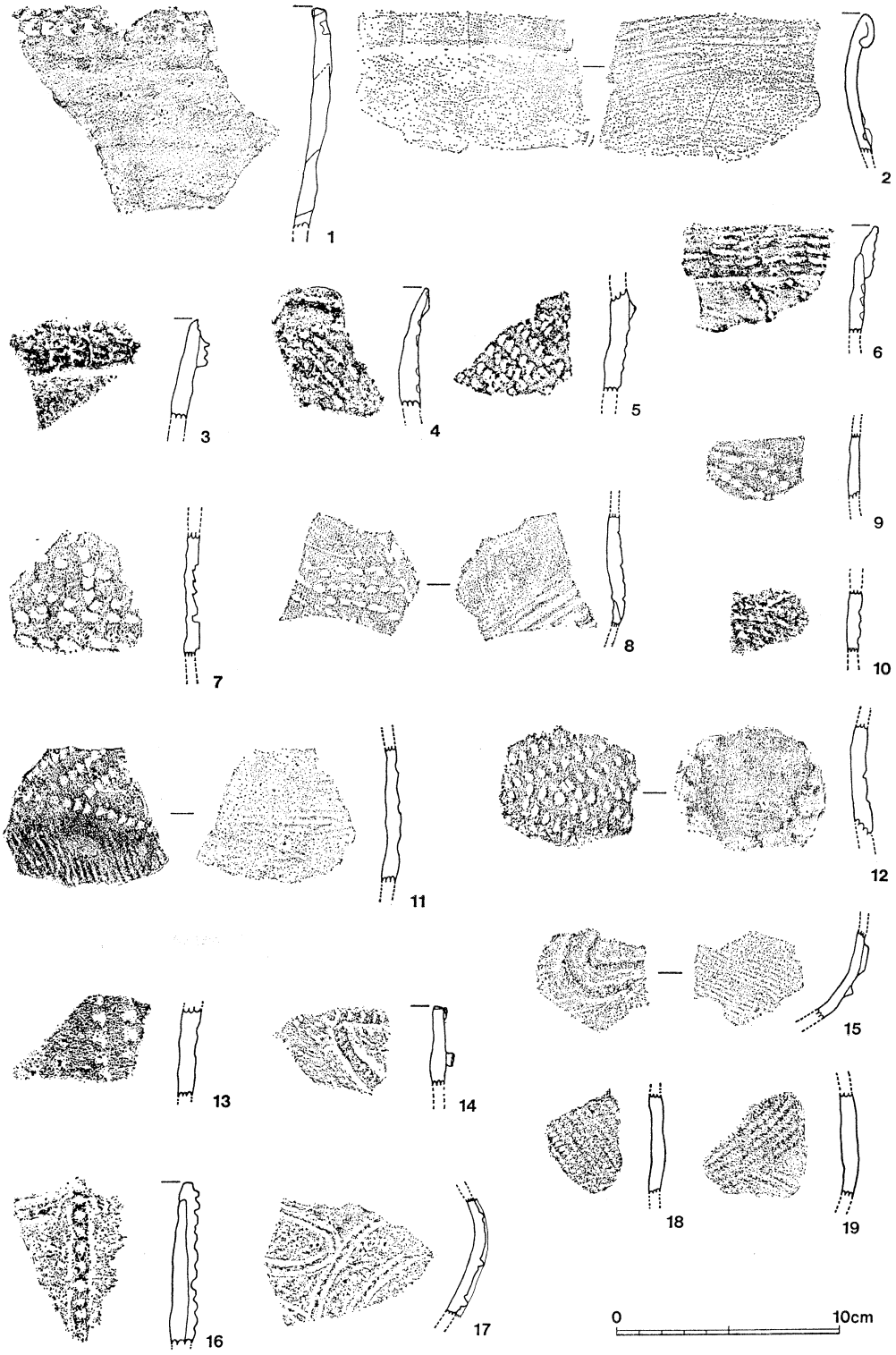
D類土器（第11図11）は表面が半截竹管状工具によると考えられる工具によって浅い沈線が格子状に引かれている。裏面は横位の条痕文が施されている。器厚は0.7㎝と他類のものに比してやや薄手である。小さな砂粒を若干含んでいる。

前期の土器

この期の土器は若干のバラエティがあるものの全体的に薄い作りである。器形は全形を知るものが一点も存在せず、あまりはっきりしないが、概ね深鉢形をなすものが多い様である。口縁部はそのほとんどが平たい凸帯を貼り付け肥厚させており、これらの凸帯上に



第12図　縄文式土器拓影（前期1）



第13図　縄文式土器拓影（前期2）

も施文が認められるものが多い。施文による分類を行うと、押し引き文のA類、貝殻腹縁文のB類、条痕文のC類、爪形文のD類、刺突文のE類、凸帯文のF類、縄文のG類に大別でき、文様は非常にバラエティに富んでいる。文様構成は、押し引き文と刺突文では、文様が横と斜めに交互に施され、幾可学的に構成されるものが多い。

A類土器（第12図1～7）は、押し引き文を一括したが、棒状工具による施文を行っている1・3～7と半截竹管状工具で施文を施す2とがある。2は文様構成も、横と斜めに幾可学的に構成されるものではなく、ゆるやかな弧状をなす曲線的な構成となっている。1・3・5は裏面に条痕文を施し、1・3では押し引き文帯の下方に条痕文が認められる。

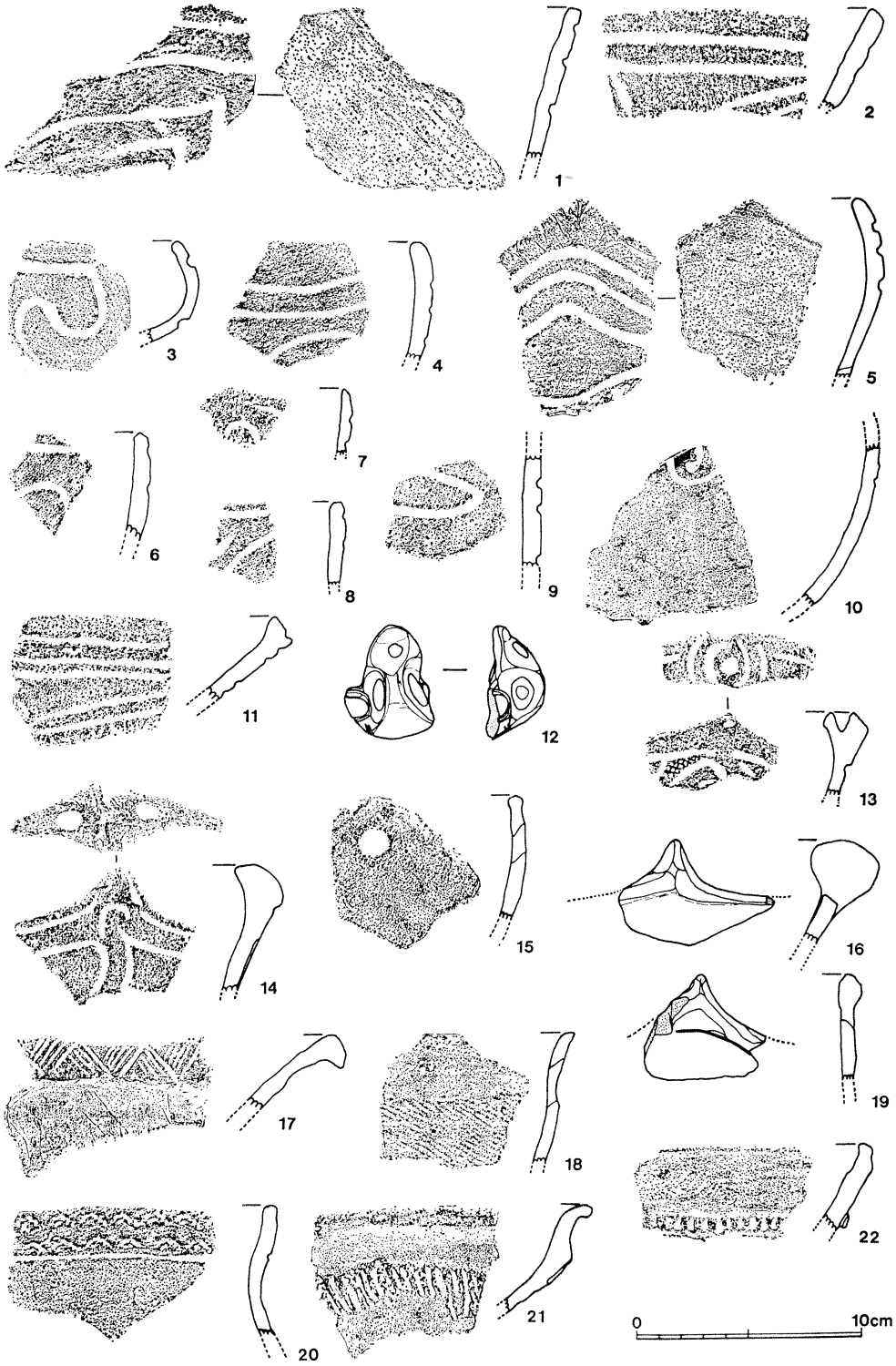
B類土器（第12図8・9）は貝殻の腹縁を横に連続して押圧し、これを一単位とした文様帯を形成するもので、文様帯の上下には幅の狭い横ナデが施されている。8は口縁から4段、9は2段の文様帯が認められる。8は口縁に小さな山形状の突起を持ち、裏面には条痕文が認められる。

C類土器（第12図10～13）は条痕文のみを施すものであるが、10・11・13は凸帯を口縁に貼付している。12は口縁端部の若干の余り土を外側に折り曲げている。10・13は裏面にも条痕文が残る。12は不定方向の条痕文が施されているが、その他は横位、斜位の条痕文が比較的整って施文され、色調も灰色をなし、他の土器とは異る。

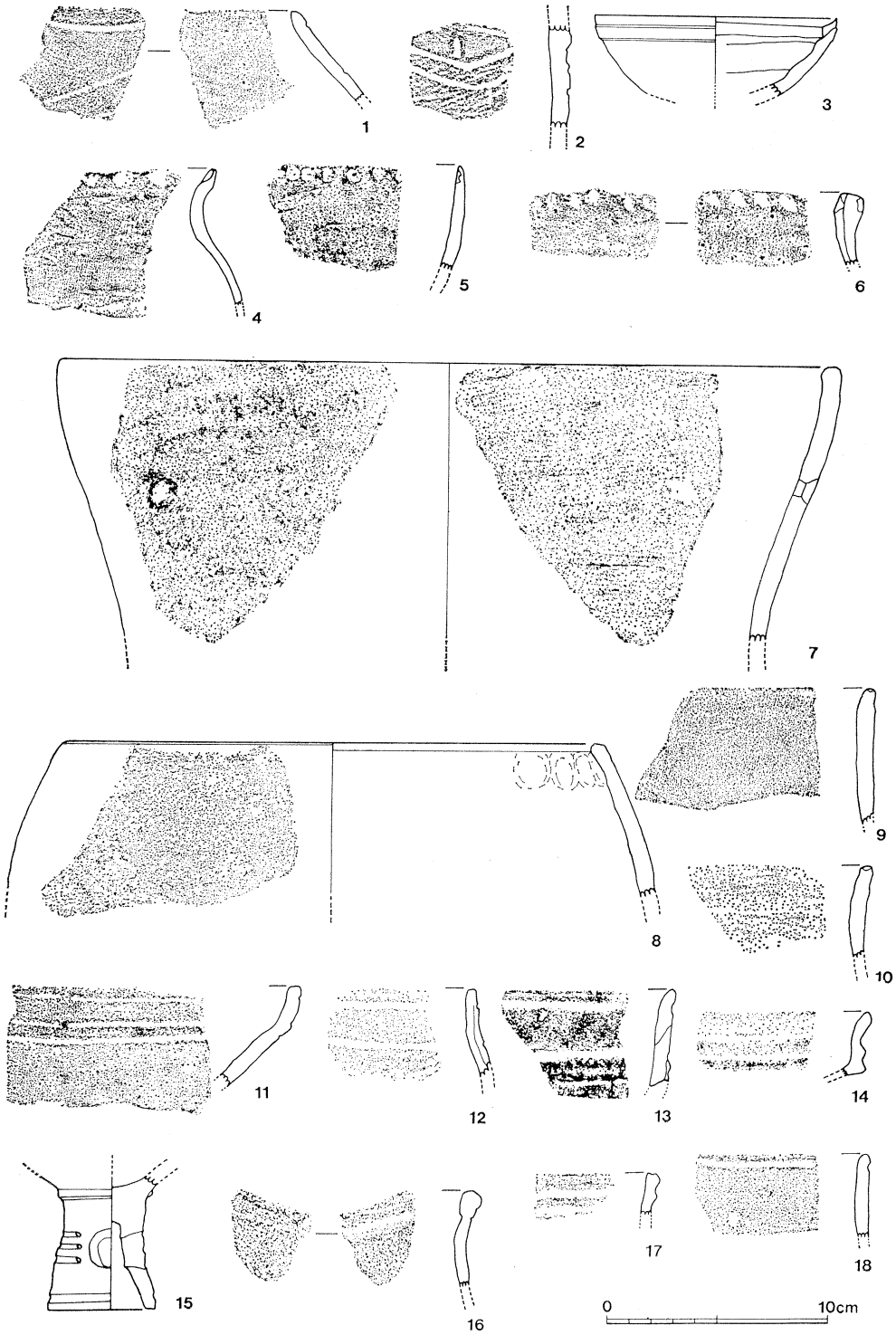
D類土器（第12図14・15）は爪形文を施文する土器である。14は条痕地に幅のつまった爪形文を連続して施文するもので裏面にも条痕文を施す。15は表裏とも条痕を持たず、無地に半截竹管状工具を押し引いて施文した筋のある連続爪形文帯が横位に二帯施されている。器厚はいずれも0.6㎝内外である。

E類土器（第13図1～13）は刺突文を施文する土器である。口縁の形態で大別すると口縁上端に刻目を持つもの（1）、折り返し口縁をとるもの（2）、凸帯を貼付するもの（3～6）の三種ある。凸帯を貼付する土器のうち平たい凸帯の3・5には凸帯の上にも文様が施文されており、3は半截竹管状工具による刺突文、6は棒状工具の一種によるものと考えられるが、三本単位の沈線が認められる。刺突文の施文工具は半截竹管状のものによるもの（1～3）と、棒状のもの（4～13）とがあり、このうち、棒状の工具には刺突痕が丸くなるもの（4～9、12、13）と三角形をなすもの（10、11）とが存在し、後者には意図的な面取りが行なわれていた可能性が考慮される。2、8、11、12には裏面ないし、表裏に条痕文が施されている。

F類土器（第13図14～17）は細い貼り付け凸帯で飾られる土器である。14、16、17は凸帯に刻目を備えている。刻目の施文工具は半截竹管状のものを刺突した14、棒状のものを



第14図　縄文式土器拓影（後期1）



第15図　縄文式土器拓影（後期2）

横に押圧した16、半截竹管状のものを蚯蚓ばれ状凸帯の上から、押し引きした17とがある。その他の部分の文様は、14が凸帯に沿った半截竹管状工具による刺突文、15が裏面条痕文、17は地文に縄文が施されている。

G類土器（第13図18・19）は縄文のみを施文するものを一括したが、18は右下りの単節斜縄文、19は左下り、右下りの単節斜文を組み合せて羽状縄文を構成する。

後期の土器

この期の土器は前期の土器と比較して若干厚手である。器形は完形をなすものがなく、いまひとつ判然としないが、以前からの深鉢形土器に加えて、浅鉢形土器、高脚付浅鉢が出現し、また把手、あるいは把手状の突起を口縁に付設するものが存在する。

この期の土器を大別すれば太い沈線文を主体として一部に磨消縄文を施すA類、口縁を肥厚させて文様帯を構成する所謂、縁帯文系と総称されるB類、細い沈線や、擬縄文を施文するC類、口縁内外に刺突を施すD類、無文で平縁の口縁や、刻目口縁をなす粗製のE類、始点と終点に工具を刺突して節のある沈線を施すF類、巻貝を利用した凹線文を施文するG類等に大別できる。

A類土器（第14図1～11）は巻貝による太い沈線を主体とした土器である。沈線には直線を基調としたもの（1・2・11）と、曲線（3～9）、あるいは渦巻き状をなすもの（5）がある。このうち、1は沈線と沈線の間にかすかに縄文が認められ、所謂、磨消縄文であることが判る。この土器の裏面には斜めの条痕文が認められる。5は波状口縁をなし、11は口縁部にアクセントを持つ。

B類土器（第14図13・14・17・18・20～22）は一応縁帯文系と考えるものを一括したが、その形状には各種あって一様ではない。13、14は沈線文を基調とするもので13は沈線と沈線との間に右下りの縄文を施し磨消縄文とし、波状をなす口縁の上端に一個の孔を中心として同心円状の沈線が施文されている。14は波状口縁の頂部の両側から貫通しない孔が穿たれている。17は口縁を外側に肥厚させ鋸歯状の沈線を施しその下部には無文帯がくるものである。18は口縁部の文様帯を省略して無文帯・右下りの縄文帯が続く。20は口縁を肥厚させる代りに、沈線で文様帯を無文帯と区画するもので、文様帯には縄の両端を結んだ原体を回転させて施文する結節縄文を施している。

C類土器（第15図1・2）は細い沈線を主体とする土器で、1は内傾する口縁部を持ち、器表面には、二本の沈線が認められる。2は細い沈線と左下りの擬縄文を施す土器である。

D類土器（第15図4～6）は口縁の内側に刺突文を施すことを基本とする土器である。刺突の工具は竹管によるもの（5）の他、先の丸いもの（4）先端のササクレたもの（6）

とがある。4は表裏に擦痕が認められる。6は口縁の表面にも裏面と同じ刺突を施す。

E類土器（第15図7～10）は粗成で無文のものを一括したが、これらの土器の器形は概ね深鉢形をなすものと考えられる。口縁は平たく仕上げるもの（7・8）とかすかに刻目を施すもの（9・10）とがある。7には所謂、補修孔が穿たれている。

F類土器（第15図11・15・18）は沈線の始点と終点に刺突を施す土器である。15は高脚付浅鉢形土器と考えられるものの脚部で、二方向から円形の透し孔が穿たれている。この透しの間には三本の・刺突を起点とする沈線が施文されている。

G類土器（第15図12～14・16・17）は口縁部に巻貝を利用した凹線文を施す土器であるが、複合口縁状をなす14、波状口縁を呈する16がある。

以上、後期の土器について若干の説明を加えたが、この他にこの期の土器として把手（第14図12）や把手状の口縁を呈するもの（第14図15・16・19）がある。12は表面上部から裏面に、また側面に貫通する孔が穿たれている。一部に平面形がU字形を呈する沈線が認められる。16は口縁に直交する形で突起を作っている。

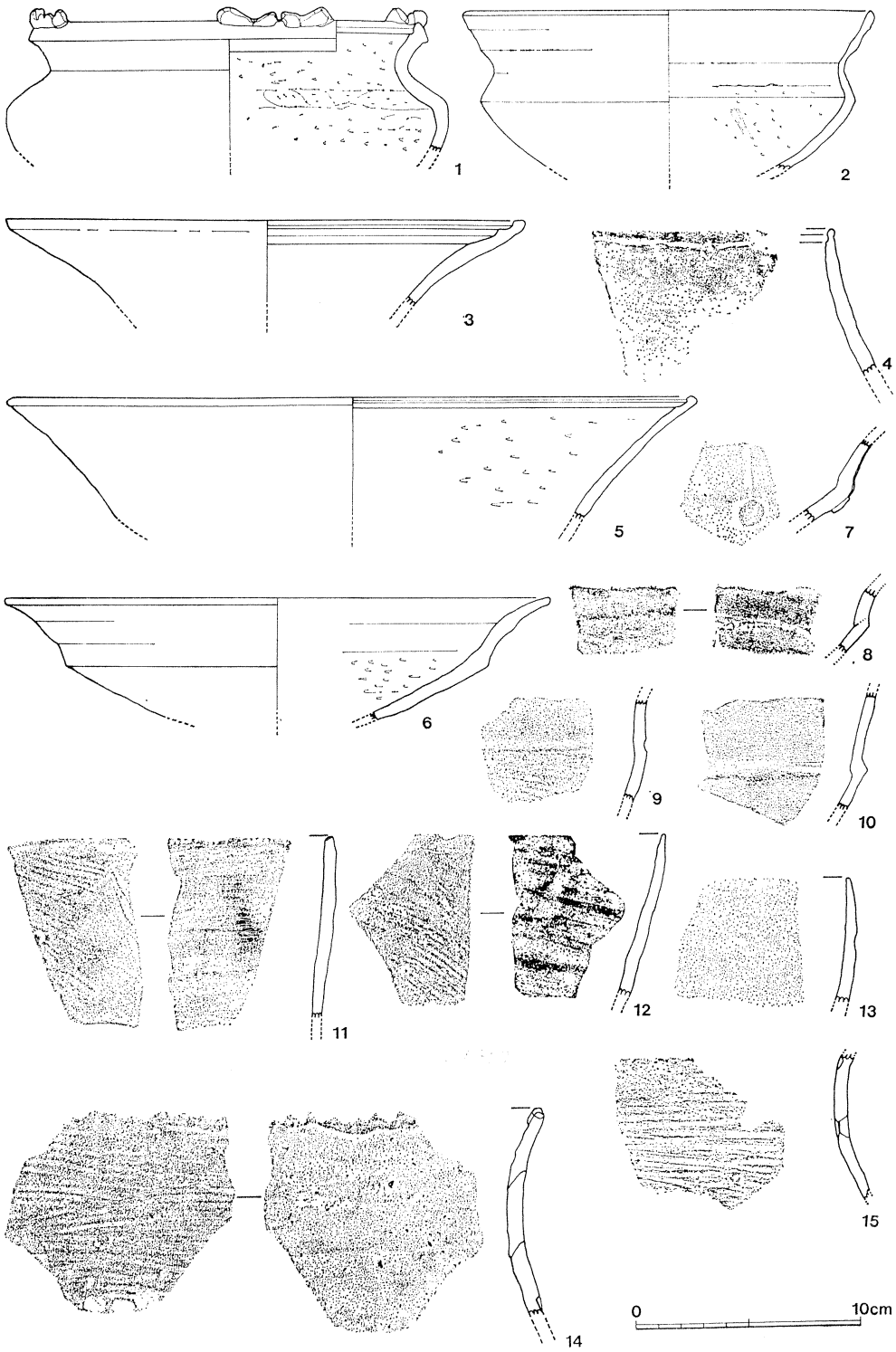
晩期の土器

今回の調査で最も多量に出土した土器である。浅鉢形を主な器形とする精製土器と深鉢形土器を中心とする粗製土器によって構成されている。精製土器は内外面をヘラ磨きで仕上げるA類と、一部に擦痕をとどめるB類とがある。また粗製土器には口縁に凸帯を持たないC類と凸帯を持つものとがあり、凸帯を持つものは口唇に刻目を持ち刻目凸帯を有するD類、口唇に刻目を持たない刻目凸帯のE類、刻目を持たない凸帯のF類とがある。粗製土器は全体にカサカサした乾いた感じのものが多い。器形はそのほとんどが深鉢形をなすと考えられるが、僅かに壺形を呈するものも存在する。全形を知るものが少量で明確にし得ないが、凸帯の下部あたりから外側にゆるく開くもの、直線的に底部に至るもの、ゆるく内湾するものがある。

A類土器（第16図1～7・10）は精製土器を一括した。器形は識別の可能なものは概ね浅鉢形を呈する。この類の土器には口縁の内側に1条～2条の沈線を備える1・3・4・5がある。1は口唇に勾玉形の突起を持ち、胴部内面の一部に削りを施す。7は縦に走る沈線の終点に円形浮文を貼付している。

B類土器（第16図8・9）は一部に擦痕をとどめる土器で半精製ともいうべき性格のものであろう。8は器表面に擦痕が認められ、9は横に引かれた沈線を境にして下部に擦痕が認められる。

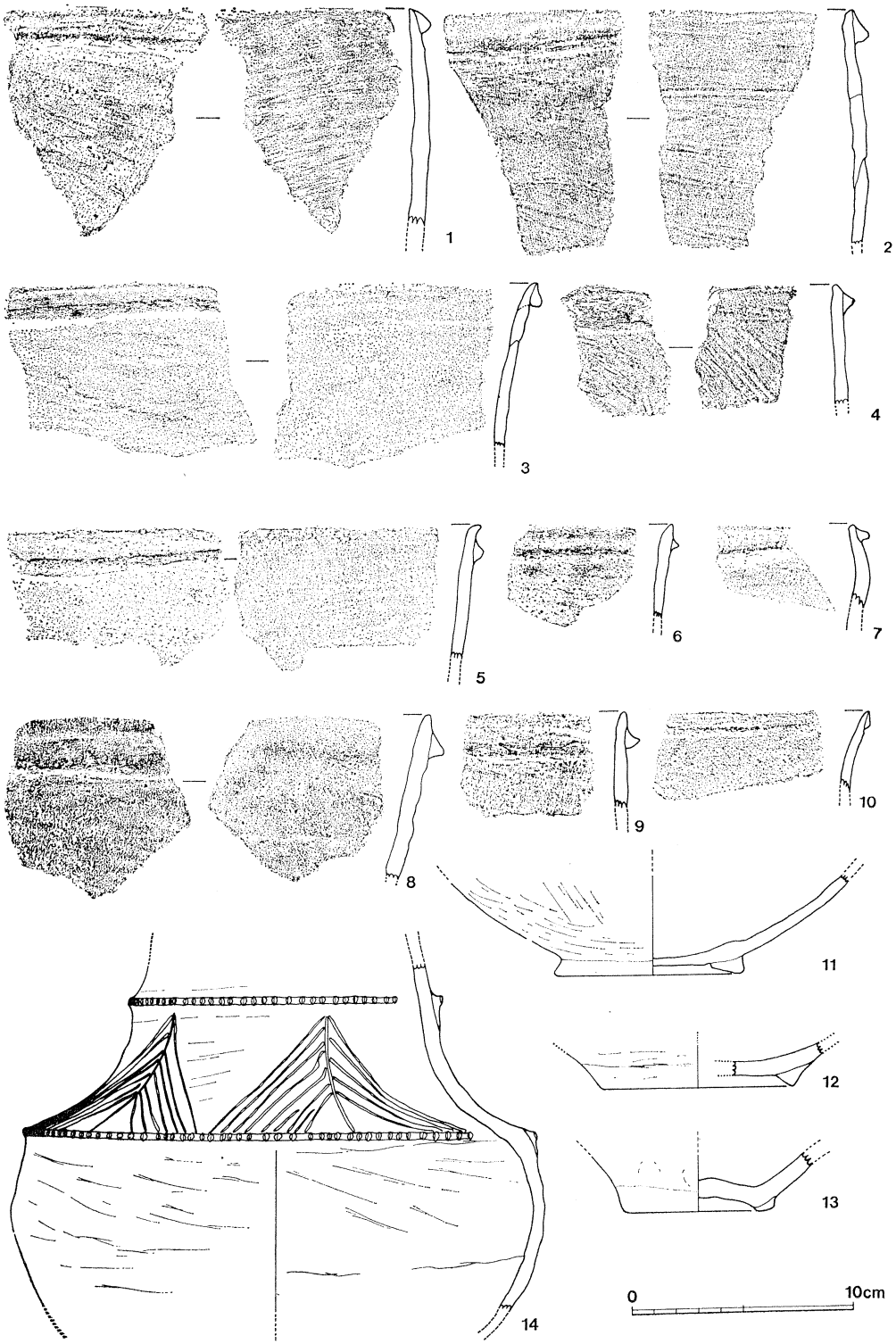
C類土器（第16図11～15）は口縁に凸帯を持たないものを一括したが、調整は条痕文に



第16図　縄 文 式 土 器 拓 影（晩期1）

第17図　縄文式土器拓影（晩期2－1）

第18図　縄文式土器拓影（晩期２－２）



第19図　縄 文 式 土 器 拓 影（晩期2～3）

よるものが多い。刻目凸帯は断面三角形を呈す。11・14は口唇に刻目を施すが、11は狭い間隔で浅い刻目、14は深い刻目をなす。14は器表面に、15は裏面にシャープさを欠く鈍い刺突文が施文されている。

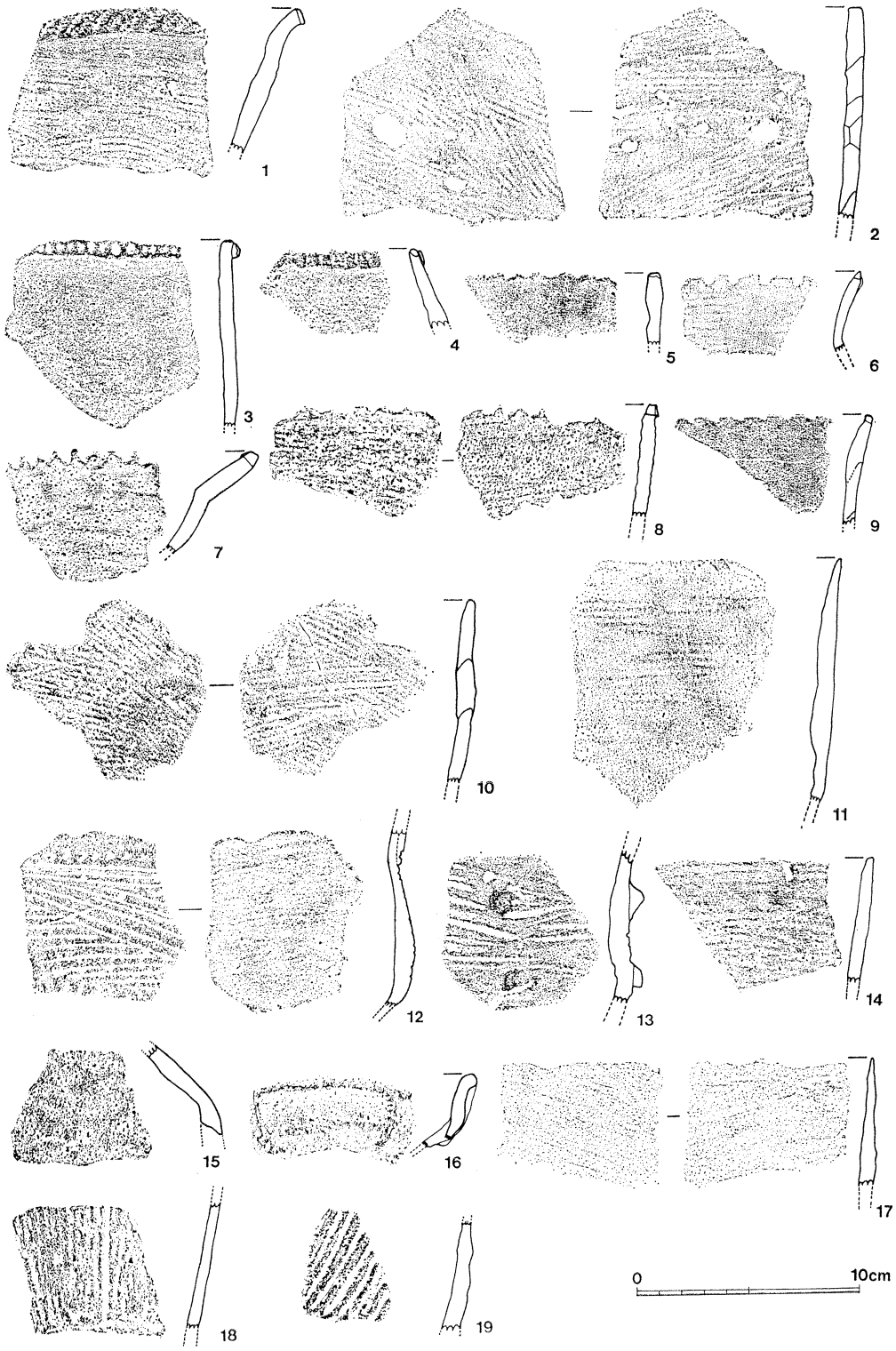
D類土器（第17図１～５）は口唇に刻目を持ち刻目凸帯を備える粗製土器を一括した。いずれも、二枚貝を利用したと考えられる刻目を施すもので、１～３は刻目が鋭く、深く刻まれている条痕文によって仕上げている。４・５は風化が著しい為、器面調整はいまひとつ明らかではないが、刻目は間隔が狭く、浅く刻まれている。

E類土器（第17図６～14、第18図１～20、第19図14）は刻目凸帯を施す粗製土器を一括した。器面は磨滅の著しいものも少なくなく全てについて正確に把握することができないが、条痕によって調整する第17図６～14、第18図１・２・５・12・14と擦痕によって調整する第18図３・７～９・17、第19図14とがある。凸帯はその形状からみると断面が三角形を呈する一群と断面を平たく収めるものとがある。第17図６～13、第18図１～８・20、第19図14が前者で第17図14、第18図19が後者である。凸帯貼付の位置では、口唇から若干、下った所に貼付する、第17図６～８、11～13、第18図２・３・６～16と口唇から直接貼付する第17図９・10・14、第18図１・４・５・17～19とがある。刻目は貝殻状工具を利用したと考えられる第17図６～11、第18図１～８・10・13・16・17とヘラ状工具を利用したと考えられる第17図12～14、第18図９・11・12・14・15・18～20、第19図14との二種ある。

第18図20は発達した厚手の凸帯を貼付する深鉢形土器で復原口径15.1㎝を測る。凸帯上の刻目はヘラ状工具によって間隔の狭い浅いもので、一部分刻目を省略している。器面は器表面では縦横に砂粒の動きが認められるが、丁寧な調整で擦痕とは異なるようである。内面は口縁近くに指頭による押圧痕が認められる。第19図14は頸部と、頸部と胴部の境に刻目凸帯を備え、この刻目凸帯の間にヘラ状工具による沈線文を施文する壺形土器である。刻目はヘラ状工具による浅いもので間隔も一定ではない。器面の調整は内外面とも擦痕である。

F類土器（第19図１～10）は刻目のない凸帯を貼付した土器を一括した。第19図４を除いていずれも器面に擦痕を認め、凸帯の位置は口唇から直接貼付する第19図１～３・７・10と口唇から若干下った所に貼付する第19図４～６・８・９とがあってE類と共通する要素を備えている。

以上の他に晩期としては粗成土器の底部が三点（第19図11～13）出土している。いずれも、中央が外周より凹んで所謂、中凹底を呈している。これらは、底部に粘土紐を巻いて嵩上げしており、第19図11などは一見高台状をなしている。器面は第17図11・12では擦痕



第20図　縄文式土器拓影（時期不明）

が認められ、第17図13では指頭による押圧が残る。

時期不明の土器

20図1～19は時期不明の土器を一括して図示した。1は口縁を若干外反させ、肥厚させて貝殻状工具による刻目を施す土器で器厚は0.9㎝と厚手である。器面には条痕文を施文する。20図2は平縁の土器で表裏とも条痕文が施文されている。所謂、補修孔が一つ穿たれている。後期的な土器であろうか。3・4は刻目凸帯を有する土器であるが、晩期の粗製土器とは手法、胎土、質感ともに明確に異なり、黒褐色でやや湿った感じを与え、刻目も二段に施されている。5～10は口唇を刻目で飾る土器である。器面に条痕を施す6～8と無文の5・9とがあり、また、10は刻目が浅いことなど一様ではない。11・14・17は条痕文を施文する土器であるが、3・4と同じく、後晩期の粗製土器とは若干、胎土、質感ともに異っている。12は刺突文と沈線文で飾る土器である。文様構成、とりわけ、沈線文のそれは前期A類等と類似するも、押し引き文ではなく、やはり区別されるべきであろう。13は沈線文と瘤状の突起を備える土器である。この土器の沈線文を工字文の変形と見れば晩期の所産とも考えられる。とまれ山陰的な土器ではないことは確かで他地域からの流入品の可能性もある。16は凸帯が囲むように施文された土器である。下部は一部変形しており、注口か何か、特殊な『装置』が付設されていたのであろうか。18は縦位の条痕文、19は右下りの沈線文風の文様を施す。

小　結

以上、早期から晩期に至る大まかな分類を試みたのであるが、最後に今回の調査で得られた成果、編年上の位置、今後の課題等、若干述べて結びとしたい。

島根県に於ける早期の土器は従来、横道遺跡(註1)の押型文土器、菱根ヤノンバ遺跡(註2)の「縄文地繊維土器」、佐太講武貝塚(註3)に代表される条痕文土器等が知られていたが、今回の調査で検出された早期の土器は、菱根ヤノンバ遺跡、佐太講武貝塚の土器と共通する要素を備えながら、他方で若干異る点も備えている。つまり、早期C類とした土器は表面が縄文、裏面に条痕文を施文する土器で表裏に縄文を施す菱根ヤノンバ遺跡の土器とは区別され、早期A類、B類の条痕地土器も繊維の混入度、器肉の厚み、A類での凸帯貼付等、佐太講武貝塚の土器とは区別される。佐太講武貝塚では器厚は薄手化の傾向をみせ始めていることから、今回の早期A・B・C類はより古式の特徴を備えていると考えられ、概ね早期末に位置付けられる。

前期の土器は器厚が全体的に薄手となり、文様も多様化し、押し引き文、貝殻腹縁文、条痕文、爪形文、刺突文、凸帯文、縄文が認められるが、縄文地の土器は極めて少ないということがいえる。前期A類、E類は文様構成が類似し、横と斜めに幾可学的に構成されており、クネガソネ・後谷遺跡[註4]出土土器[註5]とよく似ており、前期B類は羽島下層式[註6]に近い。前期D類としたものは宮尾式[註7]、磯ノ森式[註8]とほぼ同じ時期のものとみてよかろう。

後期の土器は初頭から終末に至る土器が出土したが、内容的には島遺跡[註9]で出土するような磨消縄文などが欠落しているようであり、いまひとつ明確さを欠く。

晩期はA類～F類に分類したが、精製土器の晩期A、B類を除く粗製土器は概ね晩期C類が前半代、晩期D類～F類が後半代に位置付けられる。このうち後半代の三類は、口唇・凸帯・器面調整に僅かな変化が認められる。これを時期差とみれば、口唇刻目と刻目凸帯⟶刻目凸帯⟶凸帯という図式が成立する可能性も存在し、晩期D類からF類への移行も考慮される。しかしながら、器面調整においてみると、概ね条痕から擦痕へという流れは窺えながらも一律ではなく、晩期F類に於いてさえ条痕文を残している。

次に弥生式土器との関連について考えてみると当遺跡に於いては充分に把握できなかったが近年、山陰地方では各地で晩期縄文式土器と前期弥生式土器とが同一遺跡から検出され注目を集めている、島根県では松江市の石台遺跡、鳥取県では羽合町の長瀬高浜遺跡[註10]などが代表的な遺跡であるが、とりわけ長瀬高浜遺跡に於いては、筆者のいう晩期E類と類似する刻目凸帯土器の凸帯下部に口縁と平行してヘラ描き沈線文が施されており、前期弥生式土器との関連を暗示しているといえよう。　　（卜部吉博）

註1　宍道正年『島根県の縄文式土器集成Ⅰ』（昭和49年）
2　註1に同じ
酒詰仲男・石部正志　「島根県菱根遺跡発掘報告」同志社大学古文化調査団『出雲古文化調査団報告書』（昭和34年）
3　山本　清　「佐太講武貝塚」『講武村誌』（昭和30年）
4　註1に同じ
5　註1に同じ
6　藤田憲司・間壁葭子・間壁忠彦「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第11号（昭和50年）
7　註1に同じ
8　鎌木義昌・池田次郎「岡山県磯ノ森貝塚発掘報告」『吉備考古』81.（昭和25年）
9　間壁忠彦・潮見浩「山陰・中国山地」『日本の考古学』Ⅱ（昭和40年）
10　清水真一氏から教示を受けた。

表1 縄文式土器一覧表

器種	挿図番号	分類	手法の特徴	胎土	色調	焼成	出土地点
深鉢	11—1	早—A	口唇貼り付け凸帯刻目、凸帯の厚み裏は様でない 表面：右下り条痕文 裏面：左下り条痕文	繊維と砂粒を含む	黄褐色	ややもろい	ⅠE11—3
深鉢	11—2	早—A	口縁に波状に貼り付け凸帯 凸帯上部下方に刺突文帯 波状口縁	繊維と大きな砂粒を含む	茶褐色	ややもろい	ⅠE11—1
深鉢	11—3	早—A	荒い仕上げの凸帯と刻目 表面：条痕文 裏面：上部は押圧痕（太く長い）	大量の繊維と若干の砂粒を含む	黄褐色	ややもろい	ⅠF12—2
	11—4	早—A	細い横位の凸帯 表裏：条痕文	繊維・砂粒雲母を含む	黒褐色	ややもろい	ⅠD12—1
	11—5	早—B	表面：右下りの条痕 裏面：横位条痕	繊維と若干の砂粒を含む	暗褐色	良好	ⅠF14—2 No.18
	11—6	早—B	表面：右下りの条痕文 裏面：上部に接合痕、右斜の条痕輪積み	繊維と2㎜大の砂粒を含む	暗褐色	良好	ⅠG14—4
	11—7	早—B	表面：左上りの条痕 裏面：横位条痕	若干の繊維と砂粒を含む	暗褐色	良好	ⅠF14—2
	11—8	早—B	風化著しい 裏面：指圧痕 輪積み	繊維と若干の砂粒を含む	黒褐色	良好	ⅡF12—3
	11—9	早—B	表面：横位の条痕 裏面：縦位の条痕 重厚な感じ	若干の砂粒を含む	淡黄灰色	良好	ⅢG—10
	11—10	早—B	表裏：条痕文	若干の砂粒と雲母を含む	灰色	良好	ⅢE—13
	11—11	早—D	表面：半割竹管状工具と考えられる沈線が縦横に施される　裏面：横位の条痕輪積み	小さな砂粒を若干含む	茶褐色	良好	ⅠE14—4
	11—12	早—C	表面：斜縄文 裏面：横位の条痕 補修孔あり	若干の繊維と2㎜大の砂粒を多く含む	茶褐色	良好	ⅠG14—2
深鉢	12—1	前—A	表面：口縁部に凸帯上部、凸帯上には押引き沈線（棒状工具）、下部は右下りの条痕 裏面：右下りの条痕、口唇は横位条痕	1㎜前後の砂粒を含むが良好	黄褐色	良好	ⅠF11—4
深鉢	12—2	前—A	口縁部に凸帯 表面：条痕か、押引き沈線が横方向と弧状に施されている。炭化物付着の裏面は指圧痕	比較的良好で若干の砂粒を含む	灰色	良好	ⅢF14—2

器　種	挿図番号	分　類	手法の特徴	胎　土	色調	焼成	出土地点
	12—3	前—A	表面：押し引き沈線と条痕文 裏面：横位の条痕	小さな砂粒を若干含む	黄褐色	良　好	ⅠD12
鉢	12—4	前—A	表面：先端のとがった工具による押し引きが整然と施されている	1㎜大の砂粒を多く含む	黒　色	良　好	ⅠE11—3
	12—5	前—A	表面：押し引き沈線（細い棒状工具） 裏面：右下りの条痕	2～3㎜の砂粒を若干含む	表：黒褐色 裏：灰褐色	良　好	ⅠG12—4
	12—6	前—A	表面：横位の押し引き 風化著しい	若干の砂粒を含む	暗褐色	良　好	ⅠE12—2
	12—7	前—A	口縁部貼り付け	若干の砂粒を含むが良好	黒褐色	良　好	ⅢC12
深　鉢	12—8	前—B	表面：口縁部は凸帯を貼付 口縁から胴部にかけて貝殻腹縁が4段認められる（横位条痕） 裏面：指圧痕	2㎜大の砂粒を含む	黒褐色	良　好	ⅠF12—7
	12—9	前—B	表面：貝殻腹縁文帯が2段見える	砂粒を多く含む	茶褐色	良　好	ⅠE11—4
	12—10	前—C	条痕文土器（横位）	1～4㎜の砂粒を若干含む	黄褐色	良　好	ⅠD13
深　鉢	12—11	前—C	凸帯を貼付 表面：横位の条痕に 裏面：指圧痕	3㎜大の砂を多く含み、雲母を若干含む	黄褐色	良　好	ⅠE14—2
深　鉢	12—12	前—C	口縁余り土の折り返し、表面不定方向に条痕文・不十分な器面調整	1㎜大の砂粒を含むが良好	灰　色	良　好 風化している	ⅡE13
深　鉢	12—13	前—C	口縁貼り付け凸帯 表面：横位の条痕 裏面：右下りの条痕	砂粒を含む	褐　色	良　好	ⅠE13—2
	12—14	前—D	表面：連続爪形文・条痕 裏面：横位の条痕	小さな砂粒を含む	表：黒褐色 裏：茶褐色	良　好	ⅡD14
	12—15	前—D	幅1.5㎝の爪形文が2帯 裏面：炭化物付着	細砂粒を多く含む	茶　色	良　好	ⅠF11
深　鉢	13—1	前—E	表面：指の押圧、口唇上端に棒状工具による押圧の刻目 裏面：ヘラによる押圧 輪積み	1㎜大の砂粒を若干含むが良好	黄褐色	良　好	ⅠE12—2
深　鉢	13—2	前—E	表面：口縁部に凸帯・折り返し凸帯か、その上に押圧痕あり、表壁面下方にかすかな条痕、2つの突出あり全体になめらか、右下りの刺突痕列と痕行に押し引き状の沈線 裏面：横位の条痕、押圧痕	3㎜～0.2㎜砂粒を含む	灰　色	良　好	ⅡE

器種	挿図番号	分類	手法の特徴	胎土	色調	焼成	出土地点
深鉢	13－3	前－E	表面：口縁と凸帯上に刺突文	砂粒を含む	褐色	良好	ⅠE11－4
深鉢	13－4	前－E	貼り付け凸帯　刺突文	大きな砂粒を若干含む	暗褐色	良好	表採
	13－5	前－E	表面：刺突文を斜めに施す	若干の砂粒を含むが良好	褐色	良好	ⅠD14－2
深鉢	13－6	前－E	表面：貼り付け口縁、短い条痕条痕文＋刺突	砂粒を多く含む	褐色	良好	ⅠE11－1
	13－7	前－E	裏面：竹管状工具による刺突	砂粒を若干含む	茶褐色	良好	ⅠE12－3
	13－8	前－E	表面：連続刺突文 裏面：太い沈線	若干の砂粒を含む	灰黄色	良好	ⅣD11
	13－9	前－E	表面：連続刺突文	緻密	茶褐色	良好	ⅠD13－1
	13－10	前－E	表面：刺突文	小さな砂粒を含む	褐色	良好	ⅠG11－3
	13－11	前－E	表面：連続刺突文、右下りの条痕 裏面：横位の条痕 前期	若干の砂粒を含む	黄褐色	良好	ⅠE14－2
	13－12	前－E	表面：羽状に構成される刺突（棒状工具） 裏面：横位の条痕	若干の砂粒を含む	灰色	良好	ⅡE12
	13－13	前－E	表面：連続刺突が縦に施文	砂粒を多く含む	黄灰色	良好	ⅡD14
深鉢	13－14	前－F	表面：口唇部刻目、刻目凸帯、連続刺突文	6㎜大の砂粒を所々含む	黄褐色	良好	ⅠF11
	13－15	前－F	表面：擦痕に近い条痕地、貼付凸帯の曲線文、付着 裏面：整った横位条痕	若干の砂粒と雲母を含む	茶褐色	良好	ⅠE11
深鉢	13－16	前－F	口縁は波状口縁 表面：刻目凸帯を縦横に貼付	1㎜大の砂粒を若干含む	表：茶褐色 裏：黒褐色	かたい	ⅠD12－1
	13－17	前－F	表面：縄文地、貼付凸帯による曲線、半割竹管による押し引き沈線。	2㎜～3㎜大の砂粒を多く含む	表：黒色 裏：茶褐色	良好 風化著しい	ⅢG10
	13－18	前－G	右下りの単節斜縄文 炭化物付着	1～2㎜大の砂粒を多く含む	黄褐色	やや軟質	ⅣH11
	13－19	前－G	表面：縄文は風化の為細部不明なれど羽状に構成か	1㎜大の砂粒を若干含むが良好	茶褐色	もろい	ⅢC13

器種	挿図番号	分類	手法の特徴	胎土	色調	焼成	出土地点
深鉢	14—1	後—A	表面：太い直線の沈線文で区画された縄文と無文帯 裏面：条痕文、磨消縄文	大きな砂粒を含む	茶褐色	良好	ⅠE11—4
深鉢	14—2	後—A	器面の風化著しく調整不明、器表面に太い(7㎜大)沈線が横位斜位に走る	1㎜～2㎜の砂粒を多量に含む	暗灰色	良好	ⅡD13
浅鉢	14—3	後—A	表面：磨消縄文 風化が著しい	砂粒を多く含み雲母も若干含む	黒色	ややもろい	ⅡF12
鉢	14—4	後—A	裏面：太い沈線が3本施されている（巻貝か）	1～2㎜前後の砂粒を若干と雲母を含む	黄褐色	良好	ⅠD14—1
深鉢	14—5	後—A	波状口縁 表裏面：地文は不明 沈線は巻貝を利用し太く深い	1～2㎜の砂粒を含む	褐色土	良好	G13—2
鉢	14—6	後—A	表面：太くて浅い沈線を施す	大きな砂粒を含む	淡黄茶褐色	良好	ⅡD14
鉢	14—7	後—A	波状口縁 表面：太い沈線を施す	砂粒を多く含む	灰褐色	良好であるが風化著しい	ⅠG12—2
鉢	14—8	後—A	表面：太い沈線がみられる	多く砂粒を含む	黒色	やや不良	ⅢC12
	14—9	後—A	表面：巻貝による太い沈線	砂粒を多く含む	黄灰色	良好	ⅡC13
	14—10	後—A	表面：渦巻状の沈線を施す	小さな砂粒を多く含む	灰褐色	良好	ⅠD11
浅鉢	14—11	後—A	表面：沈線文	小さな砂粒を含む	暗褐色	良好 風化が著しい	ⅣG13—1
	14—12		把手状口縁 表面：コ字型の沈線文を施す、2ヶ所に孔がある	砂粒を多く含む	黄褐色	かたい	ⅠD12—3
鉢	14—13	後—B	口縁頂部に小穴、磨消縄文 器面風化	3㎜大の砂粒を若干含むが良好	黄褐色	良好	ⅠF13—3
	14—14	後—B	波状口縁 太い沈線文	2㎜大の砂粒を若干含む	茶褐色	良好	ⅠF13—4
鉢	14—15		波状口縁	2㎜大の砂粒を含む	黄褐色	良好	ⅢG13—1
深鉢	14—16		把手状波状口縁	砂粒を多く含む	茶褐色	良好	ⅠG12—3
鉢	14—17	後—B	口縁外側に鋸歯状の沈線	砂粒を若干含む	茶灰色	良好	ⅣG11
深鉢	14—18	後—B	表面：右下りの単節斜縄文輪積み	2㎜下の砂粒を多く含む	黒褐色	良好	ⅣG13
	14—19		波状口縁	砂粒を若干含む	茶褐色	良好	ⅠE11

器種	挿図番号	分類	手法の特徴	胎土	色調	焼成	出土地点
深鉢	14—20	後—B	表面：沈線文で画した口縁部に結節縄文を施す	3～4㎜大の砂粒を若干含む	黄褐色	良好	ⅠD12
浅鉢	14—21	後—B	表面：ナデと押圧、胴部折曲部分にヘラ状工具による刻目	若干の砂粒を含む	灰褐色	良好	ⅡF11—1
鉢	14—22	後—B	表面：口縁部の若干下った所に刻目凸帯	小さな砂粒を含むが良好	表：黒褐色 裏：黄灰色	良好	ⅣG11
	15—1	後—C	表面：右下りの沈線文ミガキ、風化著しい 裏面：炭化物付着	1㎜大の砂粒を多く含む	暗褐色	良好	ⅢG13—2
	15—2	後—C	表面：沈線で画す磨消縄文	砂粒を若干含む	灰黄色	良好	ⅢF14—4
小型浅鉢	15—3		口縁部裏面に断面菱形の貼付凸帯、口縁部表面には凸帯状がかすかにある	2㎜大の砂粒を含む	暗褐色	良好	Ⅲ
	15—4	後—D	裏面：口縁に刺突	小さな砂粒を若干含む	淡黄灰色	良好	ⅡD12—2
深鉢	15—5	後—D	口縁裏面：竹管の刺突文擦痕	砂粒を多く含む	淡黄灰色	良好	ⅢD14
深鉢	15—6	後—D	口縁内外面：先端のサカクレタ工具による刺突	若干の砂粒を含む	黄褐色	良好	F12—1
深鉢	15—7	後—E	裏面：条痕文 補修孔あり	小さな砂粒を多く含む	灰色	良好	ⅡD14
深鉢	15—8	後—E	裏面：口縁直下指による押圧、無文	1㎜大の砂粒を多く含む	黄灰色	良好	ⅡF11—14
深鉢	15—9	後—E	口縁先端刻目 口縁表裏面：ナデ	若干の砂粒を含む	黄褐色	良好	ⅠE13—3
深鉢	15—10	後—E	表裏面：横位条痕 口唇刻目	小さな砂粒を多く含む	茶褐色	良好	ⅠF14—1
浅鉢	15—11	後—F	表面：口縁部刺突を起点とする細い沈線が口縁にそって3本走る	若干の雲母と1～3㎜の砂粒を含む	表面：黒褐色 内面：茶褐色	良好	ⅢF12—3
浅鉢	15—12	後—G	沈線が2本（横位）施されている	緻密	黄褐色	ややもろい	ⅠD13
浅鉢	15—13	後—G	表面：横位の凹線文 風化著しい 輪積み	若干の砂粒を含む	淡褐色	良好	ⅡF12
浅鉢	15—14	後—G	表面：凹線文 風化著しい	砂粒を多く含む	黒褐色	良好	ⅠG14—1
高脚付き浅鉢	15—15	後—F	脚に透しを2穴開けて刺突を起点とする沈線が4本施してある	小さな砂粒を含む	灰色	良好	ⅢF14—3
	15—16	後—G	表面：口縁部に2本横走する小さい沈線 裏面：口縁部に太い沈線	1㎜大の砂粒を多く含む	茶色	やや不良	ⅠD12

器種	挿図番号	分類	手法の特徴	胎土	色調	焼成	出土地点
	15—17	後—G	表面：口縁部先端にかすかに２本沈線がある	0.5㎜大砂粒を含む	灰色	良好	ⅢF14—4
深鉢	15—18	後—F	表面：口縁部に一本の沈線 調整ていねい 裏面：指圧痕のため調整は荒い 全体に風化著しく、細部の調整不明	細砂粒を多く含む	淡茶灰色	良好	ⅢE12—4
浅鉢	16—1	晩—A	表面：ヘラ磨きか 裏面：ヘラ磨きと削り 口縁内側には一条の不明な沈線 口唇に勾玉状突起 精製土器 口径16.7㎝ 胴部最大径19.4㎝	1㎜大の砂粒を若干含むが良好	灰色	良好	ⅢD11
浅鉢	16—2	晩—A	胴部内面：ヘラ磨き 精製土器 口径18㎝ 胴部最大径16.6㎝	1㎜前後の砂粒を多く含むがおおむね良好	黄灰色	良好	ⅢG11—2
浅鉢	16—3	晩—A	口縁内面に二条の凹線	砂粒を多く含む	灰黄色	良好	ⅡD14
深鉢	16—4	晩—A	口唇裏面に沈線文	砂粒を多く含む	淡灰褐色	良好	ⅡD13
浅鉢	16—5	晩—A	裏面：ヘラ磨き、口縁直下沈線　精製土器	若干の砂粒を含むが良好	灰黄色	良好	ⅠD12—4
浅鉢	16—6	晩—A	裏面：磨き 精製土器 復元口径　24㎝	若干の砂粒を含むが良好	灰色	良好	ⅢF11—4
浅鉢	16—7	晩—A	表面：縦に沈線円形浮文 裏面：ヘラ磨きか、 精製土器	小さな砂粒を若干含む	黒褐色	良好	ⅡF12
浅鉢	16—8	晩—B	表面：擦痕 半精製土器 輪積み	若干の砂粒を含む	暗灰色	良好	ⅡE12
	16—9	晩—B	表面：沈線の横走、擦痕 裏面：調整は不明確 両面とも段がみられる	砂粒を多く含む 0.5～2㎜大	茶黒色	良好	ⅠF11—3
浅鉢	16—10	晩—A	表裏面：ヘラ磨きか 精製土器	小さな砂粒を多く含むが良好	褐色	良好	Ⅳ
深鉢	16—11	晩—C	表裏：条痕文（表・横位、裏・右下り）	緻密	黒褐色	良好	ⅢE12—4
深鉢	16—12	晩—C	表面：右下りに条痕 裏面：右下りに指圧痕	砂粒を含む	淡茶灰色 裏面は黒色	良好	ⅡF12
深鉢	16—13	晩—C	裏面：ヘラ磨きか	1㎜大の砂粒を含むが良好	灰黒色	良好	ⅡF12
深鉢	16—14	晩—C	口唇に二枚貝による刻み目 表面：横位の条痕胴部に刺突文 輪積み	3㎜大の砂粒を多く含む	黒灰色	良好	ⅡE12—2
	16—15	晩—C	表面：条痕文（巻貝） 裏面：刺突文 補修孔あり	砂粒を多く含む	黄灰色	良好	ⅡD13

器　種	挿図番号	分　類	手法の特徴	胎　土	色調	焼成	出土地点
深　鉢	17—1	晩—D	表面：条痕文、口唇と貼り付凸帯上に2段のシャープで深い刻目を有する工具 裏面：条痕文 輪積み	若干の砂粒を含む	黄灰色	良　好	ⅢD11
深　鉢	17—2	晩—D	表面：凸帯より上部は指圧痕　条痕文 裏面：口縁部つまみ上げ刻目は口唇と凸帯に2段に施す、条痕文貝状工具	2㎜大の砂粒を多く含む	茶灰色	良　好	ⅢG11—2
深　鉢	17—3	晩—D	表裏面：条痕文、貼り付け凸帯刻目は口唇部二段（口唇部と貼り付け凸帯上）	1～2㎜の砂粒を多く含む、若干の雲母を含む	暗灰色	良　好	ⅡD14
深　鉢	17—4	晩—D	表・裏面：条痕(凸帯下部)刻目は凸帯と口唇に二段（貝状工具）	1～4㎜大の砂粒を多く含む	灰　色	良　好	ⅡE11
深　鉢	17—5	晩—D	表面：口縁先端部と凸帯部に刻目（狭い間隔）凸帯下方は擦痕 風化の為調整不明	多く砂粒を含む	灰　色	良　好	ⅣF11
深　鉢	17—6	晩—E	表面口縁下凸帯にS字状工具による刻目、条痕の上に貼り付凸帯。胴部に穿孔 裏表面ともに貝殻条痕文 輪積み	多量の砂粒と若干の雲母を含む	黄灰色	良　好	ⅡE11
深　鉢	17—7	晩—E	刻目凸帯 表裏面とも貝殻条痕 輪積み2段まで確認	砂粒を多く含む	黄灰色	良　好	ⅡF12
深　鉢	17—8	晩—E	表面：凸帯を貼り付けた後条痕 内面：口縁つまみ上げた後条痕 凸帯の刻目は先端S字状工具による胴部表面に炭化物付着	1～4㎜大の砂粒を含む	黄灰色	良　好	ⅡF13
深　鉢	17—9	晩—E	表面：口縁部凸帯上左下りにに細い刻目間隔狭し、凸帯下方に擦痕 裏面：横位条痕、その上に押圧痕か	砂粒を多く含む	茶　色	やや不良	ⅠD12—2
深　鉢	17—10	晩—E	表面：口縁部凸帯、狭い刻目 裏面：押圧痕 表裏面に横位条痕、	砂粒を多く含む0.5～1.5㎜大	淡茶灰色	良　好	Ⅲ
深　鉢	17—11	晩—E	表面：口縁部に凸帯、凸帯上に刻目右下りの条痕、押圧痕 裏面：横位条痕、押圧痕	1～2㎜大の砂粒を多く含む	淡茶灰色	良　好	ⅡF11—2
深　鉢	17—12	晩—E	表面：荒い条痕刻目凸帯 裏面：横位に走る条痕（規則的） 刻目はヘラ状工具	2㎜大の砂粒を多く含む	表面：黄灰色 裏面：灰色	良　好	F13

器種	挿図番号	分類	手法の特徴	胎土	色調	焼成	出土地点
深鉢	17—13	晩—E	表面：条痕を施した後凸帯貼付、刻目はヘラ状工具で巾は狭い、間隔は不定 裏面：口縁部に指圧痕（凸帯の押え付け）	2㎜大の砂粒を多く含む	暗褐色	良好	ⅣE14
深鉢	17—14	晩—E	表面：刻目（ヘラ状工具）押圧痕 裏面：横位条痕	細砂を多く含む	灰色	良好	ⅣG13—4
深鉢	18—1	晩—E	表面：擦痕、刻目凸帯、条痕文土器 裏面：右下りの条痕	2㎜大の砂粒を多く含む	黄灰色	良好	ⅢE11
深鉢	18—2	晩—E	凸帯貼付 表面：口縁部ナデ 裏面：条痕文 刻目施文具は貝状工具	1㎜大の砂粒を多く含む	黄灰色	良好	ⅢE14
深鉢	18—3	晩—E	表面：擦痕 口縁部に刻目凸帯を貼帯 刻目は巾が狭く、工具は貝殻か　輪積み	多くの砂粒を含む	黄灰色	良好	ⅡD11
深鉢	18—4	晩—E	表面：不明 貼り付け凸帯は荒い作業 刻目凸帯文土器	砂粒を若干含む	黄灰色	良好	ⅡD11
深鉢	18—5	晩—E	表面：口縁部に凸帯刻目（狭い間隔） 表裏面ともに横位の条痕 全体的に風化が進んでいる	1㎜大の砂粒を多く含む	茶色	やや不良 炭化物が付着	ⅠD14
深鉢	18—6	晩—E	刻目の間隔は狭く浅いが一定。（全体に風化が著しい、調整不明）	砂粒を多く含む	暗茶褐色	良好	ⅠF11—3
深鉢	18—7	輪積み	表面：擦痕 裏面：指頭による押圧 刻目凸帯	1～4㎜大の砂粒を多く含む	暗褐色	良好	ⅡD14
深鉢	18—8	晩—E	表裏面：指圧痕、擦痕、凸帯の刻目は粗雑で細く間隔不ぞろい、貝を利用 凸帯上に擦痕 裏面：一面に炭化物付着 輪積み	2㎜大の砂粒を多く含む（表面には目立たないが裏面に著しい）	表：黒色 裏：黄灰好	色良	ⅢG13—7
深鉢	18—9	晩—E	表裏とも擦痕、刻目は間隔不定である（ヘラ状工具）	1㎜大の砂粒を多く含む	黄灰色	良好	ⅢG11—2
深鉢	18—10	晩—E	表面：口縁部凸帯、刻目（浅い） その他の調整は不明確	0.2～1.5㎜大の砂粒を多く含む	灰色	良好	Ⅱ
深鉢	18—11	晩—E	表面：口縁部に凸帯、狭い間隔での刻目（ヘラ状工具）、 表裏の調整不明	0.5～2㎜大の細砂を多く含む	茶褐色	良好	ⅠD13

器種	挿図番号	分類	手法の特徴	胎土	色調	焼成	出土地点
深鉢	18—12	晩—E	表面：口縁部凸帯刻目(1.5㎝間隔) 右斜条痕 裏面：横位条痕	0.5～4㎜大の砂粒を多く含む	淡灰色	良好	ⅣE11
深鉢	18—13	晩—E	表面：口縁部に凸帯刻目 貝殻状工具 擦痕、押圧痕、接合痕 裏面：調整は不明確	0.5～1㎜大の砂粒を多く含む	暗灰色	良好	ⅡE11
深鉢	18—14	晩—E	表面：口縁部に凸帯ヘラ状工具による刻目、条痕、炭化物付着 裏面：右下りの条痕、押圧痕	1㎜大の砂粒を含むが良好	淡茶灰色	良好	Ⅳ
深鉢	18—15	晩—E	表面：口縁部先端に狭い間隔の刻目、凸帯上部に横ナデ 裏面：押圧痕	砂粒を多く含む	灰色	良好	ⅢD13
深鉢	18—16	晩—E	表面：口縁部凸帯、刻目（浅く狭い） 沈線状痕が横走（先の鋭い工具）	0.5～2㎜の砂粒を多く含む	黄茶色	良好	ⅢC12
深鉢	18—17	晩—E	表面：口唇から直に凸帯を巡らす。刻目は先端断面が波状を程す工具（2枚貝）、 表裏：擦痕	1～3㎜の大きな砂粒を多く含む 風化が進んでいる	茶褐色	良好	ⅠE14—3
深鉢	18—18	晩—E	つまみ上げと擦痕、凸帯は口唇から炭化物が表面に付着 刻目は細い線状 （ヘラ状工具）	1㎜大の砂粒（石英・長石他）を多く含む	黄灰色	良好	ⅡE13
深鉢	18—19	晩—E	表面：刻目凸帯 裏面：右下りの条痕文	1～3㎜大の砂粒を多く含む	黄灰色	良好	ⅡD14
深鉢	18—20	晩—E	口縁外面には凸帯貼付（厚く、広い）、刻目は細く、浅く、間隔不ぞろい。 （ヘラ状工具） 表面：縦・横に砂粒の動き（工具不明） 裏面：指圧痕による凹凸が著しい 炭化物付着　輪積み （複原口径15.1㎝）	若干の砂粒を含む	黒褐色	良好	ⅡE14
深鉢	19—1	晩—F	表面：口縁部凸帯上の上部に擦痕、凸帯下方に右下りの擦痕 裏面：左下りの擦痕 表裏に指圧痕	砂粒を多く含む	灰色	良好	ⅡD13
深鉢	19—2	晩—F	表面の凸帯部の下は右下りの擦痕、口縁部凸帯には指圧痕 裏面：横位条痕（1㎝巾）、圧痕 表面に若干の炭化物付着 刻目ナシ 輪積み口唇から凸帯貼付	砂を含む	茶灰色 裏面は灰色	良好	ⅡF12

器　種	挿図番号	分　類	手法の特徴	胎　土	色　調	焼　成	出土地点
深　鉢	19—3	晩—F	表面：口縁部凸帯、擦痕 裏面：接合痕、擦痕 風化が進んでいる 輪積み	細砂を多く含む	白灰色	良　好	ⅡD13
深　鉢	19—4	晩—F	表面：凸帯下方に擦痕 裏面：口縁部横位条痕、その下は右下りの条痕 刻目非常に小さく間隔狭し、炭化物付着、貼り付け凸帯	砂粒を含む	灰　色	良　好	ⅢC13
深　鉢	19—5	晩—F	表面：口縁部に凸帯、擦痕 裏面：横位の条痕	1～3㎜大の砂粒を含む	茶灰色	良　好	ⅠE13—1
深　鉢	19—6	晩—F	表面：口縁部に凸帯 横位擦痕	1㎜大の砂粒を含む	茶　色	良　好 風化著しい	ⅠE12—3
深　鉢	19—7	晩—F	表面：口縁部凸帯下部に刺突痕	砂粒を含む	淡黄灰色	良　好	Ⅲ
深　鉢	19—8	晩—F	表裏とも擦痕、口縁部凸帯は擦痕を施した後貼り付け	1～3㎜の砂粒を多く含む	黄灰色	良　好	ⅡF11—1
深　鉢	19—9	晩—F	表面：口縁部に貼付凸帯。その下方に擦痕、押圧痕 裏面：擦痕、押圧痕	砂粒を含む	灰　色	良　好	ⅡF13
深　鉢	19—10	晩—F	表面：痕帯上に横位の擦痕	砂粒を含む	灰　色	良　好	Ⅳ一括
底　部	19—11		表面：擦痕 底部外面に若干の炭化物付着　中凹底	小粒の砂粒を若干含む	黄灰色	良　好	D11—24
底　部	19—12		表面：擦痕 中凹み底	砂粒を含む	黒褐色	良　好	ⅡE12
底　部	19—13		表面：指圧痕 風化が著しく、細部の調整不明 炭化物付着 中凹底 底部表面に粘土紐の輪を貼付し、一見高台状を施す	大きな砂粒を多く含み 不良	黄灰色	ややもろい	ⅡF13—2
壷	19—14	晩—E	表裏面：擦痕 刻目凸帯、沈線文土器 上部凸帯径14㎝ 下部凸帯径23㎝ 輪積み	1㎜大の砂粒を含む	灰　色	良　好	ⅡF—13—4
深　鉢	20—1		表面：横位条痕刻目 裏面：刻目	3㎜程度の砂粒を多く含む	黒褐色	良　好	D11
深　鉢	20—2		表面：右下りの条痕 裏面：上部一横位の条痕 下部一右上りの条痕 輪積み	大小の砂粒を若干含む	表面：黄褐色 裏面：黄褐色＋黒色	良　好	ⅣF11—3

器種	挿図番号	分類	手法の特徴	胎土	色調	焼成	出土地点
深鉢	20—3		表面：刻目は凸帯と口唇に2段 刻目は断面がW状 裏面：指圧痕	1㎜大の砂粒と雲母を若干含む	黒褐色	良好	ⅠD11
深鉢	20—4		口唇部に刻目 口縁表面に貼付凸帯刻目	砂粒を多く含む	黒褐色	良好 風化著しい	ⅢF—13
深鉢	20—5		刻目は2枚貝によるものか、断面はW状	若干の砂粒を含む	灰色	良好	ⅢD11—12
深鉢	20—6		口唇：貝による刻目 表面：条痕文	緻密	黄灰色	良好	ⅡF13—2
深鉢	20—7		表面：条痕刻目	1～2㎜の砂粒を多く含む	黄灰色	良好	Ⅳ一括
深鉢	20—8		口唇に刻目表裏面共に横位の条痕	2㎜大の砂粒を多く含む	黄褐色	良好	ⅠF12—3
深鉢	20—9		指頭による刻目、無文土器輪積み	1～3㎜大の砂粒若干の雲母を含む	暗褐色	良好	ⅡF12
深鉢	20—10		表裏面：条痕文（口唇刻目）炭化物付着 輪積み	若干の砂粒を含む	黄褐色	ややもろい	ⅠD13—1
深鉢	20—11		表面：不鮮明な横位条痕 所々押圧痕がある 裏面：全面に指圧痕	砂粒を含む	暗灰色 裏面下部に焼火痕	良好	ⅢG13—12
	20—12		表面：刺突（半割竹管） 沈線（細い） 裏面：横位条痕	砂粒を若干含む	黒褐色	ややもろい	ⅡE12—1
	20—13		表面：ヘラ状工具による沈線、コブ状の貼付文 裏面：指による押圧	若干の砂粒を含む	黒褐色	良好	ⅠC12—1
深鉢	20—14		表面：縄文が横走 全体的に風化が激しく、裏面の調整不明確	砂粒を含む	茶黒色	良好	ⅡA7
	20—15		調整不明 輪積み	3㎜大の砂粒を含む	黄褐色	良好	ⅢC12
	20—16		刻目のある貼り付け凸帯が器面を飾る	大きな砂粒を多く含む	黒褐色	ややもろい	ⅡF12—1 No.3
深鉢	20—17		表裏面：横位の条痕	3㎜大の砂粒を所々1㎜大の砂粒を多く含む	黄褐色	良好	ⅠE12—4
	20—18		表面：縦位の条痕、細い沈線が横走 裏面：調整は不明確	0.5～2㎜の砂粒を多く含む	暗灰色	良好	ⅢD11—12
	20—19		表面：左下りの沈線 裏面：不定方向に条痕文	大粒の砂粒を含む	黒褐色	良好	ⅡE11

2 弥 生 式 土 器

弥生式土器は本遺跡出土遺物中最も量が多く、コンテナ約150箱分ある。これらは前期壺形土器の一部を除いてほとんど破片の状態で出土しており、全てにわたって時期を考えることは困難であるが、口縁部片や文様をもつもの、手法のわかるものが約3,000点あり、これらを大きく前・中・後期に区分し、発掘区ごとに出土点数を示すと表2のとおりである。これによると最下流に位置する第1調査区から全体の約64%が出土しており、あと第Ⅲ調査区、第Ⅱ調査区の順で、上流部にあたる第Ⅳ調査区ではわずか4%の出土をみるにすぎない。時期別にみると前期63%、中期32%、後期5%となっており、前期が圧倒的に多く、後期のものはきわめて少ない。前期の土器のみについてみると第Ⅰ調査区で59%と最も多く、あと第Ⅲ調査区で23%、第Ⅱ調査で14%、第Ⅳ調査区で4%出土している。中・後期の土器はいずれも第Ⅰ調査区に集中して約73%も出土しており、他の調査区ではきわめて少ない傾向にある。このほか、第Ⅱ調査区と第Ⅲ調査区では前期の壺形土器が完形あるいはそれに近い状態で10数個体出土していることが注意される。このことは第Ⅱ・Ⅲ調査区付近に前期の遺構の存在した可能性も考慮されるが、いずれの調査区出土の土器も各時期のものが混在して出土しており、かつ前期の土器でも量的に最も多い甕形土器に完形に近いものがほとんどみられないなど一概には遺構の存在を考え難い。さらに第27図17の鉢形土器（第Ⅱ調査区E13と第Ⅲ調査区C14出土土器片が接合）、第27図18の鉢形土器（第Ⅳ調査区E13と第Ⅳ調査区G14出土土器片が接合）、第32図3の壺形土器（第Ⅲ調査区D12と第Ⅲ調査区E13出土土器片が接合）、第35図23の高坏形土器（第Ⅰ調査区D11と第Ⅲ調査区D14出土土器片が接合）などのように同一個体の破片が遠いものでは直線距離にして約200mも離れて出土するなど、原位置を失ってかなり移動していることが知られる。また、大部分の土器片は破面および器面がかなり磨滅しており、調整痕や文様の不鮮明なものが多い。したがって、少なくとも弥生時代に限って言えば今回の調査区ではいずれも原位置から移動している可能性が強く、調査区にほど近い周辺に遺構が

表2　弥生式土器出土点数一覧

		Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅳ区	合計
前期	壺	375	130	195	31	731
	甕	755	136	238	55	1,184
	蓋	5	1	4	0	10
小計		1,135	267	437	86	1,925
中期	壺	330	13	80	20	443
	甕	365	24	99	19	507
	高坏	28	1	4	1	34
小計		723	38	183	40	984
後期	壺類・甕	98	5	25	5	133
	器台	3	0	2	0	5
小計		101	5	27	5	138
合計		1,959	310	647	131	3,047

存在するか、調査区内に遺構が存在していたとしても洪水等によりかなり破壊されているものと推定される。とすれば、完形に近い状態で遺存していた前期壺形土器は造り方、形態、焼成等、少々移動しても破損しにくい要素をそなえていたとも考えられる。

以上のように本遺跡出土の弥生式土器は、出土状態、遺存状態などから原位置を失っているものと考えられ、各時期のものが混在しているので共伴関係は不明であるが、これまで当地方で行なわれてきた弥生式土器の変遷をもとにその概要を記すことにする。

前期の土器

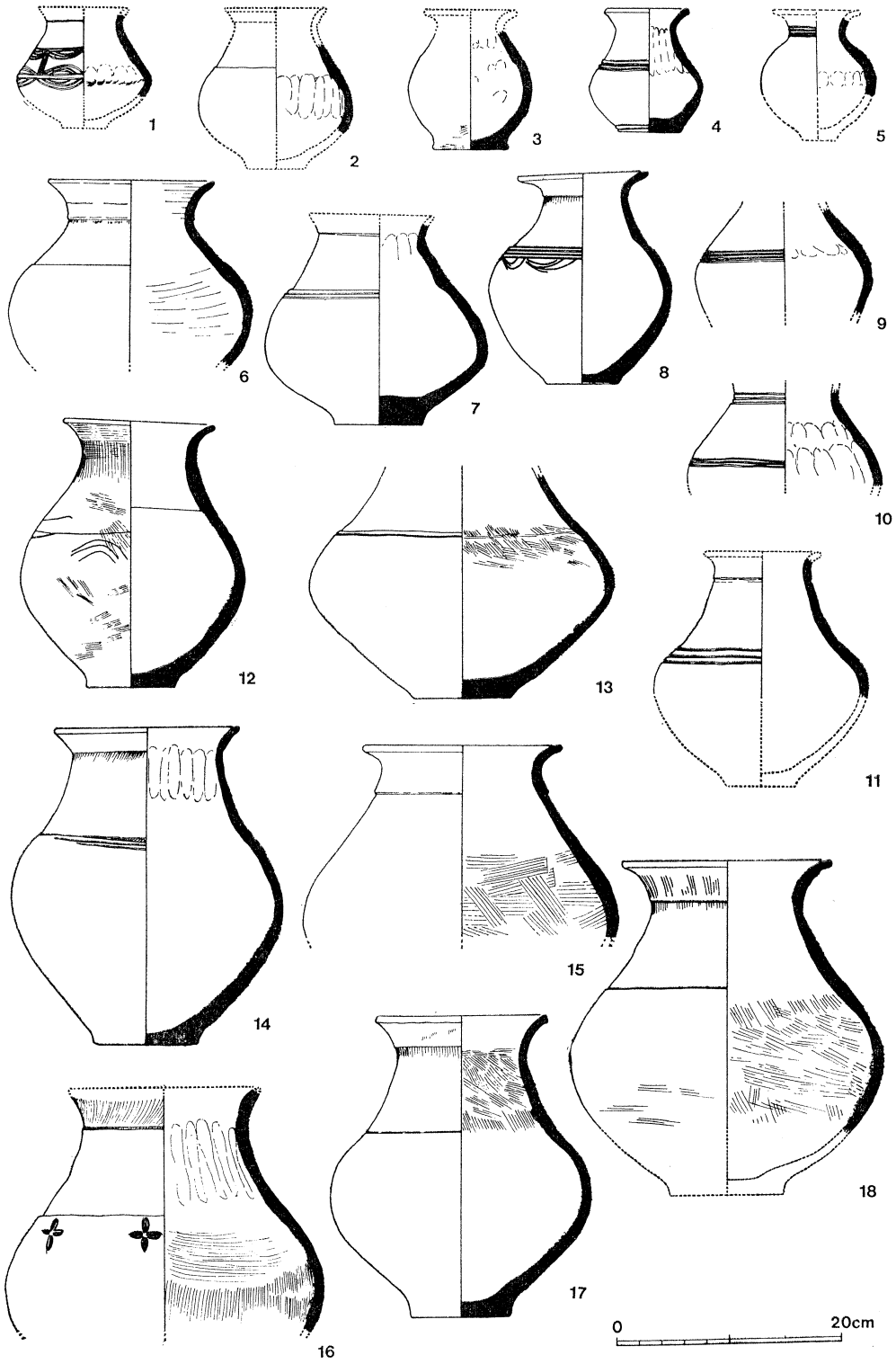
器種として壺形土器、甕形土器、鉢形土器、蓋形土器がある。

壺形土器　形態から大きく3種に分けることができる。

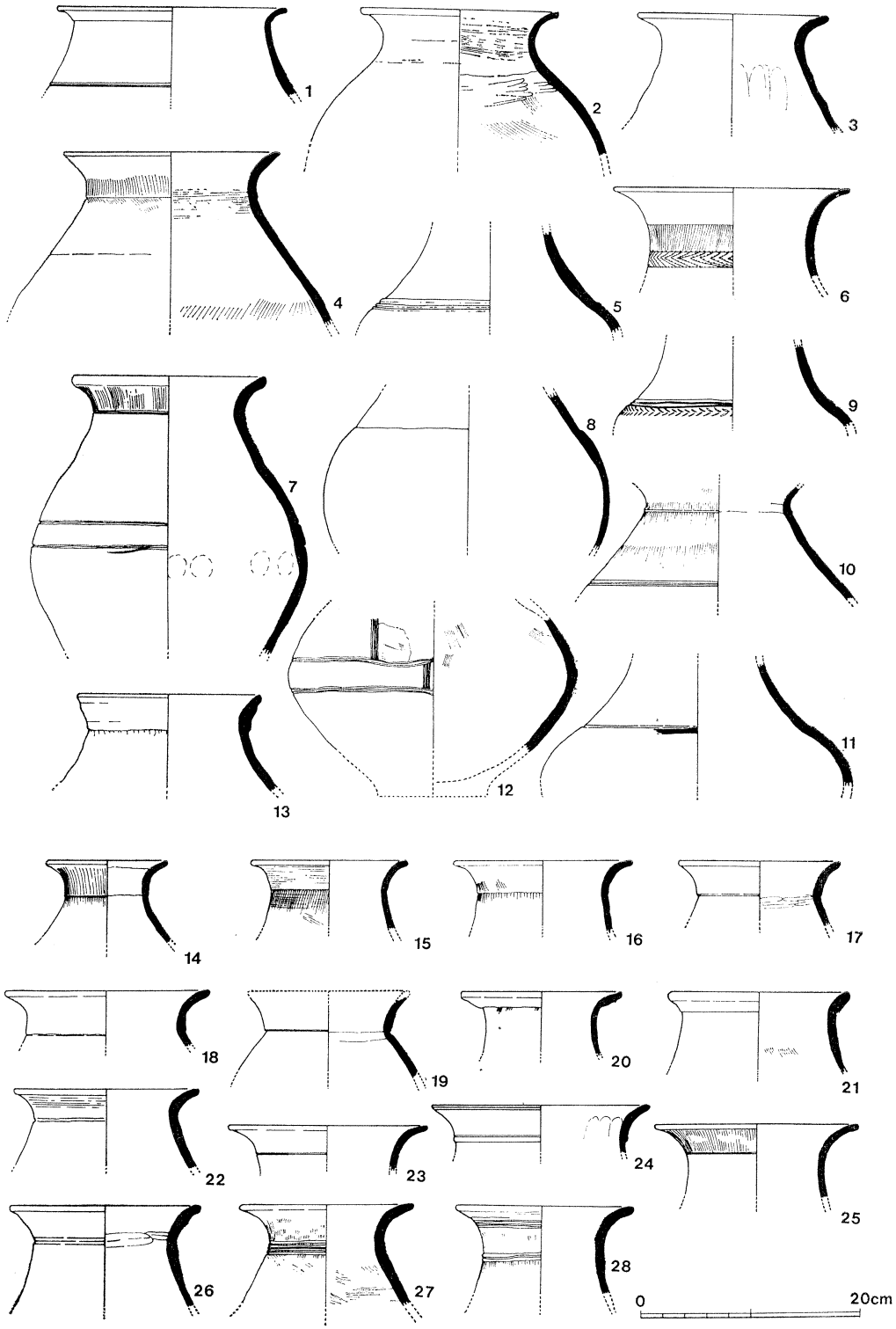
壺A（第21図1～4、6～8、11～18、第22図1～28、第23図7～10、24、25）は口縁部がゆるく短かく外反し、頸部が「八」字状に開き、胴部は扁球形に大きく張り出し、安定した平底におわるものである。ほとんど例外なく外面はていねいなヘラ磨き、内面は刷毛目のあとナデあるいはヘラ磨きで調整され、器面にはあまりあらわれていないが断面をみると大粒の砂粒を多く含んでいる。無文のものもかなりあるが、文様は口縁部と

表3　弥生前期壺の文様構成　　（・個体数を示す）

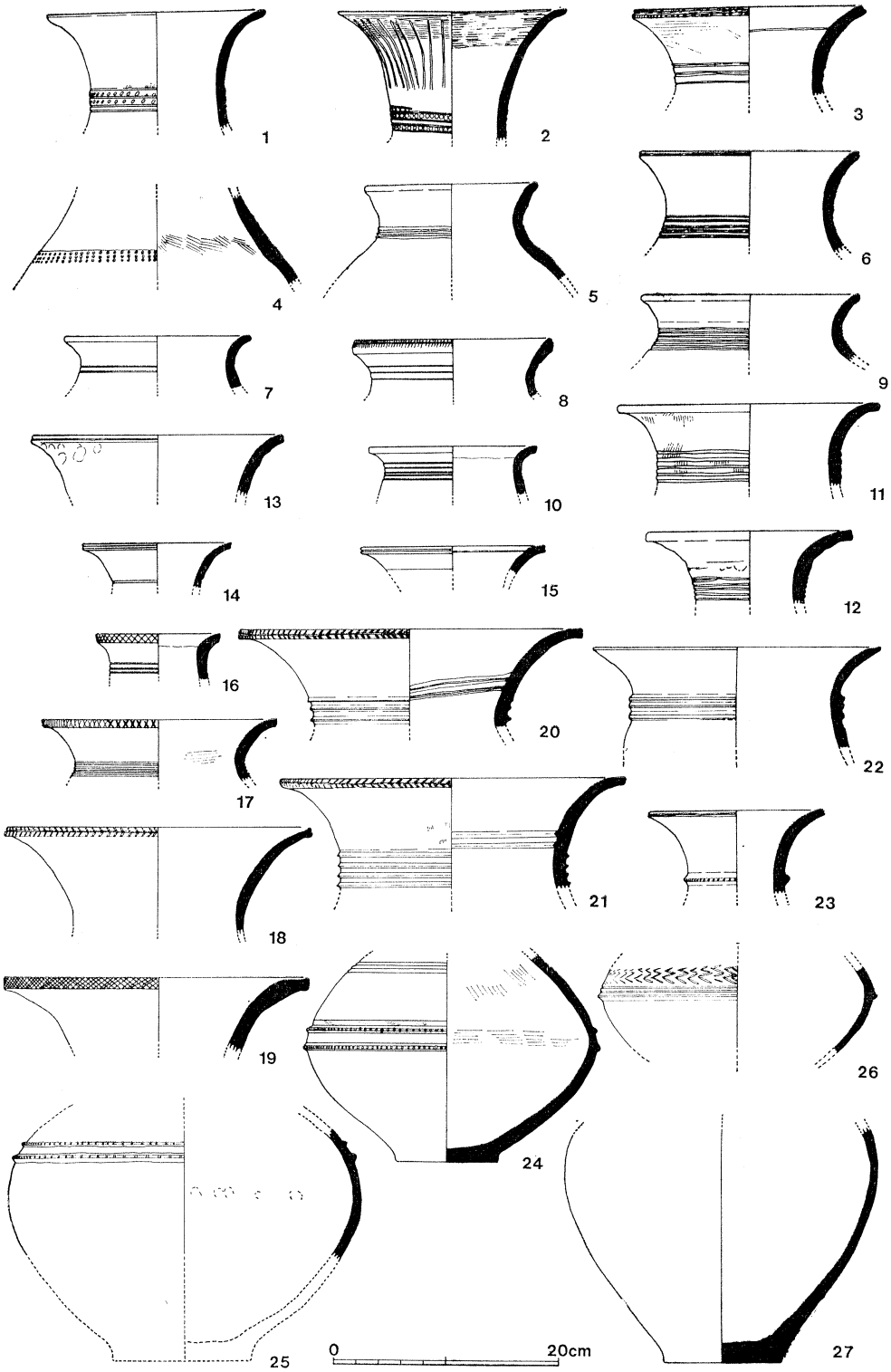
		壺　A	壺　B
無　文		•••••••••••••••••••• •••••••••••••••••••• ••••••••••••••••	•••
段		•••••••••••••••••••• •••••••••••••••••••• •••••••••••••••••••• •••••••••••	
	＋沈線	•••••••••••••••••••• •••••••••••••••••••• •••••••••	
	＋沈線＋羽状	••••••••••••••••••••	
	＋重弧文	•••	
	＋木葉文	••	
削り出し凸帯	帯上無文		•
	帯上沈線	••••••••••	••
	＋貼付突帯	•	
貼り付け凸帯	刻み目無し	••••••	•••••••••
	刻み目あり	•••••••	•••••••
	帯上沈線	••••	
沈　線	1～3条	•••••••••••••••••••• •••••••••••••••••••• •	•••••••••••••••••
	4条以上	••••••••••••••••	•••••••••••••••••••• ••••••••••••
	＋羽状文	••••••••••••••	•
	＋刺突文（竹ヘラ等）		•••
	＋重弧文		•



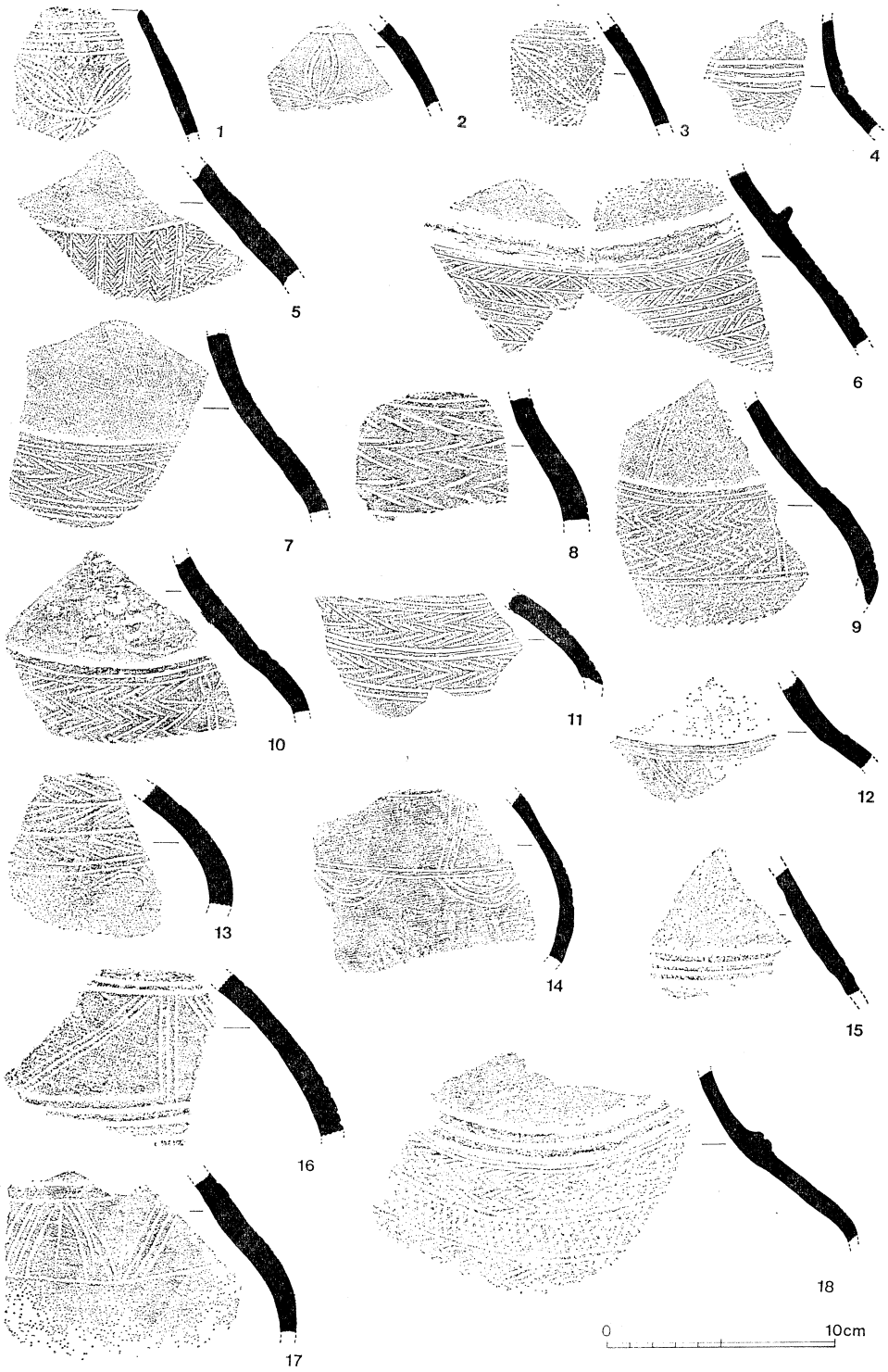
第21図　弥生式土器実測図(1)



第22図　弥生式土器実測図(2)



第23図　弥生式土器実測図(3)



第24図 弥 生 式 土 器 拓 影 (1)

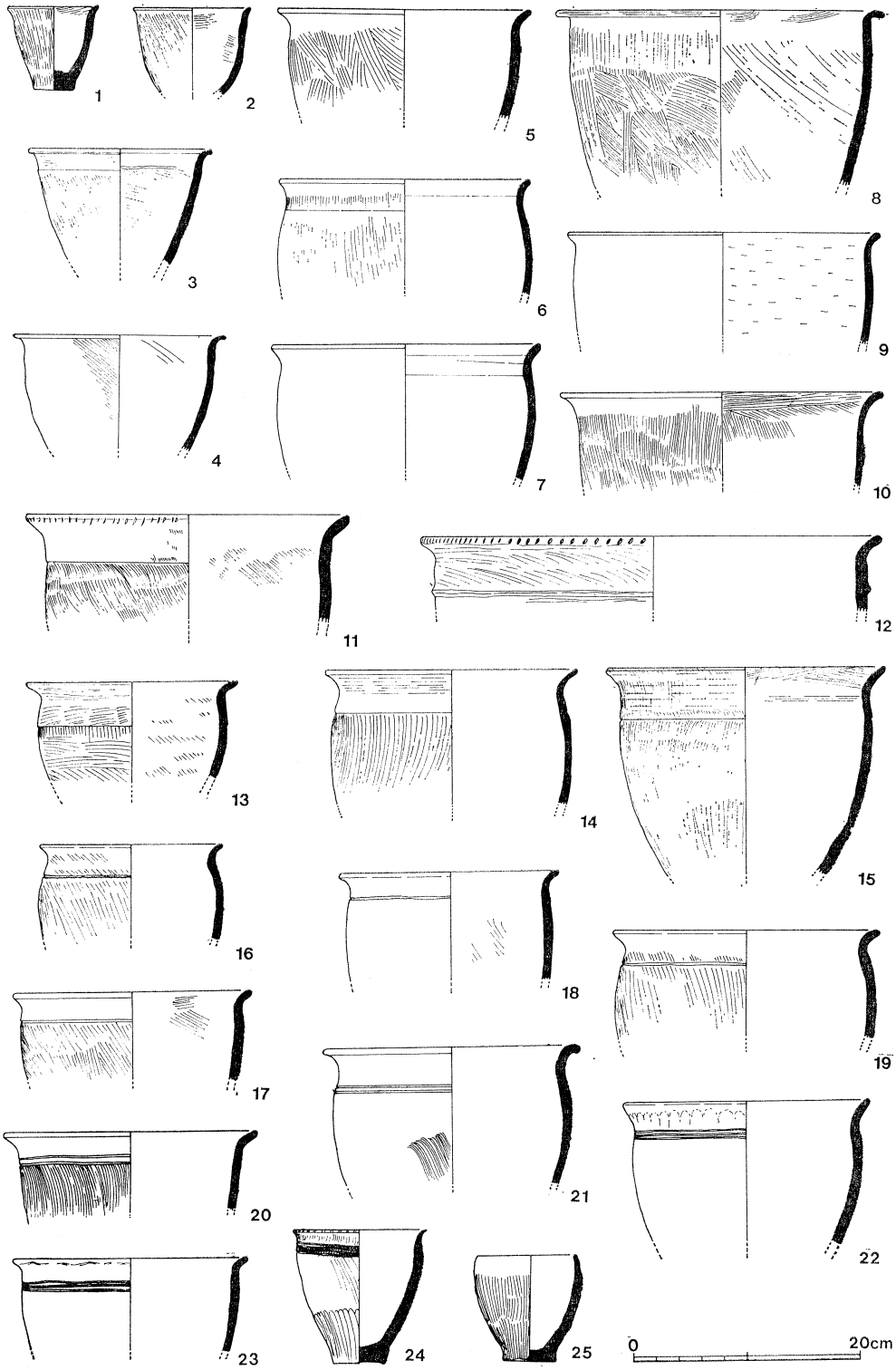
頸部、頸部と肩部の境に区分文様としての段をつけたものが最も多い。段は1条のヘラ描沈線を入れたのち削り取ったもの、刷毛目原体あるいはヘラ状工具でつけたもの、折り返して段状にしたものなどがある。また、段に1～2条のヘラ描沈線を加えたり、さらに羽状文やまれに重弧文、木ノ葉文をつけたものもみられる。羽状文は貝殻腹縁によるものあるいはヘラと貝と併用したものが多く、ヘラのみによるものは少ない。木ノ葉文はX字状の対角線をひいて、これを軸として木ノ葉形を描くいわゆる新しい型のものである。(註1)

次に量的に多いのは口縁部と頸部の境あるいは頸部にヘラ描沈線を入れたものである。このうち1～3条の沈線を入れたものが大半を占め、4条以上の多条の沈線を入れたものは少い。そのほか少数ではあるが、削り出し突帯をもつものと貼り付け突帯をもつものがある。削り出し突帯としたものはまず2～4条のヘラ描沈線を入れ、そのあと上下の沈線部分を浅く削り取って突帯状にしたものが多く、頸部あるいは肩部につくり出されている。貼り付け突帯の多くは肩部あるいは胴部最大径付近につけられ、刻み目のあるものとないもののほか、やや幅広い突帯を貼り、帯上に1～2条の沈線を入れたものもわずかにみられる。

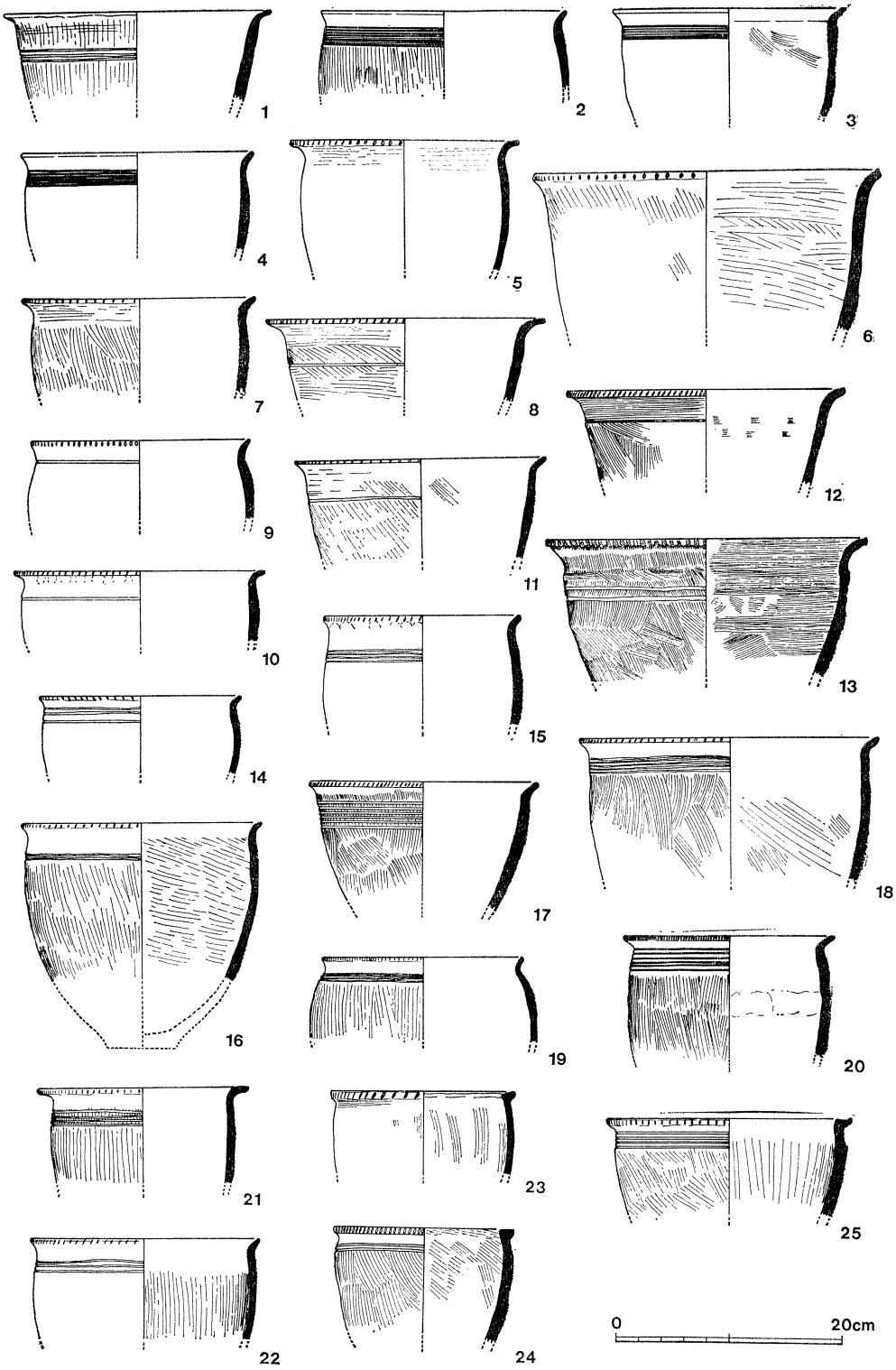
壺B（第23図1～4、6、11～23）は、口縁部がやや大きく外反して開き、頸部は筒状に長くなるものである。この種の土器で完形品はないが、肩部はあまり張り出さず長胴形になって平底におわる形態と思われる。無文のものおよび段をもつものはきわめて少なく、頸部にヘラ描沈線を入れたものが多い。ヘラ描沈線は4条以上の多条のものが多く、なかには9条にまで達しているものもみられる。また沈線文が頸部に螺旋状にめぐらされ、この沈線間に竹管による刺突文をめぐらしたものが1例ある（第23図2）。螺旋状の沈線は上から見た場合時計回りの方向に回っており、回転台が使用された可能性を示唆するものである。ほかに貼り付け突帯をめぐらすものと削り出し突帯をもつものがある。貼り付け突帯は頸部外面に数条めぐらされるが（第23図20～23）、内面にも同様な突帯をもつもの（第23図20・21）がある。削り出し突帯は壺Aのものと同じく浅く削り出したものである。このほか壺Bに特徴的なのは大きく開いた口縁部先端に1条のヘラ描沈線を入れたもの、それに加えて貝あるいはヘラで羽状に刻み目を入れたもの、斜格子文を施したものが半数近くみられることである。櫛描直線文をもつ中期前葉の壺形土器の口縁端部に刻み目や斜格子文が多くみられることからすればこの種のものはより中期に近い要素といえる。

ほかに壺AかBか不明であるが、前期壺とみられる底部に3条づつのヘラ描沈線を十字形に施したものがある（第30図1・2）。

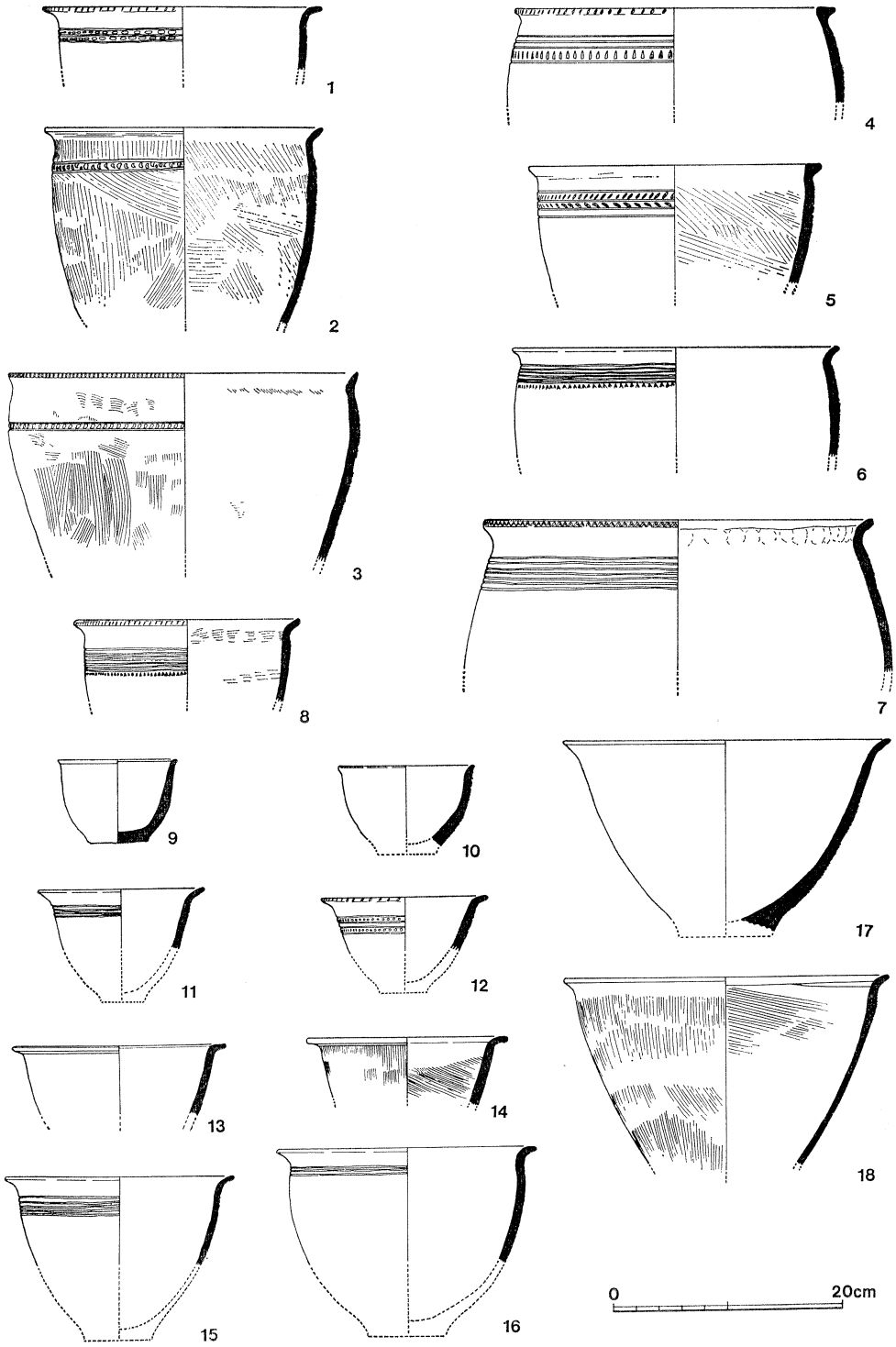
壺Cは無頸壺で3例ある。口縁部に4条のヘラ描沈線を入れその下にヘラによる木ノ葉



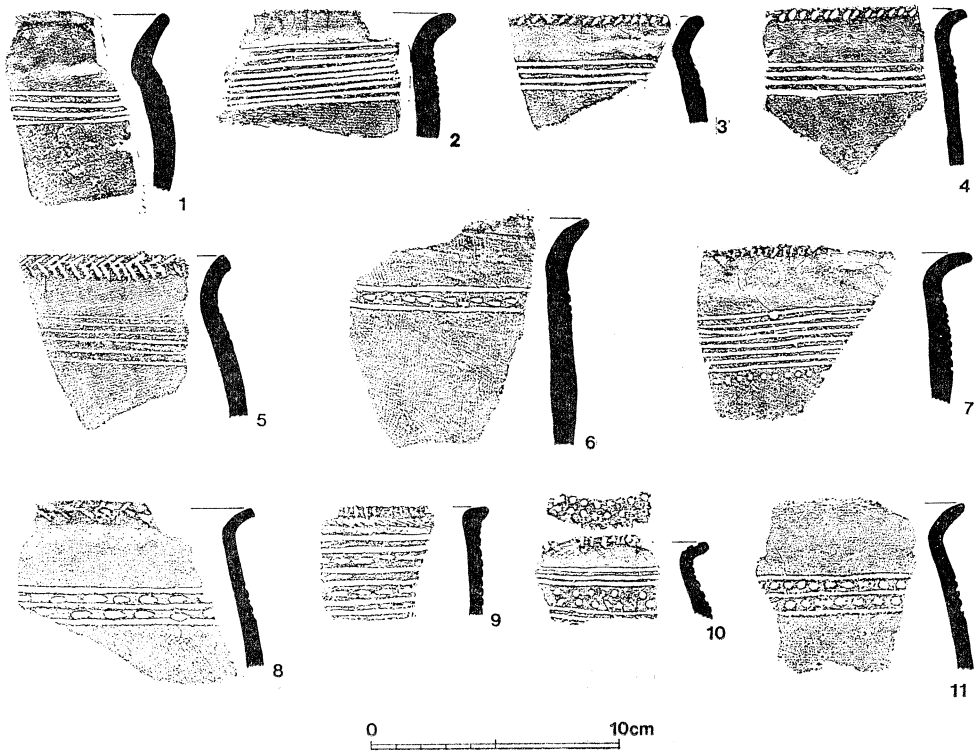
第25図 弥 生 式 土 器 実 測 図 (4)



第26図 弥 生 式 土 器 実 測 図 (5)



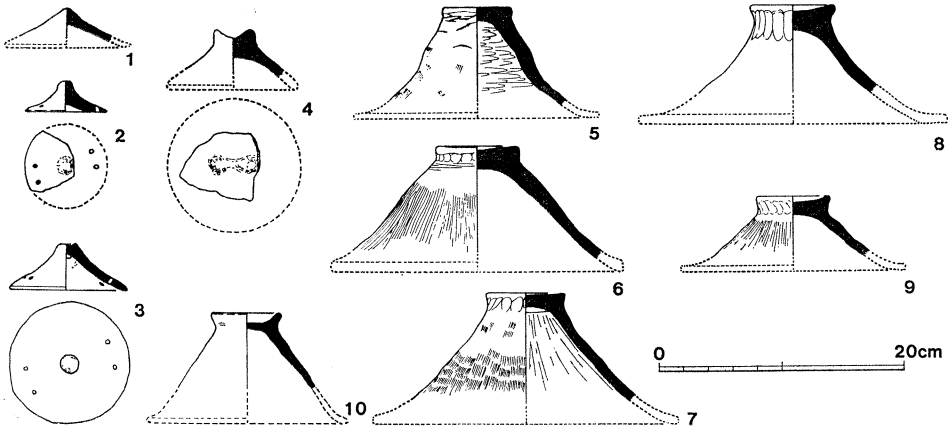
第27図　弥 生 式 土 器 実 測 図 (6)



第28図　弥　生　式　土　器　拓　影 (2)

文を施したもの（第24図１）、ヘラ描沈線と刺突列点文を交互にめぐらし、口縁部の相対する位置に２個づつの孔をあけているもの（第32図７）、口縁端部に突帯をつけて幅広くつくり、肩部に貼り付け突帯を２条つけ、その下に貝殻腹縁による沈線文と斜格子文を施したもの（第32図20）などで量的にはきわめて少ない。

甕形土器　小片が多いためなかには鉢形土器もかなり含まれていると思われるが、弥生式土器中最も多い。口縁部は短くゆるく外反し、胴部はほぼ直線的にすぼまるものもあるが、ややふくらんだのちすぼまって平底におわるものが多い。口縁部が肥厚して逆Ｌ字状になるものも少量みられる。調整はほとんど内外面ともに刷毛目が施され、胎土中には大粒の砂粒を含むものが多い。大きく分けて口縁端部に刻み目をもつものともたないものがあり、量的には刻み目のないものが３倍ほど多い。両者ともに頸部無文のもののほか１～10条のヘラ描沈線を入れたものがある。ヘラ描沈線の条数を比較してみると数的には口唇部に刻み目をもたないものに１～３条の沈線文が多く、刻み目をもつものに４条以上の多条の沈線文が多いが、顕著な差は示していない。沈線文以外の文様をもつものとして頸部に段をつけたものと沈線文にヘラあるいは竹管によって刺突列点文を加えたものがある。



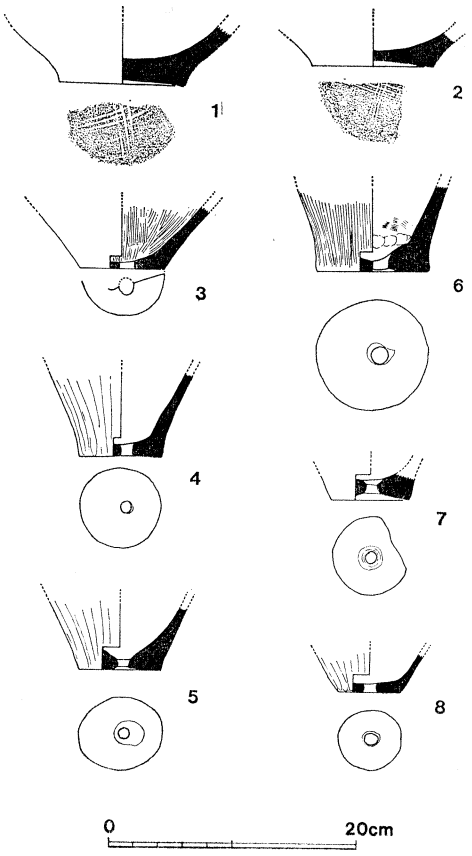
第29図　弥生式土器実測図(7)

段はヘラあるいは刷毛目原体によって浅くつけられたもので8例ほどあり、前期甕形土器の1%にも満たない。ヘラ描沈線に竹管あるいはヘラによって列点文を加えたものは52例ほどある。ほとんどのものは2～3条のヘラ描沈線を描き、その沈線間に列点文を施すものであるが、三角形列点文はいずれも5～7条の多条の沈線を描いた下に施されている。沈線間に列点文を施すものは小数例ではあるが壺Bの頸部に同様の文様構成のものがみられる（第23図1・2）。多条の沈線の下に三角形列点文をめぐらすものは中期前葉の甕形土器にみられる櫛描直線文＋三角形列点文の文様構成ときわめて類似していることが注意される。

鉢形土器　文様、調整等甕形土器とほとんど同じであるが、形態として口径に比して高さの低いものを鉢形土器としてとりあげた（第27図9～18）。小片が多いため甕形土器としたものの中にかなり含まれているかもしれない。

蓋形土器　量的にはきわめて少なく、10例出土している（第29図）。壺用蓋形土器とみられるものは4例あり、いずれも笠形を呈す。乳頭状のつまみを1個もつもの、2個もつもの、中凹みのつまみをもつものがある。いずれも外面ヘラ磨き調整がなされ、胎土中に大粒の砂粒を含むなど壺形土器と同様な特徴をそなえている。甕用蓋形土器とみられるものは大きく外方へ開く笠形の土器で6例ある。外面は刷毛目調整のものとナデ仕上げのものがある。これら蓋形土器のなかには中期のものも含まれている可能性もあるが形態、技法等によって今のところ区別し難いので一応ここで一括して取り上げた。

以上、前期の土器についてその概要を述べた。これまで弥生前期を大きく前半と後半に分けて考えているが、(註2)良好な一括遺物がないため必ずしも明確な区分とは言い難い。ここでも同様に共伴関係が不明なため組成や層位をもとに区分することはできない。ただし、



第30図　弥生式土器実測図 (8)

技法、文様、形態等を大雑把にみても、本遺跡出土土器群中には少なくとも古い要素をもつものと新しい要素をもつものの二者は含まれている。古い要素をもつものとしては壺Aとしたものの大半が考えられる。すなわち口縁部がゆるく短かく外反し、頸部が「八」の字状に開き、胴部は扁球形に大きく張り出し、安定した平底におわるもので、なかでも口縁部と肩部に段をつけたものがその典型といえる。これに対して壺Bとしたものは口縁部がやや大きく外反して開き、頸部は筒状に長くなる形態で、口縁部先端に刻み目を入れ、頸部には貼り付け突帯や多条のヘラ描沈線をめぐらすものが多いなど、櫛描直線文をもつ中期の壺形土器に近い要素を多くそなえていることが注意される。これに関連して、良好な一括資料とはいえないが、邑智郡瑞穂町の順庵原A遺跡(註3)からはほとんど壺Bにあたるものばかり出土しており、相対年代を考えるうえで示唆に富むものといえる。なお、前期でも新しい要素とされる削り出し突帯や貼り付け突帯が壺Aとしたものの中にも少数ながらみられ、今後壺Aとどのような関係をもって出土するのか注意する必要がある。また壺Aに多くみられる貝殻腹縁あるいはヘラによる羽状文、重弧文、木ノ葉文などのほか無文のものを前期のなかでどのように位置付けるか今後の課題といえよう。

甕形土器と鉢形土器は多条のヘラ描沈線をもつもの、多条のヘラ描沈線の下に三角列点文を加えたものなど中期前葉のものに直接つながる要素をもつもの、あるいは壺Bにみられる沈線間に刺突列点文を加える文様と同種の文様をもつものがあり、これらは前期のなかでもより中期に近い新しい要素をもつものとして個々には指摘できる。ただし、大半のものは技法・文様・形態等によって今のところ明確に区分できない。

中 期 の 土 器

器種として壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高坏形土器などがある。

壺形土器　全形を窺えるものはほとんどないが口縁部の形態から次の6種に分けることができる。

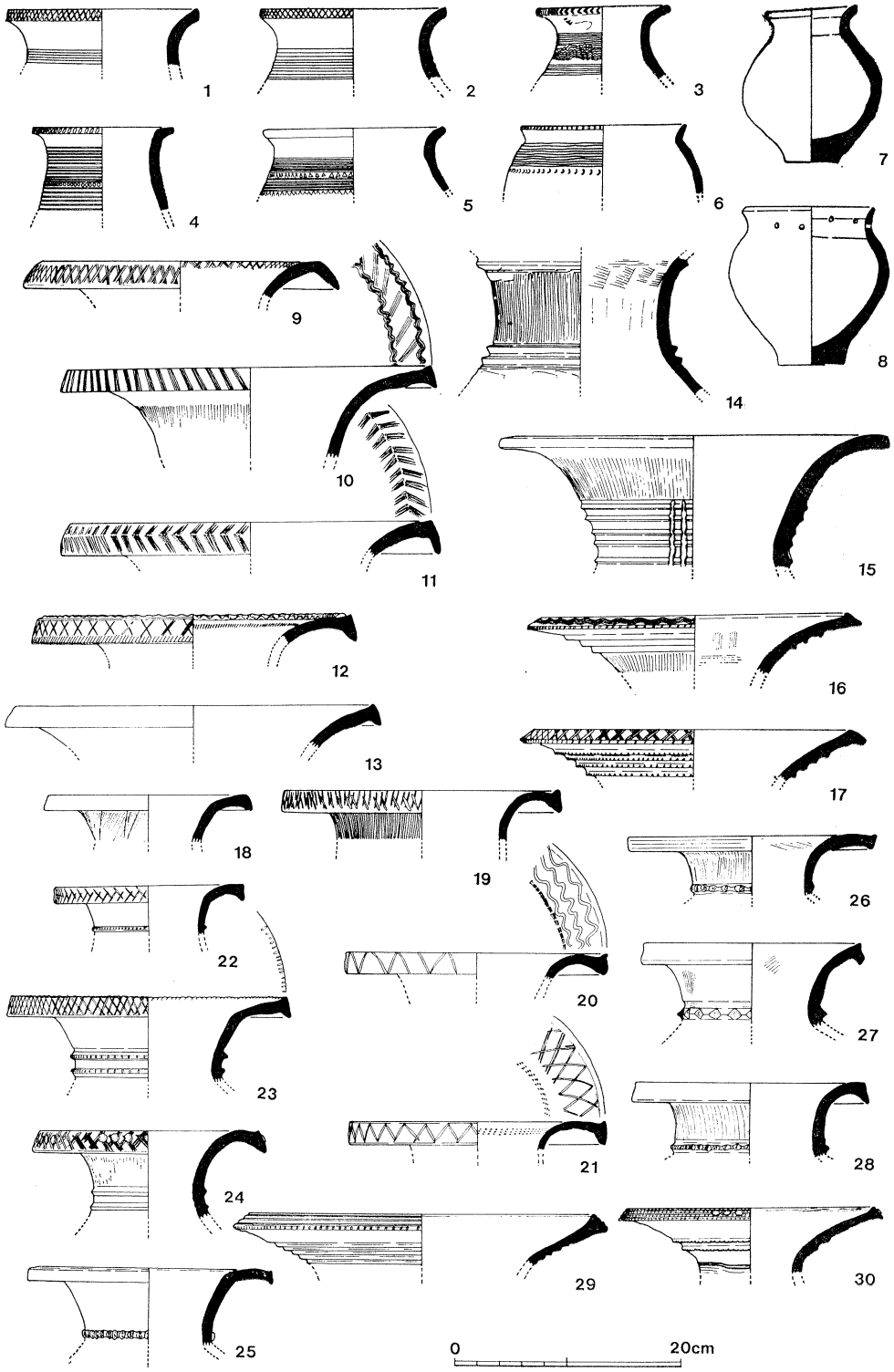
壺A（第31図1～5）は口縁部がゆるく外反し、端部にわずかな平坦面をもつものである。文様としては口縁端部にヘラによる刻み目、羽状文、斜格子文等を施し、頸部には櫛描直線文、波状文、三角形列点文等をめぐらすものである。頸部の直線文は1単位5～6本の櫛状工具で文様の間隔をほとんどあけずに施して幅の広い文様帯をつくり出すものが多く、一帯づつ間隔をあけて施すものは少ない。波状文はもっぱら手先の動きによってえがくものである。口縁部の文様と三角形刺突文は前期壺Bや、前期甕形土器にみられるものと同様のものである。

壺B（第31図9、11、12、15、18～28）は口縁部が朝顔形に大きく開き、筒状の頸部につづくものである。口縁端部を上下に拡張し、そこに文様を施すものが多い。つくり、形態、大きさにはかなりの幅がある。施文の範囲、文様の多寡等を比較すると口縁部の内外面に文様をもつもの、口縁部の外面にのみ文様をもつもの、無文のものに分けることができる。口縁部の内外面に文様をもつものは量的に最も多く40数例ある。文様は半截竹管状の工具あるいは櫛状工具によって2～3条の斜格子文が施される例が最も多く、ほかに波状文、直線文、斜行文、刺突列点文などがある。また、きわめて少数であるが、ヘラによる斜格子文、斜行文などもみられる。さらにこれらの文様に円形浮文や貼り付け突帯を加えたものもある。これら各種の文様は単独で用いられることはなく、ほとんど数種類の文様を組み合せてにぎやかに飾られている。櫛描文のうち、一度も櫛を土器面からはなすことなく描出する波状文や直線文は量的に少なく、単位文をえがくごとに櫛を土器面からはなし、この操作を反復することによってえがく斜格子文、斜行文、刺突文等が多い。波状文はすべて回転運動を十分利用して連続的にえがくものである。頸部まで残存している破片をみると、頸部に断面三角形の突帯をめぐらしたものや、それに刻み目を加えたもの、指頭圧痕を加えたものなどもある。

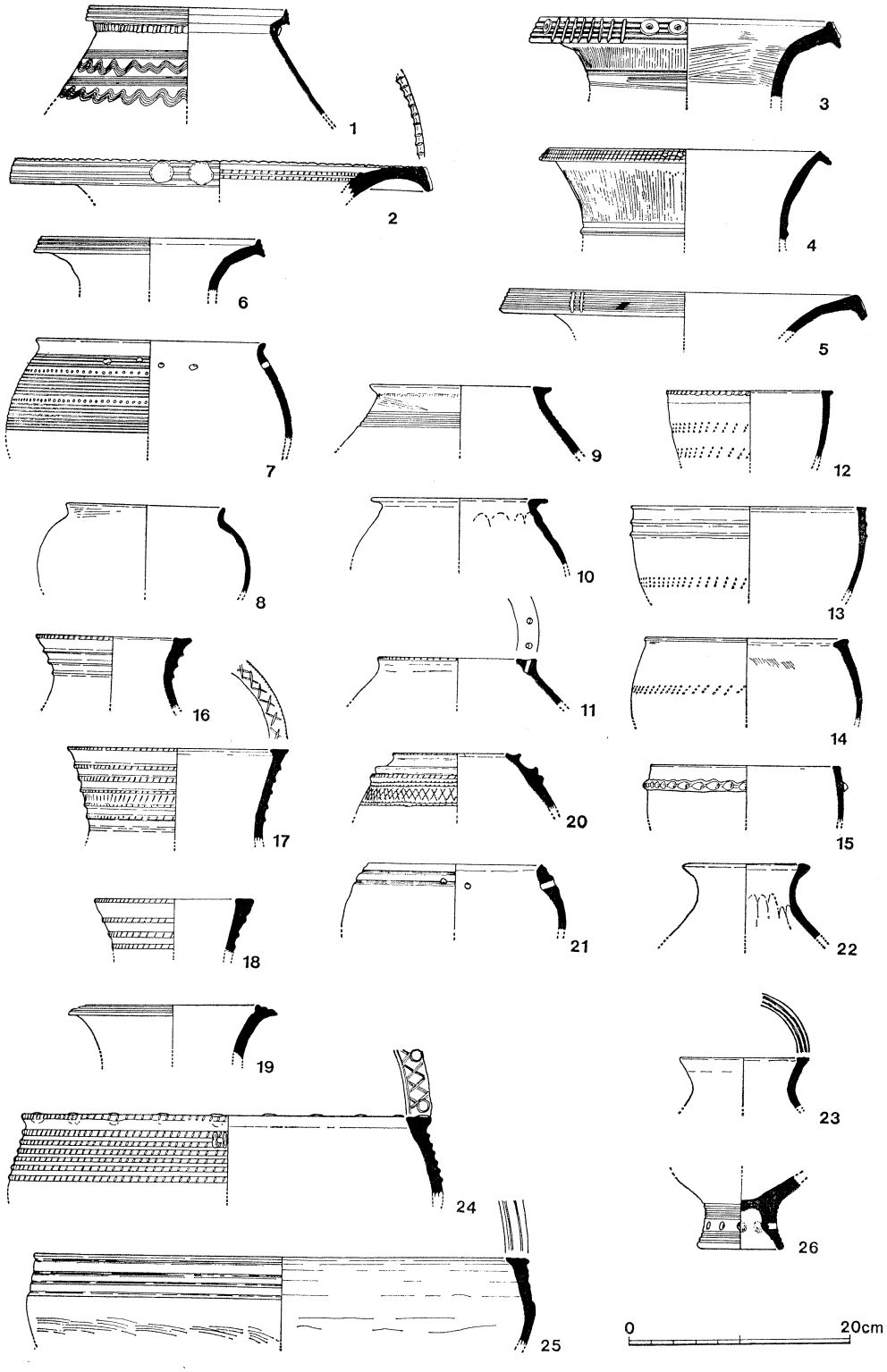
口縁部外面にのみ文様をもつものは27例ほどある。文様としてはヘラによる斜格子文、斜行文がほとんどで、櫛描斜格子文等はきわめて少ない。このほか少数であるが4～5条の凹線文をめぐらしたものもある。これらは数種の文様を組み合せて用いられることは少ない。

口縁部無文のものは量的に少ない。全体に口縁端部の拡張度は少なく、頸部まで残存したものをみると断面三角形の貼り付け突帯や、指頭圧痕文帯をめぐらしたものもある。

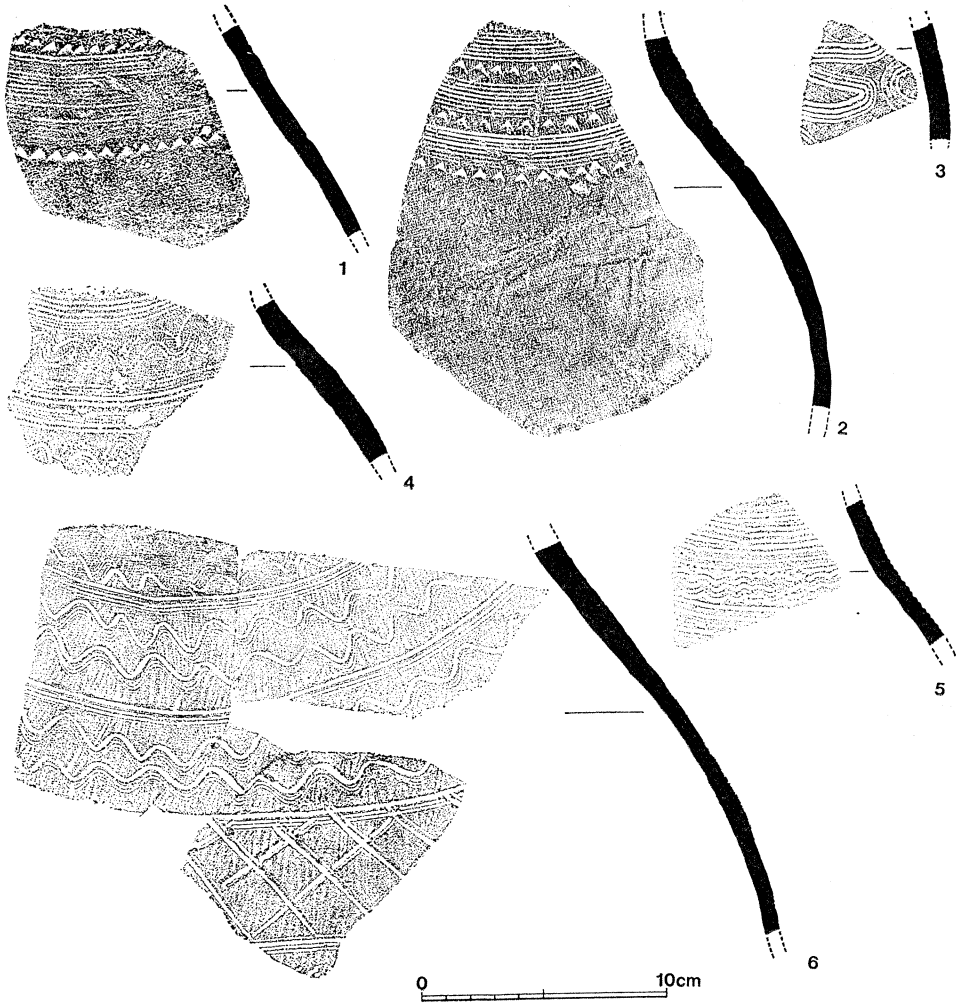
壺C（第31図10、13、16、17、29、30、第32図3～6）は口縁部が一旦大きく開いたの



第31図　弥生式土器実測図(9)



第32図　弥生式土器実測図(10)



第33図　弥　生　式　土　器　拓　影 (3)

ちにやや内湾し、口縁端部は上下に拡張するものである。この種の壺は文様構成のうえから凹線文をもたないもの、凹線文に他の文様を加えたもの、凹線文のみのものに大別できる。

凹線文をもたないものは口縁端部の拡張部に斜格子文、斜行文などを施すものが多く、さらに口縁部外面に断面三角形の貼り付け突帯をめぐらしたものもある。量的には少なく7例ほどしかみられない。

凹線文に他の文様を加えたものは最も多く25例ほどある。口縁端部の拡張部に2～5条の凹線文をめぐらし、その上にヘラによる斜行文、刻み目文や円形浮文、棒状浮文を加えたものが多く、斜格子文等はほとんどみられない。ほかに口縁端部の凹線文に加えて、内面に凹線文と波状文をめぐらすものもあるが全体として文様の繁縟さは薄い。

凹線文のみをもつものはいずれも口縁端部の拡張部に2～5条めぐらされるもので、20例あまりある。

ほかに無文のものが数例ある。

壺D（第32図16～19、22、23）はやや外傾しながら直線的にのびて端部に平坦面をもつ口縁部のもので、全形を窺えるものはないが直口の壺になると思われるものである。文様としては大別して口縁部外面に貼り付け突帯をめぐらしたものと、凹線文を入れたものとある。貼り付け突帯は断面三角形のものが3～5条めぐらされ、その上にヘラで刻み目を入れたものと無文のものがあり、口縁端部の平坦面には斜格子文を施したものもある。凹線文は口縁端部の平坦面や側面に施されている。

壺E（第32図9～11、21）は胴部が球形に張り出す無頸壺で15点ある。口縁端部は厚く平坦につくったものと、単純に丸くなるものとある。無文のものが多いが、櫛描直線文、ヘラによる刻み目文、刺突文、貼り付け突帯、凹線文等をもつものがある。ほかに口縁部に2孔づつの小孔を穿ったものもある。

壺F（第32図12～15）は口縁部上面に平坦面をもち鉢形にすぼまる無頸壺。全形を窺えるものが1例もなく、ここでは一応壺形土器として取り扱ったが、あるいは鉢形土器になるかもしれない。20点ほどあり、貼り付け突帯を1～3条めぐらした上に刻み目や指頭圧痕を加えたもの、櫛状工具による刺突列点文をめぐらしたものなどがある。なお、凹線文をもつものはみられない。

甕形土器　前期の甕形土器に較べてかなりバラエティーに富んでおり、大きく4種に分つことができる。

甕A（第34図1、3、4）は口縁部がゆるく外反して胴部があまり張り出さないもので、形態は前期のものとほとんど変るところがない。文様は櫛描直線文のみのものや、それに加えて三角形列点文、波状文を施したものがある。内外面ともに刷毛目調整を行うものが多い。

甕B（第34図2、7、9）は胴部の形態は甕Aとほぼ同様であるが、口縁部が逆L字状に強く折れるものである。量的にはきわめて少ない。文様としては櫛描直線文に三角形列点文を加えたもの、圧痕をもつ突帯と三角形列点文をめぐらしたものなどがある。

甕C（第34図10～18、第35図1）は口縁部が「く」字状に折れ、胴部がやや張り出すもので、中期の甕形土器のなかで量が最も多い。無文のものが多いが、胴部中位にヘラ、櫛、貝殻腹縁等による刺突列点文をめぐらすものもかなりある。ほかに、頸部に指頭圧痕文帯をもつものが1点ある。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面刷毛目、内面刷毛目のあとナ

デを行うものがほとんどで、全体に器肉が薄くつくられていることが大きな特徴である。なお底部まで遺存している例はないが、胴部下半まで残った土器片をみると、胴部外面の調整は上半が刷毛目、下半がヘラ磨きのものが多い。

甕D（第35図2～19）は口縁部が「く」字状に折れて端部が上下に拡張し、肩部は強く張り出すものである。頸部に指頭圧痕文帯をもつものが40点、突帯のないものが50点ほどある。頸部に指頭圧痕文帯をもつもので凹線文のないもの（口縁部無文のもの6点、口縁端部にヘラあるいは貝殻腹縁による斜行文等を施したもの12点）は18点あまりみられる。凹線文をもつものとしてはそれのみのものが16点、口縁部の拡張部に2～4条の凹線文を入れた上に斜行文、円形浮文等を加えたものが6点ある。

頸部に突帯をもたないもので、無文あるいは斜行文、斜格子文等をめぐらしたものは22点、凹線文に斜行文等他の文様を加えたもの7点、凹線文のみのものが23点ある。これらは外面は刷毛目調整あるいはそのあとナデが行なわれるものが多い。内面は刷毛目を施したのちナデを行なうものが多いが、口縁部に凹線文をもつもののなかに、胴部下半にヘラ削りを行なっているものがある。

鉢形土器　量的にはきわめて少ないが3種のものがみられる。

鉢A（第34図5）は口縁部がゆるく外反し、甕Aに類似した形態のものである。口縁端部に刻み目、胴部に刺突文、櫛描直線文、波状文等をめぐらしている。

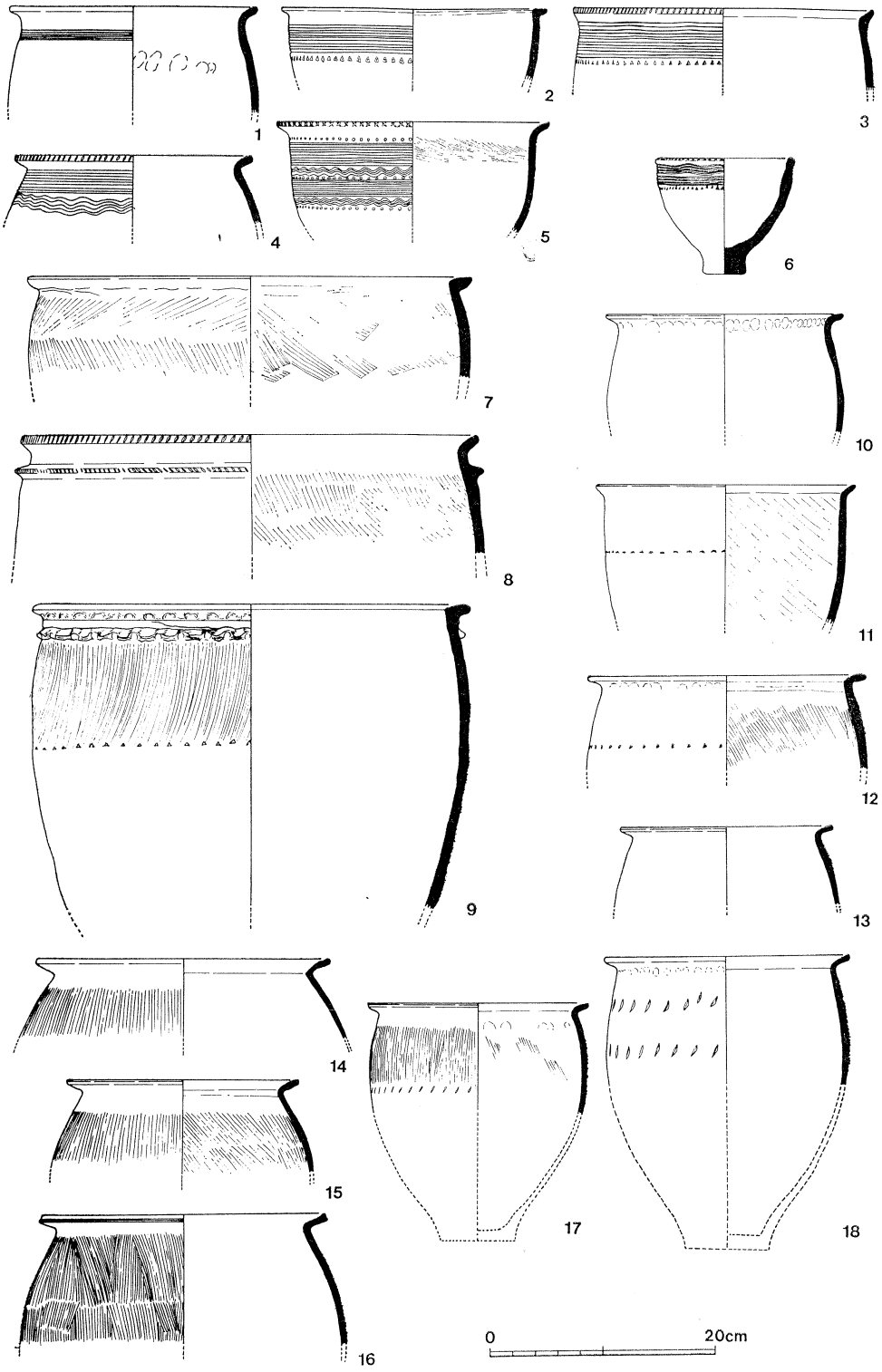
鉢B（第34図6）は椀形のもので口縁部は屈曲しない。底部は径が小さくかなり厚くつくられている。文様は口縁端部に三角形列点文、胴部に櫛描直線文と三角形列点文を入れている。

鉢C（第32図24、25）は器高の低い大形のもので、高坏形土器の坏部になる可能性もある。口縁端部の平坦面に斜格子文と円形浮文を施し、胴部に刻み目をもつ貼り付け突帯をめぐらすものと、凹線文を入れたものがある。

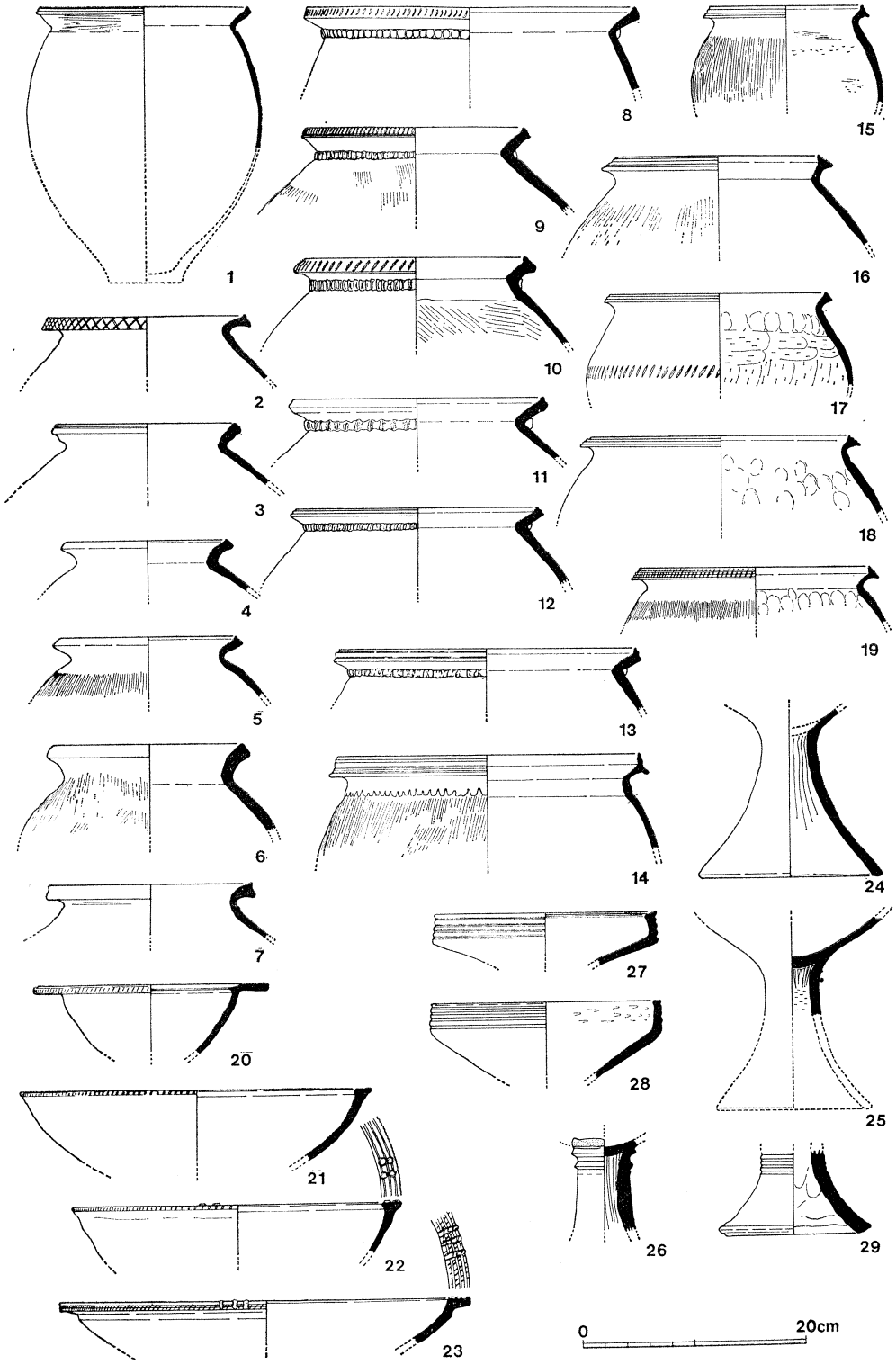
高坏形土器　総数約35点あり、坏部の形態から3種に分けることが出来る。

高坏A（第35図20）は底の深い椀形の坏部をもち、口縁部が逆L字形に強く折れるもので2点ある。口縁部はヨコナデ、坏部内外面ともヘラ磨きがなされている。文様としては図示したものの口縁端部にヘラによる刻み目がみられる。

高坏B（第35図21～23）は浅い椀形の坏部をもち、口縁端部は厚く平坦につくられるものである。高坏形土器の中では最も量が多く23点あまりみられる。無文のものが8点あるほか、口縁端部に刻み目文を入れたもの、平坦面および坏部側面に凹線文や浮文を施したものなどがある。いずれも内外面ともにヘラ磨きがなされている。坏部側面に凹線文を入



第34図 弥 生 式 土 器 実 測 図 (11)



第35図 弥 生 式 土 器 実 測 図 (12)

れたものは次に記す高坏Cに近い形態をもつ。

高坏C（第35図27・28）は坏部がなかほどで「く」字状に折れて直立あるいはやや内傾ぎみに立ち上るものである。いずれも口縁部側面に凹線文を施し、内外面ともヘラ磨きがなされている。

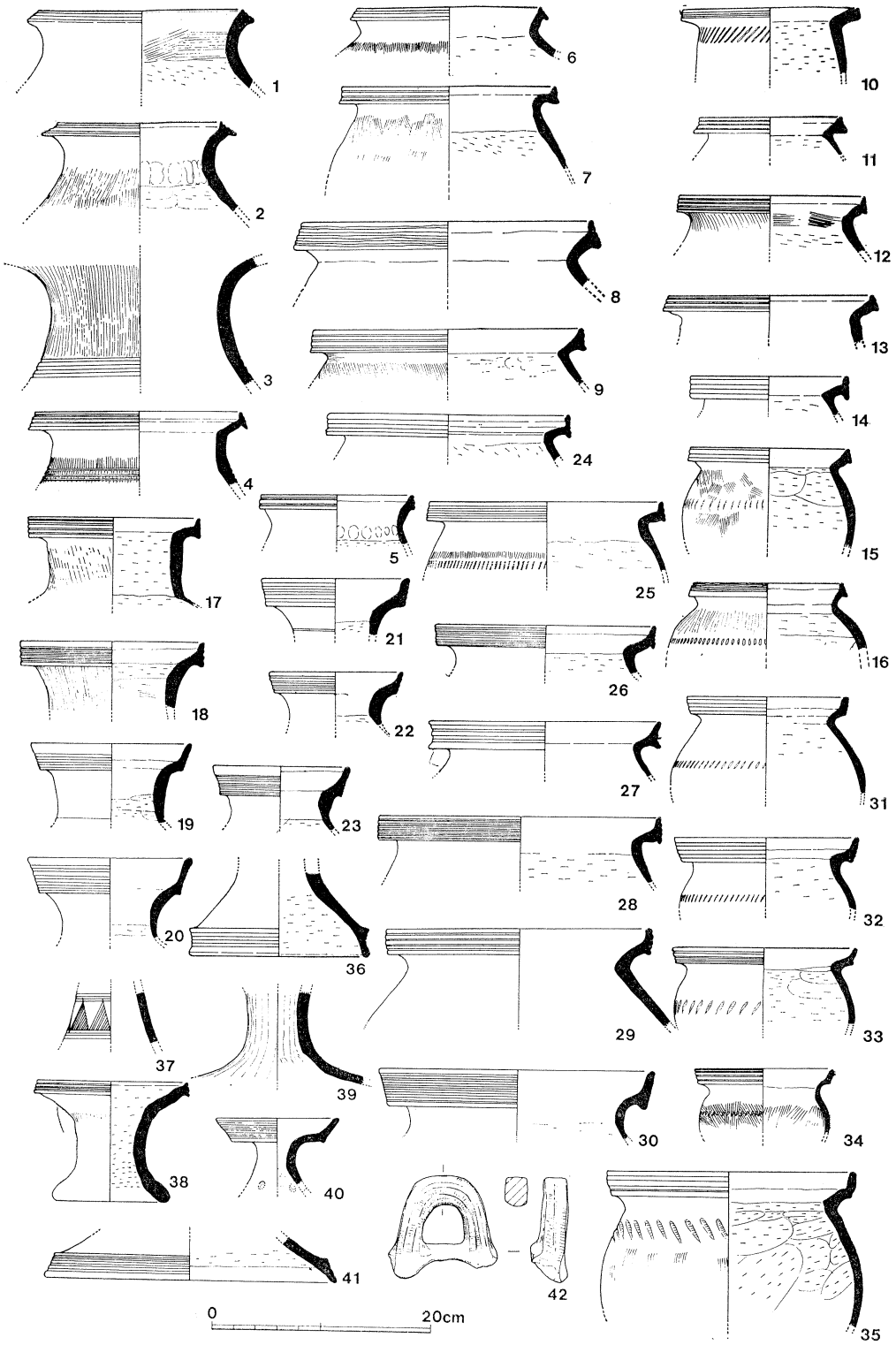
中期の土器についてもいまのところ同時性の強い一括遺物が少ないため明確な区分はし難いが、櫛描文の出現、櫛描文の盛行、凹線文の盛行などを目安に前葉、中葉、後葉の3区分を行っている。(註4)

中期前葉の土器はヘラ描文が櫛描文に変るのが基本的な変化で、器形、文様構成など前期のものに類似している。この期にあたるものとして磯近遺跡(註5)（八束郡 東出雲町）、鹿谷遺跡(註6)（仁多郡仁多町）、夫手遺跡(註7)（松江市手角町） などで少量ではあるが比較的良好な資料が出土している。なかでも夫手遺跡では櫛描直線文と三角形列点文を施した壺・甕形土器とともにヘラ描沈線と三角形列点文をもつ甕形土器が数点出土しており、ヘラ描文から櫛描文への移行期の状況をよく物語っている。磯近遺跡、鹿谷遺跡出土の土器も夫手遺跡出土土器とほぼ同様な器形、文様構成をもつもので、施文帯が拡大し、文様は頸肩部に集中して4～5本単位の櫛状工具を数回繰り返して施文し、幅広い櫛描による直線文を主体としてそれに加えて三角形列点文、波状文等で飾る。また、壺形土器の口縁端部はわずかに厚くつくられ、刻み目文、羽状文、斜格子文等を施すものが多い。この種の土器は本遺跡では量的にあまり多くはないが、壺A、甕A、鉢Aとしたものがほぼ同様な特徴を示している。なお、甕Bとしたもののなかにもこの期に含まれると思われるものがある。

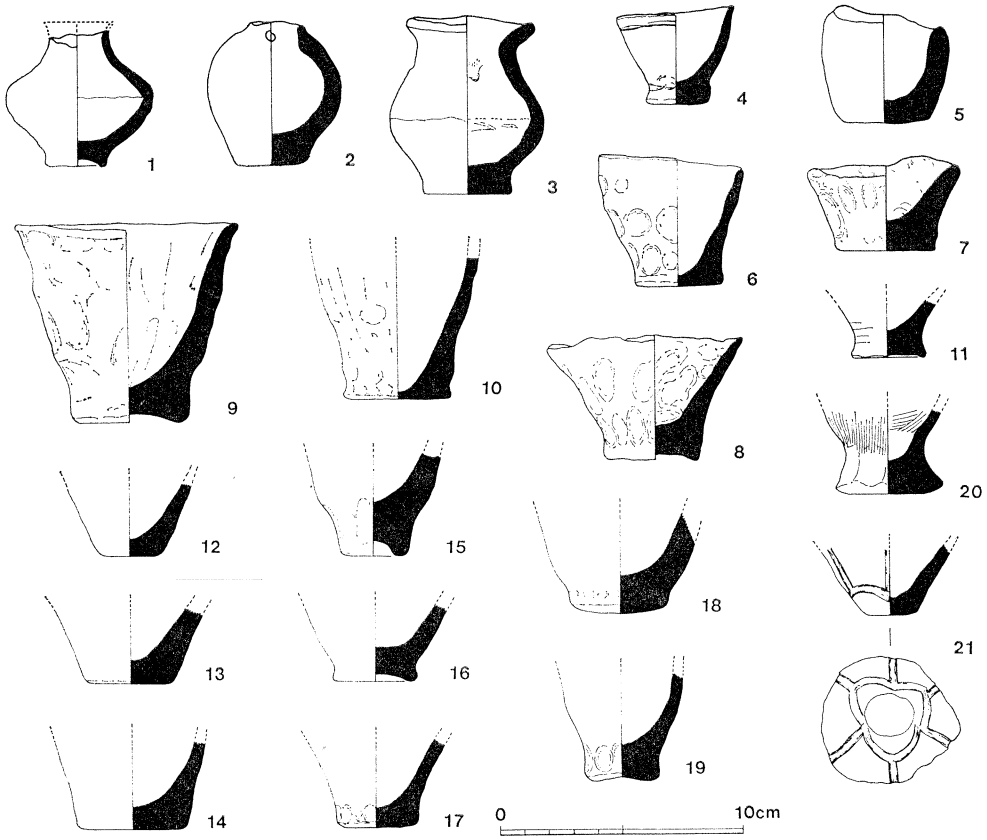
中期中葉は天神遺跡(註8)（出雲市天神町）出土土器をもって位置付けている。天神遺跡では溝状遺構5、土壙墓10が検出されており、そのなかには切り合い関係にある遺構もあるこからなお詳細に検討すれば細分できる可能性もあるが、土器の特徴としてはそう大きな違いが認められないから、ここでは一応一括して考えておく。天神遺跡出土土器のうち壺形土器は朝顔形に大きく外反して開く広口壺をはじめ直口壺、無頸壺など各種のものがある。広口の壺は口縁部の内外面あるいは外面に斜格子文、波状文、刺突列点文、貼り付け突帯など各種文様を組み合せて飾られる。直口壺は口縁部がやや外傾して直線ぎみにのびて端部は平坦になる。口縁端部の平坦面に斜格子文、口縁部外面に断面三角形の貼り付け突帯、頸部に指頭圧痕文帯等をめぐらす。無頸壺は口縁部上面に平坦面をもち鉢形にすぼまるもので、無文のもの、貝殻腹縁による刺突列点文をもつもの、指頭圧痕文帯をもつものなどがある。これらはいずれも内外面とも刷毛目のあとヘラ磨きあるいはナデによって調整されており、ヘラ削りはみられない。甕は口縁部がきつく「く」字状に折れ、胴部が

やや張り出して細くしまった底部におわるものである。文様はほとんど施されないが、胴部中位にヘラ、櫛、貝殻腹縁などによる刺突列点文をめぐらすものもある。口縁部はヨコナデ、胴部は外面上半を刷毛目、下半をヘラ磨き、内面刷毛目あるいはナデ仕上げのものが多く、ヘラ削りを行ったものはみられない。高坏は浅い椀形の坏部をもつもので、口縁端部は厚く平坦につくられている。無文で内外面ともにていねいなヘラ磨きがなされている。これら天神遺跡出土土器を要約すれば、壺形土器は種類が豊富で、斜格子文、波状文、突帯文等各種文様であでやかに飾られるが、甕形土器は胴部の刺突列点文以外にはほとんど文様がみられない。また各器種にわたって凹線文はみられず、内面ヘラ削り手法も施されないのを大きな特徴とする。本遺跡では壺B、壺D、壺F、高坏Bの大部分をはじめ壺Cの一部や甕Cとしたものが概ねこの範疇に入るものと思われる。このほか高坏Aとしたものは山陰では類例の少ないものであるが、凹線文がみられないことや、この種の高坏が畿内第Ⅲ様式にあること(註9)などから、これも中期中葉に含めて考えてよいものと思われる。なお、山陰地方ではこの期の一括資料は量的に少ないが鳥取県米子市の青木遺跡(註10)ＦＳＫ11出土土器（青木Ｏ期）及び奈喜良遺跡(註11)（鳥取県米子市）トレンチＴ３拡張部出土土器などが概ねこれに近い特徴をそなえていると思われる。ただし、両遺跡出土の甕形土器をみると口縁部がわずかに幅広くつくられているほか、内面下半にヘラ削りが施されているなどやや新しい要素もみられ、天神遺跡出土土器群との関係をいかに理解すべきか今後の課題といえる。

中期後葉としているものは量的にかなり出土しているもののやはり良好な一括資料にはめぐまれず、これまで多聞院貝塚(註12)（出雲市知井宮町）出土土器などをこれにあてている。壺形土器は中期中葉の形状を踏襲するが、口縁端部などの装飾性は薄れ、凹線文が主流をなし、頸部に幅の広い指頭圧痕文帯をめぐらしたりする。甕形土器は頸部が「く」字状に屈折し、口縁端部が拡大してくりあげ口縁状になり、外面に凹線文を入れるものが多い。高坏形土器は筒部が細長くしまって坏部、脚端部の外面に凹線文を入れ、筒脚部は凹線文を主体に三角形の透しなどでうめているものが多い。こうした特徴をそなえているものは本遺跡では壺C、甕D、高坏Cなどが概ねこれにあたるものといえよう。やや詳しくみると壺Cは器形としては壺Bに類似しているが、口縁端部付近でやや内湾するという特徴をもっており、文様としては凹線文のみのもの、あるいはそれに若干の文様を加えたものがこの種の壺形土器のなかで８割以上も占めていることが注意される。この種の壺形土器は良好な資料が多数出土している青木遺跡の場合をみても青木Ⅰ期（弥生中期後葉）とされているＦＳＩ15、ＨＳＩ22、ＪＳＩ12、ＦＳK12などの住居跡や土壙内から出土しており、



第36図　弥　生　式　土　器　実　測　図 (13)



第37図　弥生式土器実測図（ミニチュア土器）

中期後葉の壺形土器の主体をなす器形と思われる。このほか凹線文の使用から壺Dのうち第32図19・23、壺Eのうち第32図21なども中期後葉とみられるが、この種の器形はきわめて少ない。甕形土器は口縁部が「く」字状に折れて端部が上下に拡張し、肩部が強く張り出すものが多く、そのなかでも口縁部に凹線文をもつもので胴部内面下半にヘラ削りのみられるもののあることが注意される。高坏形土器は高坏Cのほかに高坏Bのうちの第35図22・23や第35図29も中期後葉の範疇に入るものと思われる。

後期の土器

器種としては壺形土器、甕形土器、器台形土器などがある。

壺形土器　形態から大きく2種に分けることができる。

壺A（第36図1～5）は口縁部をやや内傾して拡大させ、その部分に凹線文を入れ、頸部は「八」字状に開くものである。外面は刷毛目、内面はナデあるいは指頭圧痕がみられるが、頸部以下はヘラ削りがあるのかどうか不明。

壺B（第36図17～23）は複合口縁で頸部が円筒状に長くなるものである。口縁端部の拡

張部の文様は、凹線文状のものもあるが貝あるいは櫛状工具で多条の沈線をめぐらすものが多い。外面は刷毛目のあとナデられ、内面頸部以下はヘラ削りがなされる。

甕形土器　口縁部が複合口縁状に拡大するもので、頸部が「く」字形に短く屈折し、胴上半部が張り出すものである。口縁部外面にほとんど例外なくヘラまたは貝、櫛状工具による多条の沈線を入れてそのあとナデ仕上げを行い、肩部にヘラ、貝、櫛状工具等による刺突列点文を入れるものが多い。外面には刷毛目をとどめるものが多く、内面頸部以下はヘラ削りが顕著で器肉が薄い。

器台形土器　筒部が長く器受部と脚台部が甕形土器の口縁部と同様な複合口縁状を呈するものである。

後期の土器は内面頸部以下に顕著なヘラ削りがみられるほか、装飾性が薄れ、擬凹線文を入れた複合口縁が多いことを特徴とするが、これをさらに前・後の2期に区分して考えている。[註13] 前半は矢野貝塚[註14]（出雲市矢野町）や古浦遺跡[註15]（八束郡鹿島町）出土の土器等をあて、後半は九重第3号土壙墓[註16]（安来市九重町）のものを指標としている。本遺跡出土のものは後期前半にあたるものとして第36図1～5の壺形土器や、第36図6～16の甕形土器、後半のものとして第36図17～23の壺形土器、第36図25～35の甕形土器などが概ねこれにあたるものとみられる。なお、後期弥生式土器から古式土師器にかけての編年については最近山陽地方と山陰地方との土器型式の対比から新たな見解が出されている[註17]が、本遺跡ではこの時期の資料が少ないうえ共伴関係が全く不明であるため、この点については別の機会に触れることにしたい。

ミニチュア土器（第37図）

20点あまり出土しているが、時期のわかるものはほとんどない。器形や胎土からみると第37図1～3は前期壺形土器に、第37図4は前期甕形土器に類似している。（松本岩雄）

註1　佐原真編「弥生土器」『日本の美術』10（昭和51年）
2　東森市良他「弥生式土器集成」『八雲立つ風土記の丘研究紀要』Ⅰ（昭和52年）
3　門脇俊彦「古代史・資料編1」『瑞穂町誌』第2集（昭和41年）
4　註2に同じ。
5　東森市良「八束郡東出雲町磯近弥生遺跡」『季刊文化財』第11号（昭和45年）
6　山本清「山陰地方Ⅱ」『弥生式土器集成』本編1（昭和39年）
7　東森市良「山陰における農耕文化の開始(1)」『山陰史談』第3号（昭和46年）
8　出雲市教育委員会『天神遺跡』（昭和52年）
9　佐原真「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2（昭和43年）
10　青木遺跡発掘調査団編『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（昭和51年）青木遺跡発掘調査団編『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（昭和52年）
青木遺跡発掘調査団編『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』（昭和53年）
11　米子市教育委員会「奈喜良遺跡発掘調査報告」『鳥取県米子市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』（昭和51年）
12　大塚初重「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」『考古学集刊』第2巻第1号（昭和38年）
13　註2に同じ。
14　東森市良「破壊に瀕している低地性遺跡」『季刊文化財』第20号（昭和48年）
15　註6に同じ。
16　内田才他「安来平野における土壙墓」『上代文化』第36輯（昭和41年）
17　藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第4号（昭和54年）

表4 弥生式土器一覧表

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	21—1	最大径(11.6)	小型品で、胴部の最大径が胴中位よりやや下にあり、安定した形態。	口縁部に1条のヘラ描沈線。頸部と胴部に2条づつのヘラ描沈線を施し、その間をタテ方向のヘラ描沈線で画し、その中に2～3条のヘラ描重弧文を配す。	頸部～胴部の外面ヘラ磨き。頸部内面ナデ。胴部内面指頭痕ヘラ圧痕あり。	焼成良好砂粒を多く含む。明灰褐色口縁部と底部を欠損。	ⅣG14
壷	21—2	最大径(13.4)	小型品で、胴部の最大径が胴中位よりやや下にある。	肩部にかすかな段をもつ。	外面ていねいなヘラ磨き。頸部内面ナデ。胴部内面に指頭圧痕あり。	焼成良好。砂粒を多く含む。外面灰褐色。内面黒色。口縁部と底部を欠損。	ⅡD12 No.16
壷	21—3	最大径 (108) 底径 6.6	小型品で、胴部の最大径が胴中位よりやや下にあるが、全体としてやや長胴形 底部は安定した平底	なし	外面ヘラ磨き。内面ナデと指頭圧痕あり。	焼成良好。砂粒を多く含む。黒灰色。外面に炭化物付着。口縁部欠損。	ⅡD11—4 No.27
壷	21—4	口径 7.5 器高 11.9 最大径 9.8 底径 5.4	小型品で、胴部の最大径が胴中位よりやや下にあり、安定した平底に終る。	頸部から肩部に明瞭な段を施し、その下に2条のヘラ描沈線を入れる。胴部下半の底部付近にも2条のヘラ描沈線をめぐらす	外面頸部縦方向、胴部横方向のヘラ磨き。内面頸部指によるナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。淡灰色。	ⅢF10 No.38
壷	21—5	最大径(10.4)	小型品で、口縁と底部を欠損しているが胴最大径はほぼ胴中にあると考えられる。	頸部に4条のヘラ描沈線。	外面ヘラ磨き。内面頸部ナデ、胴部に指頭圧痕がみられる。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅢC13
壷	21—6	口径 14.4 最大径 21.2	口縁部はゆるく外反し胴部は扁球形に大きく張り出す。胴部最大径は胴中位よりかなり下にある。	口縁部と肩部に明瞭な段をもつ	内外面ともていねいなヘラ磨き。	焼成きわめて良好。砂粒を多く含む。	Ⅱ
壷	21—7	最大径 19.5 底径 7.9	胴部は扁球形に大きく張り出し、安定した平底に終る。胴部最大径は胴中位よりかなり下にある。	口縁部に段をともなう1条のヘラ描沈線。肩部に段を設けその下に2条のヘラ描沈線。	外面ていねいなヘラ磨き。内面頸部ナデ。	焼成きわめて良好。砂粒を含む。灰褐色。口縁部欠損。	ⅢD10—2 No.1
壷	21—8	口径 11.6 器高 18.6 最大径 16.3 底径 5.5	口縁部は大きく外反し胴部は球形に張り出し、胴部最大径はほぼ胴中位にある。	口縁部と肩部に段をもち、肩部段の直下に3条のヘラ描沈線と粗雑な重弧文を施す。	口縁部外面ナデ、内面ヘラ磨き。頸部～胴部外面ヘラ磨き、内面ヘラ磨きとナデ。	焼成きわめて良好。砂粒を多く含む。灰褐色。完形品。	ⅢF12—4 No.58

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	21－9	最大径(15.6)		肩部に4条のヘラ描沈線。	外面ヘラ磨き。内面ナデ。指頭圧痕あり。	焼成やや不良。砂粒を若干含む。黒褐色	ⅢC13
壷	21－10	最大径(17.3)		頸部と胴部最大径付近に3条づつのヘラ描沈線。	外面は風化著しく不明。焼成やや不良。内面頸部ナデ、胴部指頭圧痕あり。	焼成やや不良。砂粒を多く含む。茶褐色。	ⅠF13－4 No.41
壷	21－11	最大径(19.0)		口縁部はヘラ描沈線を施したのち、削って段をつくる。肩部3条のヘラ描沈線。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗褐色～明褐色。	ⅣF11
壷	21－12	口径 12.2 最大径 19.8 底径 8.8 器高 23.4	口縁部はゆるく外反し胴部は球形に張り出し安定した平底におわる。	肩部に1～2条の粗雑なヘラ描沈線をめぐらし、その下にヘラによる重弧文を施す。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。完形品。	ⅡD11－4 No.18
壷	21－13	最大径 26.8 底径 6.8	胴部は扁球形に大きく張り出し、安定した平底におわる。	肩部に段をつけ、その直下に1条のヘラ描沈線を入れる。	外面はていねいなヘラ磨き。内面頸部と胴部はナデあるいはヘラ磨きで仕上げ、頸部と胴部の継ぎ目付近には刷毛目痕が残る。	焼成きわめて良好。砂粒を多く含む。灰褐色。口縁部欠損	ⅡE14 No.17
壷	21－14	口径 16.2 最大径 23.6 底径 9.2 器高 27.8	口縁部はゆるく外反し、胴部は球形に張り出し平底におわる。最大径はほぼ胴中位あたりにある。	口縁部と肩部にかすかな段をつけ、肩部段の直下には貝殻腹縁により粗雑な2条の沈線を施す。	外面はていねいなヘラ磨き。内面口縁部ヘラ磨き、頸部ナデ、胴部～底部ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅡD14－1
壷	21－15	口径(17.3) 最大径(27.0)	口線部はゆるく外反し、球形に張り出した胴部に続く。	口縁部に段をもつ。	全体に風化が著しく不明瞭であるが外面はヘラ磨き。内面頸部は刷毛目のあとヘラ磨き、胴部は刷毛目。	焼成良好。砂粒を含む。白灰色。	ⅡF12
壷	21－16	最大径 (27)	口縁部はゆるく外反し、胴部は球形に大きく張り出す。胴最大径は中位よりやや下にある。	口縁部に段をもつが、通常のものとは異り上方が低くなる。肩部に段をもちその下にヘラによる粗雑な木葉文を施す。	外面ヘラ磨き。内面口縁部ヘラ磨き。頸部ナデ、胴部刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。	ⅡD13－2 No.13
壷	21－17	口径 14.6 最大径 20.8 底径 8.6 器高 26.6	口縁部はゆるく外反し、胴部は扁球形に大きく張り出し、安定した平底におわる。胴最大径は胴中位よりやや下にある。	口縁部と肩部にかすかな段をもつ。	外面ていねいなヘラ磨き。内面頸部刷毛目、胴部～底部ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅡF14－1 No.23
壷	21－18	口径 18.6 最大径 27.8	口縁部はゆるく外反し、胴部は扁球形に大きく張り出し、安定した平底におわる。胴最大径は胴中位よりやや下にある。	口縁部と肩部に1条のヘラ描沈線を施しそのあと段状に削る。	外面刷毛目のあとヘラ磨き。内面頸部～口縁部ヘラ磨き、胴部刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅡD12－2 No.24

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	22—1	口径(20.8)		口縁部と肩部に段をつけ、肩部段の直下にヘラ描沈線をめぐらす。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を含む灰褐色。	I E11—3 No.169
壷	22—2	口径(16.8)	口縁部はゆるく外反し、頸領は短く、肩部は強く張り出す。	なし	外面ヘラ磨き、内面口縁部刷毛目、頸部〜胴部はヘラ磨きあるいはナデ。	焼成良好。砂粒を含む。炭化物付着。	III D13—2 No.40
壷	22—3	口径(17.4)		なし	外面口縁部ヨコナデ、頸部ヘラ磨き。内面口縁部ヘラ磨き、頸部指ナデ調整のあとヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	III F13
壷	22—4	口径(19.4)		口縁部に段をもつ。	口縁部外面ヨコナデと刷毛目。頸肩部ヘラ磨き。内面刷毛目とナデ。	焼成良好。砂粒を含む。灰色。	II F13—1 No.4
壷	22—5			肩部に削り出し状の段、その直下に2条のヘラ描沈線をめぐらす。	外面ヘラ磨き。内面は雑なヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	II D11
壷	22—6	口径(21.5)		口縁部に段をもつ。頸部に貝殻腹縁による沈線を2条めぐらし、その間に羽状文を施す。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰黒色。	II F13 No.57
壷	22—7	口径(17.2) 最大径(24.4)	口縁部はゆるく外反し、胴部はあまり張り出さず長胴形を呈す。	口縁部に1条のヘラ描沈線。胴部に2条のヘラ描沈線。	外面口縁部粗い刷毛目、頸部〜胴部ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。胴部に指頭圧痕あり。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。淡茶色。内外面に炭化物付着。	IV
壷	22—8			肩部にかすかな段をつける。	外面ていねいなヘラ磨き。内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	III E14 No.21
壷	22—9			肩部に段をつけ、その直下にヘラにる2条の沈線と羽状文を施す。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。黄褐色。	I G12—1 No.72
壷	22—10			頸部と肩部に段をつけ、肩部段の直下に2条のヘラ描沈線を施す。	外面刷毛目のあとヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。明灰色。	I D10—2 No.74
壷	22—11	最大径(28.2)		頸部にヘラ描沈線を入れたのち削り取って段を設け、その下に2条のヘラ描沈線を施す。ヘラ描沈線は雑につけられ全周してはいない。	外面ていねいなヘラ磨き。内面粗い刷毛目のあとヘラ磨き。	焼成きわめて良好。少砂粒を多く含む。明灰褐色。	II E11—3 No.14

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	22—12	最大径(26.4)	球形に強く張り出す胴部。	胴部に約3cmの間隔をおいて2条づつのヘラ描沈線をめぐらし、この間を3条のヘラ描沈線を縦方向に引く。	外面は風化が著しく不明瞭であるがヘラ磨きの痕跡あり。内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。赤褐色。	I E14—1 No.78
壷	22—13	口　径(16.6)		口縁部に段をもつ。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	II F13—2
壷	22—14	口　径(10.9)		口縁部に段をもつ。	口唇部内外面ともヨコナデ。外面刷毛目のあとヘラ磨き。内面ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を含む茶褐色。	I F11
壷	22—15	口　径(14.1)		口縁部に段。	口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	焼成良好。灰褐色。	III G10
壷	22—16	口　径(16.2)		口縁部に刷毛目原体によって段をつける。	外面口縁部ヨコナデ外。面頸部ヘラ磨き。内面刷毛目のあとヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗黄灰色。	II E13—2 No.15
壷	22—17	口　径(14.7)		口縁部に段をもつ。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。	II F13—1 No.5
壷	22—18	口　径　(18)		口縁部に折り返した段をもつ。	口縁部内外面ともヨコナデ。	焼成やや不良。砂粒を多く含む。灰褐色。	IV E13
壷	22—19			口縁部に折り返した段をもつ。	風化が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。	I D14—2 No.73
壷	22—20	口　径(14.2)		口縁部に段をもた段をもつ。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗灰褐色。	I F13—4
壷	22—21	口　径(16.5)		口縁部に折り返しつ。	風化が著しく不明瞭であるが内外面ともヘラ磨きとみられる。	焼成良好。砂粒を多く含む。黒灰色。	II F11—14
壷	22—22	口　径(16.6)		口縁部下に1条のヘラ描沈線。	外面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	III F 3—2
壷	22—23	口　径(17.8)		口縁部に1条のヘラ描沈線。	外面は風化著しく不明。内面はヘラ磨き。	焼成やや不良。砂粒を多く含む。黒灰色。	I D10 No.25
壷	22—24	口　径(19.8)		口縁部に段をつけその直上に1条のヘラ描沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。	砂粒を多く含む。	I F14—2

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	22—25	口 径(18.5)		口縁部に1条のヘラ描沈線。	外面口縁部刷毛目のあとヘラ磨き、頸部ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。	ⅢE14 No.22
壷	22—26	口 径 (17)		口縁部に1条の太いヘラ描沈線。	外面ヘラ磨き。内面口縁部ナデ、頸部ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒は少ない。	ⅢC12・13
壷	22—27	口 径(15.6)		頸部に4条のヘラ描沈線	外面刷毛目のあとヘラ磨き。内面口縁部ナデのあとヘラ磨き。頸部刷毛目。	焼成良好。大粒の砂を多く含む。黒灰褐色。	ⅢE13
壷	22—28	口 径 (16)		頸部に巾0.7cmの削り出し突帯をつくりその中央に1条のヘラ描沈線を施す。	外面刷毛目のあと雑なナデあるいはヘラ磨き。内面ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。黒灰色。	E14—3 No.11
壷	23—1	口 径(18.9)	口縁部はゆるやかに外反し、頸部は筒状にやや長い。	頸部に幅約0.6cm間隔で3条のヘラ描沈線をめぐらし上の3沈線の間を刺突文で飾る。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗褐色。	IG12—5 No.120
壷	23—2	口 径 19.8	口縁部はゆるいカーブで大きく外反し、頸部は筒状にやや長い。	頸部にヘラ描沈線をら線状に施し、その間を竹管状工具による刺突文でうめる。	外面縦方向、内面横方向のヘラ磨き。口縁部は内外ともヨコナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	ⅡD14—4
壷	23—3	口 径(20.3)	ゆるいカーブで大きく外反する口縁部。	口唇部に1条のヘラ描沈線を施したのちヘラによる刻み目を加える。頸部に2条のヘラ描沈線を施し、その直下は段になる。口縁部内面に浅い1条のヘラ描沈線	外面は刷毛目のあとヘラ磨き。内面横方向ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。褐灰色。	ⅡD12—3 No.39
壷	23—4			肩部にかすかな段を設けその下に3列に竹管状工具による刺突文をめぐらす。	外面ヘラ磨き。内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗灰褐色。	ⅡE12 No.17
壷	23—5	口 径(15.3)	口縁部はゆるく開き、頸部は短く、肩は張る。	頸部に削り出し状の突帯を設けその上に2条の沈線をめぐらす。	外面ヘラ磨き。内面口縁部ヘラ磨き、頸部指頭圧痕。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰白色。	ⅡF11—4 No.8
壷	23—6	口 径(18.9)	口縁部はゆるく開き、頸部はやや長く筒状を呈す。	口縁端に1条のヘラ描沈線。頸部に5条のヘラ描沈線。	風化が著しく不明瞭であるが外面ヘラ磨き、内面ナデあるいはヘラ磨きと思われる。	焼成良好。砂粒を多く含む。黄褐色。	IF11—1 No.161
壷	23—7	口 径(16.4)		頸部に2条の浅いヘラ描沈線。	風化が著しく不明瞭であるが、内外面ともナデと思われる。	砂粒を多く含む。灰褐色。	IF11—2 No.177

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	23—8	口径(17.5)	口縁部はゆるく外反し、口唇部やや肥厚。	口唇部に1条のヘラ描沈線を施し、その上にヘラによる刻み目を加える。口縁部に3条のヘラ描沈線。	風化が著しく不明瞭であるが、内外面ともナデと思われる。		ⅠE11—4
壷	23—9	口径(19.0)	口縁部はゆるく外反し、頸部は短かい。	頸部に6条のヘラ描沈線。	不明瞭であるが内外面ともヘラ磨きと思われる。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅠF11—1 No.102
壷	23—10	口径(19.8)	口縁部はゆるく外反する。	頸部に5条の浅いヘラ描沈線。	不明瞭であるが内外面ともナデか。	砂粒を含な灰褐色。	ⅢF10—1
壷	23—11	口径(23)	口縁部はやや大きく外反し、筒状に長い頸部に続く。	頸部に5条以上の太いヘラ描沈線。	外面刷毛目のあとヘラ磨き。内面ヘラ磨き。	焼成やや不良。砂粒を含む。暗灰褐色。	ⅠG12—4 No.29
壷	23—12	口径(18)	口縁部はやや大きく外反し、筒状に長い頸部に続く。	頸部に5条以上のヘラ描沈線。	外面ヘラ磨き。内面は摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多の含む。灰褐色。	ⅠE14—3 No.27
壷	23—13	口径(22.2)		口唇部に1条のヘラ描沈線。	内外面ともヘラ磨き。口縁部外面に指頭圧痕あり。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅠF13—2 No.54
壷	23—14	口径(13)	口縁部はやや大きく外反し、口唇部はわずかに肥厚。	口唇部に1条のヘラ描沈線、頸部に1条以上のヘラ描沈線。	風化が著しく不明瞭。	焼成良好。砂粒を含む茶褐色。	E13 No.46
壷	23—15	口径(16.2)	口縁部は大きく外反し、口唇部はわずかに肥厚。	口唇部に1条のヘラ描沈線。口縁内部に段をもつ。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	ⅣD12
壷	23—16	口径(11)	口縁部はわずかに外反し、口唇部は平端面をもつ。	口唇部にヘラによる斜格子文、頸部に3条の沈線を施す。	内外面ともナデとみられる。	焼成良好。砂粒を多く含む。	ⅠE12—3 No.120
壷	23—17	口径(20.6)	口縁部は大きく外反し、口唇部に平坦面をもつ。頸部は短かい。	口唇部にヘラによる斜格子文、頸部に5条以上の沈線を施す。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。外面 黄灰色。内面 暗灰色。	ⅠF12—1 No.79
壷	23—18	口径(27.6)	口縁部は大きく外反し、口唇部はやや肥厚。	肥厚した口唇にヘラによる沈線を施し刻み目を加える。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅠG13—2 No.60
壷	23—19	口径(26.6)	口縁部は大きく外反し、口唇部はやや肥厚し、平坦部をもつ。	口唇部にヘラによる斜格子文を施す。	内外面ともヘラ磨き。口縁端部は内外面ともヨコナデ。	焼成良好。砂粒を含む。赤褐色。	E14—4 No.96

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	23—20	口径(29.6)	口縁部は大きく外反し、口唇部はやや平坦面をもつ。	口唇部に1条のヘラ描沈線をめぐらし、その両側に貝殻腹縁により刻み目を施す。頸部外面に3条以上、内面に2条の貼付突帯をめぐらす。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を含む。淡黄色。	ⅣG11
壷	23—21	口径 (30)	口縁部は大きく外反し、口唇部はやや平坦面をもつ。	口唇部に貝殻腹縁による綾杉状文。頸部外面に4条以上、内面に2条の貼付突帯をめぐらす。	外面刷毛目のあとヘラ磨き。内面ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を含む。黄灰褐色。	ⅢE11—3
壷	23—22	口径(25.2)		頸部に3条の貼り付け突帯。	風化著しく不明瞭であるが、内外面ともヘラ磨きか。	焼成良好。砂粒を多く含む。	ⅡE14 No.43
壷	23—23	口径(15.6)	口縁部は大きく外反。	口唇部に削り出し突帯。頸部に刻み目をもつ1条の貼付突帯をめぐらす。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	ⅡD14
壷	23—24	最大径(26.1) 底径(9)	胴部は球形に大きく張り出し、安定した平底におわる。	肩部に削り出し突帯。最大径付近に刻み目を入れた2条の貼付突帯をめぐらす。	外面はていねいなヘラ磨き。内面刷毛目のあとナデ。	焼成きわめて良好。砂粒を多く含む。	ⅡD14 No.31
壷	23—25	最大径(31.4)	球形に大きく張り出す胴部。	胴部に刻み目を入れた2条の貼付突帯をめぐらす。	外面ていねいなヘラ磨き。内面ナデ、指頭圧痕がみられる。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗灰褐色。	ⅢG10
壷	23—26	最大径(24.2)	扁球形に大きく張り出す胴部。	胴部最大径付近に貼付突帯をめぐらし、その上方に2条のヘラ描沈線、その上にヘラによる羽状文をめぐらす。	外面ヘラ磨き、内面ナデのあとヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。黄褐色。	ⅠD13—1 No.144
壷	23—27	最大径 27.0 底径 10.2	最大径が胴中位よりかなり上にある。		外面ヘラ磨き。内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅢC13—2 No.2
壷	24—1		無頸の壷。	口縁部に4条のヘラ描沈線を入れ、その下にヘラによる木葉文を施す。	口縁部ヨコナデ。	焼成良好。砂粒を含む。灰褐色	ⅡD12
壷	24—2			肩部に段をつけ、その下にヘラによる木葉文を施す。	外面ヘラ磨き。内面ナデ。	焼成きわめて良好。砂粒を含む。外面暗黄褐色。内面灰褐色。	Ⅲ No.37

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	24—3			肩部にヘラ描沈線を入れ、その下に縦方向に沈線を入れて文様帯を画しその中に木葉文を施す。	外面ヘラ磨き。内面刷毛目。	焼成良好。砂粒を含む	Ⅲ
壷	24—4			頸部に4条のヘラ描沈線を入れ、その下に貝殻腹縁による羽状文を施し、さらに1条の沈線をめぐらす。	外面ヘラ磨き。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。黄灰色。	ⅡE13—3
壷	24—5			肩部に1条のヘラ描沈線をめぐらし、その下に縦方向に沈線を入れて文様帯を画し、その間に貝殻腹縁による羽状文を施す	外面ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を含む。白灰色。	ⅢD13
壷	24—6			肩部に1条の貼付突帯をめぐらし、その下にヘラによる沈線と羽状文を交互に施す。	外面ヘラ磨き。中面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗灰色。	ⅡF12
壷	24—7			肩部に段を設け、その下に貝殻腹縁による沈線と羽状文を施す。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。砂粒は少ない。暗茶褐色。	ⅠG13—1
壷	24—8			頸部から肩部にかけてヘラによる沈線と羽状文を施す。	内面指頭圧痕あり。	焼成良好。大粒の砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅢG11
壷	24—9			頸部に縦方向の沈線を施す。肩部に段を設けその下にヘラ描沈線と貝殻腹縁による羽状文をめぐらす。	外面ヘラ磨き。内面ナデ。	焼成良好。砂粒を含む。明灰色。	ⅢG10
壷	24—10			肩部に段をつけ、その下に貝殻腹縁による沈線と羽状文をめぐらす。	内外面ともヘラ磨き。	焼成やや不良。小砂粒を含む。灰色。	ⅢG12—3
壷	24—11			肩部にヘラ描沈線と貝殻腹縁による羽状文を交互にめぐらす。	外面ヘラ磨き。内面ナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。外面 黄灰色。内面 黒灰色。	ⅢC12
壷	24—12			肩部に段をつけ、その下に沈線と重弧文を施す。	内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。	ⅡD14
壷	24—13			肩部に貝殻腹縁による沈線と斜行文を交互に施し、その下に重弧文をめぐらす。	内外面ともヘラ磨き。	焼成やや不良。砂粒を多く含む。黄褐色。	Ⅲ

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	24—14			肩部にヘラによる横方向沈線、縦方向沈線を交互に施し、その下に重弧文をめぐらす。	外面ヘラ磨き。内面刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅣD11
壷	24—15			肩部に削り出し突帯を設けその上に2条のヘラ描沈線を施す。	外面ヘラ磨き。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。茶褐色。	ⅠD11
壷	24—16			肩部にヘラ描沈線と貝殻腹縁による縦方向の沈線と斜行文をめぐらす。	内面刷毛目のあとナデ。	焼成やや不良。砂粒を多く含む。黄灰色。	Ⅰ12—1 No.157
壷	24—17			肩部に横方向のヘラ描沈線をめぐらし、その下に縦方向、斜方向の沈線をめぐらす。	外面ヘラ磨き。	焼成やや不良。砂粒を多く含む。黄灰色。	ⅡD13 No.60
壷	24—18			肩部に貼付突帯をめぐらし、その中央に1条のヘラ描沈線を入れる。その下に貝殻腹縁による羽状文と格子目文を交互に施す	外面ヘラ磨き。	焼成やや不良。大粒の砂粒を多く含む。黄褐色。	ⅡD14
甕	25—1	口径 7.9 底径 3.3 器高 7.2	小型品。底部がかなり厚い。	なし。	外面刷毛目。内面口縁部刷毛目、頸部以下ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	ⅡF11—4
甕	25—2	口径 (10)	小型品で胴部下半がやや丸味をもつ。	なし。	内外面とも刷毛目あとナデ。	焼成良好。小砂粒を多く含む。黄灰色。	ⅢF14—1 No.1
甕	25—3	口径 (16)	口縁部はやや強く折れ、胴は直線的に細くすぼまる。	なし。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内外面とも刷毛目。	焼成良好。砂粒を若干含む。	Ⅳ No.12
甕	25—4	口径 (18)		なし。	口縁部内外ともナデ。胴部外面刷毛目痕が残る。胴部内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。淡灰色。	ⅠD11 No.101
甕	25—5	口径 (22)		なし。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。内外面とも炭化物が多量に付着。	ⅢF11—2
甕	25—6	口径(22.1) 最大径(22.3)	胴部がやや張り出し口径とほぼ同じ径となる。	なし。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。	ⅣD13
甕	25—7	口径(23.7) 最大径(22.7)	胴部がやや張り出し、口径に近くなる。	なし。	摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。	ⅠD12—1 No.163

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
甕	25—8	口径 (29)	口縁部がL字状に折れ、胴部は直線ぎみにすぼまる。	なし。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部は内外面とも刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗灰色。外面に炭化物付着。	ⅡD13 No.20
甕	25—9	口径(27.7) 胴径(26.5)	胴部がやや張り出す。	なし。	摩滅が著しく不明。	砂粒多く含む。灰色。	ⅢD14 No.6
甕	25—10	口径(28.4)		なし。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内外面とも刷毛目。	焼成良好。砂粒は少ない。黒灰色。	ⅡD13 No.20
甕	25—11	口径 (28)		口唇部にヘラによる刻み目文。口縁部に段をもつ。	胴部外面刷毛目。内面は刷毛目痕ををかすかに残す。	焼成良好。砂粒を多く含む。淡灰色。	ⅠF13—4 No.91
甕	25—12	口径(40.6)	大型品	口唇部にヘラによる刻み目。口縁部に明瞭な段をもつ。	口縁部外面は粗い刷毛目。内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。明灰褐色。	ⅠE11 No.31
甕	25—13	口径(18.2) 最大径(16.4)	胴部がわずかに張り出す。	口縁部にかすかな段をもつ。	外面口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目。内面口縁部ヘラ磨き。胴部刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。明灰褐色	ⅢG13—4 No.61
甕	25—14	口径 (22) 最大径 (21)	胴部がわずかに張り出す。	口縁部にかすかな段をつける。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。口縁部に炭化物付着。	ⅡE14
甕	25—15	口径 (24)		口縁部にかすかな段をもつ。	外面口縁部刷毛目のあとナデ、胴部刷毛目。内面口縁部刷毛目、胴部ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。胴部に炭化物付着。	ⅡF11—4
甕	25—16	口径(15.9) 最大径(16.2)	口縁部はゆるく外反し、胴部は口径をわずかに上まわるほど張り出す。	頸部に1条の刷毛目を施す工具によって押しつけた沈線あり。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面粗い刷毛目。胴部内面指ナデ。		ⅢD13 No.46
甕	25—17	口径(20.8)		頸部に1条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。外面頸部以下刷毛目。内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	ⅡF12—3 No.8
甕	25—18	口径(19.2)		頸部に1条のヘラ描沈線。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面は摩滅が著しく不明瞭であるがナデか。胴部内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅡD14
甕	25—19	口径(23.3) 最大径(22.7)	胴部がわずかに張り出す。	頸部に1条のヘラ描沈線。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面刷毛目。胴部内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。外面明灰褐色。内面灰褐色	ⅠE13—3 No.74

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
甕	25—20	口径 (22)		頸部に2条のヘラ描沈線。	口縁部内外面ともヨコナデ。外面頸部細かい刷毛目。内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。淡灰色。	ⅢD No.48
甕	25—21	口径(22) 最大径(20.2)	胴部がわずかに張り出す。	頸部に2条のヘラ描沈線。	胴部外面の1部に刷毛目を残すが、全面磨かれている内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	ⅠD12 No.68
甕	25—22	口径(21.6)	胴部がわずかにふくらむ。	頸部に3条の櫛描直線文。	外面口縁部指頭圧痕、胴部ナデ。内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。明灰褐色。内面に布目がついている。	ⅣG11
甕	25—23	口径(20.2)		頸部に3条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面ともナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗茶褐色。外面に多くの炭化物付着。	ⅡE12 No.20
甕	25—24	口径 11.6 底径 4.6 器高 11.5	口縁部はゆるく外反し、胴部はわずかに張り出す。	口唇部に刻み目。頸部に4条のヘラ描沈線。	外面胴部上半粗い刷毛目、下半はヘラ磨き。胴部内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	Ⅰ11—4 No.217
	25—25	口径 13.5 最大径 9.3 底径 4.6 器高 9.2	口縁部はやや内湾して単純におわるコップ形の土器。	なし。	胴部外面縦方向の粗い刷毛目。胴部内面ナデ。	焼成良好。石英等の大粒の砂粒を含む。暗茶褐色。	ⅠD13 No.53
甕	26—1	口径(23.5)	胴部は鉢状に直線的にすぼまる。	頸部に3条のヘラ描沈線。	外面刷毛目。内面刷毛目のあとヘラ磨きあるいはナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色	ⅢD12—2
甕	26—2	口径(21.3)	胴部がかなり張り出し、口径をうわまわる。	頸部に8条のヘラ描沈線。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ。	焼成やや良好。砂粒を多く含む。黄褐色。	ⅠE12—1 No.27
甕	26—3	口径 (20)		頸部に5条のヘラ描沈線。	外面ナデ。内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を含む。淡灰色。	ⅢF12—2
甕	26—4	口径(20.3) 最大径(19.5)	胴部がわずかに張り出す。	頸部に6条のヘラ描沈線を施す。	摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。外面暗茶褐色。内面暗灰色。	ⅠF13—4 No.93

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
甕	26—5	口径(20.1)	胴部がわずかに張り出す。	口唇部にヘラによる刻み目をめぐらす。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内外面ともナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。外面黒褐色。内面暗茶褐色。外面に炭化物多量に付着。	ⅡD14
甕	26—6	口径(30.1)	口縁部はわずかに外反し、胴部は直線ぎみに細くすぼまる。	口唇部にヘラによる刻み目をめぐらす。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面粗い刷毛目のあとナデ。胴部内面粗い刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。外面に炭化物付着。	ⅡF13—3 No.14
甕	26—7	口径(20.6)	胴部がわずかに張り出す。	口唇部にヘラによる刻み目をめぐらす。	口縁部内外面ともヨコナデ。外面刷毛目。内面風化著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗茶褐色。	ⅢF14—3 No.18
甕	26—8	口径(24.5)	胴部は直線ぎみに底部に向ってすぼまり、鉢状を呈す。	口唇部にヘラによる刻み目をめぐらす。頸部に1条のヘラ描沈線。	口縁部内外面ともヨコナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。明灰褐色。	ⅠG14—1 No.56
甕	26—9	口径(19.3) 最大径(19.8)	胴部はかなり張り出し口径より広くなる。	口唇部にヘラによる刻み目。頸部に1条のヘラ描沈線。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面は摩滅が著しく不明。内面はナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。外面暗著褐色。内面茶褐色。	ⅠF11—1 No.156
甕	26—10	口径 (22)		口唇部にヘラによる刻み目をめぐらす。頸部に1条のヘラ描沈線。	外面はヘラ磨き。内面はナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	ⅡD12
甕	26—11	口径 (22)	胴部は直線ぎみに底部に向ってすぼまり鉢状を呈す。	口唇部にヘラによる刻み目をめぐらす。頸部に1条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。外面口縁部付近に炭化物付着。	
甕	26—12	口径 (24)	胴部は直線ぎみに底部に向ってすぼまり、鉢状を呈す。	口唇部にヘラによる刻み目をめぐらす。頸部に1条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	E12—2
甕	26—13	口径 (28)	胴部は直線ぎみに底部に向って細くすぼまり、鉢状を呈す。	口唇に刷毛目原体により刻み目をめぐらす。頸部に2条の太いヘラ描沈線。	外面縦あるいは斜方向の刷毛目、内面横方向の刷毛目。	焼成きわめて良好。砂粒を含む。淡灰色	ⅡF13
甕	26—14	口径(17.8)	胴部がわずかに張り出す。	口唇部に刻み目、頸部に3条のヘラ描沈線。	摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗黄褐色。	ⅠE11
甕	26—15	口径(17.9)	胴部がわずかに張り出す。	口唇部に刻み目、頸部に4条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面ともナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗茶褐色	ⅢC13

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
甕	26—16	口径 (24)	胴部がわずかに張り出す。	口唇部に刻み目、頸部に2条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部外面縦方向刷毛目、内面横方向刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗茶褐色。外面に炭化物多量に付着。	ⅢF12—3 No.56
甕	26—17	口径 (20)	胴部が底部に向ってかなり細くすぼまり鉢状を呈す。	口唇部に刻み目、胴部に6条のヘラ描沈線を施す。	胴部外面刷毛目、内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。淡灰色。	ⅡE13—2 No.64
甕	26—18	口径 (26)		口唇部に刻み目、頸部に5条のヘラ描沈線。	胴部外面刷毛目、内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。淡灰色。	ⅢC13
甕	26—19	口径(17.8) 最大径 (20)	胴部がかなり張り出し、口径を大きくうわまわる。	口唇部に刻み目、頸部に4条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗茶褐色。	ⅠE12—1 No.95
甕	26—20	口径(18.2) 最大径(17.2)	胴部がわずかに張り出す。	口唇部に刻み目、頸部に6条のヘラ描沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。胴部外面粗い刷毛目、内面ナデと指頭圧痕がみられる。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅠG13—2 No.57
甕	26—21	口径(18.7)		口唇部ヘラ状工具による刻み目、頸部4条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部外面縦方向の刷毛目、内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰黒色。	ⅠE13—2 No.27
甕	26—22	口径(20.4) 最大径 (20)	胴部がわずかに張り出す。	口唇部ヘラ状工具による刻み目、頸部3条のヘラ描沈線。	口縁部はヨコナデ胴部外面は風化著しく不明。胴部内面縦方向刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色	ⅠF14—4 No.75
甕	26—23	口径(16.3) 最大径 (16)	口縁部はL字状に肥厚し、胴部はわずかに張り出す。	口唇部ヘラ状工具による刻み目。	内外面とも刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗茶褐色	ⅠE13—1 No.89
甕	26—24	口径 (16)	口縁部はL字状で上面がフラットになり胴部はわずかに張り出す。	口唇部ヘラ状工具による刻み目、頸部2条のヘラ描沈線。	内外面とも刷毛目。	焼成良好。砂粒を若干含む。灰黒色。炭化物付着。	ⅢD13
甕	26—25	口径(21.4)	口縁部はL字状で上面がフラットになり胴部はわずかに張り出す。	口唇部ヘラ状工具による刻み目、頸部4条のヘラ描沈線。	内外面とも粗い刷毛目。	焼成良好。砂粒を含む。暗褐色。外面に炭化物多量に付着。	ⅡE13 No.31
甕	27—1	口径 (24)		口唇部ヘラによる刻み目、頸部3条のヘラ描沈線を施し、その間に棒状工具による刺突文をめぐらす。	内外面ともナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。明茶褐色。	ⅠE12—1 No.23

器種（分類）	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
甕	27—2	口径 (24)		頸部に2条のヘラ描沈線を施し、その間に棒状工具による刺突文をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面とも粗い刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。炭化物付着。	ⅡD13—4
甕	27—3	口径 (30)		口唇部にヘラによる刻み目、頸部に2条のヘラ描沈線を施し、その間に棒状工具による刺突文をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。内外面ともに炭化物付着。	ⅡE12 No.20
甕	27—4	口径(27.9) 最大径(29.3)	口縁部はL字状になって上面がフラットになり、胴部はかなり張り出す。	口唇部ヘラ状工具による刻み目文、頸〜肩部4条のヘラ描沈線をめぐらし、最下段に刺突文を施す。	内外面ともナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を多く含む。黒色〜暗灰色。	ⅢC13 No.3
甕	27—5	口径(25.6)	口縁部はL字状になって上面がフラットになり、胴部は直線的にすぼまって底部につづく。	頸に4条のヘラ描沈線を施し、上2段の間に綾杉状の刺突文をめぐらす。	外面はナデ。内面刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗茶褐色。	ⅠE11 No.49
甕	27—6	口径(28.5)		頸部に6条のヘラ描沈線を施し、その下にヘラによる刺突列点文をめぐらす。	内外面ともナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅠD14 No.38
甕	27—7	口径(33.8) 最大径(37.0)	胴部はかなり張り出し口径をしのぐ。	口唇部刻み目、頸部7条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部外面ナデ。頸部内面指頭圧痕、胴部内面ナデ。	焼成やや不良。砂粒を多く含む。外面 黒灰色。内面 茶褐色。	ⅢG13—3 No.16
甕	27—8	口径(19.4)		口唇部刻み目。頸肩部は7条のヘラ描沈線を施し、その下にヘラによる三角形列点文をめぐらす。	外面ナデ。内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗灰褐色	
鉢	27—9	口径(10.2) 底径 5.2 器高 (7.3)	小型でコップ形を呈す。	なし。	外面は器面の摩滅が著しく不明。内面ナデ。	焼成やや不良。砂粒を多く含む	ⅠF12—2 No.19
鉢	27—10	口径(11.9)		なし。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。黄灰褐色。	ⅠF12—2 No.49
鉢	27—11	口径(14.9)	口縁部はゆるく外反し、胴部は直線状にすぼまって底部に至る。	頸部に4条のヘラ描沈線。	内外面ともナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。	ⅠG14—2 No.15

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
鉢	27—12	口径(14.3)		口唇部に刻み目。頸部〜肩部に4条のヘラ描沈線を施しその間に棒状工具による刺突文をめぐらす。	内外面ともナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。外面黒色。内面暗褐色。	I G12—3 No.97
鉢	27—13	口径(18.4)	口縁部は強く折れ、胴部は直線的にすぼまる。	なし。	内外面ともナデか。	砂粒を多く含む。	I F11—1 No.84
鉢	27—14	口径(16.4)		なし。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面とも刷毛目。	焼成良好。砂粒を含む。灰褐色。	III D13 No.48
鉢	27—15	口径(19.7)		頸部に5条のヘラ描沈線。	内外面ともナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を多く含む。黒褐色。外面に炭化物付着。	III
鉢	27—16	口径(22.3)		頸部に3条のヘラ描沈線。	内外面ともナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	I E14—2 No.44
鉢	27—17	口径(28.4) 底径(8.0) 器高(17.0)	口縁部はゆるく外反し胴部は直線ぎみにすぼまって平底におわる。	なし。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面ともヘラ磨き。	焼成やや不良。砂粒を含む。灰褐色。	II E13 No.23 III C14—1 No.12
鉢	27—18	口径(28.3)	口縁部はわずかに外反し、胴部は直線ぎみにすぼまる。	なし。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面とも刷毛目。	焼成良好。砂粒を含む。	IV E13 IV G14
甕	28—1		肩部がやや張り出す。	肩部に4条のヘラ描沈線。	内面刷毛目。外面ヘラ磨きか。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。灰色。	III D14
甕	28—2			頸部に9条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面ともナデ。	焼成良好。砂粒を含む。暗黄褐色。	I G13—1 No.73
甕	28—3		肩がわずかに張り出す。	口唇部にヘラによる刻み目。頸部に4条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面ともナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。	I F12—3 No.57
甕	28—4			口唇部にヘラによる刻み目。頸部に4条のヘラ描沈線。	内外面ともナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。黒茶色。	III D14
甕	28—5			口唇部に羽状の刻み目。頸部に6条のヘラ描沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面ともナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を多く含む。黒灰色。	II E14—4 No.5
甕	28—6			頸部に2条のヘラ描沈線を施し、その間に刺突文を入れる。	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目のあとヘラ磨き、内面刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	IV D12

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
甕	28—7			口縁部貝殻腹縁による刻み目。頸部に8条のヘラ描沈線を施し、その下に刺突文を入れる。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面とも刷毛目のあとナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。黄灰色。	II D14—4
甕	28—8			口縁部ヘラによる羽状の刻み目。頸部に3条のヘラ描沈線を入れ、その間に刺突文をめぐらす。	同　上	焼成良好。砂粒をわずかに含む。黄褐色。	I D14—1
甕	28—9		口縁部が短い。	口唇部に刻み目。頸部に6条のヘラ描沈線を入れ、その間に刺突文をめぐらす。	同　上	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	I G14—2 No.6
甕	28—10			口唇部貝殻腹縁による刻み目。外面にヘラ描沈線と刺突文を施し、口縁部内面にも刺突文をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。	焼成良好。砂粒は少い。茶褐色。	I F13—3
甕	28—11			頸部に3条のヘラ描沈線をめぐらし、その間に刺突文を入れる。	口縁部ヨコナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。茶褐色。	I G13—3
蓋	29—1		小型で笠形を呈す。	なし。	内外面ともヘラ磨き。	焼成きわめて良好。砂粒を多く含む。	III D12 No.5
蓋	29—2	口　径 (6.8)	小型で笠形を呈す。口縁付近に径0.4cmの孔をもつ。	なし。	内外面ともナデ。	焼成良好。小砂粒を含む。茶褐色。	I E11—4 No.130
蓋	29—3	口　径 9.9 器　高 3.7	小型で笠形を呈し、天井部がややくぼむ。孔が4穴あけられている。	なし。	内外面ともナデ、あるいはヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。黄灰色。	III E14—2 No.10
蓋	29—4		天井部に乳頭状の突起を2つもつ。	なし。	内外面ともナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を多く含む。暗茶褐色。	I E12—4
蓋	29—5		天井部は平坦部をもち大きく末広がりになる。	なし。	外面刷毛目のあとナデ。内面ヘラ磨き。	焼成良好。大粒の砂粒を多く含む。灰黒色。	I G14—4
蓋	29—6		同　上	なし。	外面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。	III C13
蓋	29—7		天井部は平坦面をもち、末広がりになる。	なし。	天井部は上面、側面ともに指頭圧痕あり。外面刷毛目のあと磨き。内面ヘラ磨き。	焼成良好。大粒の砂粒を多く含む。灰黄色。	I E14—3

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
蓋	29—8		輪状のつまみをもち底面に向って大きく末広がりになる。	なし。	天井部は上面、側面とも指頭圧痕あり。なし。その他の部分は摩滅が著しく不明。	焼成やや不良。大粒の砂粒を多く含む。外面 灰黒色。内面 黄茶色。	ⅢC13
蓋	29—9		同上。	なし。	天井部は上面、側面とも指頭圧痕あり。外面刷毛目。内面ヘラ磨き。	焼成良好。大粒の砂粒を多く含む。黄灰色。外面炭化物付着。	ⅢD13
蓋	29—10		同上。	なし。	内外面ともナデ	焼成良好。小砂粒を多く含む。外面 黄褐色。内面 灰褐色。	ⅠD14 No.52
	30—1	底 径(10.0)		底面にヘラで3条の線を十字形に描く。	内外面ともヘラ磨き。底面指頭圧痕あり。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。黄白色。	E12—1
	30—2	底 径(9.6)	底面がややくぼむ。	同上。		焼成良好。大粒の砂粒を含む。灰白色。	ⅠD12—2
	30—3	底 径(6.6)	底面に径約1.2 cmの孔をもつ。	なし。	外面ヘラ磨き。内面刷毛目。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。外面 灰白色。内面 黒色。	ⅠG14—2
	30—4	底 径 6.6	底面に径約1 cmの孔をもつ。	なし。	外面縦方向ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒をほとんど含まない。黄灰色。	ⅠF11
	30—5	底 径 6.5	底面に径約1 cmの孔をもつ。焼成後に穿孔。	なし。	外面縦方向のヘラ磨き。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。灰白色。	ⅠG13—2
	30—6	底 径 8.8	底面に径約1.2 cmの孔をもつ。焼成後に穿孔。	なし。	外面刷毛目。内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を多く含む。灰黒色。	ⅠD12—3
	30—7	底 径 6.2	底面に径約0.9 cmの孔をもつ。			焼成良好。大粒の砂粒を含む。灰白色。	ⅠF12—4

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
	30—8	底径 6.9	底面に径約0.9 cmの孔をもつ。焼成後に穿孔。	なし。	外面縦方向のヘラ磨き。	焼成良好。	I F11—1
壷	31—1	口径 (16.4)	口縁部はゆるく外反し、端部にわずかな平坦面をもつ。	口縁部端に、ヘラによる斜格子文 頸部に櫛描直線文をめぐらす。	外面ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を多く含む。外面黒色。内面茶灰色。	I D12—3 No.201
壷	31—2	口径(16.4)	同上	同上	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰茶色	I G13—2 No.5
壷	31—3	口径(11.2)	口縁部は外反し、頸部はやや長い。	口縁端部にヘラによる羽状文。頸部に櫛描直線文、波状文、直線文をめぐらす。	同上	焼成やや不良。小砂粒を含む。灰褐色。	II D13—2 No.16
壷	31—4	口径(12.2)	口縁部は短いがきつくL字形にまがる。頸部はやや長い。	口縁端部にヘラによる刻み目。頸部に18条以上の櫛描直線文をめぐらし、その間に1条刺突文を施す。	同上	焼成良好。砂粒を含む。茶褐色。	I D12 No.37
壷	31—5	口径(15.2)	口縁部は短く、ゆるく外反。頸部は短かい。	頸部に櫛描直線文と刺突文を交互にめぐらす。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を含む。	I G13—3 No.33
壷	31—6	口径(14.2)	口縁部は短く、くの字状にまがる。肩部は張り出す。	口唇部に刻み目。肩部に10条の櫛描直線文をめぐらし、その下に半截竹管状の工具で刺突文を施す。	外面ヘラ磨き。内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。黄褐色。	I D11—2 No.125
壷	31—7	口径 8.0 最大径 12.0 底径 4.4 器高 12.7	口頸部はコの字形に近く折れまがり、胴最大径はほぼ中位にある。	なし。	外面は摩滅が著しく不明。内面はナデ。肩部内面には指頭圧痕あり。	焼成やや不良。小砂粒を含む。灰褐色。	I E11—4
壷	31—8	口径 11.6 最大径 13.9 底径 5.9 器高 13.5	口縁部は短く直立ぎみに立ち、胴最大径は中位より上にある。	なし。	口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラ磨き、内面ヘラ磨きのあとナデ。	焼成良好。砂粒を含む。	II F11—1 No.2
壷	31—9	口径(24.2)	口縁部は朝顔形に大きく開き、端部はL字形に折れ曲がる。	口縁端部外面と内面に3条の櫛状工具による斜格子文。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。小砂粒を多く含む。	IV G11
壷	31—10	口径(32.4)	口縁部は朝顔形に大きく開き、端部は肥厚して平坦面をもつ。	口縁端部外面に4条の櫛状工具による斜行文。内面に波状文、斜行文、波状文をめぐらす。	外面は刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	I F13—2
壷	31—11	口径(31.5)	口縁部は朝顔形に大きく開き、端部はL字形に折れ曲がる。	口縁端部の内外面に3条の櫛状工具による羽状文を施す。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗灰色。	IV

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	31—12	口径(27.6)	口縁部は大きく開き、端部は肥厚して平坦面をもつ。	口縁端部の外面に斜格子文と斜行文。内面に押圧を加えた貼付突帯と斜行刺突文を施す。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。小砂粒を多く含む。灰白色。	ⅢE11
壷	31—13	口径(31.6)	口縁部が大きく開き、端部が肥厚して平坦面をなす。	なし	同上	焼成不良。砂粒を多く含む。赤褐色。	IG13—2 No.52
壷	31—14			口縁部から頸部にかけて1条以上、頸部から肩部にかけて2条の貼り付け突帯。	外面縦方向のヘラ磨き。内面刷毛目とナデ。	焼成きわめて良好。小砂粒を多く含む。暗褐色。	IG13—4 No.93
壷	31—15	口径(34.0)	口縁部は朝顔形に大きく開く。	頸部に断面三角形の貼り付け突帯を5条以上めぐらし、その上に突帯を縦方向に2条貼り付ける。	外面縦方向の荒い刷毛目。	焼成良好。小砂粒を多く含む。暗黄褐色。	IF11 No.23
壷	31—16	口径(26.4)	同上	口縁端部に波状文と刻み目文、その下部に3条の貼り付け突帯。	外面刷毛目。内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。砂粒をわずかに含む。青灰色。	ID11
壷	31—17	口径(30.0)	同上	口縁端部に斜格子文刻み目文を加え、その下に刻み目をもつ貼り付け突帯をめぐらす。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。小砂粒を多く含む。暗褐色。	ID13 No.55
壷	31—18	口径(18.0)	口縁部は大きく開き、端部は肥厚して平坦面をもつ。	なし	外面刷毛目。内面横方向のヘラ磨き。	焼成良好。細砂粒を含む。灰白色。	Ⅳ
壷	31—19	口径(24.0)	同上	口縁端部にヘラあるいは板の先端による粗雑な斜格子文。	口縁部ヨコナデ。頸部外面刷毛目。	焼成良好。砂粒を含む。灰色。	IF11—4
壷	31—20	口径(23.0)	同上	口縁端部外面に山形文、内面に波状文と刺突文。	口縁部ヨコナデ。	焼成良好。砂粒を含む。灰褐色。	IG13—3 No.15
壷	31—21	口径(22.4)	同上	口縁端部外面に山形文、内面に斜格子文と刺突文をめぐらす。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。小砂粒を多く含む。暗褐色。	IE12—3 No.3
壷	31—22	口径(16.4)	同上	口縁端部に斜行文、頸部に刻み目をもつ突帯をめぐらす。	口縁部内外面ともヨコナデ。外面頸部ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を含む。茶灰色。	IF10—4 No.137
壷	31—23	口径(24.2)	同上	口縁端部に刻み目と斜格子文。頸部に刻み目をともなう貼り付け突帯。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成やや不良。小砂粒をわずかにむ。黄灰色。	ID14—2 No.63
壷	31—24	口径(19.2)	同上	口縁端部に斜格子文をめぐらし、その上に3個づつの円形浮文を加える。頸部に貼り付け突帯。	同上	焼成やや不良。砂粒を含む。黄灰色。	ID14—2 No.55

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	31—25	口径(21.4)	口縁部は大きく開き、端部は肥厚して平坦面をもつ。	頸部に押圧を加えた貼り付け突帯をめぐらす。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成やや不良。砂粒を多く含む。青灰褐色。	I F11 No.25
壷	31—26	口径(21.5)	同上	頸部に押圧を加えた貼り付け突帯。	口縁部ヨコナデ。頸部外面に刷毛目。	焼成やや不良。砂粒をわずかに含む。黄灰色。	I F13—4
壷	31—27	口径(18.8)	同上	同上	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を含む。暗赤褐色。	I G12—4 No.112
壷	31—28	口径(20.2)	同上	頸部に貼り付け突帯をめぐらしその上にヘラによる刻み目を加える。	口縁部ヨコナデ。頸部外面刷毛目。	焼成良好。小砂粒を含む。茶灰色。	II
壷	31—29	口径(30.2)	口縁部は大きく外反したのちやや内湾する。	口縁端面に3条の凹線文と刻み目。その下に貼り付け突帯。	内面ヘラ磨き。	焼成きわめて良好。小砂粒を多く含む。黄褐色。	I G13—4 No.95
壷	31—30	口径(21.4)	同上	口縁端部に3条の凹線文を施したのち、斜行文と円形浮文を加える。その下に2条の刻み目をもつ貼り付け突帯。	口縁部ヨコナデ。	焼成良好。小砂粒を含む。黄灰褐色。	III
壷	32—1	口径(17.5)	頸部はゆるく湾曲し口縁部は内傾して立ち上る。	口縁部に凹線文状の沈線を施したのち、ヘラによる斜行文を加える。頸部は押圧を加えた貼り付け突帯をめぐらす。肩部は櫛描直線文と波状文を交互にめぐらす。		焼成良好。細砂を含む。茶褐色。	I D11—3 No.186
壷	32—2	口径(36.8)	口縁部は朝顔形に大きく外反し、口縁端部は幅広い平坦面をもつ。	口縁端部に凹線文を施し、その上に円形浮文を加える。口縁端部上面に押圧を加えた貼り付け突帯。口縁部内面に2条の刻み目をもつ貼り付け突帯。	外面ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒をわずかに含む。内面黄灰色。外面褐灰色。	IV G11
壷	32—3	口径(26.3)	同上	口縁端部に凹線文状の沈線を施し、その上に円形浮文、棒状浮文を加える。頸部に凹線文状の沈線。	内外面ともに刷毛目。	焼成良好。砂粒を含む。灰褐色。	III D12 III E13—4 No.13
壷	32—4	口径(24.6)	同上	口縁部に凹線文を施しその上にヘラによる斜行文、円形浮文を加える。頸部に貼り付け突帯。	外面縦方向の刷毛目。	焼成良好。小砂粒を多く含む。外面黒灰褐色。内面暗灰褐色。	I D11 No.51

器種（分類）	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	32—5	口径(31.2)	口縁部は朝顔形に大きく外反し、口縁端部は幅広い平坦面をもつ。	口縁端部に凹線文状の沈線を入れ、その上に棒状浮文を加える。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。細砂粒を含む。灰色。	ＩD11
壷	32—6	口径(19.4)	同上	口縁端部に3条の凹線文。	口縁部ヨコナデ。頸部内外面ともナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。外面暗茶褐色。内面暗黄褐色。	ＩF13—1 No.125
壷	32—7	口径(20.4) 最大径(25.4)	口縁部は短くゆるく外反し、肩部は大きく張り出す。	肩部から胴部にかけて沈線と刺突文を交互に加える。口編部の相対する位置に2個づつの孔あり。	内面ナデ。	焼成良好。砂粒を含む。黄褐色。	ＩF13—3 No.122
壷	32—8	口径(14.0) 最大径(19.0)	同上	なし	内外面ともヘラ磨きか？	焼成良好。小砂粒を含む。外面暗茶褐色。内面明黄茶褐色。	ⅢF10
壷	32—9	口径(17.2)	口縁部上面に平坦面をもつ無頸壷。	肩部に凹線文状の4条の沈線。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	
壷	32—10	口径(15.7)	同上	なし	口縁部ヨコナデ。	焼成良好。灰褐色。	ＩE12—3
壷	32—11	口径(14.4)	同上	口唇部に刻み目。口縁部平坦面に孔をもつ。	内外面ともナデ。	焼成良好。砂粒を含む。黄褐色。	ⅡE11 No.12
壷	32—12	口径(15.2)	口縁部上面に平坦面をもち、鉢形にすぼまる。	口唇部に刻み目。胴部に櫛状工具による刺突文を2条めぐらす。	同上	焼成良好。小砂粒を含む。暗灰褐色。	ⅢC12・13
壷	32—13	口径(21.2)	同上	口縁部直下に2条の貼り付け突帯。胴部に櫛状工具による刺突文。	同上	焼成良好。小砂粒を多く含む。暗茶褐色。	ＩE—11 No.48
壷	32—14	口径(18.5) 最大径(20.8)	口縁部上面に平坦面をもち胴部はやや張り出す。	胴部最大径付近に櫛状工具による刺突文。	内面刷毛目のあとナデ。	焼成良好。小砂粒を多く含む。暗黄褐色。	ＩE13—3 No.73
壷	32—15	口径(17.2)	口縁部上面に平坦面をもち鉢形にすぼまる。	胴部に突帯を貼り付け押圧を加える。	摩滅が著しく不明瞭であるが内外面ともナデか。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗茶褐色。	ＩD12—4 No.222
壷	32—16	口径(13.8)	口縁部は直口ぎみに立ち上り、上部に平坦面をもつ。	口縁端部にヘラによる刻み目。その下に3条の貼り付け突帯。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。小砂粒を多く含む。暗褐色。	ＩE11 No.17
壷	32—17	口径(19.6)	同上	口縁部上面にヘラによる斜格子文。口縁部外面に刻み目をもつ突帯を5条めぐらす。	内面ヘラ磨き。	焼成良好。小砂粒を多く含む。暗灰褐色。	ⅢC13 No.3

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	32—18	口径(14.2)	口縁部は直口ぎみに立ち上り、上部に平坦面をもつ。	口縁端部にヘラによる刻み目。その下に突帯を貼り付け、刻み目を入れる。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。小砂粒を多く含む。淡褐色。	ＩG13—2
壷	32—19	口径(15.0)	口縁部はゆるく外反して開き、端端を幅広くつくる。	口縁端部に3条の凹線文。	同上	焼成良好。小砂粒を含む。黄褐色。	ＩG14—1 No.60
壷	32—20	口径(11.4)	無頸壷か。	口縁端部に刻み目。肩部に2条の突帯を貼り付け、その下に貝殻腹縁による沈線と斜行文を入れる。	内面ナデ。	焼成良好。大粒の砂粒をわずかに含む。暗黄灰色。	ＩD13
壷	32—21	口径(15.2)	同上	口縁部に2条の凹線文を施し、相対する位置に2孔づつ穿孔。	口縁部内外面ともナデ。胴部内面にヘラ削りの痕跡あり。	焼成良好。大粒の砂粒をわずかに含む。	ＩF11—4 No.136
壷	32—22	口径(11.4)	口縁部はゆるく外反し端部は肥厚する。	なし	外面ヘラ磨き。頸部内面指頭圧痕。	焼成良好。小砂粒を多く含む。外面黄褐色。内面黒褐色。	ⅢD12—2 No.1
壷	32—23	口径(11.6)	同上	口縁端部上面に2条の凹線文。	内外面ともナデ。	焼成良好。小砂粒を多く含む。暗褐色。	Ⅳ
鉢	32—24	口径(36.6)	口縁端部が肥厚し、上部に平坦面をもつ。肩部がやや張り出す。	口縁部上面に斜格子文を描き、その上に円形浮文を貼り付ける。口縁部から肩部にかけて刻み目をもつ突帯をめぐらし、上部の2条には縦方向の棒状浮文を加える。	内面ナデか。	焼成良好。小砂粒を多く含む。暗灰褐色。	ＩG13—3 No.117
鉢	32—25	口径(44.2)	同上	口縁部上面に2条、外面に4条の凹線文。	外面刷毛目のあとナデ。内面ナデのあとヘラ削りの痕跡かすかにあり。	焼成良好。砂粒を含む。暗茶褐色。	ＩF11—1 No.103
壷	32—26	底径 7.8	壷の台部か。ハ字状に開く。	凹線文状の沈線を施し、その間に竹管状の工具によって12個刺突しているが貫通していない。	外面ヘラ磨きか。	焼成良好。小砂粒を多く含む。内面暗茶褐色。外面黄褐色。	ＩE12—2 No.13
壷	33—1			肩部にヘラによる刺突文を2条めぐらし、その間に6～7本を1単位とする櫛状工具による直線文を3回施す。	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。大粒の砂粒をわずかに含む。黄褐色。	ＩE11 No.76
壷	33—2			頸部に櫛描直線文とヘラによる刺突文を交互にめぐらす。	外面ヘラ磨き。内面ナデ。	焼成良好。小砂粒を多く含む。茶褐色。	ＩE11—4 No.120

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	33－3			流水文とみられる。	外面ヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を含む。茶褐色。	ＩD14 No.42
壷	33－4			肩部に櫛描直線文と波状文を交互にめぐらす。	内面ナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を若干含む。外面明黄灰色。内面茶灰色。	ⅢD13 No.40
壷	33－5			櫛描直線文と波状文をめぐらす。	内面ナデ。	焼成良好。大粒の砂粒を若干含む。暗黄褐色。	ＩF12－2 No.101
壷	33－6			櫛描直線文と波状文を交互にめぐらしその下に斜格子文を施す。	内面刷毛目。	焼成きわめて良好。小砂粒を多く含む。外面明黄灰色。内面茶灰色。	ⅢG12
甕	34－1	口　径(21.7) 最大径　(22)	口縁部はゆるく外反し、肩部はわずかに張り出す。	頸部に6条の櫛描直線文。	胴部内外面ともナデ。内面に指頭圧痕あり。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗灰褐色。	ＩG14－2 No.3
甕	34－2	口　径(23.5)	口縁部はL字形になって上部に平坦面をもち、胴部は張り出さず鉢状にすぼまる。	1単位5本の櫛状工具で2回直線文を施し、その下にヘラによる刺突文をめぐらす。	胴部内面ナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ⅢC12
甕	34－3	口　径(26.8)	口縁部は短くわずかに外反する。	口縁端部にヘラによる刻み目。頸部に1単位6本の櫛状工具で2回直線文を施し、その下にヘラによる刺突文をめぐらす。	内外面ともナデ。	焼成良好。砂粒を若干含む。暗褐色。	ＩG12－3 No.98
甕	34－4	口　径　(21)	口縁部は強く外方へ折れ、肩部は大きく張り出す。	口縁端部にヘラによる刻み目。頸部から肩部にかけて9～10条の櫛描直線文と5条の波状文をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。内面は摩滅が著しく不明瞭であるがナデか。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	Ⅲ
鉢	34－5	口　径(24.0)	口縁部はゆるく外反し、胴部は底部に向ってすぼまる。	口縁端部にヘラによる斜格子文。頸部から胴部にかけて、棒状工具による刺突文、櫛描直線文、波状文を交互にめぐらす。	口縁部ヨコナデ。胴部外面ナデ。胴部内面刷毛目とナデ。	焼成良好。砂粒をわずかに含む。暗黄褐色。	ＩG11 No.102
鉢	34－6	口　径　12.4 底　径　4.0 器　高　10.2	底部が台状につくられ、きわめて厚い。	口縁部上面にヘラによる刺突文。胴部に4本を1単位とする櫛状工具で2回施文して直線文を描き、その下にヘラによる刺突文をめぐらす。	外面ナデ。内面指で押圧したのち雑なヘラ磨き。	焼成良好。砂粒を若干含む。灰褐色。	Ⅱ

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
甕	34—7	口径 (39)	口縁部は逆L字形になり、胴部はわずかに張り出す。大形品。	なし	口縁部ヨコナデ。胴部内外面とも刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗灰褐色。	ID11—4
甕	34—8	口径 (39)	大形品。	口縁端部にヘラによる刻み目。頸部に1条の突帯をめぐらしその上に刻み目を加える。	口縁部ヨコナデ。胴部外面ナデ。胴部内面刷毛目。	焼成良好。砂粒を含む。暗茶色。	IF11—4 No.44
甕	34—9	口径 (38) 最大径(37.8)	大形品。口縁部は逆L字形になり、胴部はわずかに張り出す。	頸部に突帯を貼り付け指頭圧痕を加える。胴部最大径付近にヘラによる刺突文をめぐらす。	外面胴部上半は刷毛目、下半はナデ。胴部内面ナデ。	焼成良好。小砂粒を多量に含む。黄褐色。	ID12—3
甕	34—10	口径(21.2) 最大径 (21)	口縁部はゆるく外反し、胴部はわずかに張り出す。	なし	口縁部ヨコナデ。口縁部内外面に指頭圧痕あり。胴部内外面ともナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。暗茶褐色。	IIIF10
甕	34—11	口径(23.0)	口縁部はわずかに外反し、胴部は直線ぎみにすぼまる。	胴部に先端を半円形にしたヘラ状工具によって刺突文をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面荒い刷毛目。	焼成良好。小砂粒を含む。暗灰褐色。	IIID14
甕	34—12	口径(24.6)	口縁部は大きく折れ曲がり、胴部はかなり張り出す。	胴部にヘラによる刺突文をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。胴部外面はナデか。胴部内面斜め方向の荒い刷毛目。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	ID11
甕	34—13	口径(18.8)	同上	なし	口縁部ヨコナデ。胴部内外面ともナデ。	焼成良好。小砂粒を含む。外面黒褐色。内面暗灰褐色。	IE11
甕	34—14	口径(25.8)	口縁部は大きく折れ曲がり、胴部は強く張り出す。	なし	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目。胴部内面ナデ。	焼成良好。小砂粒を多く含む。灰褐色。	IIID12
甕	34—15	口径(20.4)	同上	なし	口縁部ヨコナデ。胴部内外面とも刷毛目。	焼成良好。長石等の小砂粒を多く含む。外面暗黄褐色。内面暗茶褐色。	IF12—2 No.109
甕	34—16	口径(24.6)	同上	なし	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目。	焼成良好。石英、長石等の細砂を含む。暗灰色。	IF12—1
甕	34—17	口径(19.4)	口縁部は大きく折れ曲がり、胴部はわずかに張り出す。	胴部にヘラによる列点文。	口縁部ヨコナデ。外面胴部上半刷毛目、下半ナデあるいはヘラ磨き。内面刷毛目のあとナデ。	焼成きわめて良好。長石等の小砂粒を含む。暗茶褐色。	IF11—1 No.156

器種（分類）	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
甕	34—18	口径(21.6)	口縁部は大きく折れ曲がり、胴部はわずかに張り出す。	胴部にヘラによる列点文を2条めぐらす。	口縁部ヨコナデ。胴部内外面ともナデか。	焼成良好。長石、石英等の小砂粒を多く含む。灰褐色。	I D14—2 No.88
甕	35—1	口径(18.0) 最大径(20.6)	頸部はくの字状に折れ、口縁端部はやや肥厚する。胴部はわずかに張り出す。	口縁端部に2条の凹線文。	口縁部ヨコナデ。胴部は内外面とも摩滅が著しく不明。	焼成良好。長石、石英等の小砂粒をわずかに含む。赤褐色。	I E14—4 底68
甕	35—2	口径(17.2)	頸部はくの字状に折れ、口縁端部はやや肥厚する。胴部は強く張り出す。	口縁端部にヘラによる斜格子文。	同上	焼成良好。石英、長石等を多く含む。明灰褐色。	I E13—1 No.89
甕	35—3	口径(15.6)	同上	口縁端部に凹線文状のかすかな沈線。	同上	焼成良好。小砂粒を含む。灰色。	III D12 No.5
甕	35—4	口径(15.0)	同上	なし	口縁部ヨコナデ。	焼成良好。長石、石英、雲母等の砂粒を多く含む。明褐色。	I F12—2 No.149
甕	35—5	口径(15.4)	同上	なし	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ。	焼成良好。長石、石英等の砂粒を多く含む。黄褐色。	I G13—2 No.111
甕	35—6	口径(16.4)	同上	なし	同上	焼成やや不良。石英、長石等の砂粒を含む。茶褐色。	I G4—1 No.49
甕	35—7	口径(17.6)	同上	なし	口縁部ヨコナデ。胴部内外面ともに摩滅が著しく不明。	焼成良好。長石、石英、雲母等の小砂粒をわずかに含む。暗黄褐色。	I E13—2 No.62
甕	35—8	口径(29.3)	頸部はくの字状に折れ、口縁端部はやや肥厚する。胴部はわずかに張り出す。	口縁部に貝殻腹縁による刻み目。頸部に突帯を貼り付け、押圧を加える。		焼成良好。小砂粒を含む。黄褐色。	I D12—1 No.176
甕	35—9	口径(19.0)	頸部はくの字状に折れ、口縁端部はやや肥厚する。胴部は強く張り出す。	口縁部にヘラによる刻み目をめぐらし、その下に1条の凹線文状の波線を入れる。頸部に突帯を貼り付け、押圧を加える。	胴部外面に刷毛目がかすかに残る。内面は摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰白色。	I E14—1

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
甕	35—10	口径(18.8)	頸部はくの字状に折れ、口縁端部はやや肥厚する。胴部は強く張り出す。	口縁部に櫛状工具による刺突。頸部に突帯を貼り付け、その上に押圧を加える。	口縁部ヨコナデ。胴部外面は摩滅が著しく不明。内面は刷毛目。	焼成良好。長石、石英等の砂粒を含む。青灰色。	I F13—2
甕	35—11	口径(22)	同上	頸部に突帯を貼り付けその上に押圧を加える。	口縁部ヨコナデ。胴部は摩滅が著しく不明。	焼成良好。長石、石英、雲母等の砂粒を含む。青灰褐色。	III D14
甕	35—12	口径(21)	同上	口縁端部に凹線文を入れる。頸部に突帯を貼り付け、その上に押圧を加える。	器面の風化が著しく不明。	焼成良好。砂粒を含む。灰白色。	I G11—1 No.55
甕	35—13	口径(26)	同上	同上		焼成良好。砂粒を含む。灰白色。	I
甕	35—14	口径(26.7)	口縁部は上下に長く拡大し、胴部は張り出す。器肉は全体に薄い。	口縁部に凹線文状の沈線を4条入れる。頸部に突帯を貼り付ける。	口縁部ヨコナデ。	焼成良好。小砂粒を含む。灰褐色。	III E12—4
甕	35—15	口径(13.6)	頸部はゆるいくの字状に折れ、端部は上下に拡大する。胴部はわずかに張り出す。	口縁部に3条の凹線文。	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目、内面上半は刷毛目痕が若干残り、下半はヘラ削り痕がかすかに認められる。	焼成良好。石英、長石等の小砂粒を含む。暗灰褐色。	III
甕	35—16	口径(18)	頸部はくの字状に折れ、端部は上下に拡大する。胴部は強く張り出す。	口縁部に4条の凹線文。	胴部外面刷毛目。内面摩滅が著しく不明。	焼成良好。長石、石英等の砂粒を含む。暗黄褐色。	I F13—4 No.94
甕	35—17	口径(19.4) 最大径(23.8)	同上	口縁部に2条の凹線文。胴部最大径付近に列点文。	口縁部ヨコナデ。胴部外面ナデ。内面肩部以下ヘラ削り。	焼成良好。長石等の小砂粒を多く含む。暗灰褐色。	III F12—3 No.42
甕	35—18	口径(23.2)	同上	口縁部に3条の凹線文。	口縁部ヨコナデ。胴部外面ナデあるいはヘラ磨き、内面指による押圧。	焼成良好。長石等の砂粒を含む。茶褐色。	I D13 No.41
甕	35—19	口径(20.4)	同上	口縁部に2条の凹線文を入れ、その上にヘラによる刻み目。	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目、内面指頭圧痕。	焼成良好。長石、石英等の砂粒を含む。暗褐色。	I F12—4 No.87
高坏	35—20	口径(20)	坏部は椀状に湾曲し、口縁部は長く強く折れ曲がる。	口縁端部にヘラによる刻み目。	口縁部ヨコナデ。坏部内外面ともヘラ磨き。	焼成きわめて良好。長石等の小砂粒を多く含む。暗黄褐色。	I F13—2 No. 5

器種（分類）	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
高坏	35—21	口径(30.8)	坏部は椀形に湾曲し、口縁端部は肥厚して平坦面をもつ。	口縁端部にヘラによる刻み目。	坏部内外面ともていねいなヘラ磨き。	焼成きわめて良好。長石等の小砂粒を含む。明褐色。	I E11 No.31
高坏	35—22	口径(29.0)	同上	口縁上部の平坦面に3条の浅い凹線文を入れ、その上に円形浮文を加える。口縁端部にヘラによる刻み目。	摩滅が著しく不明瞭であるが内外面ともヘラ磨きか。	焼成良好。長石等のきわめて小砂粒を含む。暗茶褐色。	I F12—2 No.112
高坏	35—23	口径(36.0)	坏部は椀形に湾曲し、口縁部は強く折れ曲がり上部に平坦面をもつ。	口縁上面の平坦部と側面に浅い凹線をもち、上面から側面にかけて棒状浮文を貼り付け、刻み目をつける。	同上	焼成良好。長石、石英等の砂粒を多く含む。黒灰色。	I D11 No.46 III D14
高坏	35—24	脚部底径 (16)	脚部上半から坏部下半にかけての破片。		脚部と坏部を一緒につくり、坏部の底に円板状の粘土を貼り付ける。内外面ともていねいなヘラ磨き。脚部内面ヘラ削り。	焼成良好。長石等の小砂粒を含む。黄灰褐色。	I 11—3 No.145
高坏	35—25		脚部から坏部下半にかけての破片、脚部は細長く末広がりに開く。		内外面ともヘラ磨き。	焼成良好。長石、石英等の砂粒を多く含む。黄褐色。	I G12—4 No.111
高坏	35—26		脚部の破片。	脚部上端に断面三角形の突帯を2条貼り付ける。	外面ヘラ磨き。	焼成良好。長石等の砂粒を含む。	I E13—4
高坏	35—27	口径(19.6)	口縁部はやや内傾して立ち上り、上部に平坦面をもつ。	口縁部上面に2条、側面に4条の凹線文を施す。	坏部内外面ともていねいなヘラ磨き。	焼成きわめて良好。長石等の小砂粒を含む。茶褐色。	I E13—3 No.116
高坏	35—28	口径 (20)	同上	口縁部側面に4条の凹線文。	同上	焼成良好。砂粒をわずかに含む。明灰色。	I
高坏	35—29	脚部底径 (11.2)	末広がりに開く脚部の破片。	筒部に数条の凹線文。	摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。黄灰色。	I E14—4
壷	36—1	口径(18.6)	口縁部はゆるやかに湾曲して開き、端部はわずかに肥厚する。	口縁部に3条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。内面頸部刷毛目、それ以下はヘラ削り。	焼成はきわめて良好。長石、石英等の砂粒を含む。暗黄褐色。	I D13—3 No.178

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
壷	36—2	口径(14.8)	口縁部はゆるやかに湾曲して開き、端部はわずかに肥厚する。	口縁部に4条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。外面頸〜肩部刷毛目。内面頸部指による押圧、それ以下はヘラ削り。	焼成良好。長石・石英等の砂粒を多く含む。灰褐色。	I D13 No.116
壷	36—3			頸部に数条の沈線。	外面刷毛目。内面摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰色。	III
壷	36—4	口径(19.0)	頸部は八の字状にやや長く開き、口縁端部は上下に拡大。	口縁部と頸部に凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部外面刷毛目、内面摩滅が著しく不明。	焼成良好。長石・石英等の砂粒を多く含む。茶褐色。	I G11—2 No.121
壷	36—5	口径(13.4)	口縁部はゆるやかに湾曲して開き、端部はわずかに肥厚する。	口縁部に2条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ、内面頸部指による押圧、それ以下はヘラ削り。	焼成やや不良。砂粒を多く含む。灰色。	IV
壷	36—6	口径(16.3)	口縁部はくの字状に折れ端部は上下に拡大。肩部は強く張り出す。	口縁部に3条の凹線文。	口縁部ヨコナデ。肩部外面刷毛目、内面ヘラ削り。	焼成良好。石英・長石等の小砂粒を含む。暗灰色。	I G13—2
甕	36—7	口径(19.0)	口縁部は強く湾曲して開き、端部は上下に拡大。	同上	同上	焼成良好。小砂粒を多く含む。	I D13—1
甕	36—8	口径(26.0)	頸部はゆるいくの字状に折れ、口縁端部はやや内傾して上下に拡大。	口縁部に4条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。砂粒を多く含む。黄褐色。	I G13—2
甕	36—9	口径(24.0)	頸部はくの字状に折れ、口縁端部は上下に拡大。	口縁部に3条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。肩部外面刷毛目。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。砂粒を多く含む。黄褐色。	III
甕	36—10	口径(15.3)	口頸部はくの字状に曲がり、肩部はあまり張り出さない。	口頸部に2条の凹線文状の沈線。頸部に刷毛目原体による刺突列点文。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。長石・石英等の砂粒を含む。暗茶色。	I F11—3
甕	36—11	口径(12.4)	頸部はくの字状に折れ口縁端部はやや内傾して上下に拡大。	口縁部に3条の凹線文状の沈線。	内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。砂粒を含む。灰白色。	I F13—4
甕	36—12	口径(16.0)	頸部はゆるいくの字状に折れ、口縁端部はやや内傾して上下に拡大。	口縁部に4条の凹線文状の沈線。	頸部頸部刷毛目。内面頸部刷毛目。頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。砂粒を多量に含む。青灰色。	I G13—3
甕	36—13	口径(18.0)	同上	口縁部に3条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰白色。	I F14—3
甕	36—14	口径(14.0)	頸部はくの字状に折れ、口縁端部は直立ぎみに上下に拡大。	口縁部に4条の凹縁文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。砂粒を多量に含む。黒褐色。	III G12—3

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
甕	36—15	口径(14.0)	頸部はくの字状に折れ、口縁端部は内傾ぎみにわずかに拡大。胴部は球形に張り出す。	口縁部に3条の凹線文状の沈線。胴部に列点文。	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。灰白色。	I
甕	36—16	口径(13.0)	頸部はゆるいくの字状に曲がり口縁端部はやや内傾して上下に拡大。口縁部は強く張り出す。	口縁部に3条の凹線文状の沈線。胴部に列点文。	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。砂粒を多く含む。灰褐色。	I F11—3 No.192
壷	36—17	口径(15.6)	頸部は筒状に長く、口縁部は大きく開き、端部は上下に拡大。肩部は強く張り出す。	口縁部に4条の凹線文状の沈線。	口頸部ヨコナデ。頸部外面刷毛目、内面ヘラ削り。	焼成良好。砂粒を含む。灰褐色。	I D13—3
壷	36—18	口径(16.6)	同上	口縁部に3条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。外面頸部刷毛目。内面頸部ヘラ削りと刷毛目。	焼成やや不良。小砂粒をわずかに含む。灰色。	III E F10
壷	36—19	口径(14.5)	同上	口縁部に6条の平行沈線。頸部に沈線。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成やや不良。小砂粒を多く含む。黄灰色。	I G12—2 No.126
壷	36—20	口径(14.6)	同上	口縁部に9条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。内面頸部ヘラ磨き。	焼成良好。長石等の小砂粒を多く含む。外面茶灰色。内面灰褐色。	
壷	36—21	口径(13.0)	同上	口縁部に8条の平行沈線。頸部に沈線。	口縁部ヨコナデ。内面頸ヘラ磨き、それ以下はヘラ削り。	焼成良好。大粒の砂粒を多く含む。黄褐色。	I E14—3 No.26
壷	36—22	口径(11.8)	同上	口縁部に4条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成やや不良。砂粒を多く含む。	I D13
壷	36—23	口径(12.0)	同上	口縁部に6条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナギ。内面口縁部〜頸部ヘラ磨き、頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。大粒の砂粒を多く含む。暗褐色。	I D12—2 No.140
甕	36—24	口径	頸部はゆるいくの字状に曲がり、口縁端部はやや内傾ぎみに上下に拡大。	口編部に4条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。	
甕	36—25	口径(21.0)	頸部は外方に強く折れ、口縁端部はわずかに内傾して上方に拡大。	口縁部に3条の凹線文状の沈線。肩部に貝殻腹縁による列点文。	口縁部ヨコナデ。肩部外面刷毛目。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。石英・長石等の砂粒を含む。褐色。	I F12—1

器種(分類)	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
甕	36—26	口径(19.8)	頸部はゆるいくの字状に曲がり、口縁端部はやや外傾ぎみに上下に拡大。	口縁部に5条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。小砂粒をわずかに含む。黒褐色。	Ⅲ
甕	36—27	口径(21.0)	同上	口縁部に4条の凹線文状の沈線。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。砂粒を含む。暗黄褐色。	ⅢD11
甕	36—28	口径(25.2)	同上	同上	同上	焼成良好。石英・長石等の砂粒を含む。	ⅢE11—4 No.8
甕	36—29	口径(23.8)	同上	同上	器面の摩滅が著しく不明。	焼成良好。砂粒を含む。外面淡黄褐色。内面黒褐色。	ⅠE14—3 No.1
甕	36—30	口径(25.0)	同上	口縁部に12条の細い沈線。	口縁部ヨコナデ。	焼成良好。砂粒を多く含む。赤褐色。	ⅠD
甕	36—31	口径(14.2) 最大径(17.4)	口縁部はやや外傾ぎみに上方にのび、胴部は球形に張り出す。	口縁部に4条の平行沈線。胴部にヘラによる列点文。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。砂粒をわずかに含む。黄褐色。	ⅠE11 No.32
甕	36—32	口径(16.4)	同上	口縁部に5条の平行沈線。肩部に貝殻腹縁による刺突列点文。	口縁部ヨコナデ。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。小砂粒を含む。黄褐色。	ⅠE14—2 No.45
甕	36—33	口径(16.2)	同上	口縁部に3条の凹線文状の沈線。胴部に列点文。	同上	焼成良好。小砂粒を多く含む。外面暗茶褐色。内面黒褐色。	ⅠE13—2 No.52
甕	36—34	口径(12.0) 最大径(11.4)	小型品。口縁部はやや外傾して上方に立ち上り、胴部は球形に張り出すが口径より小さい。	口縁部に3条の凹線文状の沈線。胴部に列点文。	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目。胴部内面ヘラ削りと刷毛目。	焼成良好。砂粒を少量含む。黒褐色。	ⅠF11—4
甕	36—35	口径(22.0) 最大径(23.2)	頸部はくの字状に折れ、口縁端部は外傾して上方にのびる。胴部はやや張り出す。	口縁部に4条の沈線。肩部に刷毛目を施す工具のようなもので列点文をめぐらす。	口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目のあとナデ。内面頸部以下ヘラ削り。	焼成良好。大粒の砂粒を含む。灰白色。	ⅠD13
器台	36—36	底径(15.8)	筒部下半から脚台部の破片。	脚台部に5条の凹線文状の沈線。	内面ヘラ削り。	焼成良好。大粒の砂粒を若干含む。明黄褐色。	ⅠD14 No.13
	36—37			沈線と鋸歯文をめぐらす。		焼成きわめて良好。砂粒を多く含む。淡黒褐色。	NG11

器種（分類）	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
器台	36—38	口径(13.6) 器高(10.8) 底径(9.6)	口縁部は大きく外反して開き、端部をわずかに拡大。	口縁端部に3条の凹線文状の沈線。	外面刷毛目のあとナデ。内面ヘラ削り。	焼成良好。 砂粒を多く含む。 灰白色。	ⅢE11—4
器台	36—39		筒部の破片。筒部は細く、底部にむけて大きく開く。		外面ヘラ磨き。 内面しぼり痕。	焼成良好。 砂粒を多く含む。 薄灰色。	ⅠF13—3 No.70
器台	36—40	口径(10.8)	高坏状を呈し、口縁部は外傾して長く立ち上る。	器受部に平行沈線。筒部に6個の円形透し。	外面は器面の摩滅が著しく不明。器受部内面ヘラ磨き。筒部内面ヘラ削り。	焼成良好。 小砂粒を多く含む。 灰褐色。	ⅠG13—2 No.121
器台	36—41	底径(26.6)	脚台部の破片。	脚台部外面に4条の凹線文状の沈線。	内面ヘラ削り。	焼成やや不良。 砂粒を多く含む。 灰色。	ⅢF11—9 No.5
壷	36—42		壷の把手とみられる。	ヘラ描沈線と貝殻腹縁による刺突文を交互に施す。		焼成良好。 長石・石英等の砂粒を多く含む。 灰褐色。	Ⅰ
ミニチュア壷	37—1	最大径 (6.0) 底径 (2.3)	前期の壷形土器に類似。胴部最大径はほぼ胴中位にありややあげ底の底部におわる。	なし。	外面にヘラ磨き痕あり。内面ナデ。	焼成良好。 砂粒を含む。 灰色。	ⅢE14—1
ミニチュア壷	37—2	口径 (2.1) 器高 (5.9) 底径 (3.0)		口縁部に2ケ所孔を穿つ。	指によるナデ。	焼成良好。 大粒の砂粒をわずかに含む。 黄灰色。	ⅠG13—3
ミニチュア壷	37—3	口径 (5.2) 最大径 (5.8) 底径 (3.5) 器高 (7.3)	前期の壷形土器に類似。口縁部はゆるく外反し、最大径は胴中位よりやや下にあり、平底におわる。	なし。	同上	焼成良好。 小砂粒を多く含む。 灰黒色。	ⅢD13—3
ミニチュア甕	37—4	口径 (4.8) 底径 (2.4) 器高 (3.8)	前期の甕形土器に類似。	ヘラによる2条の雑な沈線。	同上	焼成良好。 長石・石英等の砂粒を含む。 茶褐色。	ⅡE13—2
ミニチュア	37—5	口径 (4.3) 底径 (3.2) 器高 (4.5)		なし。	同上	焼成良好。 砂粒を多く含む。 灰色。	ⅠD13—3
ミニチュア	37—6	口径 (5.9) 底径 (3.5) 器高 (4.2)	甕形を呈す。	なし。	指による押圧。	焼成良好。 大粒の砂粒を多く含む。 灰褐色。	ⅢD12—2
ミニチュア	37—7	口径 (5.9) 底径 (3.9) 器高 (3.8)	鉢形を呈す。	なし。	同上	焼成良好。 砂粒を含む。 淡灰色。	ⅢD11—1

器種（分類）	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
ミニチュア	37—8	口径（8.0） 底径（3.8） 器高（5.1）	同上	なし。	指による押圧。	焼成良好。 小砂粒を含む。 黄灰色。	I G11—1
ミニチュア	37—9	口径（9.0） 底径（4.2） 器高（8.1）	甕形を呈す。	なし。	同上	焼成良好。 長石等の小砂粒を多く含む。 暗褐色。	不明
ミニチュア	37—10	底径（4.2）	同上	なし。	同上	焼成良好。 長石・石英等の砂粒を多く含む。	III D14
ミニチュア	37—11	底径（2.8）			内外面ともナデ。	焼成良好。 長石等の小砂粒を含む。 黄褐色。	I D13 No.99
ミニチュア	37—12	底径（2.4）			同上	焼成良好。 長石等の小砂粒を含む。 明褐色。	I E12—2 No.91
ミニチュア	37—13	底径（3.2）			同上	焼成良好。 小砂粒を多く含む。 暗茶褐色。	I D11 No.53
ミニチュア	37—14	底径（4.2）			同上	焼成良好。 大粒の砂粒を多く含む。 灰褐色。	II D13
ミニチュア	37—15	底径（2.5）	底部はあげ底になる。		指による押圧。	焼成良好。 長石等の砂粒を含む。 茶褐色。	I E12—2 No.80
ミニチュア	37—16	底径（3.2）	同上		内外面ともナデ。	焼成良好。 石英等の大粒の砂粒を含む。 内面灰褐色。 外面暗褐色。	I D11 No.95
ミニチュア	37—17	底径（3.1）			同上	焼成良好。 長石等の小砂粒を多く含む。 茶灰色。	IV
ミニチュア	37—18	底径（3.7）			同上	焼成良好。 石英等の大粒の砂を含む。 暗茶褐色。	I F11 No.21
ミニチュア	37—19	底径（2.8）			同上	焼成良好。 長石・石英等の砂粒を含む。 茶褐色。	I G12—2 No.127

器種（分類）	挿図番号	法量 cm	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
ミニチュア	37—20	底径（4.3）			内外面とも刷毛目。	焼成良好。長石等の小砂粒を多く含む。暗茶褐色。	ⅠF13—2 No.115
ミニチュア	37—21	底径（2.0）		胴部下半から底部にかけて先端が四角になった工具で文様を入れる。		焼成きわめて良好。砂粒を多く含む。灰黒色。	ⅢC12—13

※法量（　）内の数価は復原径を示す。

3 土　師　器

弥生式土器などに比べると、土師器の出土量はきわめて少なく、この点、須恵器が僅少であるのによく符合するが、それでも第Ⅰ～第Ⅲの三つの調査区にはほぼまんべんなくみられ、特に第Ⅰ調査区と第Ⅲ調査区ではかなりまとまった資料が得られている。すなわち、他の遺物同様、各時代各時期の遺物と混在し、層位関係は明確さを欠くが、第Ⅰ調査区と第Ⅲ調査には複合口縁を有する古式タイプの壺、甕類が目立ち、第Ⅰ調査区のD11・12、E12・13、F13・14、G13では小型の丸底壺がまとまって出土し、かつそれらには完形を保つものが多かった。しかもそれら小型壺の出土区域には同時に従来県下では検出例の少なかった畿内布留式系統の甕の出土のみられたことが注意された。また第Ⅲ調査区では西南区域で検出されたしがらみ状の杭列遺構付近に新しいタイプの甕、椀類がみられ、それらは、のちに掲げる第49図、第50図の歴史時代の須恵器類とほぼ共存するものとみて誤りない出土状態を示していた。このほか第Ⅲ調査では円筒と形象埴輪の破片も検出されている。

以下、それらについて器種別に形態的な分類を行ない、それぞれの特徴を摘記することにする。なお、個々については表5の土師器一覧表を参照されたい。

壺形土器　山陰では弥生後期後半以降、器形の上で壺形土器と甕形土器の区別が次第にに不明瞭になっていくことが知られているが、その中でなお壺としての形制をとどめる古式土師器としてタテチョウ遺跡には口縁部の作りを目安にすると、大きく次のようにA、Bの2種がみられる。

A類　まず、弥生後期以来のくりあげ口縁が発達した、いわゆる「5」の字形の複合口縁を有するもので、さらに2種に細別される。

A1（第38図1～5）　頸部が長くゆるやかに彎曲し、口縁は外傾してたちあがる整正な複合口縁を形成するもので、口縁端部はやや肥厚して平坦面をなす。肩はかなり張り、全体に倒卵形をなして底は丸底ないしそれに近いものとみられる。口縁部の内外面はともにヨコナデ、頸部以下の内面にはヘラ削りが著しい。口頸部と肩部以下との接合、成形に伴い頸部の内面に細長く指頭圧痕を残すものがある。黄褐色の明るい画一的な色調で、焼成も良好である。

A2（第39図12）　口縁と頸部となす稜がにぶく不明瞭な退化複合口縁を有するもので、図示し得るものがわずかに1点認められる。口縁部内外面ともヨコナデ、頸部の内面には指頭圧痕をとどめる。形態的に複合口縁系統の最終末のものとみられる。

B類　直口の単純口縁壺形土器で、これも2種に細別される。

B1（第38図11）　口頸部がゆるく外彎しながら細長くのびるもので、1点ある。口縁

端部に稜面を残し、全体に器肉が厚い。内外面ともていねいな刷毛目調整ののちナデで仕上げる。

Ｂ２（第39図19・20）　口頸部がＢ１より短く、直線的にたちあがり、上部でやや強く屈折して外反する。胴部は球形ないしやや下脹れ気味になるものとみられる。肩部内面に成形に伴う指頭圧痕が残され、調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面は横方向に大きなヘラ削り痕をとどめている。

甕形土器　タテチョウ遺跡出土の甕形土器には大きく三つの形態が認められる。その１は「５」の字形の複合口縁を有するもので、弥生後期以来の甕形土器の形制を保つもの、その２は、「く」の字形の単純口縁で端部を特徴的に作る、いわゆる布留式系統の甕を主体とする一群、その３は、「く」の字形の単純口縁をもち、全体に流れ肩で下脹れする器形のものである。その１から順次Ａ、Ｂ、Ｃ類とすると、それらは次のような特徴をもっている。

Ａ類「５」の字形の複合口縁を有するもので、整正な複合口縁を形成し、胴部最大径がやや上位にあって倒卵形に近い形状をなすＡ１と、退化の傾向を示す複合口縁で球形に近い胴部をもつＡ２の２種に大別され、前者はさらに以下の３種に細別することができる。

Ａ１－ａ（第38図６～10、12）　肩部に文様帯をもつ一群で、櫛状工具あるいは二枚貝の腹縁による平行線文、波状文、刺突文を施している。

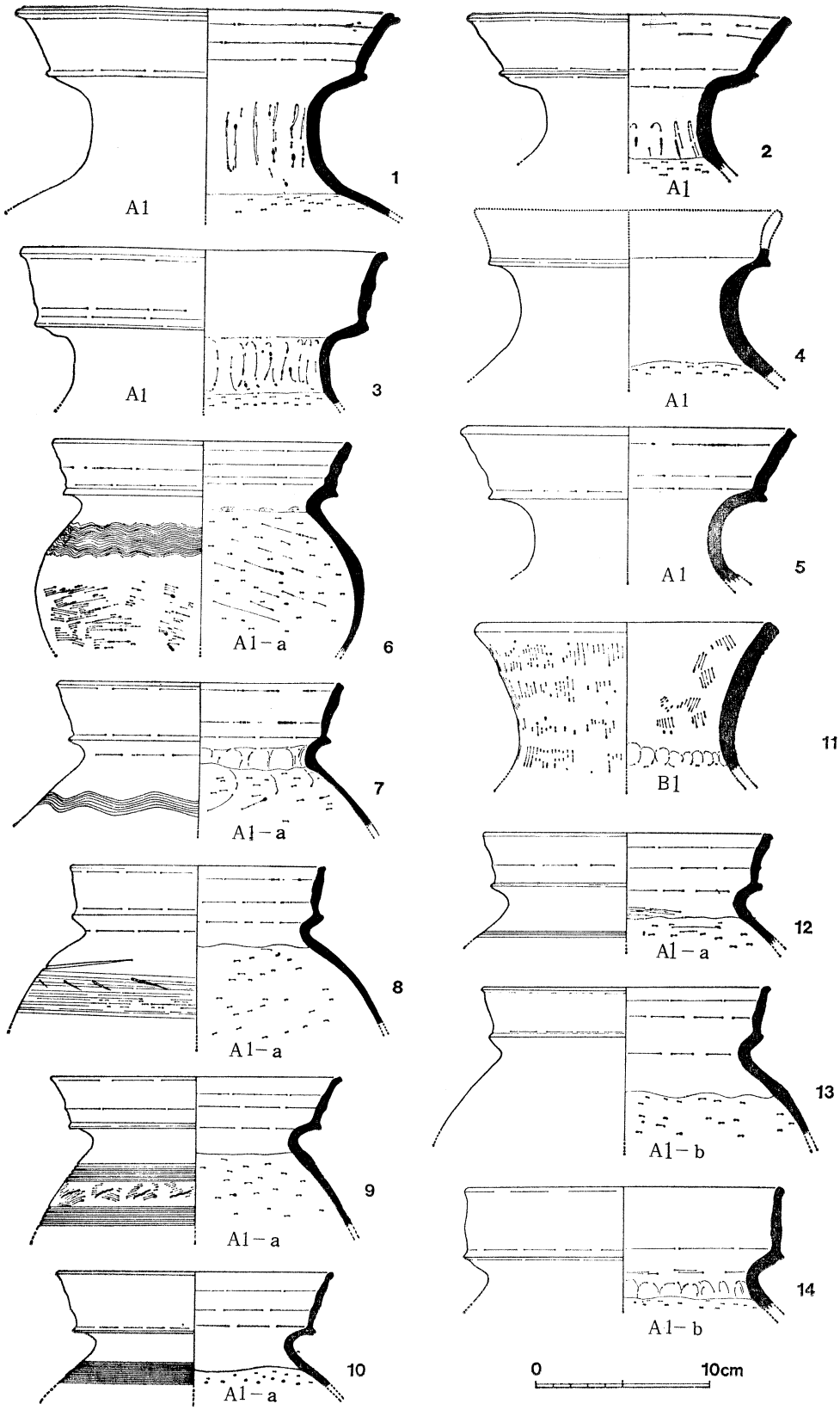
口径15～17㎝の間で大きさにバラつきが少ない。口縁部は内外ともヨコナデ、胴部には細かい縦方向の刷毛目が観察され、内面の頸部以下にはヘラ削りが著しく、薄い作りとなっている。胎土はよく選ばれ、固い焼きである。

Ａ１－ｂ（第38図13、14、第39図１～６）　装飾的要素が全くなく、Ａ１－ａに比べ口縁部がややぶ厚く整正さを欠くものである。大きさに若干バラツキがみられるが、成形や調整法はＡ１－ａと同様で、頸部以下の内面はヘラ削り放しとなっている。底は丸底のものが大半とみられる。

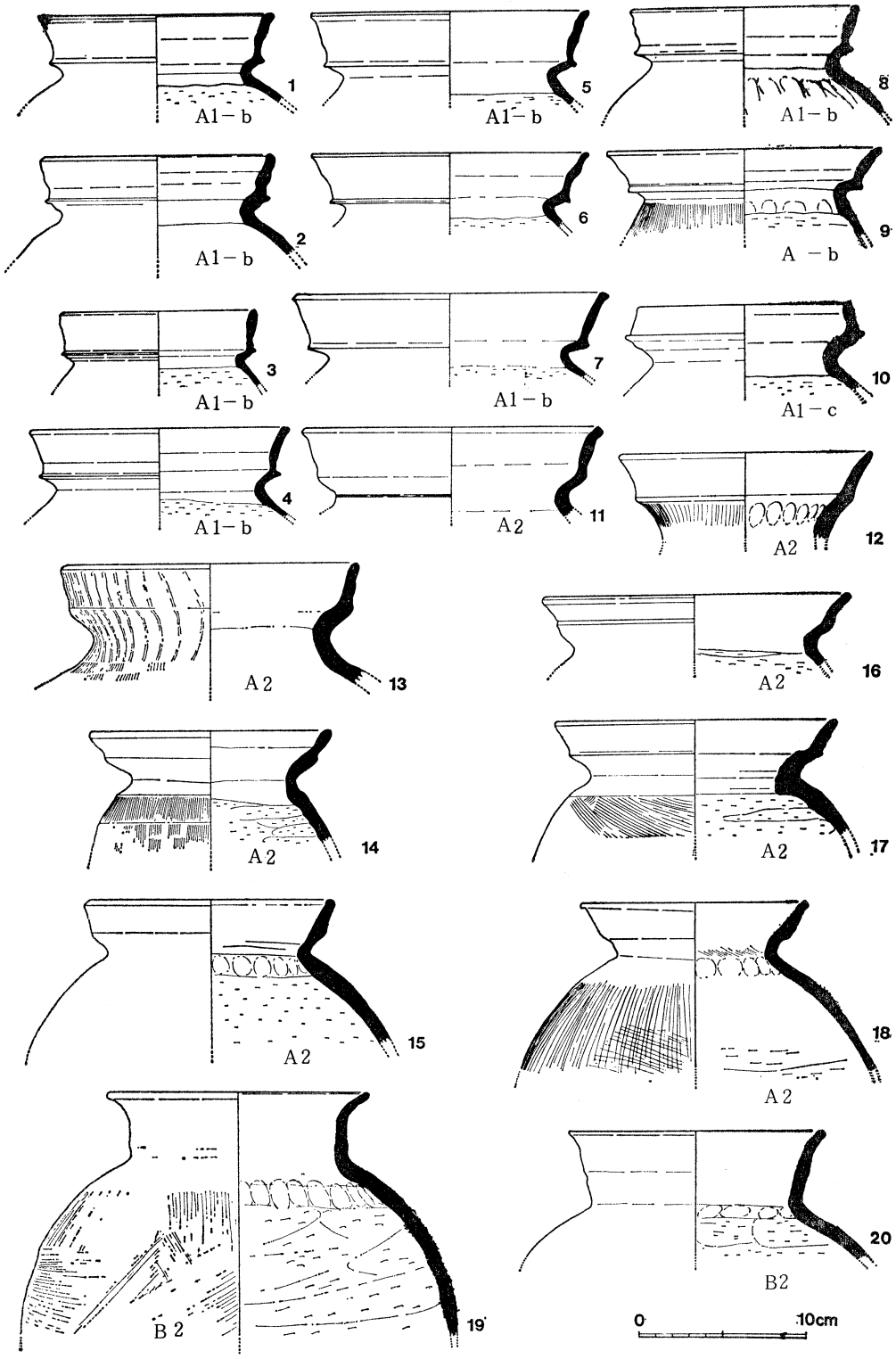
Ａ１－ｃ（第39図10）　頸部から内傾してたちあがる複合口縁を有するもので、１点ある。「５」の字形口縁の変形で山陰には時折みられるものである。口縁部は内外ともていねいなヨコナデがなされている。

以上は、大まかにみてさきの壺形土器Ａ１とほぼ併行するものとみられる。

Ａ２（第39図11、13～18）　複合口縁の稜が丸味を帯びてにぶくなるもので、形態的にはＡ１の退化形式とみられる。口縁部内外面はヨコナデ、頸部以下の内面には横方向の粗いヘラ削り痕が残り、胴部外面は縦方向のやや粗い刷毛目で調整される。底は完全な丸底とみられる。黄褐色ないし赤褐色を呈し、胎土中には若干の粗砂粒を混じ、焼きは比較的堅い。時期的な問題としてさきのＡ１－ｂやＡ１－ｃ、さらに次にあげるｃ類などとの併行関係が興味をひくところである。



第38図　土　師　器　実　測　図 (1)



第39図 土 師 器 実 測 図 (2)

B類（第40図１～17）　B類は「く」の字状に外反し、かつ、「５」の字口縁を僅かにとどめ、肩部から胴部にかけて丸く張る形態をもつ。また、口縁部と胴部との接合面には指頭圧痕が明瞭に残り、文様を全く有しないのも特徴の一つである。

さて、この類は口縁部の作りより以下の５形態に区別できる。

B１（１～４）　口縁部はゆるいカーブを描き、その口唇部は肥大し、かつ内側に屈曲している。これは畿内の布留式の影響と考えられるが、当地方では出土例は極少である。口径は13～18㎝。口縁部の内、外面はヨコナデ、胴の外面はナデ、内面はヘラ削りで仕上げている。胎土は密で、焼成は良く、黄褐色ないし灰褐色を呈す。

B２（５～10）　口縁部なかほどにかすかな段を有し、口唇部の端面は平坦で凹状になっている。この手法は当地方ではほとんど知られていない。口径は12～17㎝。口縁部は内外ともヨコナデ、胴部は外面が細い刷毛目、内面はヘラ削りで仕上げられている。６のみは内面が縦方向に荒くナデられている。胎土は粗で、焼成は良く、茶褐色ないし黄褐色を呈す。

B３（11～13）　単純な「く」の字口縁をもち、口径14㎝前後の小型品である。11、13の口縁部は内外ともヨコナデ、12は刷毛目で調整され、胴部の外面は刷毛目、内面はヘラ削りを施す。胎土は粗で、焼成は良く、黒ないし灰褐色を呈す。

B４（14～16）　頸部からゆるやかなカーブでやや外反する。中程にかすかな段を有す。口径は14㎝。口縁部はヨコナデ、胴部の外面は刷毛目、内面はヘラ削りで仕上げる。胎土は粗で、焼成は良く、黄褐色ないし茶褐色を呈す。

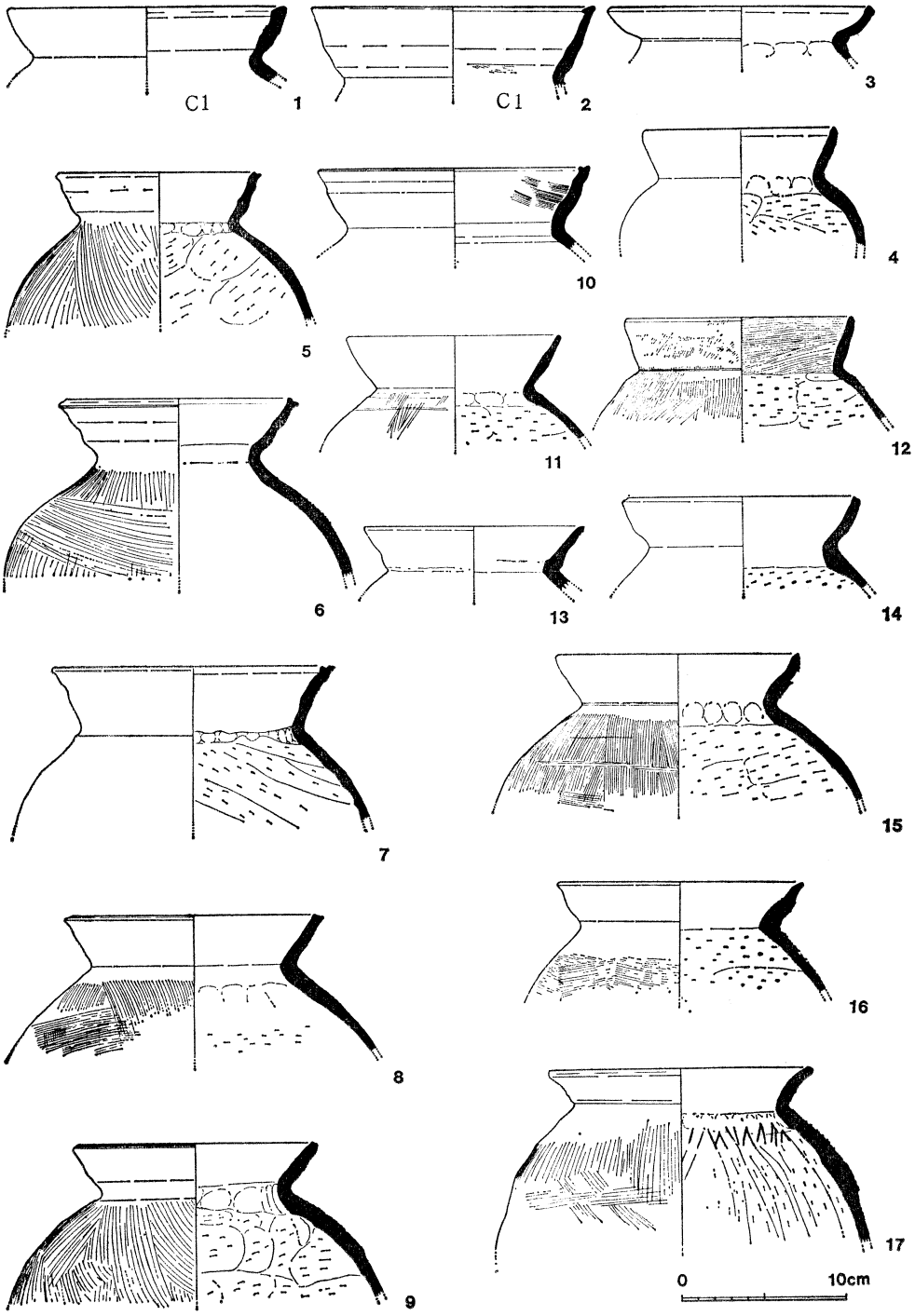
B５（17）　口縁部は大きく外反し、幾分反り気味である。口径16㎝。口縁部はヨコナデ、胴部外面は刷毛目の後ナデで調整し、内面はヘラ削りを荒く施す。胎土はやや雑で、焼成は良く、黄褐色を呈す。

このC類の時期は複合口縁の退化と文様を有しない点から須恵器出現期およびそれ以前と推定される。正確な位置付けは今後の資料増加に待ちたい。

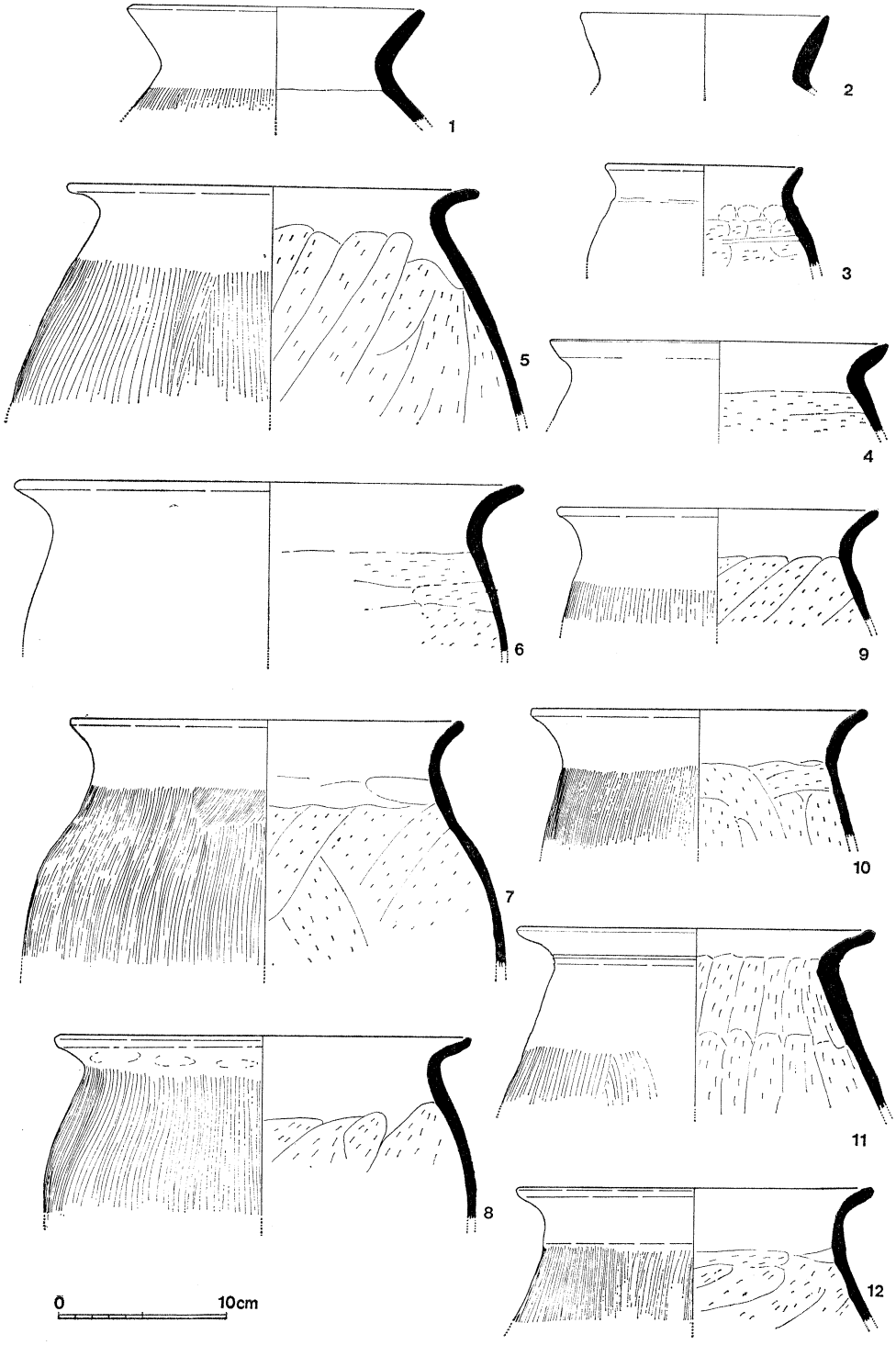
C類（第41図１～12）　「く」の字口縁をもち、ほとんど肩部が張らない甕である。器の大小により２区分できる。

C１（１～３）　「く」の字で直線状の口縁をもつ小型の甕である。口径は12～18㎝で肩はあまり張らない。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部は外面刷毛目、内面はヘラ削りを施す。胎土は密（３は粗）で、焼成は良く、黄褐色から灰褐色を呈す。２は第Ⅰ調査区、他は第Ⅲ調査区出土。

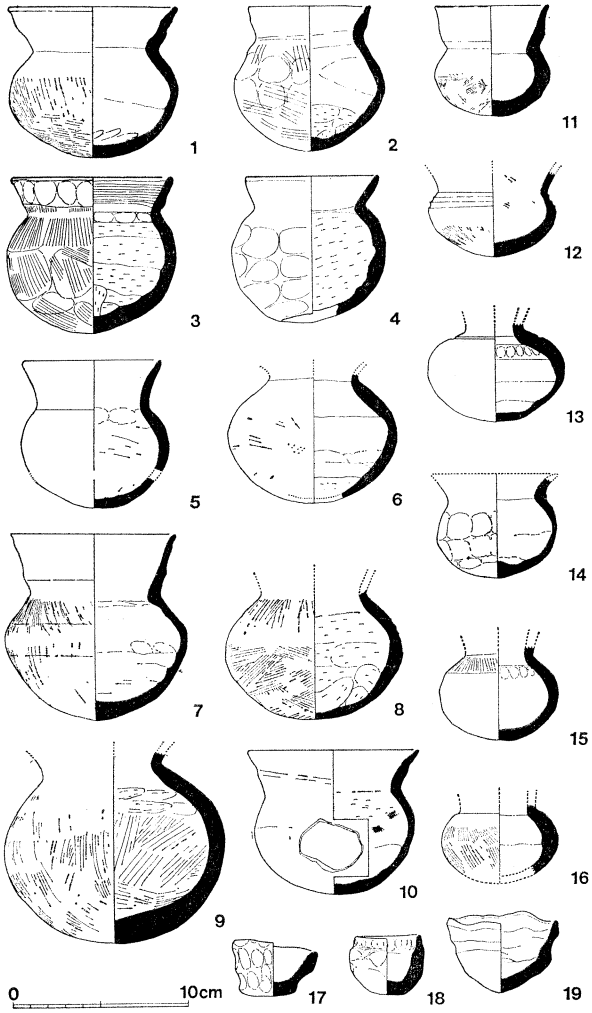
C２（４～12）　口縁部は大きく外反し、幾分張りをもつ。肩はC１類と同様あまり張らず、流れ肩となるのが特徴である。口径は20～30㎝。



第40図 土 師 器 実 測 図 (3)



第41図 土 師 器 実 測 図 (4)



第42図　土師器実測図（小型壷と手捏土器）

口縁部は内外面ともヨコナデ、肩部以下は外面縦方向の刷毛目調整、内面はヘラ削りを施す。胎土は粗で、焼成は良く黄褐色、灰褐色を呈す。出土地は第Ⅱ、Ⅲ調査区が多く、大型の破片は第Ⅲ調査区のしがらみ付近に集中しており、この地点で出土している須恵器坏などと同時代と推定される。

小型壺（第42図1～16）　本遺跡からは16個体以上が出土している。これらの半数は口縁部を欠損し、形態上にも大きな変化が認められないので、ここでは器形の大小で２区分するにとどめる。

A類　口縁部にかすかな段を有するもの（１、２、３、７）と無いもの（４、５）に分かれ、体部はすべて球形をなす。調整では口縁部の内外面は３を除きヨコナデであり、３のみ内面は刷毛目で仕上げる。体部は外面刷毛目、内面ヘラ削りを施し、２・３・４の表面には指頭圧痕が多く残る。また、10の内面には細かな布目が随所にみられ、ヘラ削りの後簡単に布でナデたであろう。口径は７～9.6㎝、胴径は最大径で8.5～12.5㎝、器高は8.2～10.7㎝を測る。胎土はやや粗で、焼成は良く黄褐色、灰褐色を呈す。出土地点はすべて第Ⅰ調査区である。時期は口縁部の形態より古墳時代中期以降と考えられるが、各々については不明である。なお５・４・10は焼成後なんらかの目的で胴および底部を穿孔している。

B類　口径は6.5～7.3㎝、胴径は5.7～8.0㎝、器高は6.0～6.4㎝を測り、小型品である。これらは口縁部を欠損したものが多い。形態では口縁部にかすかな段を有すもの(11)と大きく外反するもの(14)とがあり、また胴部はA類と同様に球形をなす。口縁部はヨコナデ。

体部の外面は刷毛目が多く、ナデや磨き(11)もみられる。内面は削りの後ナデ。全体につくりは丁寧であるが、14の外面には指頭圧痕が残る。胎土は粗密まちまちで、焼成は良く黄褐色、灰褐色を呈す。出土地は15のみが第Ⅲ調査区で他はすべて第Ⅰ調査区である。12は肩が張り、全体に楕円形の胴をもち、いわゆる小型丸底坩と呼ばれるものであり、古式土師器と共伴する。

手捏土器（第42図17、18、19）　タテチョウ遺跡からは3個の完形品が出土している。

これらはいずれも指オサエにより成形され、表面には凹凸が残る粗製品である。大きさは口径3.2～4.4㎝を測る小型品である。時期は不明。

17は平底をもつ鉢形のものであり、指頭圧痕が器の内外とも明瞭に残る。器肉は厚く、胎土中には砂粒を多く含み、焼成は良く茶褐色を呈す。第Ⅰ調査区出土。

18は成形後にナデによって丁寧に調整された椀形のもので、口縁部は指先でのつまみにより仕上げられ器の内外には段が生じている。胎土は密、焼成は良好で灰褐色を呈す。第Ⅲ調査区の土馬出土地に近接して発見されており、両者の関係が注目される。

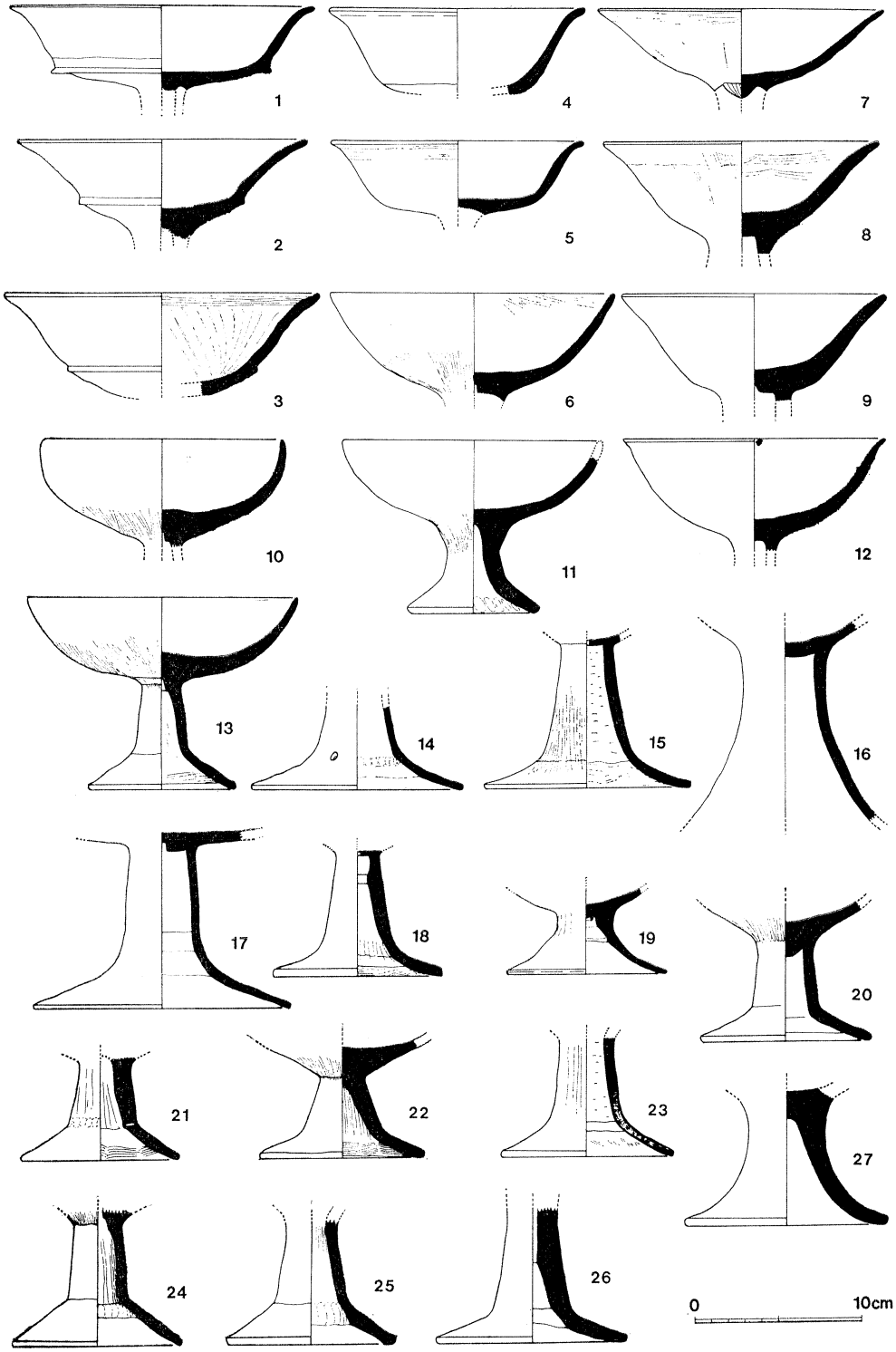
19は丸底をもつ鉢形のもので、他の二個よりやや大きい。作りは雑で、口縁部は上下に起伏し、表面には凹凸が著しい。胎土中には砂粒を多く含み、焼成は良く黒色を呈す。第Ⅲ調査区出土。

高坏形土器　坏部の形態を目安にするとタテチョウ遺跡出土の高坏には、坏部が底面外側に稜を作りながら段をなし、上方に外反する口縁をもつものと、無段で全体に内彎する坏部を有するものの2種がある。

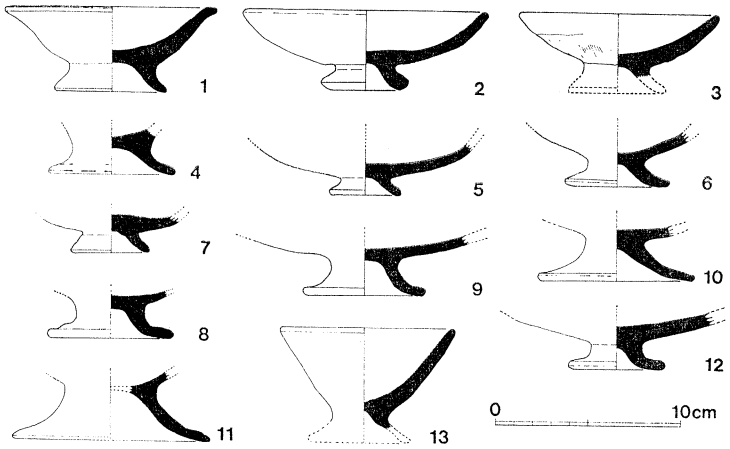
A類（第43図1～3）　平坦ないし内彎気味にのびる底面外側に稜を作り出す有段式のもので、古式の壺、甕類にみる「5」の字形の複合口縁の系統をひくものである。内外面ともヘラ磨きによる調整が顕著で、3には坏部内面に滑択のある細い暗文が浮き出されている。坏部と筒脚部の取り付は、円形粘土板を中空の取付部に充塡して接合、成形する式のものである。筒脚部としては18などが考えられる。

B類　坏部外側に段がなく、底面から口縁にかけて内彎する式のもので、さらに次の3種に分けられる。

B1（第43図4・5）　坏部底面が端で屈折、内彎しながら立ち上り、上端でさらに外反し、丸味をもって終るものである。全体に薄い作りとなっている。胎土はよく選ばれ、焼成も良好で、坏部内面の入念なヘラ磨きなど、さきのA類と共通点が多い。5は筒脚部を坏部底面に差し込んで接合した式のもののようである。なお、筒脚部としては14、15、17（円板充塡式）などが取り付くものとみられる。



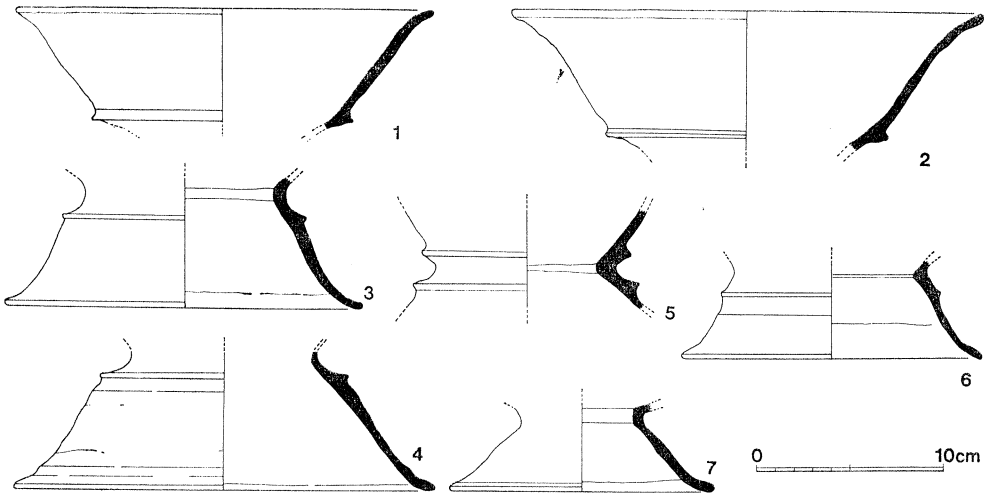
第43図　土 師 器 実 測 図（高坏形土器）



第44図　土師器実測図（低脚坏）

B２（第43図７～９、12）　坏部が底面から浅く、ゆるやかに内彎しながら開き、口縁をやや外反り気味に作るものである。坏部と筒脚部の接合には円板充塡式（７～９）と差込み式（12）の二種がみられ、うち円板充塡式の７は、充塡用の円形粘土板と筒部の接着面にヘラで放射状に刻み目を入れ、接合を強力にしている。薄い作りのこの７は内外面ともヘラ磨きによる調整がゆきとどき、A類やさきのB１との時期的な併行関係がうかがえる。８、９は器肉の厚い作りである。

B３（第43図６、10、11、13）　坏部が椀状に内彎するもので、筒脚部は完形を保つ11、13のように下方で「く」の字状に大きく裾広がりする。接合にはやはり円板充塡式（６、10、13）と差込み式(11)の二つがあり、取付部の外面には坏底部から筒部上半にかけて粗い刷毛目がみられる。また11、13には筒部内面に絞り痕、11の裾脚部内面には指頭痕、13には粗い刷毛目調整痕が残されている。20～23などもこの式の坏部に取り付くものとみられる。



第45図　土師器実測図（器台形土器）

なお、筒脚部のうち16は、円板充塡式の薄手大型品で、胎土は精選され、焼成も良好で弥生式土器の可能性もある。

低脚付坏型土器　低い脚部に浅い酒杯形の坏部を付す器形で、次の３種に細別される。

Ａ１（第44図１、４）　全体に小ぶりで、口縁端部および脚端部が肥厚してわずかに外方へ折れ曲る式のものである。内外面ともヘラ磨き調整がなされる。

Ａ２（第44図２・３、５～10、12）　器高に対し口径がＡ１よりかなり大きく、坏部が浅く内彎して、口縁端部および脚端部を丸く単純におさめるものである。規格に大小のバラエティーがあるが、坏部内面は例外なくヘラ磨き、外面はヨコナデで調整されている。

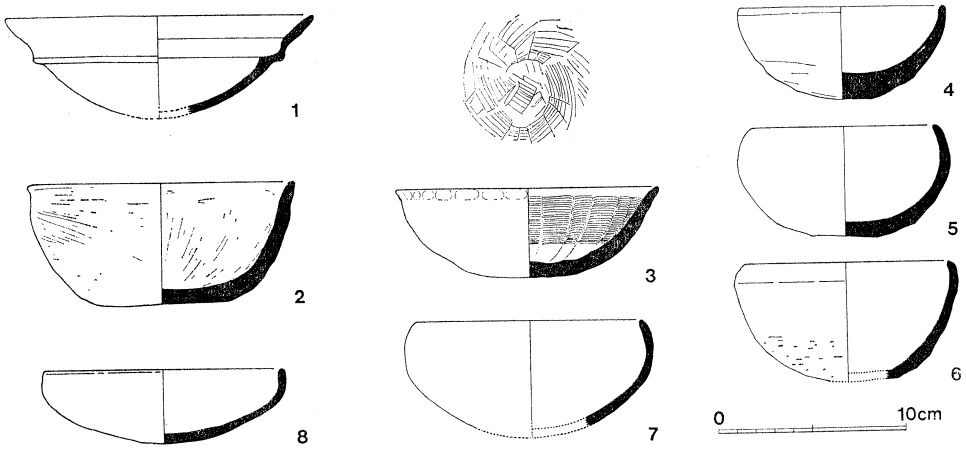
Ａ３（第44図11、13）　坏部は底が比較的深くなるもので、器高が口径をうわまわる。底面の立ち上り具合いをみると11もこの式に属するものとみられる。13は内面ヘラ磨き、外面ヨコナデで仕上げている。

器台形土器　「５」の字形の複合口縁に類似した梯形台を上下に接合した、いわゆる鼓形の器台で、弥生後期後半の器形に祖形をもち、以後、古墳時代の中頃まで山陰地方を中心に盛行する器種である。これは次の３種に分けられる。

Ａ１（第45図１～６）　規格に大小の２つがみられるが、いずれも器受部と脚台部をつなぐ筒部が太く、短かく、口径に対して器高が低くなり、口縁部、脚端は丸味をもっておわる。内面は器受部ヘラ磨き、筒部、脚台部はヘラ削りが著しい。外面はヨコナデで仕上げる。

Ａ２（第45図７）　上下をつなぐ筒部が縮まり、器受部と脚台部の外側稜線も退化して不明瞭となるものである。鼓形器台の最終末の形状をとどめるものとみられる。

鉢形土器（第46図１）　土師器の鉢はこの１個体のみ出土している。口縁部は大きく外反し、中程に段を有すもので、外面はヨコナデ、内面はヘラ磨きで仕上げられている。胎土は密で、焼成は良く黒色を呈す。第Ⅱ調査区出土。時期は古墳時代中期頃と想定される。



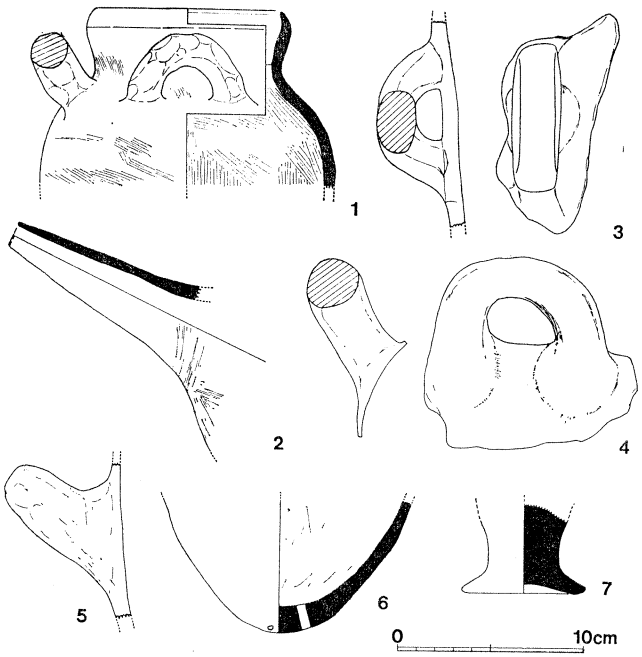
第46図　土師器実測図（鉢・坏形土器）

坏・椀（第46図２・３・４・５・６・７・８）　坏・椀は形態から４類に区分される。器高が口径の２分の１以上のものは椀、以下のものは坏として区別しているが、ここでは一括して紹介する。

A類（２）　平い底部から緩やかなカーブで、やや外反する口縁部につながる形態をもつ。口径は14.2㎝、器高は5.7㎝で比較的深い坏である。調整は内外両面とも荒い刷毛目が施され、内面はさらに放射状のヘラ磨きが一面に認められる。胎土は粗く、焼成は良く灰褐色を呈す。第Ⅰ調査区出土。

B類（３）　丸い底をもち、口縁部に向かって大きく外反する坏で、口径14.2㎝、器高47㎝を測る。外面は全面ヘラ磨き、口縁部には指先の凹凸を残している。内面には荒い刷毛によるナデが施され、７条以上の渦巻き状の文様となっている。胎土は密で、焼成は良く黄褐色を呈す。第Ⅰ調査区出土。

C類（４・５・６・７）　内彎する口縁部と丸い底をもつ。口縁部は直立するものと内彎するものの２形態が存在する。内彎の度合はさまざまで、６のように口縁部と体部との境界に僅かに稜をもつものもある。口径は10～12.5㎝、器高は５～6.3㎝を測る。内面はヨコナデおよびヘラ磨き、外面はほとんどヨコナデで底部付近にヘラ削りが認められる。胎土は密で焼成はまちまちであり、灰色および黄褐色を呈す。出土地点は５が第Ⅰ調査区、他はすべて第Ⅲ調査区である。なお、４・６の内には植物（藻か）がラセン状に遺存していた。同様のものは須恵器中の新しい時期の坏にも認められ、ともに同じ状況で放棄されたことを示している。時期は不明。



第47図　土師器実測図（把手付壷形土器）

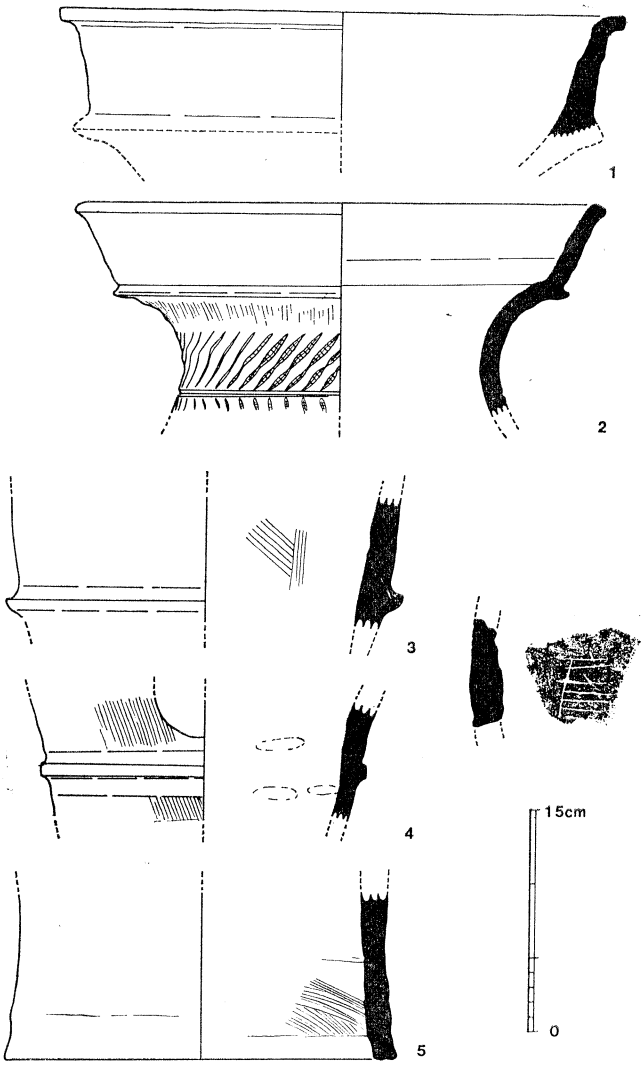
D類（８）　器肉は薄く浅い坏で、口縁部は直立する。口径13.0㎝、器高3.9㎝を測る。前者とは異なり丁寧な手法である。胎土は密で、焼成は悪く黄褐色を呈す。第Ⅰ調査区出土。時期不明。

把手付壷（第47図１）　口縁部が僅かに内彎する壺

で、肩に環状の把手をもつ。把手の作りは雑で全体に指頭圧痕を残しているが、壺自体の調整は内外とも荒い刷毛目が施され、口唇部のみナデで仕上げられている。胎土はやや粗で、焼成は良く灰褐色を呈す。口径10㎝。第Ⅰ調査区出土。

注口土器（第47図２）

注口部のみで体部を欠く。注ぎ口は直径1.4㎝、根元は約４㎝、長さ12㎝と細長いものである。調整は内外ともナデで、体部との接合部付近は刷毛目が施されている。胎土は密で、焼成は良く灰褐色を呈す。なお、接合部付近の体部の破片はヘラによる３条の羽状文が施され、これらの点より古式土師器に属すると考えられる。第Ⅰ調査区出土。



第48図　土師器・埴輪実測図

把手（第47図３・４・５）　３は把手部のみで体部を欠く。形は環状で断面は楕円形をなし、全体に丁寧に作られている。胎土はやや粗で焼成はよく、黄褐色を呈す。甑の把手か。第Ⅰ調査区出土。

４は把手付壺で体部を欠く。形は１と同様であるが大形である。調整は丁寧で全体にナデで仕上げられ、胎土は粗で、焼成は良く茶褐色を呈す。第Ⅰ調査区出土。

５はコブ状の把手で体部を欠く。全体に雑につくられ、表面には凹凸が著しい。胎土は粗く、焼成は良く灰褐色を呈す。第Ⅲ調査区出土。甑の把手か。

甑（第47図６）　丸底に５㎜大の穴が２個あり、一つは穿孔され、これから甑の底部と

考えられる。内面はヘラ削り、外面は不明。胎土はやや粗で、焼成は良く灰褐色を呈す。第Ⅲ調査区出土。

土製支脚（第47図７）　土製支脚の足部で、突起部を欠く。山陰地方では通例のものである。胎土は粗で、焼成は良く茶褐色を呈す。第Ⅰ調査区出土。

大型壺形土器（第48図１・２）　大型の壺形土器の口縁部破片で、１は口径38.1㎝、２は36.0㎝ある。ともに「５」の字形の複合口縁を有するもので、１は口縁端部が逆Ｌ字状に反り返える。２は頸部を櫛状工具による綾杉文で飾る。類例などからすると飯石郡三刀屋町松本１号墳出土の墳丘表飾用とみられる大型壺、あるいは当該時期に山陰で出土例の多い棺器としての壺棺の破片と考えられるものである。次にあげる円筒および形象埴輪同様、古墳など埋葬遺跡の立地にむかない低湿地からの出土が注意され、これらが明らかに周辺地からの流入、混入品であることの一端をうかがわせる。

埴輪（第48図３、４、５、６）　破片のみ８片が第Ⅲ調査区より出土している。３・４は円筒埴輪のタガ部である。径は３が25㎝、４が21㎝であり、４の場合はその上に円形の透しをもつ。タガの断面は三角形(3)と台形状(4)となっている。外面は刷毛目、内面は刷毛目およびナデで仕上げ、タガ付近には指頭圧痕が認められる。胎土は３がやや粗、４が密で焼成は良く、色調は赤褐色、灰色を呈す。

５は円筒埴輪の底部で径26㎝を測る。表面は風化が著しく、調整は不明。内面は裾がナデ、その上方は斜方向の刷毛目を施す。胎土はやや粗で焼成は良く、黄褐色を呈す。

６は表面に櫛による６本以上の沈線が認められ、形象埴輪の破片と考えられる。調整等は風化が著しく不明。胎土はやや密で焼成は良く赤褐色を呈す。（前島己基・西尾克己）

表5　土師器一覧表

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考	出土地点
壷形土器	A1	38—1	口径 22.2	頸部は長く直立するほどである。口縁部は段をもうけ、直線的に外傾する。口唇に凹線が入る。	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部内面ヨコナデ、指頭圧痕。同外面は細い刷毛目の後ヨコナデ。頸部以下内面ヘラ削り		口縁部。頸部に布目をのこす。	ⅠE12—3
		38—2	口径 19.0	頸部がやや長く、直立する格好となる。上端で急激に外反し、直線的で傾きの大きい口縁がつく。	口縁部内外面はヨコナデ。頸部内面はナデ、以下はヘラ削り		口縁から頸部にかけて。	ⅠF12—2
		38—3	口径 21.2	頸部は直立しながら、上端で外反する。口縁は直立ぎみにゆるやかな立ち上がりをみせる。	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部内面はヨコナデ、指頭圧痕、頸部以下は横方向のヘラ削り。		口縁部。	ⅠE14—1
		38—4		頸部はゆるやかにカーブを描く。			頸部。	ⅢF12
		38—5	口径 18.5	頸部はゆるやかに屈曲。口縁は段をなして、外傾する。	口縁部は内外面ともヨコナデ。		口縁部。表面に鉄分が付着。	ⅠE11—4
甕形土器	A1	38—6	口径 17.1 胴部最大径 18.8	頸部は「く」の字状に屈曲。口縁は段をつけて、凹凸しながら外傾する。胴は球形に近い。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部内面はヘラ削り。同外面は文様以下に横不整方向の刷毛目あり。	肩部に17条以上の波状文あり。（櫛状工具）	下腹部を欠く。	ⅢE12—1
		38—7	口径 16.4	器肉は薄手。頸部は強く屈曲し、直線的な口縁がつく。	口縁部内外面ともヨコナデ。頸内面は指頭痕、以下ヨコヘラ削り。胴外面は、縦刷毛目。	肩に6条からなる波状文あり。（櫛状工具）	口縁部から肩にかけて。	ⅢC12
		38—8	口径 14.5	器肉は薄手。頸部は「く」の字状に屈曲。段はやや不明瞭となるがほぼ直立する口縁をもつ。	口縁部の内外面はヨコナデ。肩の内面は横方向のヘラ削り。肩外面ヨコナデか。	肩にヘラ工具による一条の沈線と右下りの貝殻刺突文あり。	口縁部から肩にかけて。	ⅢF14—3
		38—9	口径 16.4	頸部は「く」の字状に屈曲。肩は張らず、直線的に下向する。口縁は段をなし、直線的に外傾しておる。	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部の外面は刷毛目調整。同内面は右上りのヘラ削り。	肩部に5条の沈線が2段に走り、その間に貝殻刺突文が入る。	同上。	ⅠG11—1
		38—10	口径 15.8	器肉は薄手。直線的で外傾する口縁がつく。	口縁内外面ともヨコナデ。肩内面にヘラ削りあり。	肩に10条以上の平行沈線あり。	口縁部。	ⅠD11—3
壷形土器	A1	38—11	口径 17.4	口縁は直線的にゆるく外反し、端部に稜面を残こして終える。器肉はやや厚手。	口縁部内面は不定方向、外面は縦方向の刷毛目のちナデ調整。頸部内面に指頭圧痕あり。		口縁残存。	ⅢD14—1

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考	出土地点
甕形土器	A1	38—12	口径 16.6	頸部は「く」の字状に屈曲。口縁は段をなして、ほぼ直立する。	口縁部内外面ともヨコナデ。内面頸部以下にヘラ削りあり。	肩に4条以上の平行沈線あり。	口縁部のみ。	ⅢD11—12
		38—13	口径 16.4	頸部は「く」の字状に屈曲。口縁は直線的に立ち上がるが、端部で外縁が脹む。	口縁部内面ヨコナデ。肩部内面に横方向のヘラ削り。		口縁から肩にかけて風化すすむ。	ⅠG11—1
		38—14	口径 3.6	脚端は低く外方へ張る。	調整不明。		脚部のみ。風化著しい。	ⅠF11—1
		39—1	口径 13.8	器肉は薄手。頸部は強く折り曲げられ、明瞭な段に直立ぎみの口縁がつく。口唇は外縁が脹む。	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部内面にヘラ削り。		口縁部のみ。	ⅠG14—3
		39—2	口径 13.4	器肉は比較的厚手。頸部は「く」の字状に屈折。口縁は段をなし短かく、ほぼ垂直的に立ち上がる。	口縁部内外面ともヨコナデ。肩外面はヨコナデ。同内面はヘラ削り。	肩に波状文があるか。	表面にスス付着。	ⅢD13
		39—3	口径 11.4	頸部は「く」の字状に屈曲。口縁部は段をつけてほぼ直立し、口唇を丸くおさめる。	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部以下内面は横方向のヘラ削り。		口縁部。表面にスス付着。	ⅠF12—4
		39—4	口径 16.4	頸部は「く」の字に屈折。口縁は明瞭な段をつくり、外傾ぎみに立ち上がる。	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部内面に横方向。削りあり。		口縁部のみ。	ⅢF14—3
		39—5	口径 16.4	頸部は「く」の字状に屈折。口縁は段をつけ、僅かに屈曲しながら外傾する。	口縁部内外面ともヨコナデ。		口縁部。	ⅡD11—24
		39—6	口径 13.4	頸部は「く」の字に屈折。口縁は直立ぎみに立ちあがる。薄手。	口縁部内外面ともヨコナデ。		口縁部のみ。風化著しい。	ⅠE13—4
		39—7	口径 19.0	頸部は「く」の字状に屈曲。口縁は段をなして直線的に立ち上がる。	口縁部内外面はヨコナデ。肩以下内面はヘラ削り。		口縁部。	ⅢD13—4
		39—8	口径 14.4	「く」の字の頸部に外反する口縁部がつく。比較的薄手。	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部以下内面は指頭痕、ヘラ削りあり。		口縁部。	ⅠE11
		39—9	口径 16.4	頸部の反転は比較的鋭く、「く」の字をなす。口縁部なかほどに段がつき、複合化をみせる。	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部以下内面は横方向のヘラ削り。同外面は細い縦刷毛目。		口縁部のみ。	ⅢF10—1
		39—10	口径 12.4	複合化した口縁部の立ち上がりは短かく、しかも内傾する。口唇が丸脹れする。	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部以下内面はヘラ削り、肩部外面は横方向の刷毛目。		口縁部。	ⅠG13—4

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考	出土地点
甕型器	B1	39—11	口径 18.0	口縁部は段をなさず、頸部から曲線を描いて立ち上がる。	口縁部内外面はヨコナデ。		口縁部。	ⅠF12—3
壷形土器	A2	39—12	口径 14.8	口縁部はほぼ直線的に外傾する。	内外面はヨコナデ。		口縁部。	ⅢF12—2
甕形土器	B1	39—13	口径 18.0	頸部はゆるやかに反転。口縁複合化の稜線が不明瞭となる。器肉は比較的厚手。	口縁部内外面ともにヨコナデ。肩部内面はスズリを施す。同外面は刷毛目にナデを加える。	口縁から頸部にかけて、外面にはヘラ磨き状の縦筋が走る。暗文か。	口縁部のみ。	ⅠF12—2
		39—14	口径 15.0	頸部は「く」の字状に屈折。口縁中ほどに複合化のふくらみをのこす。	口縁部内外面ともヨコナデか。肩内面はヘラ削り、のちナデか。同外面はナデか。		肩から口縁部にかけて。	Ⅲ
		39—15	口径 18.0	頸部は「く」の字状に屈折。口縁はゆるやかな「S」字を描く。	内外面ともヨコナデ。		口縁部。	ⅢE—10
		39—16	口径 16.8	器肉は厚手。短い口縁は反転角度が比較的大きい。口唇は鈍く尖る。	口縁部内外面はヨコナデ。肩内面はヘラ削り。同外面は刷毛目。		口縁部から肩にかけて。	ⅢD—14
		39—17	口径 13.6	頸部は「く」の字状に屈折。口縁中ほどに複合化のふくらみをもつ。	口縁部内外面ともヨコナデ。肩内面は横方向のヘラ削り。同外面は刷毛目調整。		肩から口縁にかけて。表面一部に黒斑あり。	ⅠD—13
壷形土器	B1	39—19	口径 15.6	口縁は中ほどまで直立するが、端部に至って外反する。胴部は球形か。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面は刷毛目調整。同内面は横方向のヘラ削り。肩部内面に接合部痕を明瞭に残す。指頭圧痕あり。		胴部から口縁部にかけて残存。外表面にスス付着。	ⅢE10—3
		39—20	口径 15.2	口縁は直立ぎみに外反する。	口縁部内外ヨコナデ、以下ヘラ削り。		肩から口縁にかけて残存。	ⅢF—11
甕形土器	B1	40—1	口径 18.5	口唇部はフラットで、内側に段差をもうけ脹む。頸部は「く」の字に屈折。	内外面はヨコナデ。		口縁部のみ。	ⅠF13—2
		40—2	口径 17.4	口唇はフラット面をつくり、内側に厚く拡がる。口縁は直線的に外傾する。	口縁部内外面をヨコナデ。		口縁部のみ。	ⅠG13—1
		40—3	口径 16.4	頸部は「く」の字状に屈折。口縁部は内湾ぎみ。	内外面はヨコナデか。		口縁部のみ。	ⅠD14—2

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考	出土地点
甕形土器	B1	40—4	口径 12.0	口縁部は内傾ぎみの頸部は「く」の字をなし、口縁部が直線的に外傾する。	口縁部内外面はヨコナデ。肩内面は横方向のヘラ削り。		肩から口縁部にかけて残存。口縁内面に布目跡あり。	ⅠF11
	B2	40—5	口径 12.4	口唇に浅い沈線が走る。頸部は「く」の字状に屈折。口縁はゆるく凹凸する。肩はなで肩。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部か内面は右上りのヘラ削り。同外面は刷毛目。		胴部ら口縁部にかけて残存。	ⅠD12—2
		40—6	口径 13.4	口唇に凹線が入る。頸部は「く」の字状に屈折。口縁部は僅かに凹凸する。なで肩。	口縁内外面はヨコナデ。肩内面はヘラ削りのあとタテナデ。同外面は刷毛目調整。		口縁部から肩にかけて残存。	ⅠG13—3
		40—7	口径 17.2	口唇に凹線が入る。頸部は「く」の字状に屈折。口縁部は僅かに凸凹する。なで肩。	口縁部内外面はヨコナデ。肩部外面は丁寧なナデ仕上げ。同内面は左上りのヘラ削り。		肩から口縁部にかけて残存。	ⅠF13—2
		40—8	口径 15.5	口唇は中央で僅かに凹む。頸部は「く」の字に屈折。口縁部は直線的に外傾する。	口縁部の内外面ヨコナデ。肩内面はヘラ削り。同外面は縦、横方向のハケ目。		肩から口縁部にかけて残存。	ⅠF13—2
		40—9	口径 14.8	口唇に沈線あり。頸部は「く」の字状に屈折し、直線的に外傾する口縁がつく。肩はなだらかなカーブを描く。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内面は横方向のヘラ削り。同外面は荒い刷毛目。		同上。表面にススが付着。	ⅠG13—1
		40—10	口径 16.7	口唇部は平坦で、内側に張りだす。頸部は「く」の字をなし、口縁部は直線的に外傾する。	口縁内外面ともヨコナデ。		口縁部のみ。	ⅠG14—1
	B3	40—11	口径 13.0	頸部は「く」の字に屈折。口縁は直線的に外傾する。	口縁部内外面はヨコナデか。肩内面は横方向のヘラ削り。同外面は刷毛目か。		肩から口縁部にかけて残存。	ⅠG13—3
		40—12	口径 14.2	頸部は「く」の字に屈折。口縁は部直線的に外傾する。	口縁内外面は刷毛目。肩部外面はタテ方向の刷毛目。同内面は横方向のヘラ削り。		肩から口縁部にかけて残存。	ⅠG13—2
		40—13	口径 13.4	頸部は鋭角に屈折し、直線的な口縁部がつく。	口縁内外面はヨコナデ。内面下方にヘラ削り。			ⅠF14—4
	B4	40—14	口径 14.6	方形口唇の頸部器肉が厚手。	口縁内外面はヨコナデか。肩内面はヘラ削り。		口縁部から肩にかけて現存。	ⅠD14—2
		40—15	口径 14.8	頸部は「く」の字状に屈曲。	口縁部内外面はヨコナデ。肩外面はタテ方向の刷毛目。同内面はヘラ削り。		肩から口縁部にかけて現存。	ⅠF14—1
		40—16	口径 14.8	頸部は「く」の字に屈折。短い口縁は僅かに屈曲しながら外傾する。	口縁部内外面ともヨコナデ。肩内面は横方向の削り。同外面は横方向の刷毛目。		肩から口縁にかけて現存。	ⅢF—10

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考	出土地点
甕形土器	B5	40—17	口径 16.0	頸部は「く」の字をなし、口縁部が短かく外反する。肩はゆるやかな球面をなす。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面はタテ方向のヘラ削り。同外面はハケ目のあとナデ仕上げ。			ⅠF14—2
	G1	41—1	口径 18.0	頸部は「く」の字に屈折。口縁部は直線的に外傾する。	口縁部内外面はヨコナデ。肩外面はタテ方向の刷毛目。同内面は削りか。		口縁部のみ。	ⅠF14—2
		41—2	口径 17.2	口縁部は直線的に外傾する。	器表面は酷く磨耗し調整不明。		口縁部のみ。	Ⅰ
		41—3	口径 12.0	頸部はゆるやかな「く」の字をなす。口縁部は短い。	口縁部内外面ヨコナデ。肩部外面はナデ仕上げ。同内面は横方向の削り。		同上。	ⅢE16
	G2	41—4	口径 20.2	器肉が厚く、短い口縁。頸部は「く」の字に屈曲。深く内湾し、口唇は内傾。	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部外面ヨコナデ。同内面は横方向のヘラ削り。		口縁部。表面全体にスス付着する。	ⅢD10
		41—5	口径 24.7	短い口縁は鋭く外反する。肩は直線的に下向する。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部内面はほぼ縦方向のヘラ削り。同外面は縦方向の刷毛目。		胴部から肩にかけて現存。表面にスス付着。内面はコゲつく	ⅢD2—3
		41—6	口径 30.6	短い口縁部は大きく外反する。胴部は肩が張らず、そのまま下向する。	口縁内外面はヨコナデ。胴部外面は不定方向のナデ。同内面は横、縦のヘラ削り。		肩から口縁部にかけて。	ⅢE11—2
		41—7	口径 22.4	口縁部、頸部、胴にかけてゆるやかなカーブを描く。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内面ほぼ縦方向の削り。同外面縦方向の刷毛目。		胴部から口縁にかけて現存。外表面にスス付着。	ⅢD10—1
		41—8	口径 25.0	短い口縁部は外に大きく開くが、端部をやや内傾ぎみ。	同上。胴部外面は13条以上の細い刷毛目。		口縁部から肩にかけて現存。	ⅢE11
		41—9	口径 19.6	口縁部は外反する。肩は張り出ず。	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部外面はハケ目調整。同内面は右上り方向のヘラ削リ。		口縁部残存。	ⅡD11—3
		41—10	口径 21.6	口縁部はゆるやかに外反する。肩はほぼ直線的。	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部内面は不定方向のヘラ削り。同外面は縦方向の刷毛目。		同上。	Ⅱ
		41—11	口径 21.6	口縁部は短かく、大きく外反する。器肉はやや厚手。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部内面は縦方向のヘラ削り。同外面は縦方向の荒い刷毛目。	肩部にはヘラ書きによる一条の沈線が入る。	胴部から口縁部にかけて現存。外表面にスス付着。	ⅢG13—3
		41—12	口径 21.4	短い口縁部は、大きく外反する。肩の形状は同上。	同上。		同上。	ⅢE10

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考	出土地点
小型壷	A	42—1	口径 9.6 胴部最大径 9.6 器高 8.7	指頭圧による成形のあとが窺える。	口縁部内外面ともヨコナデ。		完形。	I D11—1
		42—2	口径 7.0 胴部最大径 8.8 器高 8.2	同上。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内面はヘラ削り。同外面は刷毛目の後ナデ。底部を削る。		完形。	I D11
		42—3	口径 9.2 胴部最大径 9.6 器高 9.0	全体を手捏成形。表面に指頭圧多く残る。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面荒い刷毛目調整。同内面はヘラ削り。		完形。	I F13—3
		42—4	口径 7.8 胴部最大径 8.8 器高 8.4	全体に手捏成形。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内面はヘラ削り。同外面はヘラ削り。		完形。底部は焼成後に穿孔。	I E12—4
		42—5	口径 8.0 胴部最大径 8.5 器高 8.5	全体の形状において若干の起伏がある。	口縁内外面、胴部外面はナデ仕上げか。胴部内面ヘラ削り。頸部に指圧整形。		底欠を一部部く。	I E12—1
		42—6	胴部最大径 9.7		外面は粗い刷毛ナデ、ヨコナデ。内面は上部がヨコナデ、下方が横方向のヘラ削り。		口部縁、底部を欠く。	I D12
		42—7	口径 9.3 最大径 10.4 器高 10.7	丸底	外面一口縁部ヨコナデ、以下は刷毛目。内面の口縁部と肩はナデ。以下は削り放し、胴部に指頭圧痕。			I E12—4
		42—8	胴部最大径 10.2	胴がやや張った楕円形を呈す。	胴部外面は縦、横、斜方向の粗い刷毛目。同内面はヘラ削り。		口縁部を欠く。	I E12—3
		42—9	胴部最大径 12.5	同上。	胴部内面はヘラ削り。同外面は荒い刷毛目調整。		口縁部を欠く。器表に炭化物付着。	I D11—4
		42—10	口径 9.8 最大径 9.2 器高 8.0		外面と内面の口縁部がヨコナデ、内部は上部は削り放し、下部は削りの後ナデ、及び磨き。		胴部に焼成後の不整形な孔あり、内面に布跡あり	I E13—4
	B	42—11	口径 6.5 胴部最大径 6.7 器高 6.4	口縁部下方にかすかな稜あり。胴部以下に指頭圧痕残る。	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内面横方向の削り。同外面は刷毛目調整。		完形。	I F13—4
		42—12	胴部最大径 7.3	体部は楕円。	外面の口縁部と肩部はヘラ磨き、胴以下刷毛目及びナデ。 内面の口縁刷毛目からヨコなで。上部は刷毛目からヨコナデ。下部は削り後なで。		底部にヘラ状工具による×印あり。小型丸底壷	I G13—2

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考	出土地点
	B	42—13	胴部最大径 7.9	頸部に沈線あり。	胴部外面はナデ調整。底部をヘラ削り。同内面は横方向のヘラ削り。		口縁部を欠く。	ⅠF14—1
		42—14	口径 7.3 胴部最大径 7.0 器高 6.0	胴は球形に近く、比較的丁寧な成形の痕を残す。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部内外面は指頭圧成形の後、ナデによる仕上げ。		口縁部をやや欠く。	ⅠE11—1
		42—15	胴部最大径 6.9		胴部内面は指頭圧痕とナデ調整。同外面はナデ調整と荒い刷毛目。		同上。	ⅢE11
		42—16	胴部最大径 6.7		胴部外面は荒い刷毛目調整。同内面はヨコナデ。		口縁部、底部を欠く。内部に植物センイがラセン状で遺残。	ⅠD12
手捏土器		42—17	器高 3.2	手捏、指頭圧による成形。	内面はナデ。		完形。	ⅢG13—1
		42—18	器高 3.4	手捏、指頭による成形。丁寧な仕上げ。	内外ナデ調整。		完形。	ⅠG13—1
		42—19	器高 4.4	手捏、指頭圧による成形。	風化著しく調整不明。		ほぼ完形。	Ⅲ
高坏形土器	A	43—1	口径 18.4	フラットな底部に側縁が外反して立ち上がる。両者の界線が明瞭で、しっかりとした密帯がつく。	外面はヨコヘラナデ。内面はヨコナデ、底部をヘラ状工具にて中央より放射状にナデあげる。		坏部。	ⅠF14—3
		43—2	口径 17.1	底部内面は平たい。側縁は外反りし、大きく開く。	外面はヨコ、タテのヘラ磨き。内側面はタテのヘラ磨き上げ。底面はヨコヘラ磨き。		坏部。	ⅢF11—3
		43—3	口径 19.0	側縁は底部との界線をもちながら外反りぎみに起きる。	外面はヨコナデ。口唇部内面ヨコナデ。内面はヨコナデののち、底部より上方に向かい暗文を入れる。	滑沢のある細い暗文を施こす。（内面）	坏部。	ⅠE11
	B_1	43—4	口径 15.6	側縁は直線的に外傾し、端部で外反しておわる。	内面はヨコヘラ磨き。外面はヨコナデ。		坏部。胎土精良。	ⅠF11—3
		43—5	口径 15.4	形状は同上。	内面はヘラ磨キ。外面は口唇近くをヨコハケナデ。		坏部。	ⅠG12—3
	B_3	43—6	口径 17.2	坏部断面はゆるやかな曲線を描く。	坏部内面はヨコナデ。口唇部付近を粗い櫛状工具によってナデる。同外面はヨコナデの後、粗いクシ目調整。		坏部。胎土精良。	ⅠE11—4
	B_2	43—7	口径 17.3	比較的器肉が薄く底が浅い。坏は大きく開く。	外面は縦のヘラナデ、口縁部をヨコナデにする。内面はヨコのヘラ磨き。		坏部。	ⅠF13—4

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考	出土地点
高坏形土器	B2	43—8	口径 16.6	器肉が厚く底が浅い。端部は外反しておわる。	坏部内面はクシ状工具によるナデつけ。同外面も同様なナデ上げ。		坏部。	ⅢD10—3
		43—9	口径 15.8	器肉が厚く、坏部はやや直線的な広がりをみせる。	内面はヨコナデ。外面はヘラナデ。		坏部。	ⅠE13—4
	B3	43—10	口径 14.4	全体を丸くおさめ、端部が直立ぎみにおわる。	坏部内面はヨコナデ。同外面はヨコナデのち、粗い櫛状工具で押し撫でつける。		坏部。胎土精良。	ⅡF3—4
		43—11			坏部と筒脚部接合したのち外面に刷毛目調整を行う。筒脚部内面にはしぼり痕を残す。		口縁部を欠く	ⅡF14—1
	B2	43—12	口径 15.6	坏部全形は大きく弧を描くが、口唇でやや外反りする。	器面剝離し、調整不明。		坏部。	ⅠD11—1
	B3	43—13	口径 16.2 底径 8.9 器高 11.5	坏部は浅く、断面ゆるやかな弧を描く。脚は「く」の字状の裾広がりをみせる。	口縁部内面はヨコナデ。同外面はヘラナデと刷毛目。脚部内面ヘラ削り。同外面ヘラナデ。		口縁および脚の一部を欠く。	ⅢG14—2
		43—14	底径 12.6	脚部はスカート状に末広がりする。	外面はヨコナデ。内面はヨコヘラ削り、ヨコナデ、指頭圧痕あり。	一つの小孔あり。（3方透しか）。	脚部破片。	ⅠF12—2
		43—15	底径 12.0	薄手の器肉で、脚高が比較的ある。筒部の空間を広くもつ。	外面はヨコナデ、粗い刷毛目調整。内面上方はヘラ削り。同下方は粗い刷毛目調整。		脚部。	ⅠG12—4
		43—16		器肉の薄い、大型品。筒部の空間が広い。	器表面は風化著しく、調整等不明。口縁部と筒脚部を各々別につくり、口縁部を脚部にのせ接合する。		筒脚部。	ⅠF11—1
		43—17	底径 15.6	直線的な筒部に比し、脚裾は大きく広がる。器肉を薄手につくる。	口縁部内面はヘラ磨きか。脚部外面はタテヘラ磨き。同内面はヘラ削り、一部にヨコナデか。		筒脚部。	ⅠD13—2
		43—18	底径 10.1	脚裾は平たくのびる。	器面風化調整不明。内面は上からヘラヨコナデ、しぼり目、刷毛目調整。		脚部。	ⅠG13—2
		43—19	底径 10.4	筒部はほぼ直立するが、下端で急激に広く。	外面はヘラナデ、ヨコナデ。内面はヨコヘラ削り。		脚部のみ。	ⅢF11—4
		43—20	底径 10.3	脚部裾を急激に大きく広げる。	口縁部内面はヘラ磨き。同外面はヘラナデあげ。脚部外面はヨコナデか。同内面はヨコヘラ削り。一部粗いヨコナデ。		脚部。筒脚部内面から脚部外面にかけてスス付着。胎土精良。	ⅢG12—4

器種（分類）	挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考	出土地点
高坏形土器	43—21	底径 9.3	脚裾の形状は同上だが、器肉が比較的厚手。	外面はヘラナデ、指頭圧痕。内面は上部がしぼり目、下方は刷毛目調整。		脚部。透孔は貫通していない。	ⅠF13—1
	43—22	底径 9.9	脚断面は「く」の字に折れる。	脚部外面はヨコナデ。接合部は刷毛目調整。内面は下方を刷毛目調整。しぼり目痕。		坏部口縁を欠く。脚端部内外面に黒斑あり。	ⅢF11—2
	43—23	底径 10.3	脚裾は「く」の字をなして広がる。	外面はヘラタテナデ(磨き)か内面上部はヨコヘラケズリ、同下部はハケヨコナデ。		脚部。	ⅠD11
	43—24	底径 10.0	脚部断面は「く」の字をなし、裾が急激に広がる。	脚部外面は、タテヘラナデ、ヨコナデ。同内面はヘラ削り、ヨコナデ。		筒脚部。	Ⅰ
	43—25	底径 9.8	筒部と脚部との境を内外から指頭にてつまみ、末広がりに折る。	外面は、タテヘラナデとヨコナデ。内面はヘラ削りと粗いナデ。		脚部。	ⅢF12—1
	43—26	底径 11.4	脚部裾が急激に折れ、平たく延びる。	外面はタテのヘラナデ、ヨコナデ。内面もヨコナデ、ヘラナデ。		脚部。	ⅠD11
	43—27	底径 12.3	器肉が厚く、脚は「ハ」の字に大きく開く。	器面調整は不明。		脚部。	Ⅱ
低脚付坏	44—1	口径 11.4 底径 6.0 器高 4.5	口唇部には平坦面をつくる。	坏部内面はヨコヘラ磨き。同外面はヨコナデ。脚部内外面はヨコナデ。		完形。	ⅠE11
	44—2	底径 3.6 口径 12.5 器高 4.2	坏部は底が浅く、口径を広く拡げる。脚部は短く、厚手につくる。	坏部内面は磨きがかかる。同外面および脚部内外面はヨコナデか。		ほぼ完形。	
	44—3	口径 10.8	坏部にややひずみあり。	坏部内面はナデののちヘラ磨きか。同外面はナデアゲののちヨコナデか。		脚部を欠く。	ⅢC12
	44—4	底径 6.6	脚は低く、「ハ」の字に広がる。	外面はヨコナデ。内面もヨコナデ。坏底は磨きか。		脚部のみ。	ⅠD12—2
	44—5						ⅠF11
	44—6	底径 5.6	脚端を広げる。	全面ナデか。		同上。風化すすむ。	ⅠF11—3
	44—7	底径 4.2	坏部の大きさに比し、脚部をかなり小さく拵らえる。	調整不明。		脚部のみ。風化著しい。	
	44—8	底径 6.8	脚は端部を強く折り返し、裾を広げる。	脚部内外面ともヨコナデ。坏内底はヘラ磨き。		脚部。	ⅠE13—2

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考	出土地点
低脚付坏		44—9	底径 6.2	「ハ」の字状の小脚。	坏部内外面は磨きがかかる。脚部内外面はヨコナデ。		脚部のみ。	ⅢE13
		44—10	底径 8.0	脚は低く末を広く拡げる。	坏部内面は磨き。脚部内外面はヨコナデ。		脚部のみ。黒斑あり。	ⅠG13—2
		44—11	底径 10.7	脚高を比較的高くとる	内外面ともヨコナデ。		脚部のみ。	ⅠE11
		44—12	底径 5.2	脚端を平たく広げる。	坏部外内面は磨きか。脚部内外面はヨコナデ。		脚部のみ。	ⅢD12
		44—13	口径 9.4	坏部は底を比較的深くとり、断面逆「ハ」の字状につくる。	坏部内面は磨き。同外面および脚部はナデ。		ほぼ完形。黒斑あり。	ⅢD14
器台形土器		45—1	口径 22.3	受部外面は僅かな脹みの観がある。	器表面は風化著しく、調整等不明。		器受部。	ⅠD12—2
		45—2	口径 24.0	比較的大型品で、薄手の受部は大きく開く。	外面は櫛状工具でヨコに調整したのち、ヨコナデで仕上げる。内面はヘラ磨き。		器受部。	ⅠG13—2
		45—3	底径 19.1	台部の開きが比較的しまる。	外面ヨコナデ。内面はヘラ削り。受部内面はヘラ磨き。		脚台部。	ⅠG14—2
		45—4	底径 22.6	受部はほぼ直線的に開き、端部でさらに広がる。	器面剝離著しく、調整不明。		脚受部。	ⅠD12
		45—5		器受部と脚台部をつなぐ筒部内面に僅かな平面がみられる。	器受部内面、外面ナデ仕上げ。脚台部内面丁寧なヘラ削り。		筒部。	ⅡF14—4
		45—6	底径 15.9	器肉が薄手で、筒部断面はほぼV字形をなす。	外面はナデ仕上げ。内面脚端部はナデ。それより上は丁寧なヘラ削り。		脚台部。	ⅡG12—4
		45—7	底径 14.3	脚台部は「ハ」の字状に広がる。	外面はヨコナデ仕上げ。内面は、ヘラ削り、ヨコナデ、ナデ仕上げ。		脚台部。	ⅠE11—4
鉢		46—1	口径 16.6	坏の中途に段を有す	内面は横方向のヘラ磨き。外面はヨコナデ仕上げか。		胎土、密。	ⅡF14—3
椀・坏	A	46—2	口径 14.2 器高 5.7		外面は荒い刷毛目調整。内面は放射状のヘラ磨きが一面にあり。口唇部は荒い刷毛目。		ほぼ完形。坏。	ⅠF12—2
	B	46—3	口径 14.2 器高 4.7	口唇部を指で軽くつまむ。	外面はヘラ磨き。	内面には、7条以上の櫛状工具による渦巻様の文様。	ほぼ完成。	ⅠF12—4

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考	出土地点
椀・坏	C1	46—4	口径 11.0 器高 5.0	器肉は厚手につくられる。口唇を丸くおさめる。	内面は磨き外面上部はナデ、同下部はヘラ削り。		坏	ⅢD11
	C2	46—5	口径 1.0 器高 5.8	端部は内湾し、全体を丸め込むようにつくる。	外面はヨコナデおよびナデ。		完形。内部に植物（藻か）がらせん状に沈む。椀	ⅠD12
		46—6	口径 10.7 器高 6.3	深く内湾する 口縁部と体部の境に稜をもつ。	内面と口縁外面はヨコナデ。 底部ヘラ削り。	文様なし。	底部に植物（藻か）がらせん状に沈む。底部の一部を欠く。椀	ⅢG14—2
		46—7	口径 12.2	深く内湾し、口唇は内傾ぎみ。	器表面は磨耗し、調整不明。		底部を欠く椀	ⅢE11
	D	46—8	口径 13.0 器高 3.9	全体を平たくつくり、端部がほぼ直立する。薄手			風化著しい坏	ⅠF12—4
その他の土師器		47—1	口径10.0	口縁部内湾する。	内面、外面荒、刷毛目。		把手付壷	ⅠD12—3
		47—2		注口部は12cmを測り細長い。	注口部は内面外面ナデ。	肩部に羽状文あり。	注口土器	ⅠG13—2
		47—3		環状の把手	全体に丁寧に入る。		把手（甑か）	ⅠE12—1
		47—4		〃	〃		把手付壷か	ⅠD14
		47—5		コブ状の把手	全体に雑につくる。		把手（甑か）	Ⅲ
		47—6		底部に5mm大の孔あり。	内面ヘラ削り。		甑の底部	Ⅱ
		47—7	底径 13.8		表面調整は不明。		脚部下端。	ⅠE11—4
大型壷		48—1	口径 38.4	口縁は端部で急激に外反りする。かなりの大形品で、器肉も厚手。	調整不明。		口縁部	ⅡF14—1
		48—2	口径 36.0	器肉の厚手な大型品。頸部はゆるやかに反転。口縁は角度をかえて直線的に外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面はヨコナデ。同外面は刷毛目にヨコナデを加える。	頸部に櫛による稜杉文あり。	口縁部から頸にかけて。	ⅠD11
埴輪		48—3	最大径 26.0	逆「ハ」の字状にひらく。	内面荒い刷毛目。			ⅢC12
		48—4	最大径 23.0	逆「ハ」の字状にひらく。	外面は刷毛目、タガの部分はヨコナデ。内面、粘土を指でならす		円い透孔	ⅢF13—2
		48—5	最大径 26.4	裾にむかいやや外にひらく。	内面、刷毛目。			ⅢE14—1
		48—6				6本以上の沈線による文様あり。	形象埴輪6×6cmの破片	ⅢH11

4 須　恵　器

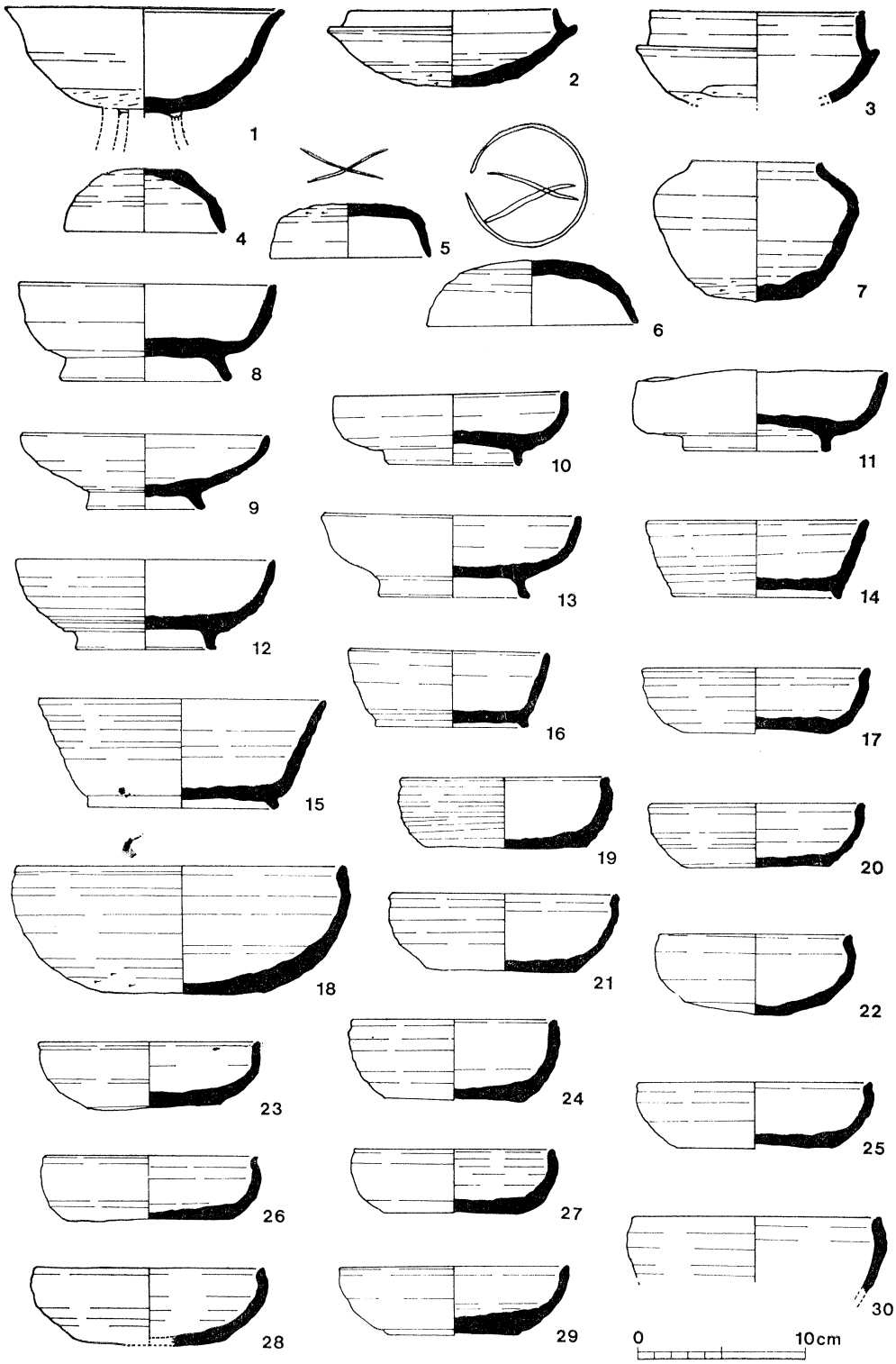
須恵器は第Ⅲ調査区の南西拡張区を中心に第Ⅲ調査区から第Ⅱ調査区にかけて出土しているが、全体的に数量はそう多くない。また時期的には古墳時代のものと飛鳥・白鳳期以降のいわゆる歴史時代のものを含むが、古墳時代のものは、各期数個体づつが出土しているにすぎない。ただし、注意すべきは、大半が完形を保って出土していることで、これは他の器物より硬質であることにもよるが、この時期あるいは地形が安定し、この地が実際に生活空間として利用されていたことを窺わせる。

まず、古墳時代の須恵器はごく少量であるが、山陰第Ⅰ期から第Ⅳ期のものがある。(註1) 第49図に示す坏3は、立ちあがりが直立し、2段口唇をもつこと、1の高坏は口唇部が2段であり、短脚であると思われることなどから、ともに第Ⅰ期（5世紀後半）に当てることができる。坏2は内傾した低い立ちあがりなど第Ⅳ期（六世紀後半）の特徴をもつ。4は蓋であるが、稜線は全く痕跡を残さず天井部のヘラ削りは施されないことから、第Ⅳ期（7世期前半）でも新しく位置するのであろう。7の短頸壺と5、6の蓋は時期判定の明確な資料を持ち合わせないが、第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけてのものと思われる。

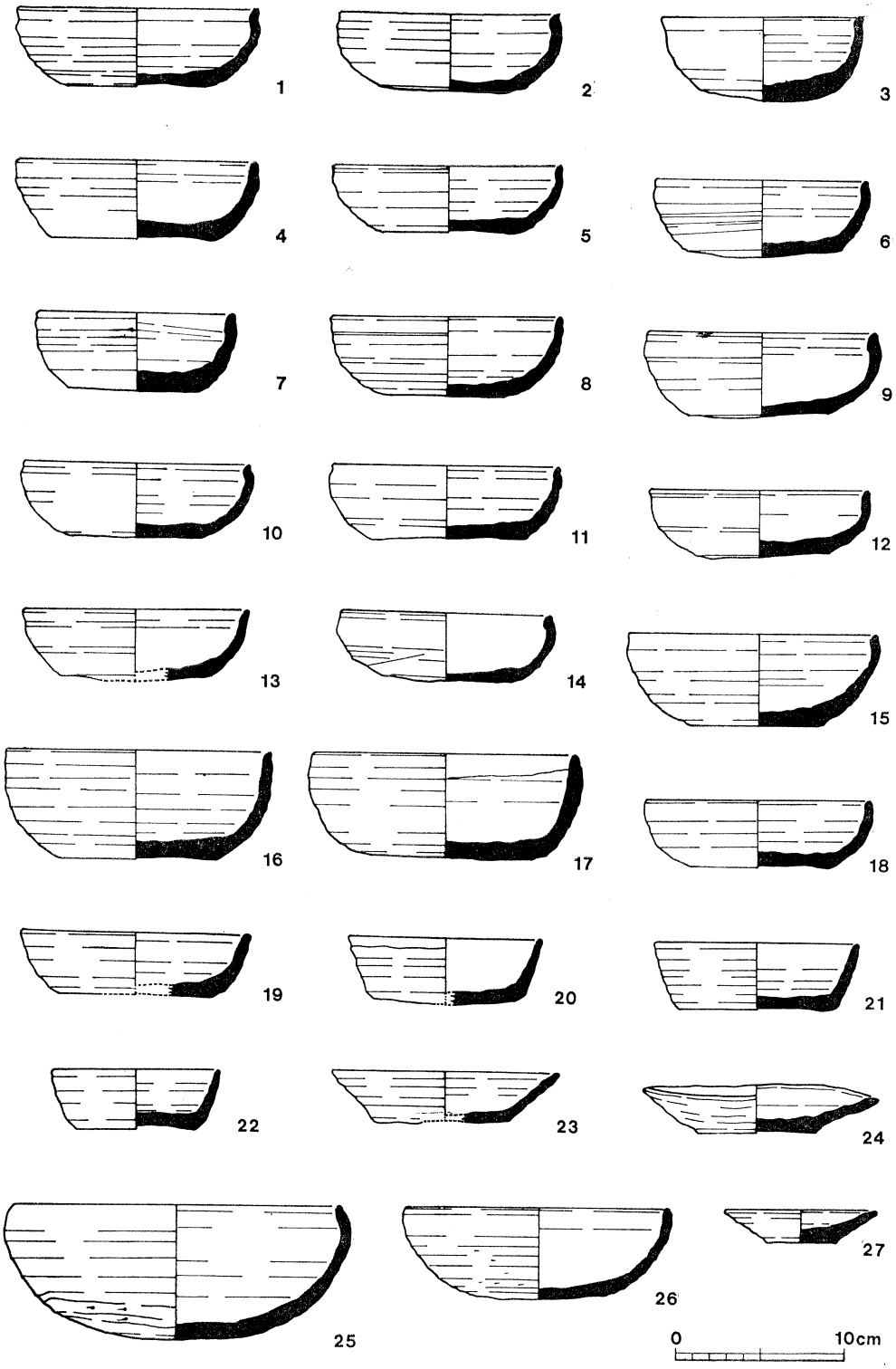
歴史時代の須恵器は、本遺跡出土須恵器の中心をなすものである。出雲における歴史時代須恵器については、さきに出雲国庁跡出土品に関して一応の編年試案が示されたが、(註2) 出土品の一部をとりあげた観察にもとづくものであって、なお不充分な点があり、この編年をただちにあてはめることは、困難というのが現状といえる。したがって、詳細な編年的位置については今後の検討をまつこととし、ここでは畿内その他の地域の研究成果を参考にして大略の時期を把握するにとどめることにした。

出土須恵器は坏を中心とし鉄鉢形土器、皿などがある。坏は高台の有無によってA.Bの2種に分けられ、それぞれさらに2つに細別される。A_1は高く外傾する高台がつき体部が丸くなるもの（第49図8～13）、A_2は低い高台がつき体部が直線的なもの（第49図14～16）、B_1は高台がつかず口縁部がくびれるもの（第49図17～30、第50図1～17）、B_2は高台がつかず口縁部もくびれないもの（第50図18～24、26）である。

底部は糸切り痕を残すものがほとんどであり大半が同時期のものと考えられる。しかし、わずかながらそれらの前後に位置するものが存在する。出雲において確認できる歴史時代須恵器の初源的な坏A_1は第49図8の形態をとるものである。これらは若干鋭さは欠けるが高台が高く外傾することなど、出雲国庁第1形式とほぼ同時期と考えられる（1類）。第49図8よりやや新しいと思われるものが同9である。体部が内湾し高台はやや低くなるが外



第49図　須　恵　器　実　測　図 (1)



第50図 須 恵 器 実 測 図 (2)

方に高くふんばる。底部はヘラ切り手法により切離され、切離し後に粗くなでる（2類）。本遺跡では2類は坏A_1のみである。3類は糸切りによって底部を切離し、その後調整して糸切り痕を消去するものである。本遺跡ではA_1、B_1、B_2の3形態が存在する。第49図の10はナデにより調整し、同18は全面ヘラ削り調整、第50図26は周辺ヘラ削り調整する。ヘラ削り調整は前者が後者より先行すると思われる。

一般に出雲地方の歴史時代須恵器はヘラ削りによる調整は稀であり、ほとんどがナデ調整による。周辺ヘラ削りは出雲国庁など県内他遺跡の例を合わせても10例に満たず、やや数は多くなるにしても全面ヘラ削りも同様に数が少い。これはヘラ削り調整を主体とする他地方と著しく相違するものである。4類は糸切り痕をとどめるもので本遺跡で最も多い須恵器である。坏A_1・A_2・B_1・B_2と形態も多様である。糸切りには静止糸切りと回転糸切りの2手法があり、静止糸切り痕をもつものはA_1、B_1、B_2に限られ数も少ない。なお静止糸切り痕をもつ坏の過少性も他遺跡と共通している。私見によれば出雲国庁の資料でも静止糸切りは坏A_1、B_1、B_2のみで坏A_2は全て回転糸切りによる。また糸切り痕をもつ坏でA_1形態とA_2形態を比較すると圧倒的にA_2形態が多い。一方、横穴出土資料をみると高台のつく坏はA_1形態のみ存在し、A_2形態は確認していない。これらのことから坏A_1は古い伝統的な形態であるが、坏A_2は新しい要素をもち糸切り手法出現以後みられる形態であると考えられる。また静止糸切り手法は坏A_1にみられるがA_2にみられないことやその絶対数が少ないことから、回転糸切り手法と同時併存したとしても糸切り導入期に一部で使用された手法であろう。

第5類は須恵器が粗雑に作られる時期で出雲における須恵器生産の末期である。歪みがひどく口縁部が広がり器高も減じてくる（第50図23・24）。焼成の非常に悪いものもある（同23）。以上の1～5類はそのまま年代差であると考えてよい。

さて、これらの実年代であるが、第1類の坏は高台付坏の初現であり陶邑TK217式[註3]（新）に似る。TK217式（新）は、ほぼ7世紀中葉以後に当たる。第2類は出雲国庁第2形式に当たり、出雲国庁出土木簡[註4]より7世紀末から8世紀前葉に時期が求められる。第3、4類の年代は糸切りの出現時期とのかかわりが問題となる。比較には適当ではないが千葉県山田水呑遺跡では回転、静止糸切りの両者とも周辺ヘラ削りの段階を8世紀末から9世紀前半としており[註5]、糸切り手法は遅くとも8世紀後半代には導入されていたと考えられる。さらに多賀城とその周辺では8世紀中頃まで遡らせることができる[註6]。各地域で糸切り手法導入時期が違うことは当然考えねばならないが、出雲ではヘラ切り手法の発達がみられないことから糸切り手法の導入は早く、8世紀中頃には使用されていたのではなかろう

か。第5類は実年代を求める手段はないが、北九州では須恵器生産の終焉が10世紀代とされ、[註7]陶邑でも9世紀末には生産は壊滅状態となったと考えられている。[註8]西日本の須恵器生産衰退の共通性を考えると第5類は9世紀末から10世紀代であろう。

以上坏に限って述べてきたが、他に鉄鉢形土器、椀が各一個体存在する。鉄鉢形土器（第50図25）は県内では例をみないものであるが、底部がこの種の土器に一般的な突底にならず丸底風であることから平城宮Ⅲ期[註9]（750年）以前のものと考えられる。

第50図27は黒色を呈するもろい瓦質の土器であり、焼成後にあけたと思われる小孔が中央にある。この種の土器は出雲ではまとまった資料がなく詳細は不明である。

なお本遺跡出土須恵器の成形技法については判別し難いがこの問題について若干述べておきたい。従来糸切り手法導入以前は粘土紐巻上げ、それ以後はいわゆる一本ビキ（水挽き）による成形、という考えが一般的であったように思う。[註10]しかし最近の報告では歴史時代のロクロ使用土器でも体部に巻上げ痕が残り、底部と体部の接合痕が確認されること、調整不良から底部内外両面に糸切り痕が確認されることから、糸切り痕をもっていても巻上げ成形ではないかという疑問が提出されている。[註11]これは東日本でのことであり、そのまま西日本、さらには出雲地方に適用できるとは考えないが糸切り＝一本ビキ（水挽き）成形という図式は再考を要する。ただし出雲地方出土の糸切りをもつ歴史時代須恵器について現在のところ巻上げ痕跡、底部と体部の接合痕跡などを明瞭に残すものを確認していないことから、一本ビキ（水挽き）成形の可能性も完全に否定できない。いずれにしても現段階では結論を出すことは不可能であり、さらに詳細な観察を必要とするのである。

（柳浦俊一）

註1　山本　清　「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』（昭和46年）以下古墳時代須恵器の編年観はこの山本編年に従う。
2　松江市教育委員会　『出雲国庁発掘調査概報』（昭和46年）
3　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』（昭和41年）
4　「大原評」木簡、註2
5　日本道路公団遺跡発掘調査団『山田水呑遺跡』（昭和52年）
6　宮城県教育委員会『日の出山窯跡群』（昭和45年）
岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺の古代坏形土器の変遷」『研究紀要』（昭和49年）
7　北九州市埋蔵文化財調査会『天観寺山古窯址群』（昭和52年）
8　田中琢「畿内と東国」『日本史研究』90（昭和42年）
9　奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』（昭和53年）
10　大阪府埋蔵文化財センター『陶邑Ⅲ』（昭和54年）Ⅴ型式を一本ビキとしているが、一本ビキの痕跡については明記していない。
11　大坪宣雄「歴史時代土師器坏の一製作技法―神奈川県川崎市影向寺遺跡出土土器をめぐって―」『法政考古学』第2集（昭和53年）松本富雄「国分期における一製作技法―俣埜遺跡新開遺跡出土の須恵器坏の紹介―」『埼玉考古』第18号（昭和54年）服部敬史、福田健司「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号(昭和54年)服部・福田氏はこれらの痕跡から「底部円柱づくり」を提唱した。但しこのような技法が普遍的に存在するか否かは不明である。

表6　須恵器一覧表

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
高坏		49—1	口径 16.1 器高 6（現存）	坏部丸底。体部は内湾してたちあがり口縁部で外反する。2段口唇。方形3方透し。	調整　体部回転ナデ 坏底部回転ヘラ削り底部内面仕上げナデ。	焼成非常に不良。脚部欠損。	ⅢE—13
坏		49—2	口径 11.9 器高 4.3	立ち上がりは内傾し短い。受部はやや長く上外方にのびて終る。体部は弧状を描き、底部は丸底。	切離し　ヘラ切り。 調整　同上。	完形。	ⅡD12—1
		49—3	口径 12.2	立ち上がりはほぼ垂直にのび、口唇は2段となる。体部は弧を描きながら底部に至る。	調整　同上。	口縁～体部片。焼成やや不良。	ⅢF12—2
蓋		49—4	口径 9.1 器高 3.2	天井部から丸く弧状に口縁部に至り半球状を呈す。体部中程に凹帯の痕跡。	切離し、ヘラ切り 調整体部、天井部内面回転ナデ、天井部外面粗くナデ	完形。	ⅢF—10
		49—5	口径 9.2 器高 3.2	やや丸味をもつ平坦な天井部。体部はやや外反気味に落ちる。	切離し　同上 調整　体部回転ナデ 天井部内面仕上げナデ、同外面回転ヘラ削り。	完形。天井部に×のヘラ記号。	ⅡF14—3
		49—6	口径 12.0 器高 3.7	天井部から体部にかけて丸くカーブを描く。口縁部は僅かに外反する。	切離し、調整とも同上。	体部、口縁部の一部に自然釉。完形。天井部に○に×のヘラ記号。	ⅡD11—1
短頸壺		49—7	口径 7.4 器高 8.0	肩が張り、口縁は僅かに内傾して立ち上がる。口唇は丸く終る。	切離し同上。胴部内外面とも回転ナデ。胴部下半から底部にかけてヘラ削り。	口縁部の一部を欠く。	ⅡE13—1
坏	A_1	49—8	口径 14.6 器高 5.8	ほぼ平坦な底部に、高く外傾したしっかりした高台を付ける。体部は内湾しながら立ち上がる。	切離し　同上 調整　体部回転ナデ 底部内面仕上げナデ、同外面回転ナデ	焼成不良。完形。	ⅢG3—4
	A_1	49—9	口径 14.1 器高 4.4	ほぼ平坦な底部に外傾した高い高台をつける。体部は大きく、広がってたちあがり、口縁部で垂直になる。	切離し、調整とも同上。	完形。	ⅢD11—2
	A_1	49—10	口径 13.3 器高 4.3	底部にやや高く直立した高台が付く。高台は面取りし、平坦。体部は内湾しながら立ち上がる。	切離し　糸切り 調整　同上	完形。	ⅢD10—1
	A_1	49—11	口径 14.6 器高 4.8	上底の底部に直立気味の高い高台をつける。体部は中程で急に上方にたちあがる。	切離し　静止糸切り 調整　体部回転ナデ 底部内面仕上げナデ。 底部外面未調整。	完形。 焼成のためのひずみあり。	ⅢG—10

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
坏	A1	49—12	口径 14.8 器高 5.2	ほぼ平坦な底部に外方にふんばる高台を付ける。体部は内湾しながら立ち上がる。	切離し、調整とも同上。	完形。焼成不良白灰色。	ⅢD10—4
	A1	49—13	口径 14.7 器高 4.7	ほぼ平坦な底部に外方に高くふんばった高台が付く。体部は内湾しながら立ち上がる。	切離し、調整とも同上。	完　形。	ⅢG13—2
	A2	49—14	口径 12.7 器高 4.6	ほぼ平坦な底部に直立ぎみの低い高台が付く。体部は直線的に立ち上がり丸く終る。	切離し　回転糸切り 調整　同上	完　形。	Ⅲ
	A2	49—15	口径 16.6 器高 6.2	ほぼ平坦な底部に外方にふんばる低い高台を付ける。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口唇は丸く終る。	切離し、調整とも同上	完　形。	ⅡF12—3
	A2	49—16	口径 11.4 器高 4.6	ほぼ平坦な底部に外方にふんばる低い高台が付く。体部はほぼ直線的に立ち上がる。	切離し、調整とも同上	完形。体部、口縁に自然釉。	ⅡE—13
	B1	49—17	口径 13.0 器高 3.8	やや上底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでわずかにくびれ外反し丸く終る。	切離し　静止糸切り。 調整　同上。	½残存。焼成不良。器表の摩滅著しい。	ⅡE13—2
	B1	49—18	口径 19.0 器高 7.5	丸底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれやや外反し丸く終る。	切離し不明 調整　体部回転ナデ底部内面仕上げナデ、同外面回転ヘラ削り	⅔欠損。焼成不良。	Ⅱ11—4
	B1	49—19	口径 12.0 器高 4.2	平底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでわずかにくびれて外反し丸く終る。	切離し　回転糸切り。 調整　体部回転ナデ底部内面仕上げナデ底部外面未調整。	焼成不良。完形。かさね焼き痕。	E12
	B1	49—20	口径 12.4 器高 3.7	平底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ外反して丸く終る。	切離し　静止糸切り。 調整　同上。	完　形。	ⅡF14—4
	B1	49—21	口径 13.1 器高 4.6	平底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれて、外反し丸く終る。	切離し　回転糸切り。 調整　同上	完　形。 焼成不良。	ⅢE10
	B1	49—22	口径 11～13 器高 4.8	焼成ひずみのため、丸くなった底部。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ、ほぼ垂直にたちやや角ばる。	切離し　静止糸切り 調整　体部及び底部内面回転ナデ、底部外面未調整。	完形。かさね焼き痕。焼成ひずみひどい。	ⅢF12—3
	B1	49—23	口径 12.6 器高 4.0	体部は内湾しながらたちあがる。口縁部近くでくびれ、外反しやや角ばる。	切離し　回転糸切り。 調整　体部回転ナデ、底部内面仕上げナデ底部外面未調整	完　形。	ⅢD11—1

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
坏	B1	49—24	口径 11.7 器高 4.9	僅かに上げ底。体部はゆるやかに内湾し立ち上がる。口縁部近くでくびれて、垂直にたち丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完形。焼成不良。	ⅢE10
	B1	49—25	口径 13.6 器高 3.9	僅かに上底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ、外反して丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完　形。	ⅣE10
	B1	49—26	口径 12.3 器高 3.8	平底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれほぼ垂直にたち、丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完　形。	ⅡF13—4
	B1	49—27	口径 11.7 器高 3.8	平底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ、ほぼ垂直にたち丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完形。かさね焼き痕。	ⅢD10—1
	B1	49—28	口径 13.4 器高 4.6	体部は内湾しながらたちあがる。口縁部近くで垂直にたち丸く終る。	切離し、調整とも同上。		ⅢF11—3
	B1	49—29	口径 13.3 器高 4.1	平底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれて、外反し丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完形。焼成不良。白灰色。かさね焼き痕。	Ⅲ11—2
	B1	49—30	口径 14.6	体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ、ほぼ垂直にたち、丸く終る。	調整　同上	口縁部のみ残存	ⅡF14—3
	B1	50—1	口径 13.8 器高 4.5	僅かに上底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ外反して丸く終る。	切離し　回転糸切り 調整　体部回転ナデ 底部内面仕上げナデ 同外面未調整	3/5欠損。赤褐色。	ⅢE10
	B1	50—2	口径 12.6 器高 4.6	僅かに凸状の底部。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれほぼ垂直にたち丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完形。焼成やや不良。かさね焼き痕。底部に板目。擦痕。	ⅢG12—4
	B1	50—3	口径 11.5 器高 4.8	凸状の底部。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ外反して丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完　形。	ⅢE10
	B1	50—4	口径 13.4 器高 4.4	やや上底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれほぼ垂直に立ち、丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完形。焼成不良。灰白色。	
	B1	50—5	口径 13.2 器高 4.0	僅かに上底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ僅かに外反して丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完形。体部にはうすく自然釉。	ⅢF11—1
	B1	50—6	口径 12.1 器高 4.4	やや凸状の底部。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ、僅かに外反して丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完形。 体部に沈線状の線が入る。	ⅢE11—1

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
坏	B1	50—7	口径 11.1 器高 4.5	ほぼ平坦な底部。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ、ほぼ垂直にたち丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完形。焼成やや不良。	ⅡE13—1
	B1	50—8	口径 13.4 器高 4.6	ほぼ平坦な底部。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ、わずかに外反し丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完形。焼成不良。灰白色。体部に沈線状の線が入る。	ⅢG12—1
	B1	50—9	口径 13.1 器高 4.2	平底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ外反し、口唇部は角ばり鋭い稜をつくる。	切離し、調整とも同上。	完形。焼成不良。かさね焼き痕。	ⅢG14—2
	B1	50—10	口径 13 器高 4.4	平底。体部は内湾しながらたちあがり、口縁部近くでくびれ外反する。	切離し、調整とも同上。	完形。	ⅢF13
	B1	50—11	口径 13.0 器高 4.9	平底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれほぼ垂直にたちやや肥厚して丸く終る。	切離し、調整とも同上。	完形。焼成不良。	Ⅲ14—1
	B1	50—12	口径 12.6 器高 4.0	僅かに凸状の底部。体部上半はほぼ直立する。口縁部近くでくびれ外反し、やや角ばる。	切離し、調整とも同上。	完形。	ⅢD11—1
	B1	50—13	口径 13.0 器高 4.1	やや凸状の底部。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ外反し、やや角ばる。	切離し、調整とも同上。	⅔欠損。	ⅢE11
	B1	50—14	口径 11.9 器高 4.0	やや上底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ内傾し、丸く終る。	切離し　同上 調整　体部、底部内面回転ナデ、底部外面未調整	完形。若干焼成ひずみあり。	ⅢG12—3
	B1	50—15	口径 14.6 器高 5.3	平底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれ外反し、丸く終る。	切離し　同上 調整　体部回転ナデ底部内面仕上げナデ同外面未調整	完形。焼成やや不良。灰白色。	ⅢD10—14
	B1	50—16	口径 15.3 器高 6.3	僅かに上底。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部近くでくびれわずかに外反し、丸く終る。	切離し、調整とも同上。	体部一部欠損。焼成ひずみあり。	ⅡE13—4
	B1	50—17	口径 15.7 器高 6.2	体部は内湾しながらたちあがる。口縁部近くでくびれ、ほぼ垂直にたち丸く終る。	切離し、調整とも同上。	底部に「驛」の墨書 内面に粘土継ぎ足し線	Ⅲ
	B2	50—18	口径 13.0 器高 3.9	やや上底。体部は内湾しながら立ち上がる。口唇部は丸く終る。	切離し　静止糸切り。 調整同上。	完形。焼成不良。かさね焼き痕。	ⅡE11—1
	B2	50—19	口径 13.4 器高 3.6	ほぼ平坦な底部。体部は内湾しながら口唇に至って僅かに外反する。	切離し　回転糸切り。 調整　同上。	⅔欠損。	ⅡD12—2

器種（分類）		挿図番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考	出土地点
坏	B2	50—20	口径 11.2 器高 3.8	やや凸状の底部。体部は直線的に立ち上がる。口唇上面は平坦につくる。	切離し、調整とも同上。	½欠損。焼成不良。	ⅡF13—3
	B2	50—21	口径 13.8 器高 3.9	平底。体部は直線的にたちあがる。内面の体部と底部の境は明瞭にアクセントがつく。	切離し、調整とも同上。		
	B2	50—22	口径 9.8 器高 3.1	上底。体部はわずかに内湾気味にたちあがる。	切離し、調整とも同上。		ⅡD11
	B2	50—23	口径 13.5 器高 3.1	平底。体部は大きく広がって直線的にたちあがる。	切離し、調整とも同上。	½ 欠損。	
	B2	50—24	口径 13.7 器高 2.9	やや上底。体部は大きく広がって直線的にたちあがる。	切離し、調整とも同上。	完形。焼成ひずみがひどい。	ⅡD13
鉄鉢型土器		50—25	口径 18.9 器高 8.0	丸底。体部も内湾しながら立ち上がり、そのまま口唇部に至り、丸く終る。	切離し　ヘラ切り。 調整　体部回転ナデ 底部内面仕上げナデ 同外面回転ヘラ削り	完形。一部に黒く自然釉がかかる。	ⅢD10—1
坏	B2	50—26	口径 15.4 器高 5.5	やや丸底。 体部は内湾しながら立ち上がり、そのまま口唇に至り丸く終る。	切離し　回転糸切り。 調整　体部回転ナゲ 底部内面仕上げナデ 同外面周辺ヘラ削り。	完形。焼成やや不良。	ⅡE13
	B2	50—27	口径 9 器高 1.9	平底。 体部は大きく広がり直線的にたちあがる。	切離し　同上。 調整　体部、底部内面回転ナデ 底部外面未調整	底部中央に小孔を穿つ？ 瓦質。	ⅡF11～14

5 石　　器

今回の調査で検出した石器は石鏃、スクレイパー、石錘、石斧、磨石、敲石、石庖丁、石鎌、石鑿、磨製石剣、石戈等多岐にわたっているが磨製石剣、石戈については別項で取り上げているのでここでは省略する。これ等石器類の出土量は、土器に比べて、はなはだ少量であり、当遺跡における出土傾向も充分に把握できるかどうか不安が残る。

これ等の石器を出土地区毎にみると、出土点数の比較的多い石鏃、スクレイパーは第Ⅰ調査区に片寄って出土していると言うことができよう。少量の資料から述べるのはどうかと考えるが縄文式土器と石鏃、スクレイパーとの出土傾向が若干の異なりを見せることは注目される。その他の石器は第Ⅳ調査区を除いて各区で少数ながら出土している。また黒曜石のフレイクは各区で多量に出土しているが、これ等についてはまだ充分に検討を行っておらず、今回は省略した。

石鏃（第51図１～19）　個々の石材、法量、型式等は別表に示したとおりであるが、いずれも無茎石鏃で有茎のものは１点も存在しない。石材は、ほとんどが黒曜石でサヌカイト製のものは１点のみである。

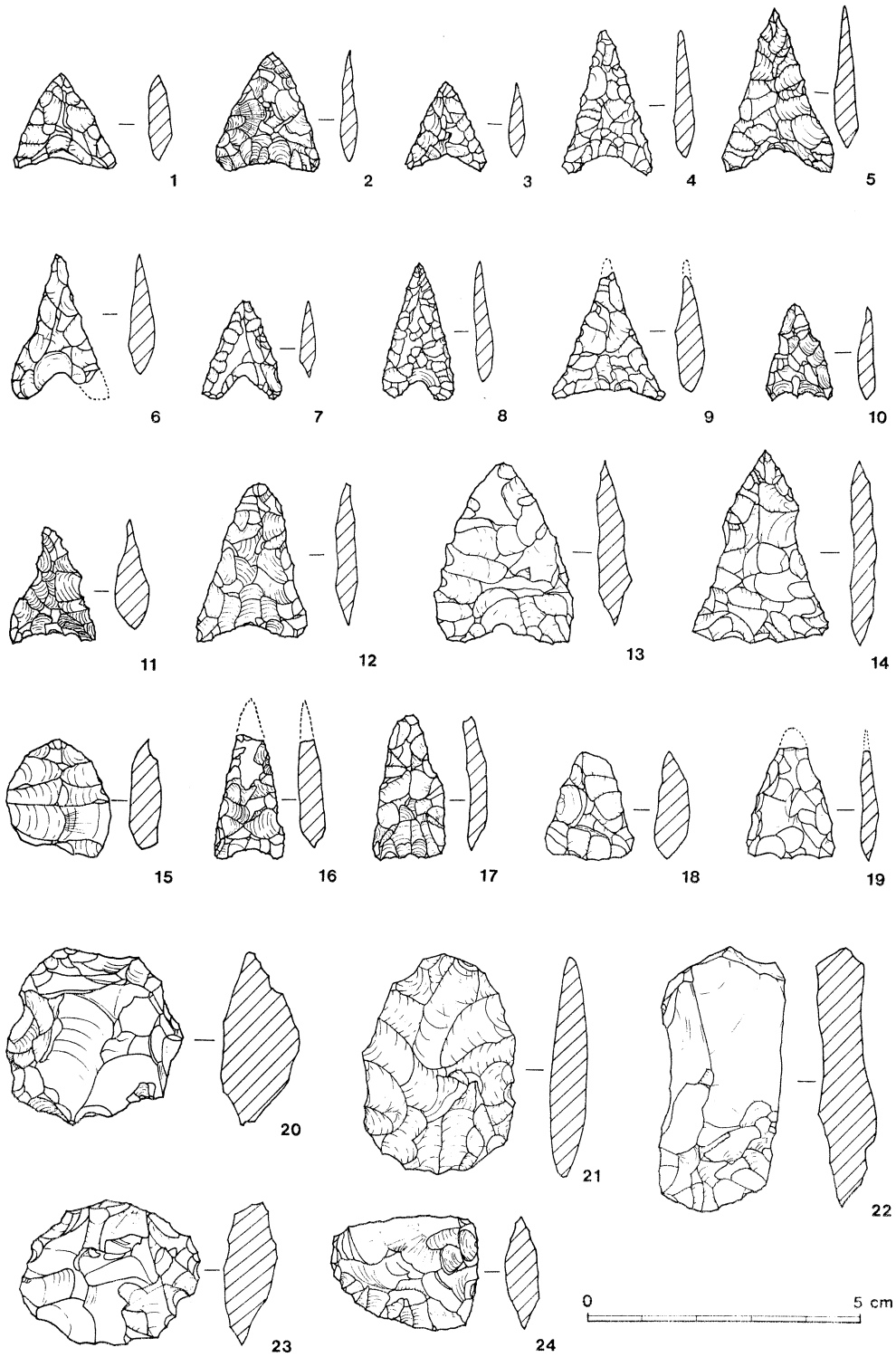
型式的に大別すると基部に抉りを入れた凹基式三角形鏃（第51図１～13、16）、基部が平たい平基式三角形鏃（第51図17～19）、平基式五角形鏃（第51図14）と先端を丸く整える式の（第51図15）が存在する。このうち、最も多量に出土した凹基式三角形鏃もその形状は一様ではなく、第51図（１、２、３）のように長さが短くて基部の広いものから、第51図（４、５、６、８、16）のように長さが長くて基部の狭いものも存在し、また全長が３㎝前後の大型品（第51図５、12、13）も存在する。抉りも浅いものと深いものとがある。

調整は両面調整を基本とし、周辺部はとくに入念に行なわれているが、一部には第１次剥離面を残すもの（第51図７、13、16）なども存在する。

スクレイパー（第51図20～24、第52図１～３）　石材はそのほとんどが黒曜石でわずかに、第52図１のみがサヌカイトを利用している。

定形化している石匙（第52図１・２）を除いて他は剥片を利用したスクレイパーであり調整はきわめて精密なものも存在するが、概ね、非常に粗く、部分的にしか調整を施さないものが大部分を占め、一部には自然面を残すものも存在する。

第51図(20)は径3.2㎝の円形を呈するスクレイパーである。調整は表裏面とも周辺部からの剥離がほぼ全面に認められるが、きわめて厚い作りとなっており、中心部での厚みは1.4㎝と厚い作りとなっている。第51図(21)は長径４㎝、短径2.8㎝の亀甲状のスクレイパーである。調整は表裏面とも周辺部からの剥離がほぼ全面に認められるが、きわめて厚い



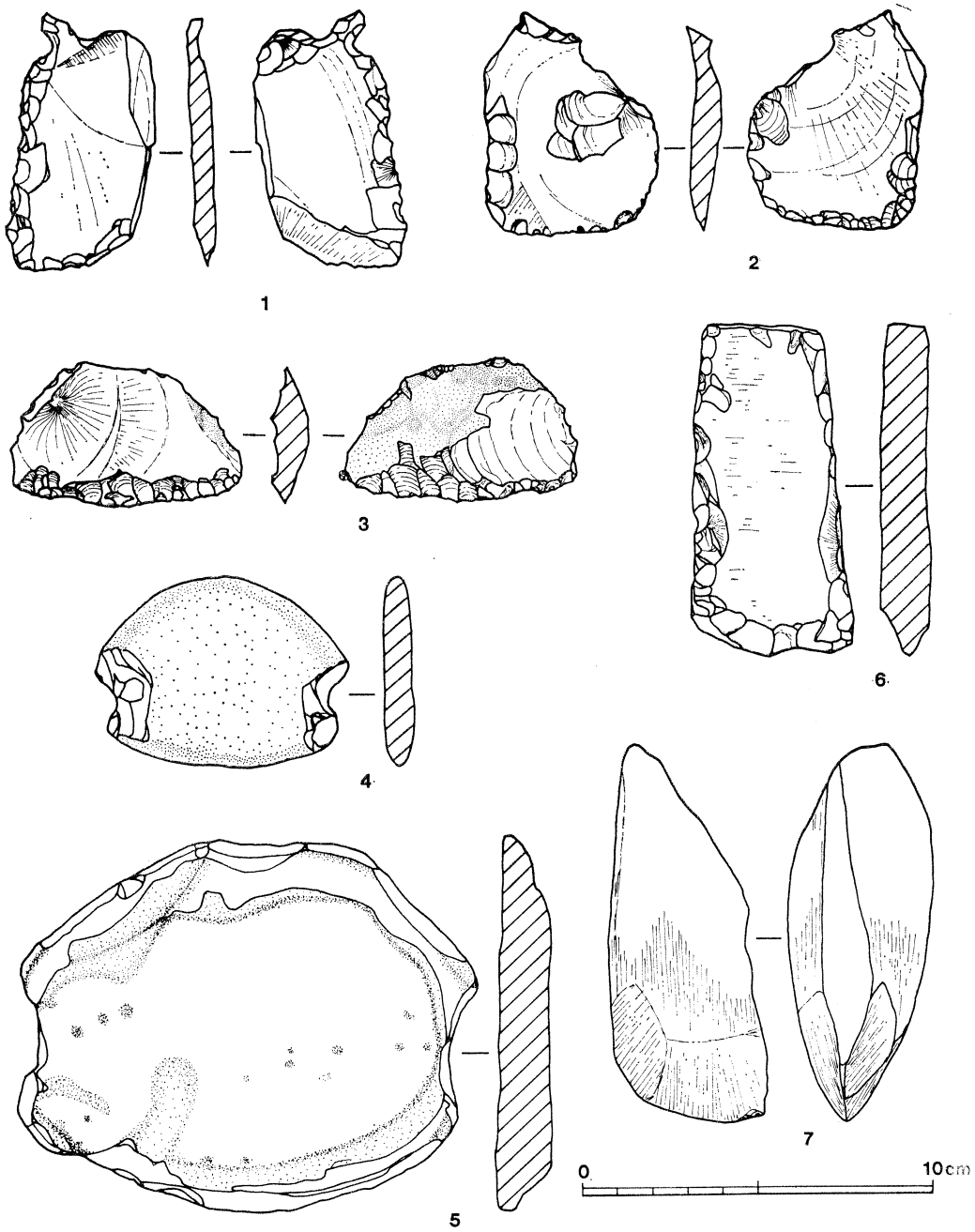
第51図　石　器　実　測　図 (1)

作りとなっている。中心部での厚みは1.4cmと厚い作りである。第51図(21)は長径4cm、短径2.8cmの亀甲状のスクレイパーである。調整は表裏面とも周辺部から中央部に向ってよく整った剝離が施されており、中央部での厚みは0.6cmと均整のとれた作りとなっており風化が著しい。第51図(22)は長辺4.9cm、短辺2.3cmの縦長の剝片を利用したスクレイパーである。調整は短辺の先端部の刃部のみ施されており、他は第一次剝離面を残す。内外面ともに縁辺からの剝離が認められ刃部は鋭く尖っている。第51図(23)は長径3.3cm、短径2.6cmの亀甲状のスクレイパーである。表裏面とも調整を行う。平面形は第51図(20、21)とよく似ているが、調整は周辺全面に及ばず、全周の四分の一は未調整の部分が残っている。第51図(22)と技法的には近く、タガネ状の断面を呈す。第51図(24)は縦の最大長2.1cm、横幅2.7cmの台形を呈するスクレイパーである。一部に第一次剝離面を残すが、刃部の調整は整っている。第52図(1)はサヌカイト製の石匙である。全長7.2cm、横幅3.7cmの縦長のものであるが、刃部は基部に平行に作られている。調査は内外面とも刃部と基部に施されている。第52図(2)は黒曜石製の石匙である。全長6.1cm、横幅4.7cmを計る。基部と対応して刃部が作られている。基部に調整が認められないことから、未製品である可能性がある。第52図(3)は長さ6.5cm、幅4cmを計る台形状のスクレイパーである。剝片に刃部を付けただけの石器で自然面、第二次剝離面を多く残している。

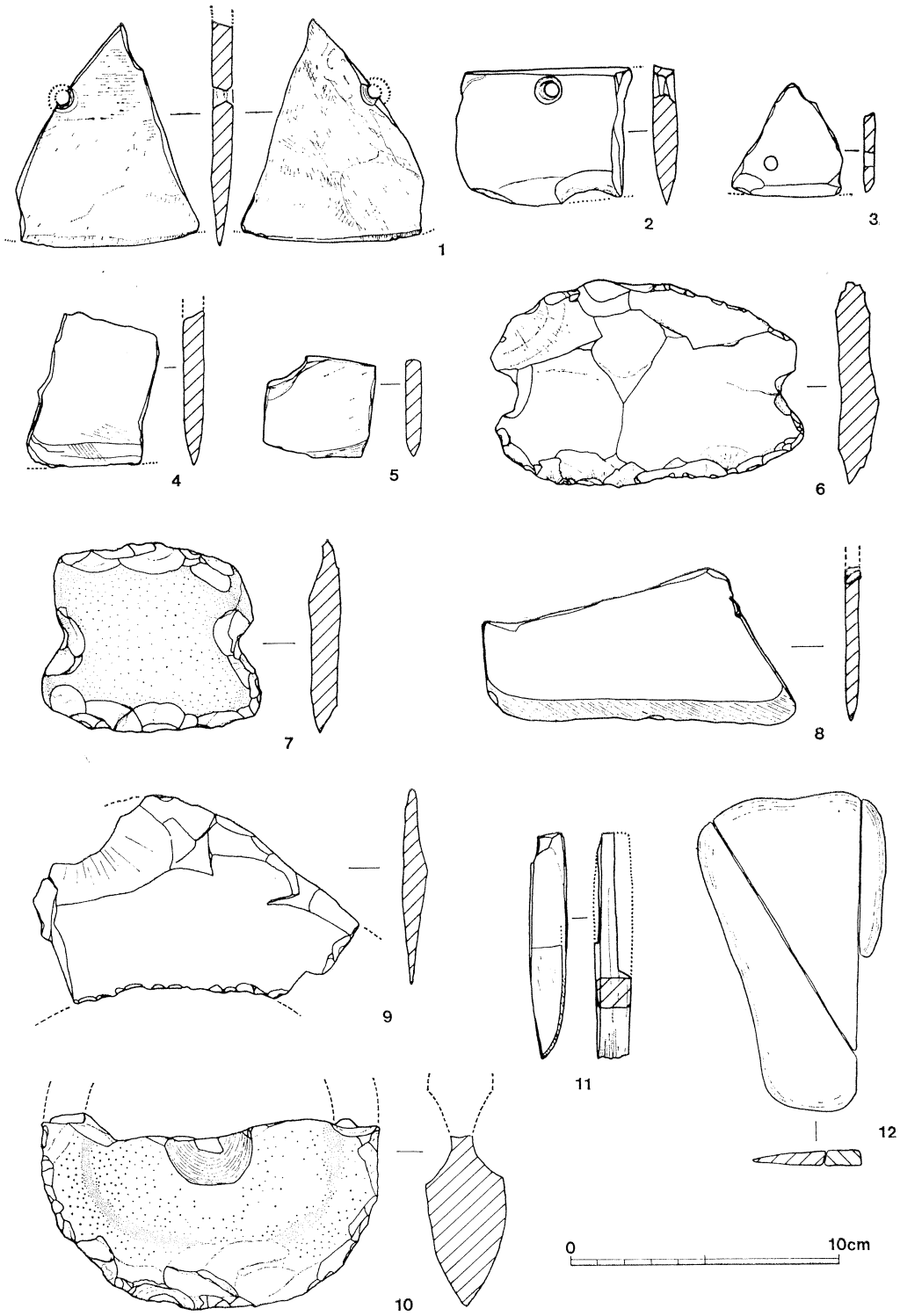
石錘（第52図4、5）　石錘は2点検出しており、いずれも第Ⅱ調査区からの出土で、大型と小型の二種ある。第52図(4)は全長7.2cm、幅5.4cm、厚さ0.8cmの小型品で自然石の円礫の両端を打ち欠いて抉りを入れている。この抉りは表裏に認められる。第52図(5)は全長13.1cm、幅10.5cmの大型品である。砂岩質と考えられる円礫の両端を打ち欠いて抉りを入れている。この抉りは表裏にわたっている。原材は風化が著しく、もろい。

石斧（第52図6・7、第54図10）　石斧は打製石斧第52図（6）と磨製石斧第52図(7)、第54図(10)が出土している。第52図(6)は、全長9.3cm、横幅4.6cmの短冊形の打製石斧である。先端部を表裏から打ち欠いて刃部を作る。長辺の縁辺にも浅いノッチを入れ、角のつぶしを行っている。平坦部は横方向の磨き痕が認められる。第52図(7)は所謂、ハマグリ刃の磨製石斧である。基部と刃部の一部を欠失する。第54図(10)は径12.7cmの環状石斧の未製品である。約二分の一を欠失しているが概ねその全容を知ることができる。周辺部は表裏両面からの打ち欠き痕がそのまま残っている。中央の孔は貫通しておらず、表裏両面から穿孔の為の痕が認められる。環状石斧の製作過程を考慮する上できわめて興味深い。孔の肩部での厚みは2.9cmを計る。

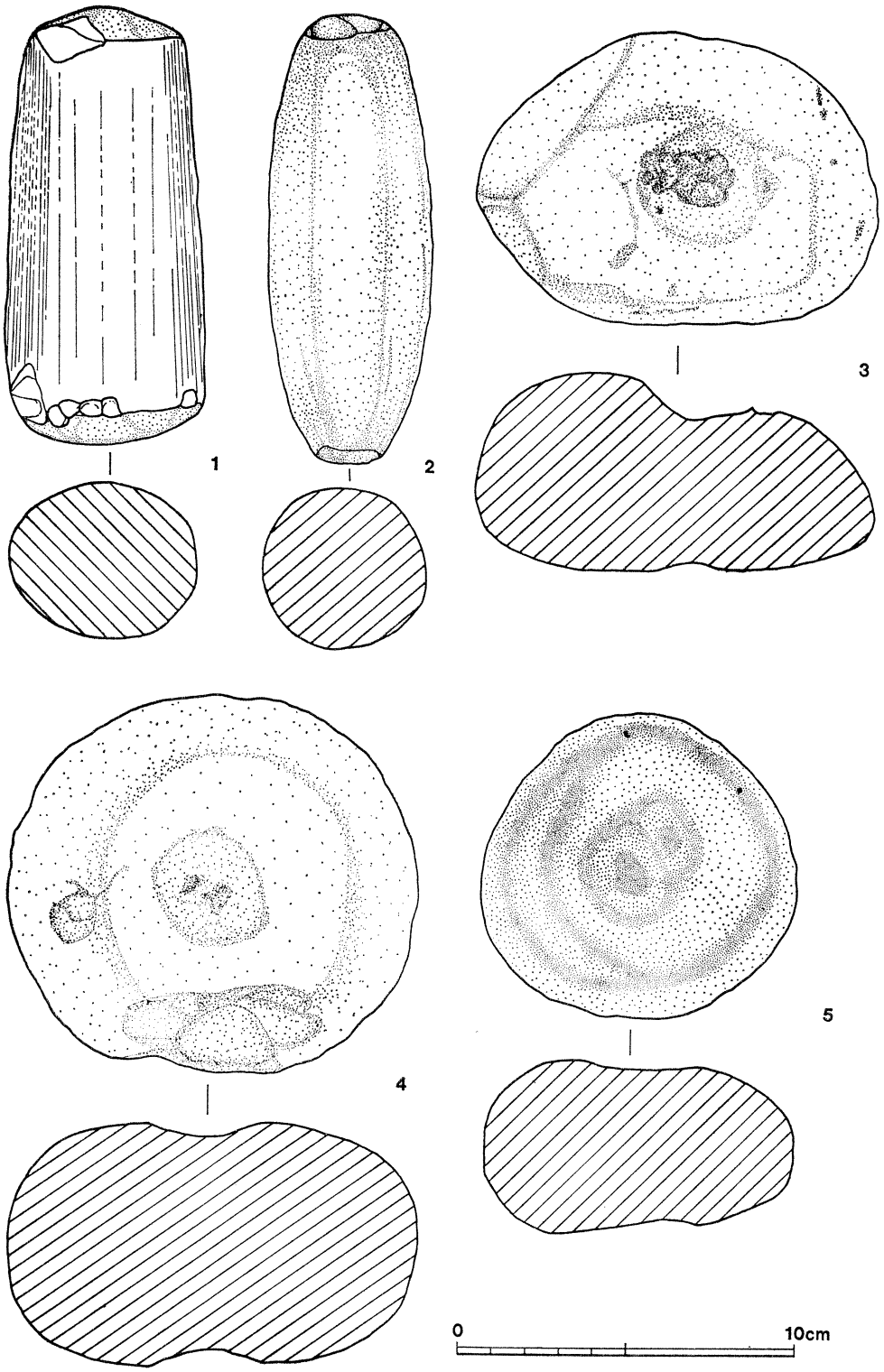
磨石（第53図1・2）　第53図（1・2）とも棒状の自然石を利用しており、両端に使



第52図　石　器　実　測　図 (2)



第53図 石 器 実 測 図 (3)



第54図　石　器　実　測　図 (4)

用痕が認められ、滑らかになっている。第53図(1)は長さ12.7cm、厚さ5.5cmを計る。第53図(2)は長さ13cm、中央部分での厚さ4.8cmを計り、両端部では若干つぼまる。

敲石（第53図3、4、5）いずれも自然石の円礫の中央部分の表裏を打ち欠いて、凹みを作っている。第53図(3)は長径11.7cm、短径8.5cmの長円形で厚さ5.8cmを計り、裏面の凹みは若干浅い。第53図(4)は径12cmの円形で厚みは7.1cmを計る。第53図(5)は径9cmの円形で厚みは5.1cmを計る。

石庖丁（第54図1～7）　石庖丁は磨製品と打製品とが検出された。磨製のものは全て破片であり、形態的には今後、資料の増加を俟って検討を加える必要があり、石庖丁以外のものの可能性のあるものもある。いずれもきめの細かい硬質頁岩および頁岩質のものを原材としている。第54図（1～3）は紐通しの孔を有するものである。第54図(1)は厚さ0.7cmで径0.8cmの紐通しの孔を表裏両面から穿つ。刃部は若干上部に湾曲する。第54図(2)は厚さ0.8cmで径1cmの紐通し孔を表裏両面から穿っている。刃部は残存部分についても破損が著しいが概ね平らに終始するものと考えられ、横に長い形態をとるものと推察される。第54図（3）は厚さ0.4cmで径0.5cmの孔を有する。孔の位置は刃部にきわめて近く、刃部も第54図（1、2）と異なり、片刃に近い。第54図（4、5）は孔を残存部に持たないものである。第54図（4）は厚さ0.7cm、第54図（5）は厚さ0.6cmを計り、いずれも全面に研磨痕を残す。

打製品は2点出土している。第54図（6）は比較的平らなサヌカイトを原材として、両端を打ち欠いて紐をかける式のものである。刃部及び縁辺は内外両面から調整を加えている。縦7.5cm、横11.2cm、厚さ1.5cmを計る。第54図（7）は偏平な自然の円礫を原材としている。両端に認められる抉りは左側は片面調整右側は表裏両面調整となっている。上下端部は両面からの調整を行っているが左右端部は抉りを除いて調整を施さず自然面のままである。縦7.2cm、横8.3cm、厚さ1.0cmを計る。

第54図（12）は、自然に折れたものか、意図的に切断したものか、判然としないが、材質としては磨製石庖丁と同質のものと考えられ、参考品として図示しておいた。

石鎌（第54図8、9）　いずれも破片であり全形を把握しがたいが、第54図（8）は刃部に研磨を施している。刃部残存長11.7cm、厚さ0.5cmを計る。刃部は表裏両面から研磨され、反りは認められない。砂質頁岩を利用している。第54図（9）は若干内反りする打製品である。刃部残存長8.0cm、厚さ1.0cmを計る。

石鑿（第54図11）　石鑿は1点だけ出土しており、一部折損しているがほぼ完形品である。やや軟質の板状に剝離するきめの細かい原石を利用している。縦8.4cm、横1.2cm、厚

さ1.1㎝を計る。先端部に位置する刃部は縦に研磨され、やや外方にふくらんで片刃状を呈す。全体に入念な研磨が施されている。

山陰の石器の研究は一部特殊な遺物を除いて、あまり報告されたことがなく、まさに未開の分野と言っても過言ではない。また今回とり上げた石器は多岐にわたり、種類も豊富であるが、どの時期の土器に伴うかいま一つはっきりしない状況で出土しているので、ここでは時期的な検討は今後の課題としたい。　　（卜部　吉博）

表7　石　鏃　一　覧　表

挿図番号	型　式	材質	長さ(㎝)	幅(㎝)	重量(g)	出土地点	備考
1	凹基式　三角形	黒曜石	全長　1.8	基部　1.9	0.94	ⅠF14-3　No. 3	
2	〃　〃	〃	〃　2.1	〃　1.9	1.17	ⅠF12-3　No. 6	
3	〃　〃	〃	〃　1.7	〃　1.5	0.42	ⅠD11　No.29	
4	〃　〃	〃	〃　2.65	〃　1.6	0.92	ⅠD12　No.29	
5	〃　〃	〃	〃　2.9	〃　2.0	1.38	ⅠD14　No.15	
6	〃　〃	〃	〃　2.6	残存最大　1.5	0.96	ⅠD11-1　No.127	基部折損
7	〃　〃	〃	〃　1.8	基部　1.5	0.52	ⅠE14-3　No. 7	
8	〃　〃	〃	〃　2.5	〃　1.3	0.85	ⅠF13-2　No.107	風化著しい
9	平基式　三角形	〃	現存長　2.4	〃　2.1	4.27	ⅠD11　No.34	先端折損
10	凹基式　三角形	〃	全長　1.7	〃　1.2	0.44	ⅠF11　No.50	
11	〃　〃	〃	〃　2.1	基部　1.6	1.24	ⅠD14-2　No.57	
12	〃　〃	〃	〃　3.0	〃　2.0	1.97	ⅠD13-1　No.26	
13	〃　〃	〃	〃　3.3	基部　2.5	4.25	ⅠE11-1　No.110	
14	平基式　五角形	〃	〃　3.55	身最大　1.3 基最大　2.5	2.85	ⅠED-12　No.56	
15		〃	残存長　2.1	残存最大　1.9	2.48	ⅠD14-2　No.82	基部折損
16	凹基式　三角形		残存　2.2	基部　1.2	1.10	ⅠE13-3　No.11	先端折損
17	平基式　三角形	黒曜石	全長　2.6	〃　1.3	1.40	ⅠED-3　No. 5	
18	〃　〃	〃	〃　2.0	〃　1.6	1.48	表採	
19	〃　〃	サヌカイト	残存長　2.0	〃　1.6	0.89	ⅠD11　No.40	先端折損

6 木　製　品

今回の調査で特に注目すべきは、多くの遺物群のなかでも数百点に及ぶ加工木材や木製品が認められたことである。これほどの木製品が一遺跡からまとまって出土したことは、いまのところ県下では他に例のないものであった。それらの木製品は様々な生活用具や労働用具など多岐にわたっているものであったが、完形に復し得るものは僅少であった。それは製品の材質が軟弱であること、さらにいくつかの部分から構成されている点等、もともと破損しやすい条件をもっていたからであろう。それに加えて、調査区一帯は朝酌川の旧河道にあたり、水田面下約1.5～2 *m*のところに広がる遺物包含層は、砂礫の多い撹乱層であった。このことが木製品の原形を損う大きな要因であったと考えられる。

調査で得られた木製品について具体的な用途や機能に関しては、推定困難な点、不明な点が多いため、形態や加工痕、使用痕、樹種、材質等から可能な限りの推測を加え、以下の様な機能的分類を試みた。また用途不明のものについては一括して取扱った。

なお、今回得ている数百点に及ぶ護岸用の杭についての分類や説明は割愛し、ここでは杭等の加工木材を除いた木製品を用途別に、生活用具と労働用具に分けることとした。すなわち生活用具としたものには杓文字・漆器・曲物容器等の厨房具や火鑽臼があり、労働用具としては斧柄、鎌柄、田下駄類、鋤、櫂、櫓、丸木弓等があげられる。

ただし、田下駄類については足への着装方法を知るために他遺跡出土のものを図示しておいた。また、鋤、櫂は全体の形状や先端部の加工が類似した点もあるが樹種が鋤として機能的に耐えうるものであるのか否かその点を鋤と櫂とに区別する根拠とした。

櫓・丸木弓は県下では他に例のないもので、とりわけ丸木弓は当時の狩猟用具として主要な位置をしめたものと考えられ、形態や強度を知るうえで貴重な資料となるものであった。

このほか用途不明の木製品があり、それらは、形態や使用痕等から推しても、その用途を明確にし得ないものである。なかでも荷ない棒状品と仮称する丸木を加工したものは、加工痕が明瞭で使用痕が認められていない点などから、実際には使用されなかったのではなかろうかとも考えられる。

いずれにしても用途の不明な木製品については文末の木製品一覧表に示した観察のみにとどめ、無理に有形民俗資料などから用途を推定する方法は避けておいた。これらの木製品は用途不明のもののみならず、今後類例をまって再検討すべき点は多々あるが、とりあえず前述した分類に従って説明することにしたい。

生 活 用 具

杓文字状木製品（第55図１）　扁平な板材を加工してつくる杓文字と考えられ、ほぼ完形に近く全長267㎜、身幅60㎜を測る。

柄は身の両側辺から直線的に削り出され、頸部に移る折曲点は稜をなす。柄尻は横一文字に切り、粗い面取りが施されている。身の先端はU字形を呈し、やや薄く仕上げられている。全体に加工痕が明瞭で、柄の片面には木理に直交する形で剃刀様のものによったとみられる痕跡が認められる。なお表裏の区別はつき難い。

箸状木製品（第55図２）　形態は箸状を呈すが先端はやや薄く削られ、わずかに反りかえる。

漆器　漆器は計４点検出された。これらはいずれも横挽ロクロを使用して作成され、木地に漆を塗布した破損品であるが、概ねその形態や法量・手法等を知ることができた。以下その概要を記していくことにしたい。

黒漆地漆絵椀（第55図３）　口縁部を欠損し、現存直径140㎜、高さ35㎜を測る黒漆塗椀。

体部は、口縁部に向って内湾しながらゆるやかな曲線をえがいて立ちあがる。全体に木地の器肉は薄く仕上げられている。底部外縁には断面方形の低い高台がつきその内面には平刃によったとみられる加工痕が認められる。これは横挽ロクロの爪痕を消すために施されたものと考えられ、この面には漆が塗布された痕跡は認められない。

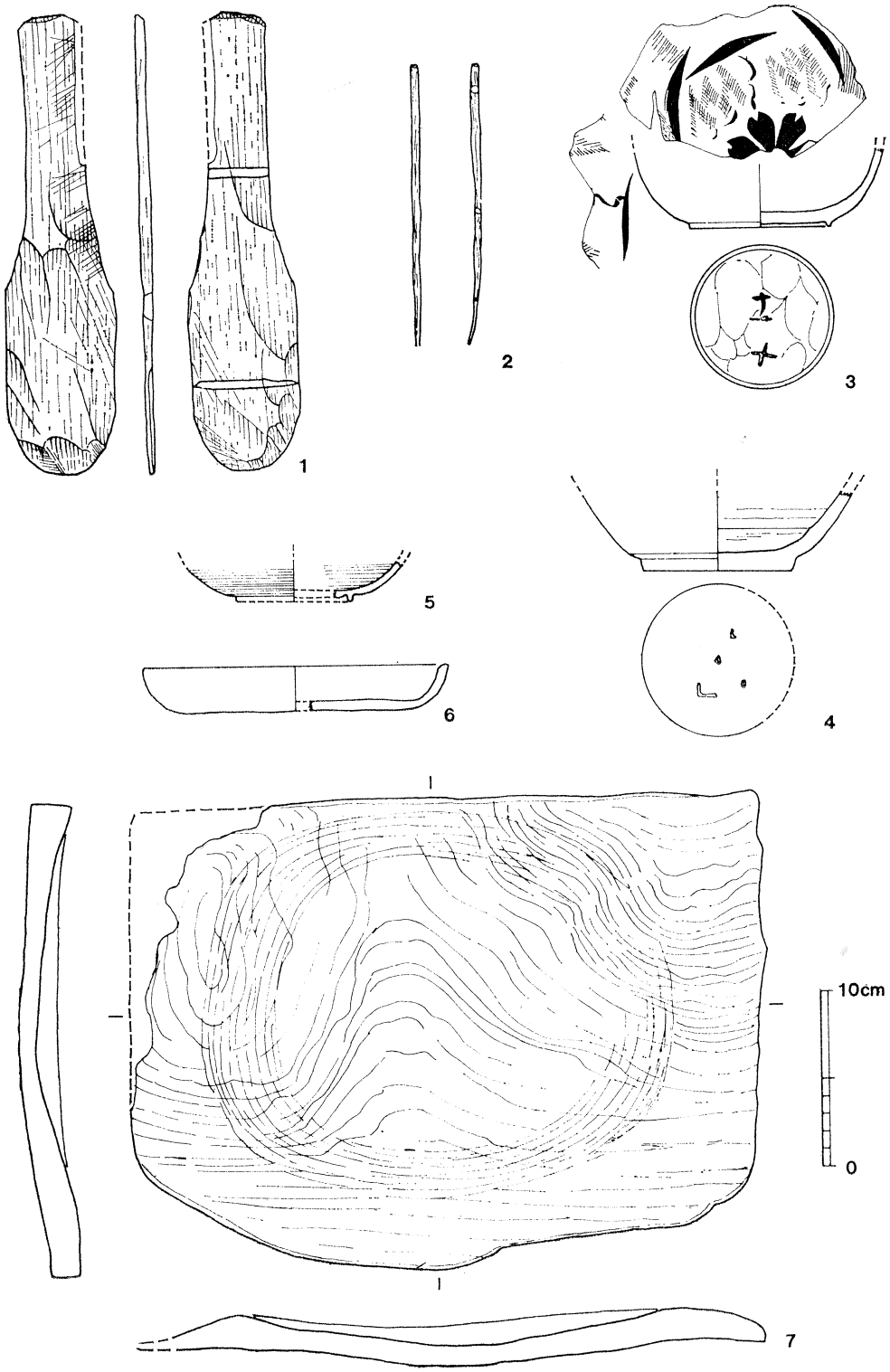
椀は高台内面を除き入念な下地加工が施され、その上に黒色漆が塗布されている。数回黒漆を塗布した後、体部外面および見込面に朱漆による漆絵が描かれている。見込面の絵柄は中央に桜あるいは山吹の花とみられる一輪と葉らしき文様を配し、それを左右上、三方から囲むように三日月形の隅どりが施されている。外面にも見込面で認められた葉様の文様が配されており、これらはいずれもつけたて風の手馴れた描法である。

なお高台内面にはほぼ中央に墨書があり、『±』と認められる。またその墨書の下方には刃物による『＋』の線刻が認められた。木取りの方向は横木取りで樹種はケヤキ材。

黒漆塗椀（第55図４）　口縁部および体部を欠損した現存径150㎜、高さ45㎜を測る黒色漆を塗布した椀である。

体部は口縁部に向って内湾しながらゆるやかな曲線をえがいて立ちあがり、器肉は比較的厚く内面の仕上げは粗い。底部には高さ７㎜の高台をもうけるが基底面はNo.３にみられるように内面を入念に仕上げるものとは異なり、一種のベタ高台を呈している。高台基底面には４点のロクロの爪痕が認められる。

現在漆はほとんど剝落しているが体部内外面および高台基底面に漆膜が認められること



第55図 木 製 品 実 測 図

から、全体に黒色漆が塗布されていたものと思われる。

木取りは横木取りで木目の緻密な四方柾材を使用し、樹種はカツラ材を用いている。

黒漆塗椀（第55図５）　口縁部および体部の⅔を欠損した現存径121㎜、高さ20㎜を測る黒漆塗椀である。

体部は口縁部に向ってゆるやかな曲線をえがいて立ちあがり、器肉は他のものと比較してやや薄い。底部外縁には高台がつき、高台端部を欠損しているが、器形から推すとさほど高台は高いものではなかったものと思われる。その内面は入念に仕上げているが漆は塗布されていない。体部内面および外面にはロクロ挽き作業の時点で生じた糸目（ロクロ目）が無数にはしる。これは装飾的な意図のもとに施されたのか否か即断の限りではない。高台を除く内外面には黒色漆が塗布されているが、糸目が明瞭に観察できる点などから下地を施すといった作業は行なわれず、直接木地に漆が塗布されたものと推定される。

木取りは横木取りで、樹種はケヤキ材を用いている。

黒漆塗皿（第55図６）　口縁径170㎜、高さ20㎜を測る黒色漆を塗布した皿である。他のものと同様にロクロで木地を挽き上げ、短い縁部は端反りする。

挽き上げた木地には丁寧な下地作業が行なわれたと思われる。ここで特に注意すべきは、口唇部に麻と思われる布を用いた布着せの技法が採用されていることである。この布着せの技法は漆芸技法の中では接合部の補強、あるいは薄い挽物木地の強度を増大させるため、または木地の木痩を防止するため等に行なわれるもので、いずれにしても丁寧な下地作業の一つであるといえよう。この様な下地工程を経て、その後は黒色漆が幾度となく塗り重ねられ、最後の仕上げは塗り放しで終えている。裏面中央には漆を短時間に、湿度の高い場所において乾燥させた場合に生じる、俗に『ちぢみ』と称される皺が認められた。また見込面には断文の現像があり、これは塗膜の老化現像による細かい亀裂で、乾性油（荏油）を含む漆を使用した時にみられるものである。またその周辺には使用痕とみられる擦痕が認められた。

木取りは横木取りとし、比較的緻密な柾目材を使用している。樹種はトチ材である。

板状木製品（第55図７）　隅丸の方形板状を呈す350×270㎜、厚さ15㎜の木器で、中央がややくぼむものである。凹部を持つ上面は、裏面と比較して磨滅していることが特に注意される。この磨滅は使用痕とみられ、形態から推すと、こね板（鉢）のような物を想定することができるが、今のところ具体的な用途は不明といわざるを得ない。類例を待って検討したい。

曲物容器　厚手の円形板に薄板を円筒形に曲げた側板を接合して容器とするもので、木

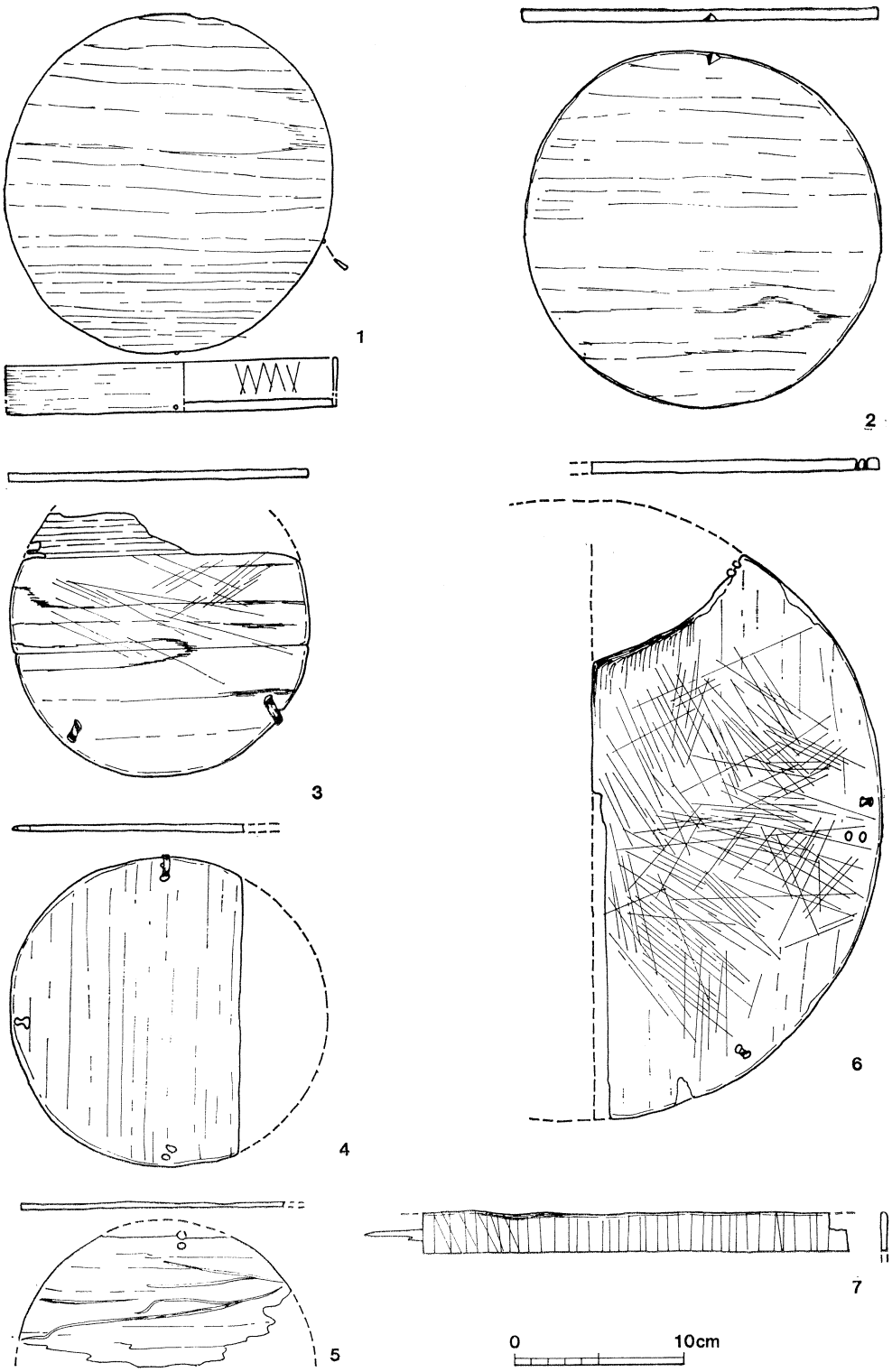
材を使用して行う刳物、挽物、箱物等にならぶ容器製作技法の一つである。

円形板と側板との接合方法は、紐状にした桜皮を用いて緊縛するものと、木釘を用いて固定するもの、両者いずれの痕跡も認められないものとがある。

いずれにしろ曲物容器は側板が薄いため破損しやすく、今回の調査で得られた資料にも容器の全様をうかがい得るものはなかった。

曲物容器蓋（第56図１～６）　いずれも曲物容器の蓋と考えられるもので、表裏を丁寧に削った板の周縁を鋭利な刃物で正円形に裁ち落している。この裁ち落しにさいし垂直に行うもの（２・３・６）と、外方に少し傾斜をつけるもの（１）とがある。（１）は円形に裁ち落したもの側面に側板を沿え、木釘を外面から打ち込んで固定している。その痕跡は５ケ所をかぞえ、ほぼ等間隔にめぐっている。木釘は、２本が打ち込まれた状態で現存しており、それらはほぼ４角柱を呈し幅の広い部分で３㎜、長さ10㎜を測る。この円形板状品には、現存幅20㎜、厚３㎜の側板とみられる木片が伴っており、この木片の片面には木理に交差する浅い刻線が数本あって、火を軽くうけた部分も認められる。出土時の観察では、いますこし幅があったように思われるが、それにしても容器の身にしては側板の立ち上りが少ないように感じられた。このことから蓋としておく方が妥当のように思われる。（２）は形態的には先に記したものと同様な円形板状を示す。特に他のものと異なる点は、側板装着痕が全く認められないことで、これは円筒形に曲げた側板に、はめ殺しの方法で装着固定されたものと推定される。ところで、この製品が曲物容器の蓋部となるのか、あるいは身の底板となるかは、にわかにきめ難いがただこのような方法によって装着されたものは、容器の底部とするにはいささか強度を欠くものと考えられる。このことから推すと、やはり蓋の甲板とすべきものであろうか。（３～６）は円形に裁ち落したものの、周縁には側板装着用の孔が穿たれている。この孔は２孔を１対としており、比較的よく形をとどめている（３・４）では、等間隔に３ケ所を認めることができる。一部を欠損しているが、その部分にも１対の孔が穿たれていたものと推定すると（５）にも４ケ所以上の孔があったものと考えられる。ただとりわけ直径の大きい（６）は、過半を失っているにもかかわらず４ケ所をかぞえることができる。それは、その大きさに応じて固定箇所数も考慮されていたと思われる。孔の中には紐状の桜皮が残存するものがあり（３・４・６）、これによって側板装着方法の一端をうかがうことができた。なお（６）には火を受けた痕跡が認められるが、これは二次的なものであろうと判断された。

曲物容器側板（第56図７）　曲物側板の一部で本来は円筒状を呈していたとみられるが、今はその大半を破損しており、幅の狭い薄板状を示し、やや湾曲する。一方の木端面には磨



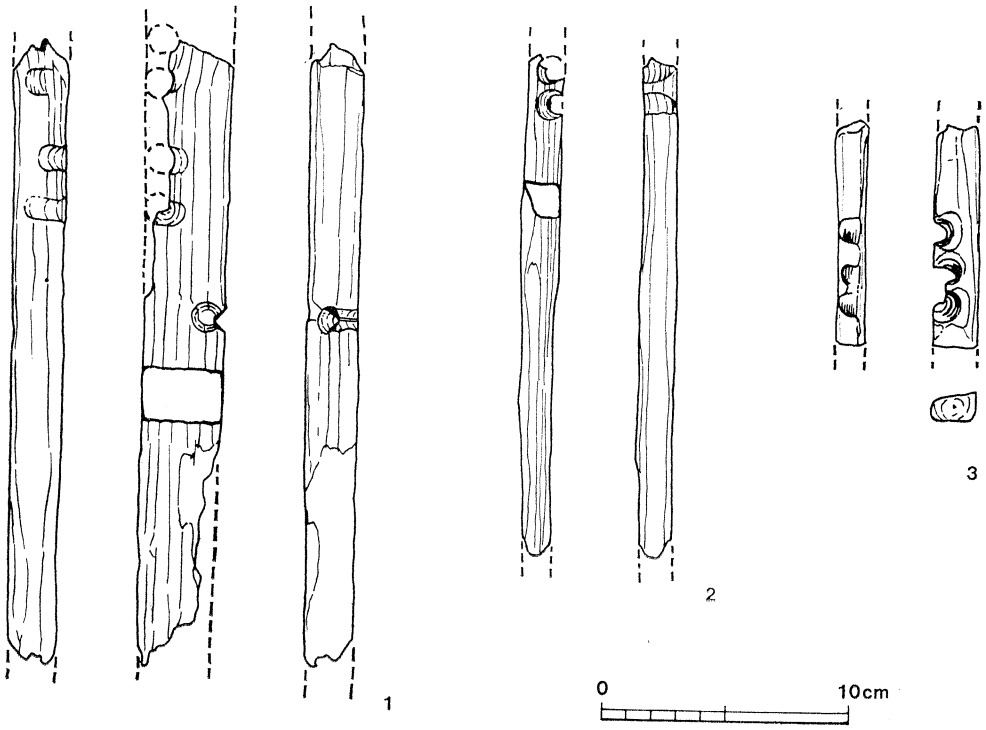
第56図　曲　物　実　測　図

滅痕が認められることから、口辺部であったことが知られる。

湾曲する内面には軽く火を受けたとみられる炭化した部分があり、さらに同面全体には、剃刀状の工具によったと思われる木理に交差する浅い刻線がみられる。この刻線はほぼ等間隔に規則的に施されており、その数45本をかぞえた。これからすると側板の作製に際しては、内面の木質繊維を浅く切断した後、火にかざしながら徐々に湾曲させ、円筒形に成形していったものと考えられる。

火鑽臼（第57図１～３）　３点あって、いずれも同様な框状の形態を示すものである。（１）は両端部を欠損しているが、他のものよりは比較的残存状態が良好で、木端面にＶ字形の切り込みを施し、その上面を臼部としている。一方の木端面に１ケ所、他方に４ケ所の使用痕が認められ、直径12㎜、深さ10㎜前後で焼け焦げている。

他の(２)(３)はそれよりすこし小さく細いもので、使用痕も一方に偏している。さらに、(１)と(３)が不整形であるといいながらも、断面は方形を示すのに対し、(２)はきわめて不整形であることが注意され、木片を無造作に使用したようである。(１・２)は柾目木取りとし、(３)は断面のほぼ中央に木芯をもっている。なお火鑽杵と思われる先端の焼け焦げた棒状の木片が出土しているが、太さがいずれの使用痕よりも大きく、それらと組合せにはならないものであると判断された。



第57図　火　鑽　臼　実　測　図

ところで（第65図５）は用途不明木製品として扱っているが、ここで火鑽杵の可能性もあることを示しておきたい。ただ使用痕が、認められないことなど積極的な根拠はないが、出雲大社の神事に使用される火鑽杵に、法量や形状が類似していることが特に注意される。(註1)

労　働　用　具

斧柄（第58図１）　幹と枝の二支の部分を利用した手斧の柄と考えられるもので鶴首状を呈す。柄尻を欠損するが、全体に面取りを施し形を整えるなど入念なつくりであったことがうかがわれる。刃部装着部は枘形に加工されており、袋状鉄斧が装着されたものであろう。

未成品（第58図２）　（１）と同様な斧柄の未成品と考えられるもので、柄尻となる部分を欠損している。木取の際の刃物痕は明瞭で鋭い。

楔状木製品（第58図３）　楔状を呈す木製品であるが先端部を欠損している。頭頂部は断面倒卵形を示し、先端部へいくほど末広がりとなり、肉も徐々に薄く仕上げられている。おそらく先端部は横一文字となり、いわば鉋刃のような形状を示していたものと思われる。

頭頂部木口面には、打撃によったとみられるささくれが認められる。これは何かに打ち込むような機能を備えたものであることをよく示しており、樹種が樫材であることも注意すべきことであろう。

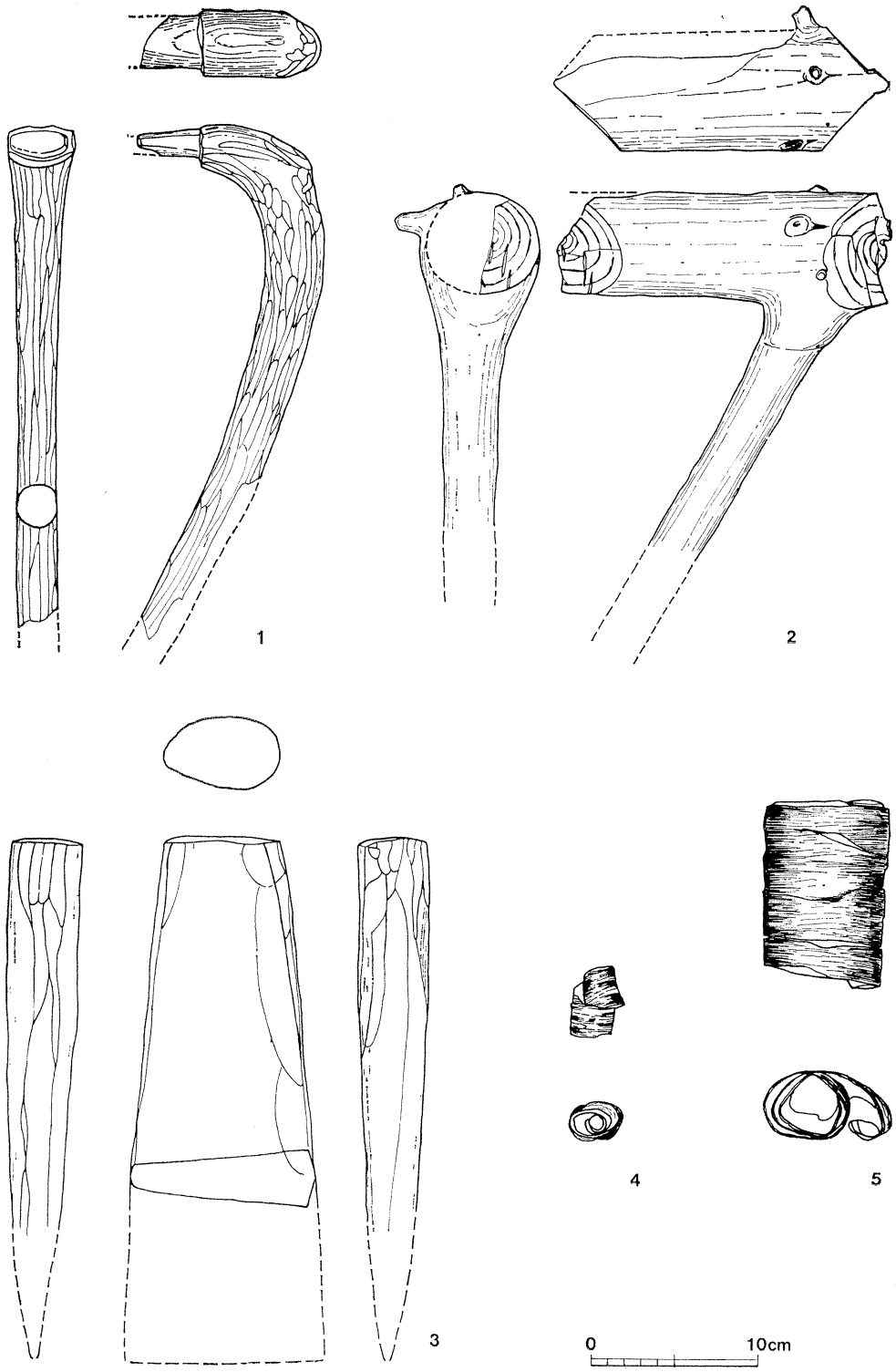
樹皮（第58図４・５）　人為的に剝ぎ取られた桜皮で、円筒状を呈し、（４）は幅23㎜、全長約105㎜、（５）は幅95㎜、全長約500㎜を測る。これは曲物の側板の縫合せ、側板と蓋板等の緊縛に使用されるものであろうか。

把手状木製品（第59図１～３）　鋤あるいは櫂等の柄上端部に、別木でＴ字形に装着されたと思われる把手で円柱状を呈す。ほぼ中央に方形の枘孔が貫通し、把手と柄の固定に際しては、それに直交する方向から木釘が打ち込まれている。木釘は、その孔から推すと断面方形のもの（１）、と断面円形のもの（３）があったことが知られる。

（２）は木釘痕が認められないことから、はめ殺しの技法によったものと思われる。いずれも木口は入念な面取り仕上げが施されている点、丸木を適当な長さに切断した芯持ち材である点など、共通した要素といえよう。

円柱状木製品（第59図４）　形態的には先の把手状品に似るが、枘孔や木釘孔は認められない。一方の木口面は切断した後、入念に削ったとみられる刃物痕が認められ、他方の木口面には、鋸状工具によったとみられる切断痕がある。用途は不明である。

把手状木製品（第59図５）　鉄製鎌の装着部とみられるもので、柄尻過半を欠損する。頭頂部の木口を蕨形に加工し木端面には、幅５㎜長さ40㎜の方形孔が貫通する。この孔に



第58図 木 製 品 実 測 図

鎌刃が挿入され、固定するに際しては木製の楔のようなものが使用されたものと思われる。特に注意すべきは、柄と刃部装着角度が鈍角を示すことでおおむね125度を測る。

田下駄状木製品（第60図１・２）　（１）は隅丸六角形板状を呈し、長さ307㎜、幅232㎜、厚さ20㎜を測る。ほぼ中央に相対して計４箇の孔が貫通している。木質は比較的緻密な杉の柾目材を使用しており、木口及び木端面には著しい磨滅痕が認められる。

（２）は両端を欠損しているが、一方の破面木口には１箇、他の破面には２箇の貫通孔が残存している。本来はいますこし長いもので、柳葉形を呈していたものと思われる。両者は、形態から推すと水田作業に使用される田下駄と呼称されるものにあたると考えられた。

このような通称田下駄と呼ばれるもののなかには、法量や形態、さらに今日の民俗例から推すと機能的にも異なるものがあって、呼称も使いわける必要があることが指摘されている。(註２) すなわち水田用の下駄には、肥料等の運搬や稲刈りのために着用する『ナンバ』と称されるものと、苗代や本田に青草や積み肥を埋めこむ作業、さらに代の耕作土を細かく練るための代踏み用の『大足』と称されるものがあることが知られている。

ここでは（１）を形態上の特徴から前者に、（２）は後者に属するものであろうと判断した。

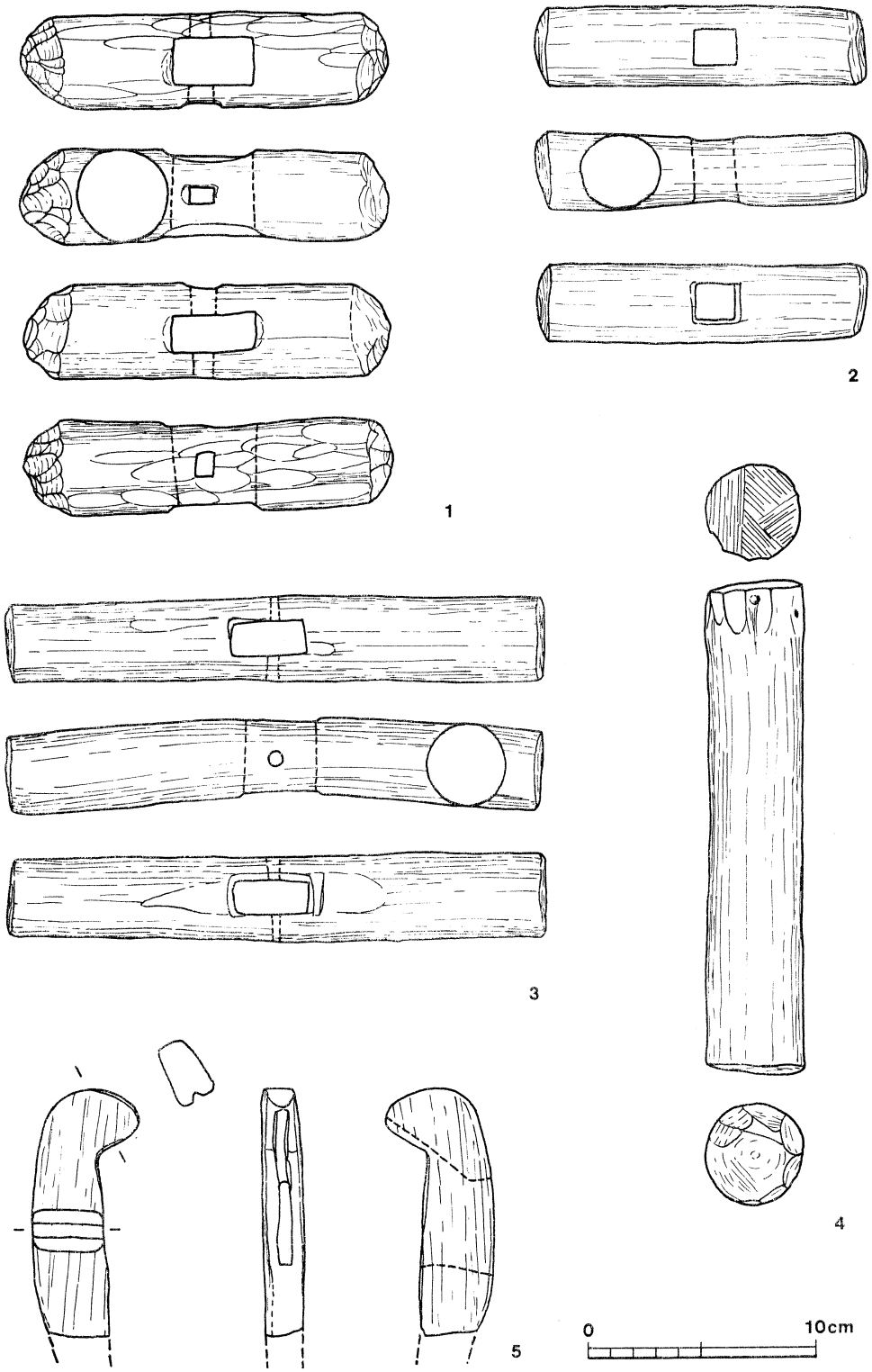
なお（第60図３）は框状を呈す木片で、木端面には約40㎜間隔に３箇の方形孔が認められた。これは前述した大足の木枠と推定されるもので、方形孔には框材が組まれ、はしご状をなしていたものと思われる。出土地点は異なるが（２）はこの木枠の中央に踏板として固定し使用されていた可能性も考慮されよう。このような田下駄の検出は、当時周辺の耕作土がきわめて軟質であったことをよく示しており、後述する鋤が木製であっても十分機能したであろうことは想像に難くない。

ところで、ここで県内で出土した田下駄状木製品の類例を記しておきたい。これらは使用方法等を推測するうえに数少ない出土例として貴重なものと云えよう。

（第61図１・２）は邇摩郡仁摩町打落し遺跡出土の田下駄状木製品で両者とも長方形板状を呈しており、（２）などはタテチョウ遺跡出土の（１）とほぼ同様な形態を示している。ただ（１）は中央に２箇の貫通孔を穿っていることが異なる点として注意される。

（３）は邑智郡石見町池の尻遺跡出土のもので、柳葉の両端を切断したような平面船形を呈す。両端部付近に各１箇、中ほどに３箇の貫通孔が穿たれている。中ほどにある３箇の孔は足を固定するための鼻緒孔であろう。また両端部にある計２箇の穴は枠木に緊縛するためのものと思われる。

この３点の田下駄状木製品を見ていくと、（第61図１・２）は鼻緒装着用の穿孔位置から推して、足を置く方向は木理に直交する形で、横長に使用したものと思われ、（第60図１）



第59図 木 製 品 実 測 図

も同様のものとみられる。(第60図２）は（第61図３）と同様に木理方向に足を固定するものであろう。

なな、潮田鉄雄氏から（第61図Ｉ）について鼻緒孔が２孔しかなく、他に足を固定するための加工が認められないことなど田下駄とするには機能的に不都合な点が多いとの御指摘をいただいている。

船状木製品（第60図４）　丸木船の艫形を呈し、断面は半円形を示すが過半を欠損している。幅75㎜で中央部の器肉は薄く刳られており、材質は木理の緻密な柾目材を使用している。先端部には磨滅痕があるが、それが使用痕であるか否かは即座には決め難い。

このような形態の木製品は各地で発見されることが多い[註3]が、それらと比較した場合、この木製品の法量が著しく小さいことが注意され用途については不明である。

鋤状木製品（第62図１～３）　（１）は鋤と考えられる木製品で柄の一部を欠損しているが、ほぼその全容をうかがうことのできるものである。鋤身は柄は直線をなす共木から削り出されており、身の長さ225㎜、幅90㎜を測り、柄尻は、握りこぶし状に粗く面取りをしておさめる。身幅は狭く、肩部はなで肩を呈すことから踏鋤ではなく、櫂であった可能性も考慮されるが、最近の類例等[註4]から鋤として扱うことにした。

なお近年各地で発見される鋤のなかには、柄の端部を柄状に加工し、別木で作った第59図１～３）をＴ字形に装着するものも知られている[註5]。

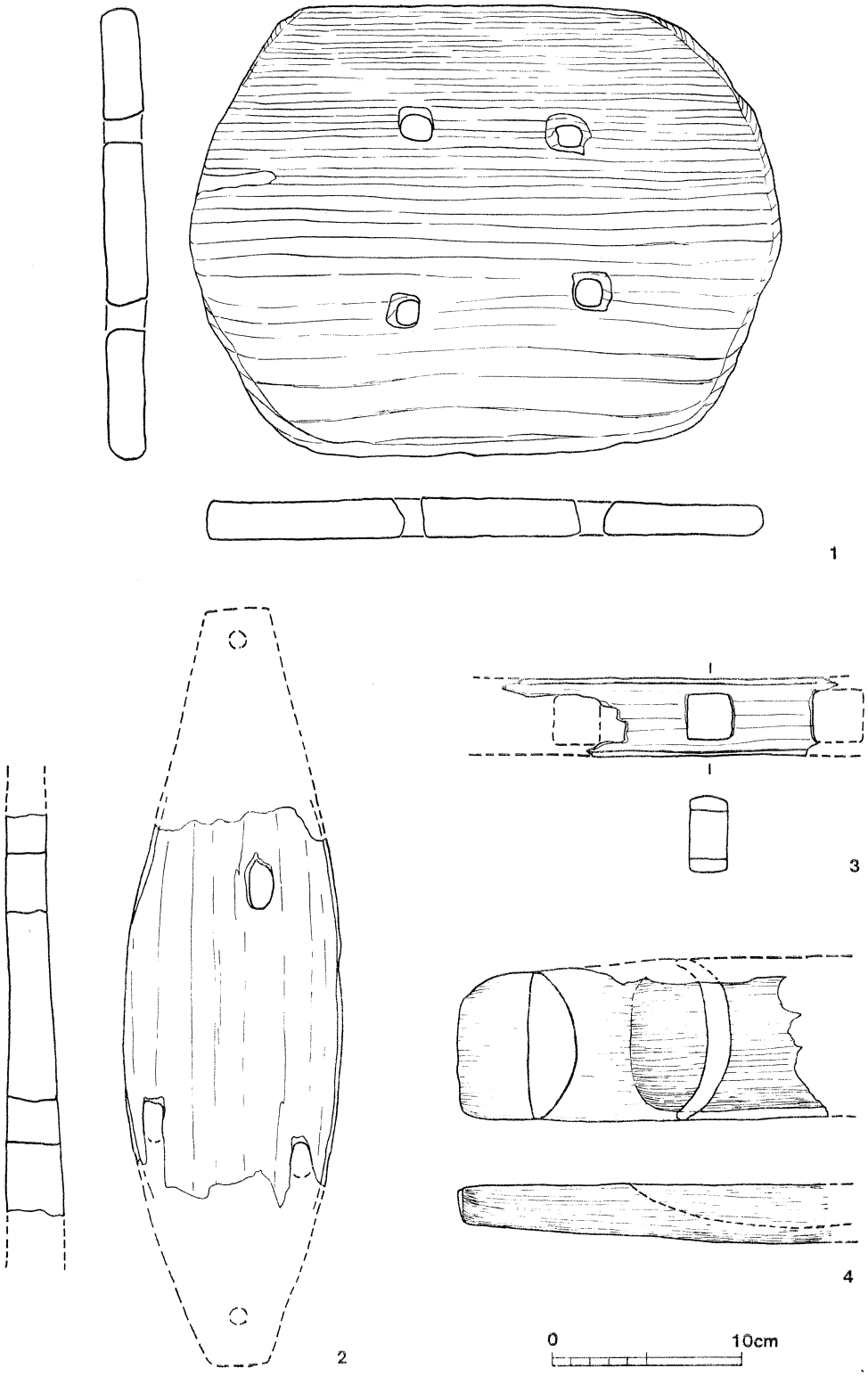
（２）・（３）も鋤としたもので、（１）と比較すれば、肩部がほとんど認められない点、先端部がやや突りぎみである点など異なる形状を示すが、先端部に著しい磨滅痕が認められるのは、この木製品が物をすくったり、突いたりする用途をそなえていたことを示している。なお樹種は（１）・（３）が樫材、（２）は不明である。

これらの木製品が農耕具として使用に耐えうるものであるか否か、きわめて興味深いことであるが、田下駄の項でも記しておいたように耕作土が軟質であったことがうかがわれ、そのような土質には幅の広い鋤を用いるよりも、狭いものの方が土離れ等が良好であって有利であろう。また土質あるいは作業内容によっては、踏鋤でなくとも目的は十分に果し得たのではなかろうか。

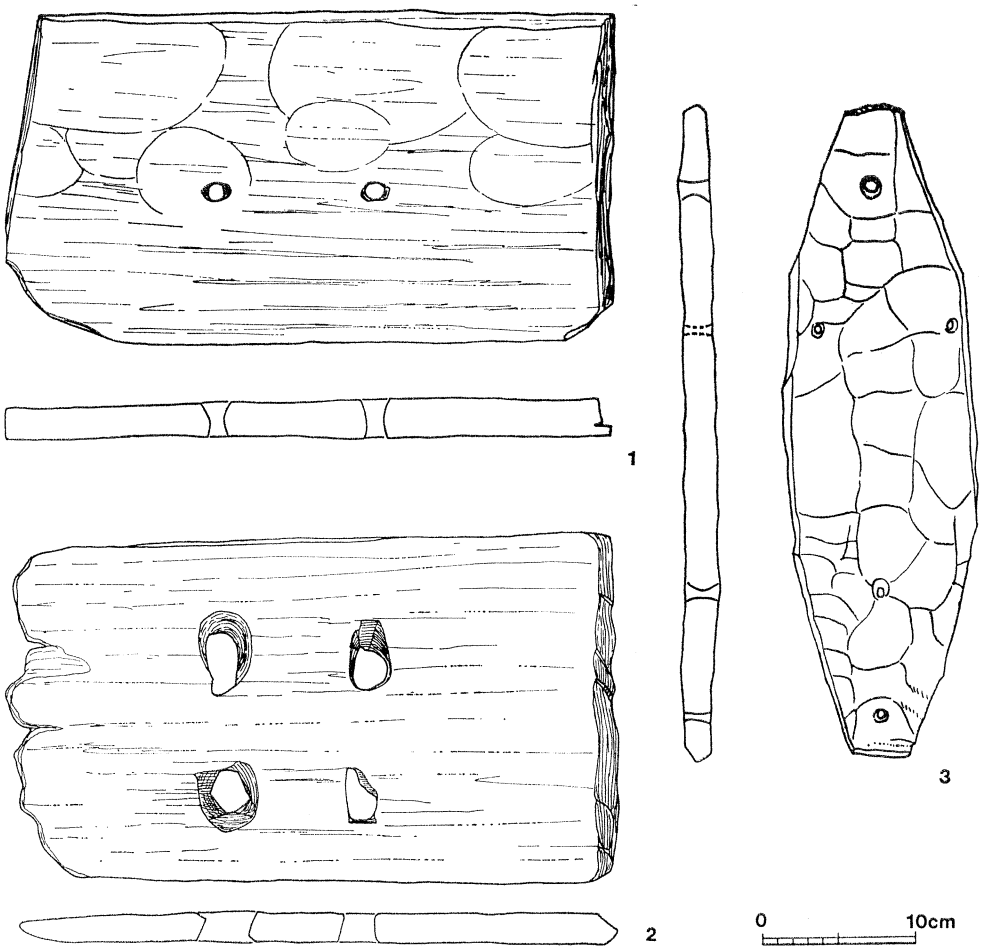
蛮刀形木製品（第62図４）　形態的には『ふぐし』[註6]と称されるものに似るが、農耕具とするにはやや薄く仕上げているため、機能的には不適当である。用途は不明である。

櫂状木製品（第62図５）　扁平な板材を加工して作り先端はＵ字形を呈し、断面はレンズ状をなす。上半部を欠損するが、頸部や柄部は共木で削り出されていたものと推測される。

形態としては、鋤として示した（３）に類似するが、樹種が軟質なものであることなどを



第60図 木 製 品 実 測 図

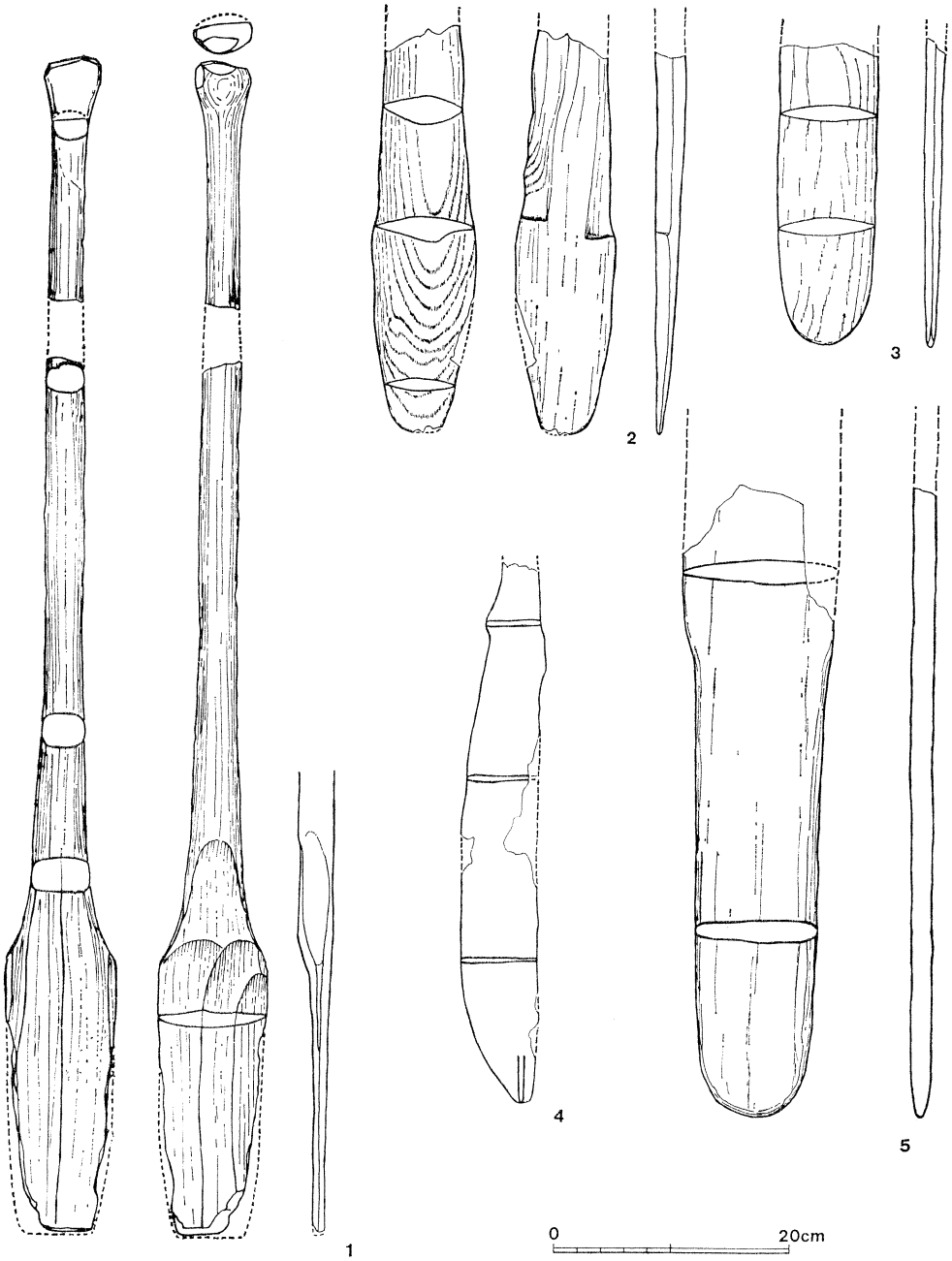


第61図　田　下　駄　実　測　図

考慮すれば、異なる用途が考えられるであろう。ここでは軟質な樹種でも耐え得るような用途として、櫂をかかげておいた。

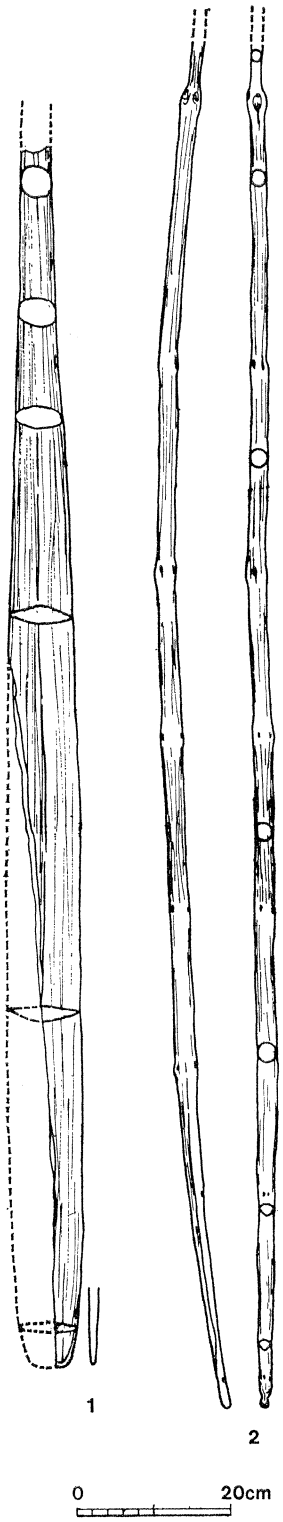
櫓状木製品（第63図１）　櫓と考えられるもので柄上端部及び穂の部分を欠損しているが、本来の形状をうかがい知ることは可能である。柄の部分は断面円形を示し、穂は先端部に向うほど薄く削られ、断面はレンズ形を示す。身の片面には中央に木理に沿って鎬がはしっている。残存長は1500㎜、幅85㎜、柄部の径48㎜を測る。樹種は竪材で木質の状態も比較的良好である。

丸木弓（第63図２）直径25㎜ほどの立木をそのまま利用して作った丸木弓で上弭の部分を欠損しているが現存長は1745㎜を測る。本来この立木には、ほぼ等間隔に８ケ所、小枝が派生していたとみられ、それらを切り落し入念な面取りが施されている。現存する端部



第62図　鋤状木製品実測図

は立木の木元にあたり下弭が削り出されている。この下弭から630㎜上方に長さ220㎜ほどの心もち細くなった箇所があり、ここが握り部分であろう。これより欠損部までは895㎜を測り、上長下短型弓の形態を示している。下弭付近の太さから推すとこの弓はいますこし長く、200㎜近くあったものと思われる。



第63図　丸木弓・櫓状木製品実測図

なお弓身には樋を掘るとか、桜皮を巻いた痕跡は認められなかった。樹種は弾力性に富むカヤの木が使用されている。

用 途 不 明 品

有歯板状木製品（第64図１～３）　三者ともに形状や法量等が類似している。さらに長方形板状を呈し、仮に表面とした面は平坦であるが、上端部付近で裏面へ向って曲折すること、その裏に木理と直交するかたちで、下駄の歯状の削り出しが認められることに共通性が認められる。そのなかで(２)は表面上半の木端に沿って、半円形の高まりが削り出されている。これらの削り出し等が、この製品の性格を知る手がかりの一つかとも考えられるが、現在のところ用途は不明である。なお(１)は、樫材である。

栓状木製品（第64図４）　棒状を呈し、先端部は徐々に細くなるが、鋭くはない。断面はほぼ円形を示して、全体に磨滅痕がある。

有刻木製品（第64図５）　断面半円形あるいは不整形な方形を示す棒状品で削り出しの双耳を有す。両端部を欠損していることや、全体に磨滅しているため使用痕は認められない。

小判形木製品（第64図６）　小判形を呈し横断面は凹レンズ状を示す。両木端は裏面へ湾曲し、表面下半部には、木理に直交した幅15㎜、深さ５㎜の溝が施されている。この溝から下端部にかけては面取りがなされ粗い刃痕が残存する。上端部両側には木理に沿って浅い溝状の傷が下方へ向って走っており、これは、使用痕とみられるが、それから用途は推し難い。

有刻木製品（第64図７）　幅の狭い板材の両端を細く尖らせ、中央の木端には半円形の刳込みが施されている。

板状有刻木製品（第10図８）幅の狭い板状を呈すもの

で、片方の木端には⌒形の欠き取りが認められる。端部は不整形なU字形をなすが、他方は欠損しているため不明。片面のほぼ中央には木理に沿って断面V字形の樋が施されている。

こけし形木製品（第64図９）　こけし形を呈すもので、丸木材を使用しており両端及び頸のくびれ部以外には加工痕はない。頭部上端の木口面は粗い面取りが認められた。木肌の部分には各所に樹皮が残存しており、本来樹皮の付いたままのものを使用していたことが知られる。特に注意すべきは頸部のくびれ部及び、下端部木口面には鋸状工具によったとみられる切断痕が認められる。これは使用工具の形態を推測するうえに、良好な資料であるといえよう。このような切断痕のあるものは前述した(第59図４)にも認められる。

有刻木製品（第64図10）　一見現在の下駄歯の部分のようにもみえるが用途は不明。

軸状木製品（第64図11）　棒状を呈したもので、一方の端部は欠損しているが、残存長は385㎜を測る。破損をまぬがれた方の端部には、こけし状の削り出しがある。全体に入念な面取りがなされていたとみられるが、中ほどの部分220㎜にわたって面取りの稜線が磨滅し、不明瞭となっている。このことから、何かを巻く軸のような用途があったのではないかと推測される。

荷ない棒状木製品（第65図１・２）　両者とも有刻棒状木製品とでもいうべき形状を示し、丸木材を使用して端部に欠き取り加工が施されたものである。(１)は荷ない棒かとも考えられるが、荷を運搬するにはいささか短かい。なお両者とも使用痕は認められない。

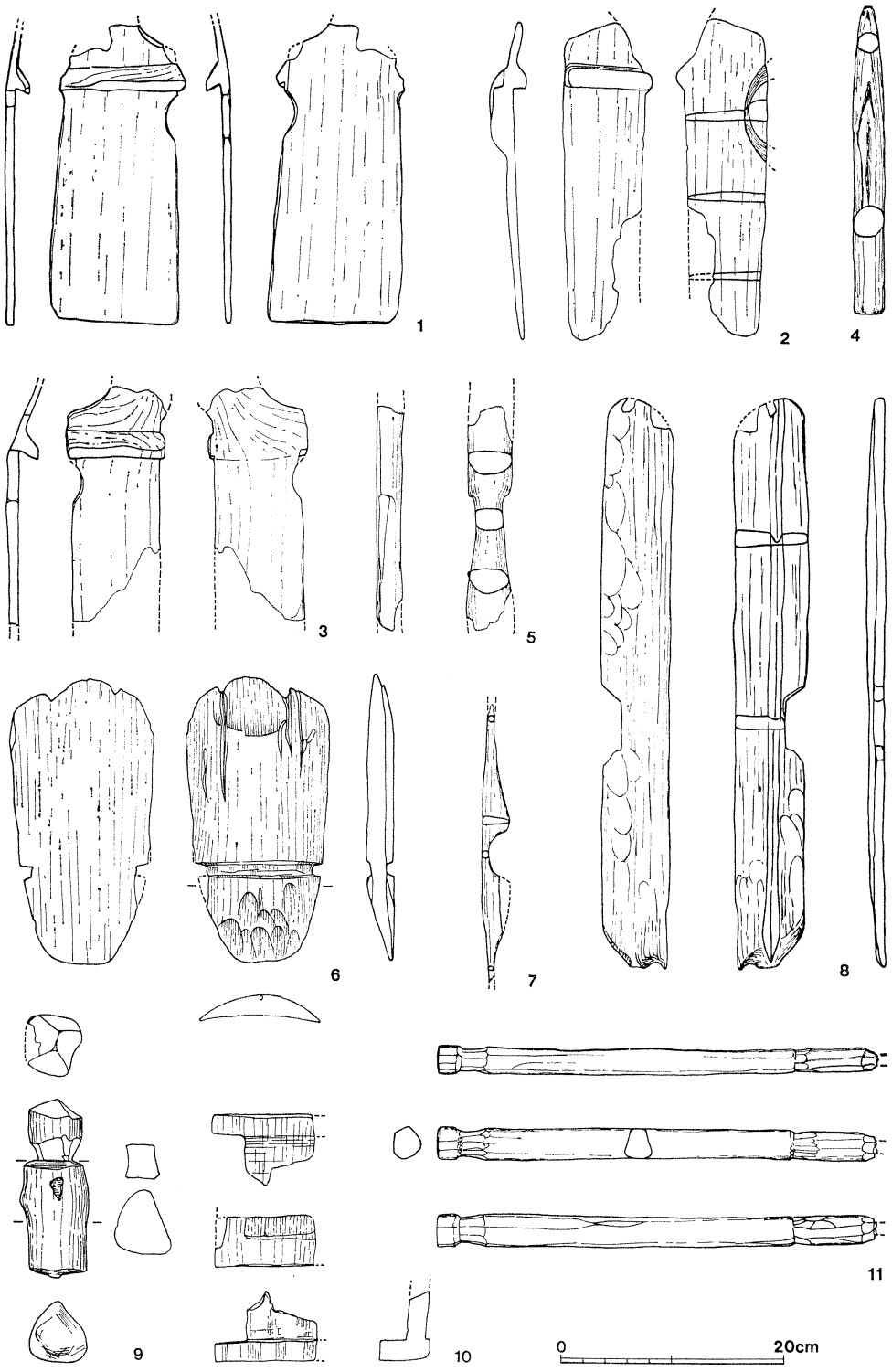
貫板状木製品（第65図３）　細長い板状を呈すもので、一方の端部を欠損するが他方の端部は垂直に切り落している。木端の各角は軽く面取り加工が施されている。

先端加工木製品（第65図４）　棒状を呈す。木肌は軽い面取りが施されており、他方の端部は杭状に削って尖らしている。

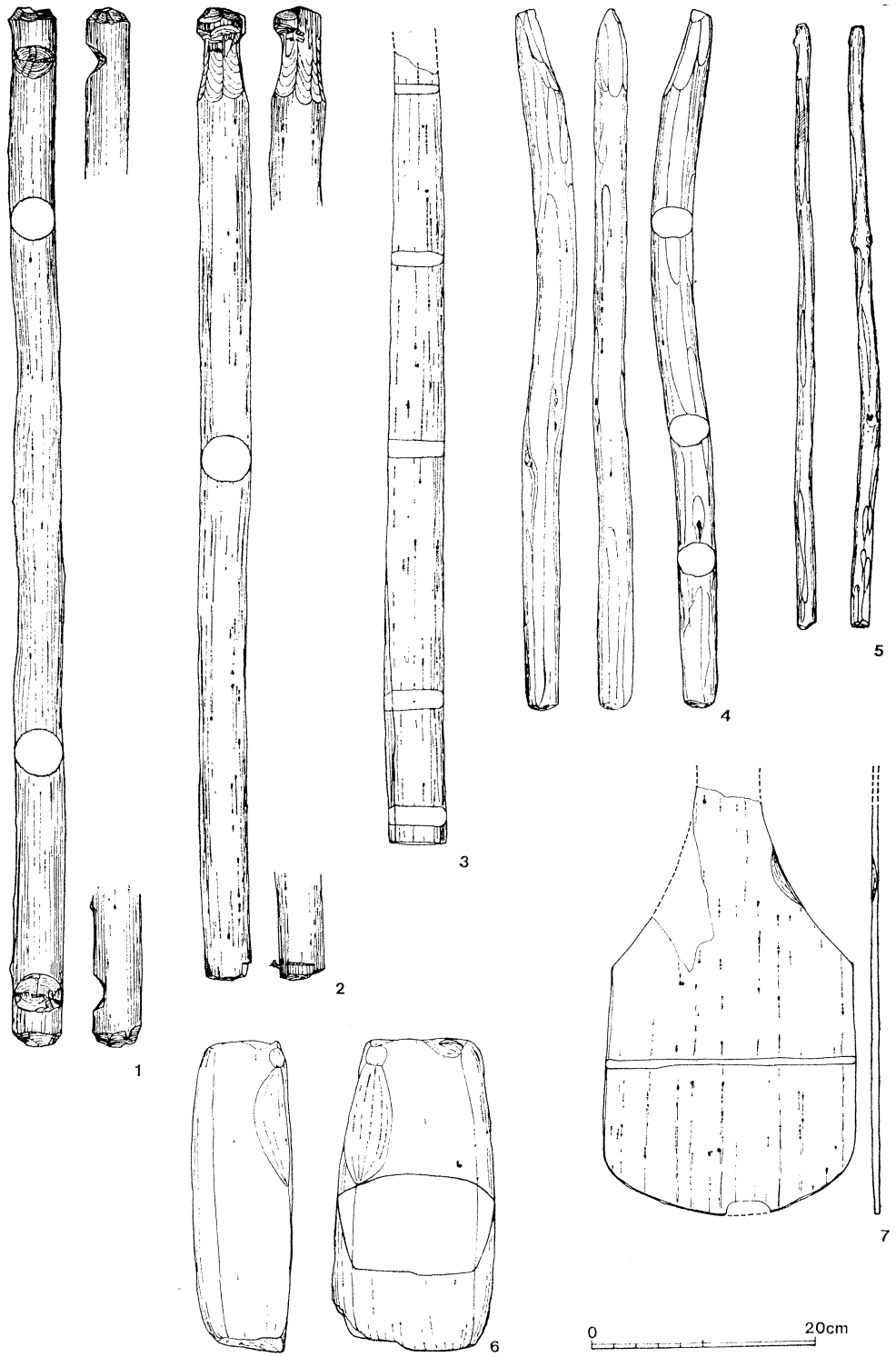
小枝状木製品（第65図５）　木の枝を、そのまま利用したもので、それから派生する数本の小枝を、その元の部分で切断し、その後入念な面取りを行なっている。先端木口のあたりに磨滅痕がある。

未成品（第65図６）　厚みのある長方形台状を呈し、断面は不整形な台形をなし、全体に、流出時に生じたとみられる磨滅痕が認められる。形態から鍬の未成品かとも思われる。

杓文字状木製品（第65図７）　扁平な板材を加工してつくる杓文字状木製品で柄の上部を欠損している。身の先端部は大きく弧をえがき、柄は身の両側辺からゆるやかな曲線をもって削り出され、頸部に移る折曲点は稜角をなす。頸部木端面には一方の面から半円形のえぐりが施されている。身のほぼ中央に相対して径10㎜の貫通孔が２箇穿たれている。この孔は横方向にならび、その間隔は50㎜を測る。この孔及び頸部の半円形のえぐりは添



第64図　木　製　品　実　測　図



第65図 木 製 品 実 測 図

え木のようなものを緊縛するための加工であったと考えられる。身幅は225㎜，厚さ5～7㎜を測り、全体に薄い作りであることが特に注意される。

小　結

他の遺物同様、層位関係が無秩序で、明確な時期はおさえにくいが、類例などから二三これら木製品についてその所属年代を考えてみたい。

まず、第55図に示した杓文字や漆器類などは、いずれも厨房具として奈良時代以後に認められるものである。このうち同図3の黒漆地に朱漆で絵を施した椀は、比較的新しい時期に属するもののように感じられるが、付近出土の須恵器の型式からすると、さほど新しいものでもないようである。椀に漆絵を施す技法は、鎌倉時代以後に多く見られるものであるが平安時代の和鏡の図柄(註7)に類似したものが認められるので、平安時代までさかのぼる可能性も考慮されよう。第55図6の黒漆皿は、平城宮跡などにも出た例があり、奈良時代のものとみてあやまりなかろう。この皿には口唇部に類例の稀な布着せの技法のみられるのが注意される。同図4、5の黒漆椀は、技法が簡単で器形からみても時期的にさきの品よりやや下るものと思われる。

第56図の曲物容器は、手法に若干の差がみられるものの大きさなどには一定の規格性も認められる。曲物類の上限については弥生後期のものが知られているが(註8)、本遺跡の品は、漆器類などとほぼ同様な時期のものとみた方が無難と思われる。

第57図の火鑽臼は、木端面にV字形の切り込みを入れ、その上部を臼部とするもので、山陰では古墳時代中期に属する事例が知られている(註9)。鉄鎌の柄と考えた第59図の5は、第Ⅲ調査区のしがらみ状遺構の杭に接して出土していることから奈良時代の遺物と考えられる。

他の木製品についてはいまのところ明確な時代を推定する根拠をもたないので今後の類例の増加をまって改めて検討してみたい。　　（三宅博士）

註1　出雲大社社務所「火燧臼・火燧杵」『出雲大社』
2　潮田鉄雄「履物研究の将来―はきものの民族学―」『民具論集』2（昭和45年）
3　後藤守一「木器」『登呂』（昭和24年）
4　大阪文化財センター「農具」『池上遺跡』（昭和52年）
5　浜松市教育委員会「伊場遺跡遺物編Ⅰ」『伊場遺跡発掘調査報告』第3冊（昭和53年）
6　木下忠「農耕技術の展開」『歴史公論』4巻3号（昭和53年）
7　保坂三郎『和鏡』（昭和48年）
8　岡山県教育委員会「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16（昭和52年）
9　鳥取県岩美郡福部村栗谷宮下、栗谷遺跡、鳥取市良田塞ノ谷遺跡出土の例があることを亀井熙人氏の教示によって知った。

木製品一覧表

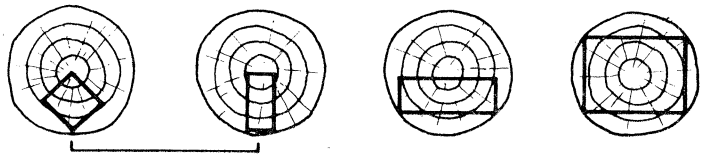
凡　　例

(1) 挿図番号　本表と挿図番号は、一致するように配慮した。

(2) 名　　称　使用法が判明するものは、それに従い、用途不明のものについては形状あるいは手法を呼称として明記した。

(3) 法　　量　法量は、全長・幅・厚さまたは直径の順で明記し、単位は㎜を用いた。折損品には（　）を付して現存長を示した。

(4) 木 取 法　木取法は、下記に示したように木目の方向によって判断した。



(5) 手　　法　手法については、①丸物、②刳物、③挽物、④曲物、⑤板物　⑥面取りに分けた。

①丸物は、横断面の年輪が一巡する程度に加工されているものとした。

②刳物は、横挽きロクロを使用しないで凹面加工の施されているものとした。

③挽物は、横挽きロクロの使用がなされていると判断したものとした。

④曲物は、薄板材を筒形に湾曲させて器とする技法のものとし、蓋や底板も便宜的に曲物として扱った。

⑤板物は、横断面の年輪が一巡せず表面、裏面が平坦なものとした。

⑥面取りは、框あるいは板物の四方の面を除去したものとし、棒状の形態を示すものもこれに含めた。

(6) 特　　徴　製品の形態、手法を中心に各所に残る加工痕、あるいは使用痕等を記した。

(7) 樹　　種　樹種については、確実に判明したもののみを記すことにした。

(8) 出土地区　出土地区については、調査時に定めたグリッド名に従った。

表8　木製品一覧表

名称	挿図番号	法量(mm)	木取法	手法	特徴	樹種	出土地区
杓字状木製品	55—1	長 267 巾 60～34 厚 5～3	柾目	板物	柄は身の両側辺から直線的に削り出す。身の先端はU字形を呈す。	スギ	第Ⅱ区 G14—1
箸状木製品	55—2	長 160 径 5～3	不明	面取り	細い棒状を呈し、断面は丸みをおびた三角形を呈す。	不明	第Ⅲ区
黒漆地漆絵椀	55—3	直 (140) 高 (35) 厚 6～4	不明 (横木取)	挽物	内外面黒漆地に朱漆で桜、山吹様の漆絵が施されている。高台内面には墨書、刃物による線刻あり。	ケヤキ	第Ⅱ区 G12—1
黒漆塗椀	55—4	直 (150) 高 (45) 厚 10～7	柾目 (横木取)	挽物	高台基底面には4点の横軸ロクロの爪痕が残存。 椀内面は粗く仕上げられロクロ挽痕が残存す。全面黒漆塗。	カツラ	第Ⅱ区 F11—1
黒漆塗椀	55—5	直 (121) 高 (20) 厚 4	柾目	挽物	椀内外面に数条のロクロ目が認められる。高台内面には漆の塗布された痕跡は認められない。	ケヤキ	第Ⅱ区 G12—1
黒漆塗皿	55—6	直 170 高 26 厚 6	柾目	挽物	内外面黒漆塗り放し。 口縁には布着せが施されている。	トチノキ	第Ⅰ区 E13—1
板状木製品	55—7	長 340 巾 270 厚 17～11	板目	板物	ほぼ方形板状を呈す。中央がやや凹み、凹み面は裏面より磨滅が著しい。	不明	第Ⅲ区 C12
曲物蓋	56—1	直 197 厚 5	板目	板物	板目材を使用して円形甲板とす。甲板と側材との接合は木釘で行い、5ケ所をかぞえる。	スギ	第Ⅱ区 E13—3
曲物側板		巾 (20) 厚 3～2	柾目	曲物	薄い板状を呈す。木理に直交するカミソリ状工具によったとみられる刻線あり。		
曲物蓋	56—2	直 210 厚 7	板目	板物	板目材を使用して円形甲板とす。木釘痕・桜緊縛孔なし。	不明	第Ⅱ区 E14—1
曲物蓋	56—3	直 180 厚 5	柾目 ＋ 板目	板物	板目材2柾目材1の計3枚の板を接ぎ合せて円形の甲板とす。 甲板と側材との接合は桜皮で緊縛。	ヒノキ	第Ⅲ区 G10
曲物蓋	56—4	直 183 厚 5～3	柾目	板物	柾目材を使用して円形甲板とす。側材との接合は桜皮で緊縛す。その痕跡3ケ所あり。	不明	第Ⅲ区 F10
曲物蓋	56—5	直 (180) 厚 5～3	板目	板物	円形甲板の1部。健材との接合は桜皮で緊縛。その痕跡1ケ所あり。	不明	第Ⅲ区 G10
曲物蓋	56—6	直 (370) 厚 6	柾目	板物	2板以上の接ぎ合せからなる円形甲板、側材との接合は桜皮で緊縛す。緊縛箇所4ケ所が残存。一部に二次的な焦痕あり。	不明	第Ⅲ区 G10
曲物側板	56—7	長 (240) 巾 (24) 厚 2～5	柾目	曲物	薄い板状を呈す。湾曲した内面には木理に直交してカミソリ状刃物による刻線が全面に残存す。	ヒノキ	第Ⅱ区 D12
火鑽臼	57—1	長 (250) 巾 32 厚 21	柾目	板物	細い四角柱体を呈し両端は欠損す。木端に5個所の使用痕あり。	スギ	第Ⅱ区 F10
火鑽臼	57—2	長 (200) 巾 15 厚 14	柾目	板物	細い四角柱体を呈す。木端に2ケ所使用痕あり。	スギ	第Ⅲ区 G10
火鑽臼	57—3	長 (90) 巾 18 厚 12	芯持	丸物	細長い棒状を呈す。断面のほぼ中央に木芯あり。木端に3ケ所使用痕あり。	カヤ	第Ⅲ区 G10
斧柄	58—1	長 (300) 径 39～24	芯持	丸物	鶴首状を呈す。全体に入念な面取りがなされ、鉄器取り付部は枘形に加工されている。	タブノ木	第Ⅳ区 G11—3
斧柄形未成品	58—2	長 (250) 径 67～28	芯持	丸物	T字形を呈す。2ケ所の加工面には、鋭利な刃物痕が残存。	不明	第Ⅲ区 F10
楔状木成品	58—3	長 (235) 巾 116～70 厚 42～29	不明	面取り	末広がりの楔状を呈す。先端部を欠損。頭頂部の木口には打撃によって生じたとみられるささくれあり。全体に粗い面取り加工が施されている。	カシ	第Ⅲ区 F10—3

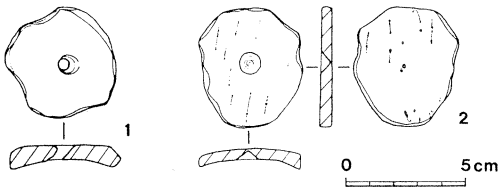
名　　称	挿図番号	法　量 (mm)	木取法	手　法	特　　徴	樹　種	出土地杓
樹　　皮	58—4	径 30 巾 23 厚 1			人為的にはぎ取られた樹皮で、曲物等に使用するためのものと思われる。今は筒状を示し全長約90‰を測る。	桜	第Ⅲ区
樹　　皮	58—5	径 70 巾 95 厚 1			人為的にはぎ取られた樹皮で、曲物等に使用するためのものと思われる。今は筒状を示し全長約500‰を測る。	桜	第Ⅰ区
把手状木製品	59—1	長 160 径 40	芯　持	丸　物	円柱状を呈し、ほぼ中央に長方形の枘孔が貫通し、それに直交して長方形の木釘孔が貫通。木肌は断面が正円形になるように入念な面取りがなされているが木口の面取りは粗い。	カ　ヤ	第Ⅳ区 D12—14
把手状木製品	59—2	長 235 径 35	芯　持	丸　物	円柱状を呈し断面は正円形を示す。木口は入念に刃物で削り上げを施す。木肌面の中央に長方形の柄孔が貫通し、それに直交して円形木釘孔が貫通す。	カ　ヤ	第Ⅲ区 E14
把手状木製品	59—3	長 145 径 33	芯　持	丸　物	円柱状を呈し、ほぼ中央に長方形の枘孔が貫通している。断面は正円形になるように成形され、木口面は入念な面取りがなされている。	不　明	第Ⅰ区
円柱状木製品	59—4	長 212 径 41	芯　持	丸　物	円柱状を呈す。枘孔の加工なし。一方の木口面に鋸状工具による切断痕あり。	不　明	第Ⅰ区
把手状木製品	59—5	長 (106) 巾 40～30 厚 18	芯　持	丸　物	一方の端部を厳形に加工し、木端のほぼ中央に不整形な長方形孔が貫通。下半部を欠くが鉄鎌の枘で刃部装着部であろう。	カ　シ	第Ⅲ区 D11—1
田下駄状木製品	60—1	長 307 巾 232 厚 20	柾　目	板　物	隅丸六角形を呈し、中央に相対して計4個の孔が貫通す。全体に磨滅が著しい。	ス　ギ	第Ⅰ区
下駄状木製品	60—2	長 (205) 巾 113 厚 27	板　目	板　物	下駄状を呈す。端部に1個他の端部に2個並んで楕円形貫通孔を有す	不　明	第Ⅱ区 E14—2
有孔框状木製品	60—3	長 (174) 巾 40 厚 20	板　目	板　物	框状を呈す。両端を欠損。3個の方形孔が等間隔に貫通している。	不　明	第Ⅰ区 G12—3
船状木製品	60—4	長 (200) 巾 75 厚 21～15	柾　目	刳　物	丸木船状を呈し断面は半円形を示す。木質の遺残状態は良好。	不　明	第Ⅳ区 G11
鋤状木製品	62—1	長 (921) 巾 92 厚 12 径 32	柾　目	面取り	スプーン状を呈す。柄の断面は楕円形を示す。柄の上端部は握りこぶし状をなす。	カ　シ	第Ⅰ区 E11
鋤状木製品	62—2	長 (332) 巾 82～65 厚 20	板　目	板　物	扁平な板材の先端をU字形に加工し、断面レンズ状を呈す。片側平担面には木肌が残存す。	不　明	第Ⅱ区 G14—2
鋤状木製品	62—3	長 (250) 巾 83 厚 14	柾　目	板　物	扁平な板材の先端をU字形に加工し、断面レンズ状を呈す。先端部に磨滅痕あり。	不　明	第Ⅰ区 G12—1
蛮刀形木製品	62—4	長 (435) 巾 64～31 厚 5～2	不　明	板　物	蛮刀形を呈し、全体に薄く加工されている。	不　明	第Ⅳ区 G11—4
櫂状木製品	62—5	長 (580) 巾123～102 厚 17～20	板　目	板　物	扁平な板材の先端をU字形に加工。断面レンズ状をなす。	不　明	第Ⅲ区 G11
櫓状木製品	63—1	長 (1501) 巾 80～40 厚 38～25	柾　目	面取り	柄上端及び先端部を欠損。柄の部分は断面円形を呈す。身はレンズ状を呈し先端へいくほど薄く加工している。片面には木理に平行して鎬がはしる。	カ　シ	第Ⅲ区 F10
丸　木　弓	63—2	長 (1745) 径 17～25	芯　持	丸　物	立木をそのまま利用して弓としている。木元に本弭を削り出す。末弭は欠損す。	カ　ヤ	第Ⅲ区
有歯板状木製品	64—1	長 (270) 巾114～110 厚 8～6	不　明	板　物	長方形板状を呈し、裏面上部には断面台形の歯が木理に直交する形で削り出されている。木端上部には半円形の刳込みあり。	カ　シ	第Ⅱ区 E11—1

名　　称	挿図番号	法　量 (mm)	木取法	手　法	特　　徴	樹　種	出土地区
有歯板状木製品	64—2	長 (280) 巾 78 厚 20～7	不　明	板　物	長方形板状を呈し、裏面上部には断面台形の歯が木理に直交する形で削り出されている。	不　明	第Ⅳ区
有歯板状木製品	64—3	長 (206) 巾 87～70 厚 10～4	板　目	板　物	長方形板状を呈し上部は裏面に向って20度の傾斜をもって屈曲している。裏面上部には断面三角形の歯が木理に直交する形で削り出されている。上部木端面には半円形の刻込みあり。	不　明	第Ⅲ区 D11—4
栓状木製品	64—4	長 (273) 径 9～27	板　目	面取り	棒状を呈し、先端は徐々に細くなる。断面はほぼ円形を示す。	不　明	第Ⅰ区 E12—4
有刻木製品	64—5	長 (197) 巾 40～27 厚 20	不　明	面取り	棒状を呈す。断面半円形あるいは不整形な方形を示す。削り出しの双耳あり。	不　明	第Ⅲ区 D10—2
小判形木製品	64—6	長 256 巾 121～95 厚 15	柾　目	板　物	小判形を呈し、内面にやや湾曲。外面下半部には木理に直交した細い溝がはしる。良質の柾材を使用。	不　明	第Ⅱ区
有刻木製品	64—7	長 (245) 巾 25～6 厚 8～3	柾　目	板　物	巾の狭い板材の両端を細く尖らせ、中央の木端に半円形の刳込みを施す。	不　明	第Ⅱ区
板状有刻木製品	64—8	長 501 巾 62～42 厚 6	板　目	板　物	幅の狭い板状を呈す。片方の木端には形⊔の欠き取りがある。片面には木理に平行して断面V字形の樋がはしる。破損していない端部木口にはU字形の浅いくり込みがある。	ス　ギ	第Ⅱ区 D14
こけし形木製品	64—9	長 160 径 62～30	芯　持	丸　形	こけし形を呈す。両端及び頸のくびれ部以外は加工痕なし。頸部下端部に鋸状工具の使用痕がみられる。	サカキ	第Ⅲ区 F10—1
有刻木製品	64—10	長 (63) 巾 93 厚 44	柾　目	不　明	各所に切り込みあり。	不　明	第Ⅰ区 D14—4
軸状木製品	64—11	長 (385) 径 28～21	柾　目	面取り	棒状を呈す。3ヶ所のくびれ部あり。一方の端部を欠くが他方は、こけし状を示す。全体に入念な面取りが施されている。軸の中ほどの部分は磨滅のため面取りの稜線が不明瞭となっている。	ス　ギ	第Ⅲ区 G10—4
荷ない棒状木製品	65—1	長 937 径 42	芯　持	丸　物	棒状の両端に⊔形の切込みあり。断面は正円形を呈す。	カ　ヤ	第Ⅲ区 F10—3
有刻棒状木製品	65—2	長 860 径 43～30	芯　持	丸　物	棒状を呈す。一方の端部にこけし様の加工を施し、他の一方は切断し面取りをする。	不　明	第Ⅲ区 D10—1
貫板状木製品	65—3	長 (730) 巾 50 厚 18～13	柾　目	板　物	細長い板状品で断面長方形を呈す。木端の各角は軽く面取り加工を施す。	不　明	第Ⅰ区 G11—1
先端加工木製品	65—4	長 625 径 35～31	芯　持	丸　物	棒状を呈す。全体に木肌には軽い面取りがある。一方の端部は杭先のように削って尖らす。	不　明	第Ⅲ区
小枝状木製品	65—5	長 540 径 11～7	芯　持	丸　物	棒状を呈し、全体に入念な面取りが施されている。木末の木口は磨滅している。	不　明	第Ⅲ区
未　成　品	65—6	長 260 巾139～105 厚 88	柾　目	面取り	断面台形を呈す。鍬の未成品かともみられるが疑問多し。	不　明	第Ⅲ区 C13
杓文字形木製品	65—7	長 (830) 巾 225 厚 7～5	不　明	板　物	大型の杓文字を思わせる。柄上半部欠損。肩は大きく張り出し、先端部は半円形を呈す。全体に使用痕なし。	カ　シ	第Ⅰ区 F13—2

7 土　　製　　品

土製品は量的に少ないが、紡錘車、土錘、土玉、土馬等が出土している。

紡錘車　（第66図）弥生式土器の破片を利用した径4～5㎝大、器肉0.3～0.5㎝の円形状のものが2個第Ⅰ調査区より出土している。周囲は荒く削られ不整形であり、1個は中央には1～0.5㎝大の孔が穿たれ、他の1個は中途まで穿たれている。これらの点より紡錘車およびその未製品と推定される。(1)は胎土が粗で、焼成が良く茶褐色を呈す。(2)は胎土が密で、焼成が良く黒色を呈す。

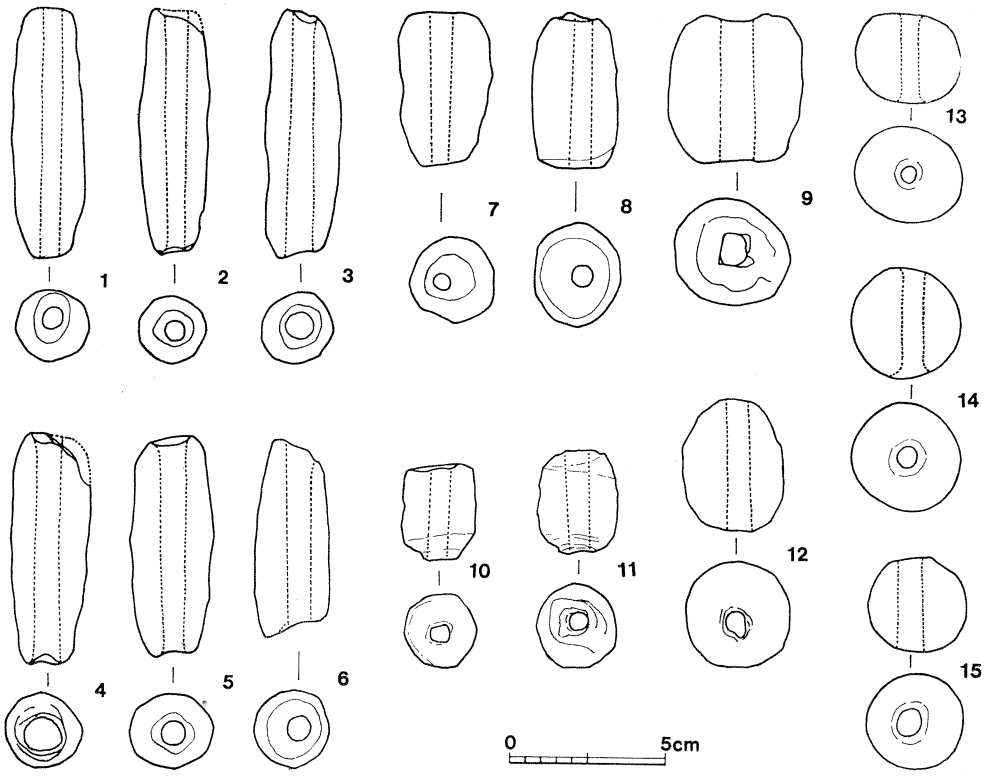


第66図　紡錘車実測図

土錘　（第67図1～11）土錘は12個以上出土している。時期は不明であるが形は総て管状であり、長さと重さより3形態に分類できる。

A（1、2、3、4、5、6）

長さは6.3㎝～7.9㎝、径は2.2㎝～2.7㎝と細長く、重さは40ｇ前後に集中している。



第67図　土錘・土玉実測図

つくりは丁寧で、器表面はナデで調整、断面は円形をなしている。出土地点は第Ⅲ調査区南側に限られている。

B（7、8、9、12）

長さは4.2cm～4.9cmと一応であるが、重さは44g～78gとバラつきが認められ、なかでも(9)は重い。つくりは全体に雑で手捏による凹凸を全面に残す。出土地点は(8)が第Ⅰ調査区、他は第Ⅲ調査区東南隅に集中している。

C（10、11）

長さは3cm前後と短く、重さも21g～26gと軽いものである。つくりは雑であり、表面は調整されず、また、穴も穿孔されたままである。両者とも第Ⅲ調査区から出土している。

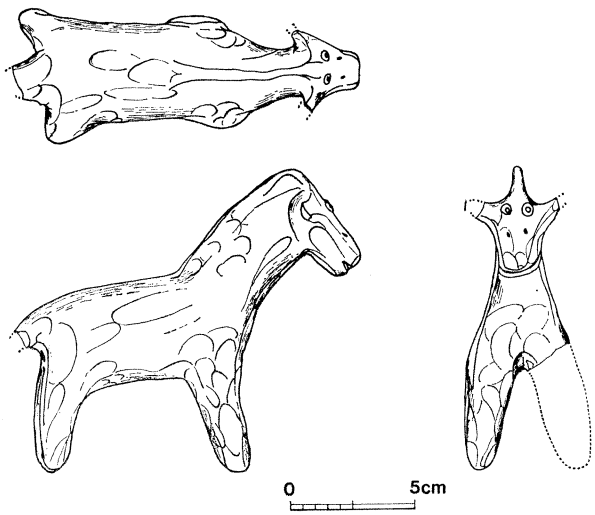
土錘は全体に胎土中に砂粒を僅かに含み焼成はよく褐色および黄褐色を呈す。

土　玉　（第67図12～15）

土玉は5個以上出土し、完形品は3個ある。すべて整った球形をなす丸玉で、大きさは径3cm前後、重さは26gから28gを測り丁寧なつくりである。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良く黒褐色および茶褐色を呈す。すべて第Ⅰ調査区より出土している。

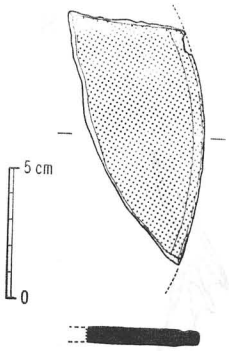
土　馬　（第68図）

須恵質の陶馬で、鞍、鐙等の馬具を表現しないいわゆる裸馬である。尻尾、左の前肢、両耳の一部を欠損はしているもののほぼ全形をうかがえるもので総高12cm、現体長14.4cmを測る。頭部を除く他は全体に円筒形に作り、脚は短く、やや開きぎみである。顔面では、眼を粘土の輪、鼻は刺突による2孔、口はヘラによる切れ込み等の簡単な表現である。耳は元が太く、先端を細く表わしている。成形については脚部を中心として、随所に指頭圧痕が認められ、胴部、頸部は圧痕をナデで消し轡を整える。全体に簡潔、素朴な作りであるが細部で



第68図　土　馬　実　測　図

は馬の特徴をよくとらえている。胎土は密で、焼成はよく青灰色を呈す。出土地点は第Ⅲ調査区東南隅の旧河川の西岸付近であり、土馬と川との関連が注目されよう。時期は定かでないが、付近の第Ⅲ調査区南側拡張区から須恵器椀、坏等がかなりまとまって出土しており、これらと前後する頃と推せられる。



第69図　円板状土製品実測図

円板状土製品　（第69図）

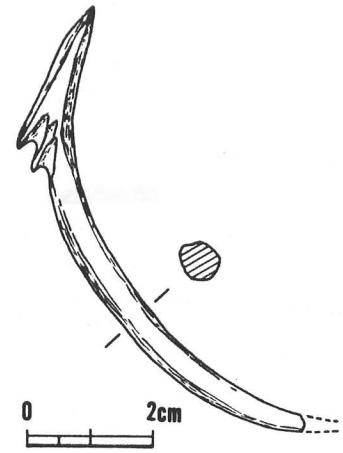
第Ⅰ調査区のE14グリットから検出されたもので、出土層位は暗灰色砂礫層中である。全体が薄い円板状をなすとみられる土製品の周縁部破片で残存長さ9㎝、幅4.5㎝ほどの小片である。注意すべきは、一方の面の全面に黒く漆の塗布が認められるうえ他面及び外縁側面にもわずかにその痕跡が残され、かつ全面に漆が残る面には外縁に沿ってわずかに凹む幅2㎜の沈線1条による縁どりがなされていることである。そして焼き歪みによるとは考えられない反りがあり、縁どりのある面が凸面となっていることも注意される。漆は剝落部分の観察によると器面をヘラ磨きしたのち塗布されたもののようである。なお、漆塗りの痕跡をわずかに残す他の一面は、外縁部が強く押しナデられ、端部に向って厚みをやや減じている。胎土中に若干の砂粒を含み、焼成は良好で固く焼きしまっている。

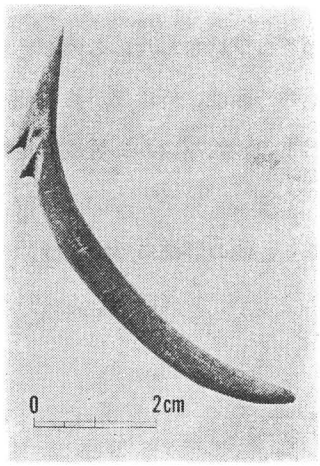
ある種器物の蓋あるいは模造品ともみられるが、破片であり、他の詳細については、今後の類品の増加をまちたい。

（西尾克己）

8　鹿角製品及び鹿角加工品

牛　沢　百合子*





第70図　鹿角製釣針鈎先部分

本遺跡では、以上のような遺物のほかに、人工遺物として獣骨を用いた骨角器、あるいは用途不明ながら明瞭な加工痕をもつ獣骨片がいくつか出土している。それらのうちここでは次の3点を挙げておく。それらは第Ⅰ調査区出土の角尖部切断品、第Ⅲ調査区出土の加工痕をもつ鹿角、第Ⅳ調査区出土の鹿角製釣針鈎先である。

1）　鹿角製釣針の鈎先部分（第70図）

第Ⅳ調査区出土。全長（鈎先より末端までの直線径）72.5㎜、中央部径5.5㎜。鈎の先端から10.8㎜程後方に鋭い逆刺が二つ切り込まれている。後方にかけて細まるがきゃしゃな感じはしない。

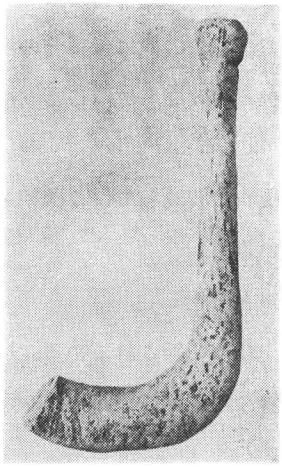
中央から後端にかけて鹿角表面の溝の痕と思われる浅い条が残っていることや、湾曲の具合からみて第1枝分岐部内側を素材としたのではなかろうか。

整形のための加工は入念で長軸に垂直に無数の擦痕が観察される。先端の二つの逆刺はこの製品を大変鋭利な形につくり上げているといえよう。

全体がゆるく湾曲しているのは、これが釣鈎の鈎先部分であることを示しており、その末端が細まるのは、別に作られている軸の下端に着装されるためであり、いわゆる「結合式」の釣針の一つになるわけである。

このような製品は山陰地方でははじめての発見であるが、同タイプの製品は縄文時代の例として、九州各地にしられるという。長崎県志多留貝塚、脇岬遺跡など縄文後期中葉にあたる層から出土するのがそれである。本製品は特に脇岬遺跡出土のものによく似た製品である。こうした形態の類似から、この鈎先を縄文時代の所産と考えるのであるが、各時期の遺物を混在出土する本遺跡の性格上、確かな所属年代を決めることはできなかった。

* 早稲田大学考古学研究室



第71図　小浜洞穴出土の釣針

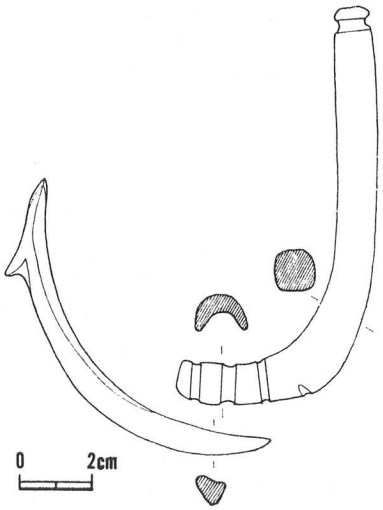
山陰地方で知られる骨角製の釣針は、かつて小浜洞穴（縄文後期）から採集された一例（第71図）があるだけと思う。小浜洞穴例は、鹿角製の単一型のもので鈎先を欠損するが幅の広いV字型を呈するもので、軸長60㎜程度になり、いわゆる「大型」に属する。軸頂部のチモトの加工は浅い溝をめぐらすだけの簡単なものである。裏面の海綿体の走向からみて鹿角の第三枝分岐部分を利用し湾曲部を上にする素材の扱い方であったと思われる。

この小浜洞穴例と同様にタテチョウ例は鈎先のみの資料であるため全体をうかがえないが、これに若し脇岬出土例（註1）と同じような鹿角器の軸の部分が装着されたとすれば（第72図）、全体はU字形で、比較的簡単な形のものになったと思われる。両者は材質の違い（脇岬例はイノシシ下顎犬歯）を除けばよく似た形態のものであったとみてよいであろう。

中国地方における縄文〜弥生時代の鹿角製釣針は、貝塚遺跡の多い割にはまだごく限られるようである。縄文時代の例をとっても、前記小浜洞穴の他には岡山県倉敷市福田貝塚、笠岡市津雲貝塚などの例があるにすぎない。これについては現在までの貝塚研究の在り方についても問題があり、一概に他の地方と数量的なことを比較することはできず、今後の調査になお待たねばならない点もあるであろう。

それはともかくとして、上記の福田、津雲例はいずれも単一型であり、比較的大型で、鈎先が強く曲るいわゆるV字形の湾曲をもち浅い外鐵をもつもので、形態的な類似のみ求めれば、関東地方の後期例に類似するということができる。

先の小浜洞穴例は巾の広いU字型で、津雲、福田例とは異なるのである。今回タテチョウ遺跡で出土した組合式釣針の鈎先には、しばしばL字型を呈するような軸および湾曲部となるものが伴い、鈎先が結び付けられる。小浜例も、形としては結合式のものがとるようなL字形の軸および湾曲部となり、鈎先があると仮定するとU字型になるような形になったものと思う。



第72図　長崎県脇岬遺跡出土の鈎先・軸実測図

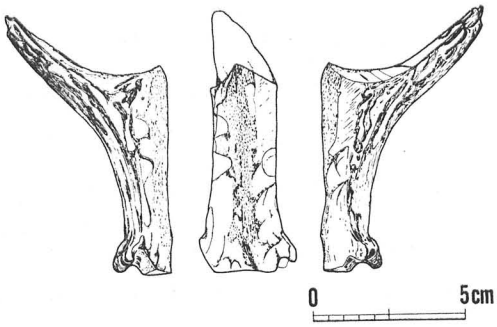
つまり、小浜洞穴やタテチョウ遺跡の釣針は津雲、福田例などとは別系統であることを、ここでも示しているのではないかと思われる。タテチョウ遺跡では鈎先の他に軸部分の出土例はない。しかし、先にみた脇岬における鈎と軸との組合せを考えるならば同じような軸がつくられたことも想定できよう。

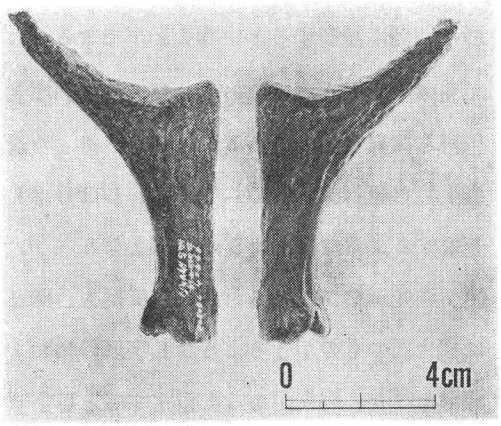
山陰の縄文後期以降文化の中に、九州の西岸地方の文化の直接的に波及していく様相を、この釣針の例からもうかがうことができるのであろうと考えている。

2) 特殊な加工痕をもつ鹿角（第73図）第Ⅲ調査区D12グリッド出土

落角の角坐部分と第一枝までの角幹部とがみられ、第一枝の先端は切断されている。片側に鹿角表面、もう一方の側には海綿質がみられ、この鹿角が縦に割られていることを示している。角坐の部分、角幹は全体の¼位をのこすのみである。

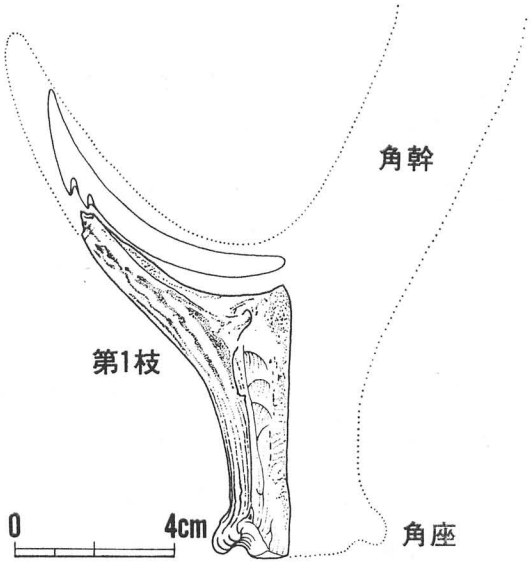
鹿角の内側、海綿質の露呈している部分には、この角を切断した際についたと思われる石器の刃痕が角の正中線を中心として、左右に上方から下方へ斜向するようにつく。この痕跡は、擦り切り法の場合にみるような滑らかな一定の幅をつくるものではなく、深い切り込みと浅い切り込みとが段になっている。従って、これの切断は擦り切り法ではなく、タガネ様の石器を切り口にあてて、上からこれを強くたたいて切り込んでいくという方法であったと思われる。これは、角坐部に近い緻密質の厚い部分を切るために必要な荒っぽい工程であったのだろう。枝の部分の切断離脱も全く同じである。まず第一枝の分岐部から角幹部に沿って角を縦に切断したのち、全く同じ方法で第一枝を半分に割っているのである。





第73図　鹿角切断品実測図及び写真

このような加工が一体何を目的に行なわれたのであろうか。筆者らは釣針の鈎先部分や軸の部分をつくる材料を得るためであったと推定する。例えば鈎先の部分であるならば、第74図に示すような位



第74図　鹿角枝からの釣針作出模式図

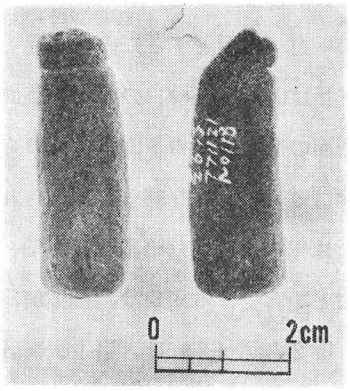
置、つまり、第一枝の内側半分の弧状に湾曲する角片を利用してつくることができたはずで、本例はその残片であ ると思われる（第73図）。また軸の部分であるならば角幹から第1枝への湾曲部分を使用すればよいであろう。

このような角の分岐部内側を利用して鈎先部分あるいは軸に当たる部分を切り取り、大型の結合式釣針をつくる例は長崎県脇岬貝塚、熊本県浜ノ洲貝塚の後期例などにみられるが、これらについてはなお詳細な調査を行なってみたいと思っている。

3）角尖部切断品（第74図）

第Ⅰ調査区D13グリッド出土

鹿角の角尖部の基部を擦り切り、尖端部をややたたき折っている。上端につく輪状にめぐる鋭い条線は、上端部をも擦り切ろうとしたものか、あるいは一種の装飾的なものか明らかではない。下端部に径4㎜位の海綿質を削る加工がみられる。



第75図　鹿角の角尖部切断品

註1　坂田邦洋『対馬の考古学』（昭和51年5月）P174 の図より。脇岬B型釣針といわれているものである。

付記　牛沢百合子氏に御執筆いただいた上記遺物のうち、鹿角製釣針の鈎先部分については現場で整理中に紛失したため、たまたま調査中にメモ用として撮った写真と略測図をもとに観察していただいたことを明記しておく。

9 特 殊 遺 物

このたび得られた各種夥大な量の出土遺物のうち、ここでは全国的に類例の稀な遺品として中空有孔の土製品および銅鐸の舌とみるにふさわしい棒状石製品を取り上げ、併せて山陰では発見例の少ない磨製石剣、磨り切り溝を残す磨製石器未成品の破片、石戈の鋒部とみうる大形磨製石器の破損品について記すことにする。

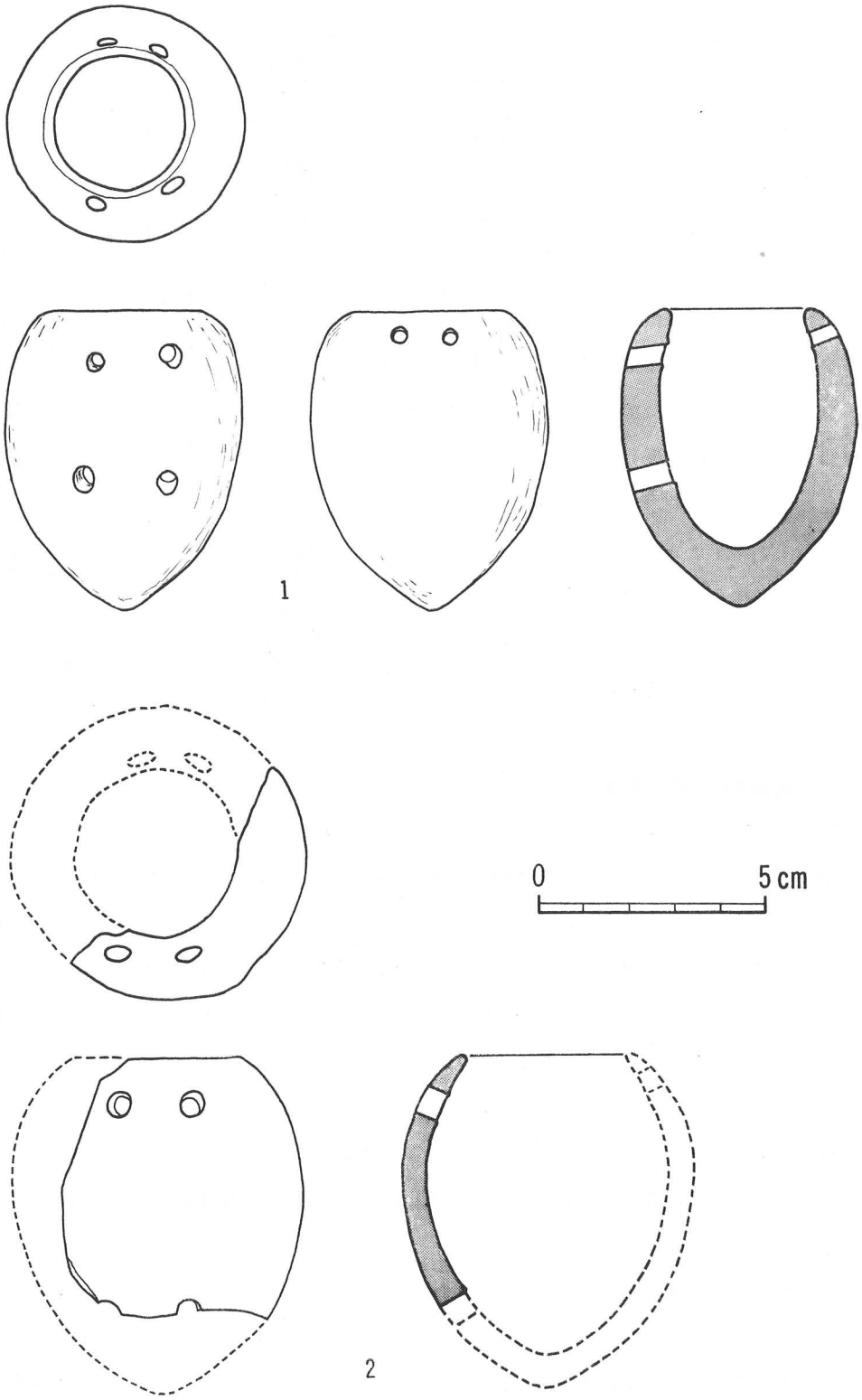
中空有孔の土製品（第76図）

第Ⅰと第Ⅱ調査区からそれぞれ1点づつ出土している。まず第Ⅱ調査区から得られた第1の品(1)は、D14区の海抜－72cmの暗灰色砂礫層中で口縁部を上にやや斜めにして検出されたもので、完形を保ちその形状は、ちょうどレモンの端部の一部を垂平に切り去ったような器形をなす中空有孔の土製品である。全長6.6cm、最広部の径5.2cm、上端部の径3.0cm、器壁は全体に肉厚で器厚0.6～1.1cmを測る。断面形は外面が下端に向ってやや尖り気味であるのに対して内面は丸味をもって倒卵形をなす。

珍奇とすべきは、側面の一方（前面とする）に上下、左右対称の位置に合せて四孔、他の一方（後面とする）の上端近くに左右対称に2孔の小孔があげられていることである。孔径は0.3～0.5cm、いずれも焼成前の穿孔で前面の4孔は、外面からやや上向きに、また後面の2孔はやや下向きにあけられている。胎土中にかなりの砂粒を混えるが、外面は丁寧な縦方向のヘラ磨きが加えられて滑沢があり、内面はナデ調整により仕上げられている。全体黒味を帯びた暗茶褐色を呈し、焼成は良好で固く焼きしまっている。胎土や器面調整などから受ける印象は、弥生前期の土器のそれを思わせる。

第2の品（2）は、第Ⅰ調査区D10グリッドの海抜－18cmの暗灰色砂礫層中に含まれていたものである。下端部を欠く上半部の破片で、側面に第1の品の前面同様、上下、左右対称の位置に小さな4孔を残している。第1の品を参考に復原すると全長約7.3cm、最広部の径6.4cm、上端部径3.8cm、器厚0.3～0.6cmとなり、第1の品よりやや大きく、薄い作りの中空有孔土製品となる。穿孔はやはり焼成前に外面よりなされ、上端部に近い2孔は斜上方から、下方のそれは斜下方からあけられている、孔径は0.5～0.6cmである。かなりの砂粒を含み、硬い焼きで黒灰色を呈す。外面は薄く風化し、調整は不明であるが、内面にはナデ仕上げによる調整痕が残されている。

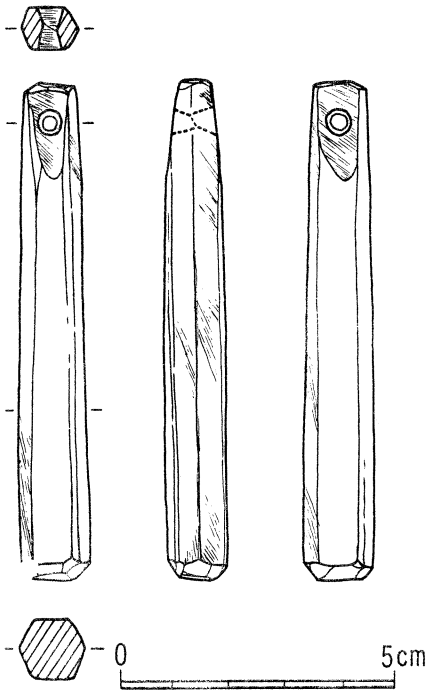
これら2点の中空有孔の土製品については、昭和41年の山口県下関市綾羅木郷台地遺跡



第76図　中空有孔の土製品（陶塤）実測図

の第3次調査でもたらされた初見例に関し、国分直一氏が中国古代の陶塤の遺制をひく土笛とされたもの[註1]と、その形状および前面4孔、後面2孔の配置状況が全く同一のものであることが知られる。同種品は昭和42年の綾羅木郷台地遺跡の第4次調査でも注意され[註2]、次いで昭和49年には京都府中郡峰山町の扇谷遺跡で一例、つづいて翌昭和50年には扇谷遺跡に近い途中ケ丘遺跡[註3]でも一例検出されている。今回得られた2個は、それらに次ぐ発見例となるものである。

なお、綾羅木陶塤や扇谷遺跡出土の陶塤に比べると、タテチョウの第1、第2の品はともに吹口の口径が広く、かつ後面の指孔が吹口部に接近しすぎており、この点陶塤の遺制をひく土笛とすれば、吹奏的機能はかなり劣るもののようである。

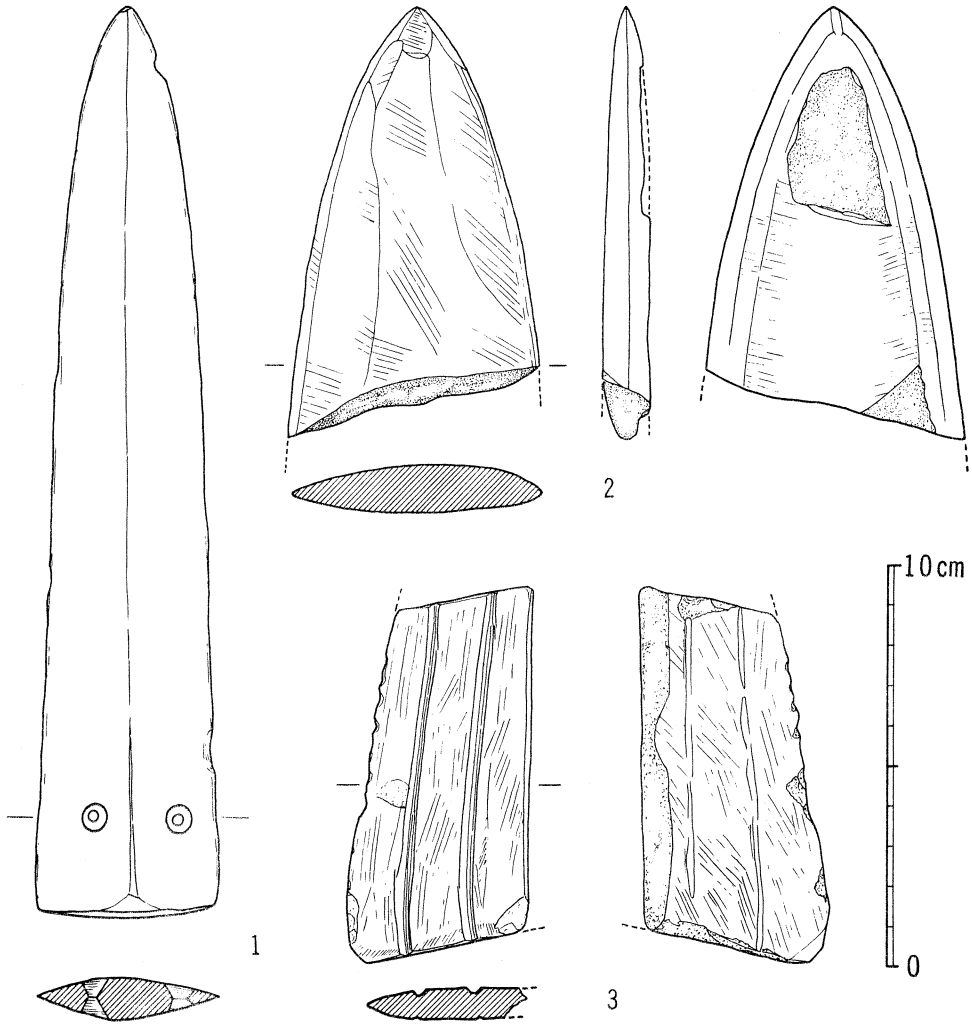


第77図　銅鐸舌様の石製品実測図

銅鐸舌様の棒状石製品（第77図）

この石製品は、第Ⅰ調査区のD14グリッドから検出されたもので、やはり各時代の遺物が混在する海抜－16cmの暗灰色砂礫層中に含まれていた。全長9cmの棒状品で、上端近くに一孔を有し、形状は上端からわずかなふくらみをもちつつ下端に向って次第に太さを増す六角柱を存す。成形にあたっては、まず板状節理を利用した厚さ1.1cmあまりの硬質頁岩を用いて両側面から研磨を加え、幅を減じつつ上端幅0.9cm、下端幅1.3cmの下方に向って太さを増すやや扁平な六角柱を作出する。そして上部付近については、断面形が頂部に向ってより扁平になるように磨り上げ、ついで上端面はほとんど稜をおとし、また下端面は周縁部に稜を残して研磨を終えている。穿孔は扁平に磨きあげた上端部付近の前後両面からなされ、孔径は外径0.4cm、内径で0.25cmを測る。重量は21.16gあり、硬質で黒色をなす。

一端に小孔を有するこの棒状石製品は、その形状が鳥取県東伯郡泊村などから銅鐸と共伴しているいわゆる銅舌ときわめてよく似ていることが注意され、小孔を紐通しの孔とみて懸垂すると、まさに銅鐸の石製舌とするにふさわしいものといえる。ただし、硬質の石材が用いられていることもあろうが、小孔に紐ずれ、あるいは下部の側面に銅鐸の内面凸



第78図　磨製石剣、磨製石戈等実測図

帯と触れ合って生ずるとみられる磨滅痕等は認められない。

磨製石剣（第78図の１）

第Ⅱ調査区Ｆ12―３グリッドの暗灰色砂礫層中から検出されたもので、剣身の断面が扁平な菱形をなす、いわゆる鉄剣形の磨製石剣である。刃部にわずかな欠損がみられるほかは完形を保ち、全長22.９㎝、身幅剣尾で4.7㎝、厚さ1.1㎝を測る。 全体に細長く、鋒部も比較的するどく研ぎ出され、ややにぶいが鎬は剣尾まで通る。剣尾はわずかに丸味をもたせて磨き上げられ、茎をつけないが、あるいはもともと有柄式であったものが、何らかの事情で茎を二次的に磨り落したものとも考えられる。剣尾の上方には身の両側に両面穿孔による小孔があり、径は外径で6.5㎜、内径で2.5㎜ある。全体に黒色のにぶい光沢をも

ち、石材にはやはり硬質の頁岩が用いられている。

石戈様品（第78図の２）

第Ⅲ調査区のＥ13―３グリッドから検出されたもので、暗灰色砂礫層中に含まれていた。大きさからみて石戈の鋒部破片とみられ、残存長1.1㎝、身幅6.4㎝、厚さ1.2㎝ある。全面入念に磨き上げられ、黒色の光沢があり、一面にはわずかながら刃の研ぎ出しもみられ、断面はレンズ状をなす。石材にはやはり硬質頁岩が用いられている。

有樋式石戈様品未成品（第78図の３）

第Ⅲ調査区のＧ12―１及びＧ13―３グリッドから検出したもので、暗灰色砂礫層中に含まれていた。磨製石器の未成品と推定されるもので、残存長6.3㎝、幅4.4㎝、厚さ0.8㎝を測る。

一方の側縁に刃が研ぎ出されているが、これを左においた場合の上面をＡ面、下面をＢ面とすると、Ａ面には細い３条の刻線がみられ、３本目の刻線に沿って切損している。刻線は磨り切り手法により施溝されたもので、幅2.0～2.5㎜、深さ1.0～2.0㎜あり、断面Ｖ字形をなす。Ｂ面にも２本の刻線が観察されるが、Ａ面のそれに比べると、わずかな痕跡程度で磨り切り期の段階で中止したもののようにみられる。また下端は周縁をわずかに磨り落しただけで、基底面は自然の剝離面を残したままとなっている。磨り切りにより施溝された刻線と刻線の幅は1.0～1.5㎜前後で、これから成品を作出するとすれば、磨製の石鏃などが考えられる。石材には黒色の硬質頁岩が用いられている。

なお、以上の石器および石器未成品の素材となっている硬質頁岩は、島根半島の惣津海岸から恵曇、平田市の日本海岸沿いに産出し、タテチョウ遺跡近辺では、北東方の北山山塊の枕木山の麓でも産出するものである。

（前 島 己 基）

註１　国分直一「陶塤の発見」『日本民族文化の研究』（昭和47年）
　２　綾羅木陶塤については下関市教育委員会から実測図その他貴重な資料提供を受けた。記して厚く御礼を申し上げる。
　３　峰山町教育委員会『途中ケ丘遺跡―第４次調査概要―』（昭和50年）

Ⅵ　出土遺物の自然科学的観察

遺跡は、朝酌川流域に広がる沖積平野下の低湿地遺跡という、これまで県下にあまり例をみなかった条件下の発掘調査であった。

各種遺物の保存状況良好な低湿地遺跡ということで、出土遺物の量とバラエティなど県下では比類なきほどであり、新たなデーターとして書き残されたものは数多い。それに加えて、今回は考古学以外の諸分野の方々の御協力で、これまで得られなかった知見を得ることができた。この結果は、緊急調査に伴う記録保存の調査について、その方法の検討を充分に促したといえる。単なる考古学的発掘による遺構の検出、出土遺物の記録で「事足れり」ではなく、遺物等の採集方法、整理方法の次第によっては、肉眼では得られない記録を手にすることができ、関連諸学の人の眼からは遺物の解釈に新たなヒントを得るようなデーターが提供されることが実証されたからである。このことは、破壊に直面し二度と再び日の目を見ることのない遺跡から、一面的な記録を得るということではなく、現在において、最大限の多面的な方法による記録の採取をするということである。

今回の発掘調査では、資料の収集について完全であったとはいえないが、調査時において、各グリッド出土の考古遺物、自然遺物をすべて記録後採集し、そのなかで、自然遺物については調査終了後、それぞれの専門の先生方に一括お送りし同定をお願いした。

獣骨に関しては、早稲田大学の金子浩昌先生に依頼し、そのなかで骨角器については同大学の考古学研究室の牛沢百合子氏から綿密な研究成果をいただくことができた。

植物種子の同定については、遺跡から持ち帰った土壌サンプルから5㎜目のふるいを用いての水洗別法によって、ふるい中に残存したもの、および水面に浮上したものを平野が採取し、大阪市立大学の粉川昭平先生に送付した。

花粉分析は、島根大学の大西郁夫先生に直接現場においでいただき、先生自らの手によって土壌のサンプリングがおこなわれ、分析結果が導き出された。

先に記したように、このような自然科学的観察、記録が一遺跡出土の遺物について実施されたのは島根県下で初めてのことであり、まだほかに実施しなければならなかった方法があったかも知れない。また、次に考えられなくてはならないのは、このような自然科学的方法からの記録と考古学的記録を総合的に解釈し、破壊される遺跡の性格なり位置づけを明確にすることである。これがなされてはじめて、総合的な記録保存ということがいえる。以下に記述されるのは、このたびの調査によって採取し得た資料の、自然科学的観察結果である。

なお、資料の採取にあたっては自然科学についての専門的な知識を持ち合わせない私ども現場の調査員が行なったため、その結果に多少なりとも問題点があるとすれば、その責は全て調査員にあることを明記しておく。

1 出土種子類の観察

粉　川　昭　平*

タテチョウ遺跡は宍道湖の東北部、大橋川の支流、朝酌川流域に広がる遺跡で、縄文、弥生、奈良時代などの遺物を中心に、江戸時代までの遺物を出土する複合遺跡とのことである。多数の果実や種子類は、朝酌川の右岸に設定された第2調査区、第3調査区、第4調査区中の遺物包含層である砂礫層中に主として含まれていた。果実等はこの砂礫層より5㎜目のふるいによって、水洗い法によって、水面に浮上したものも含めて採集されたため、各時代のものが混合している可能性がある。採集された標本は極めて保存がよく、調べた結果は次のようであった。

第Ⅱ調査区

クロマツ(*Pinus thunbergii* PARL.)—球果2個

イヌガヤ(*Cephalotaxus drupacea* S. et Z.)—種子1個

オニグルミ(*Juglans sieboldiana* MAX.) —核6個。一部は破片。1個は長いオサグルミ状のもの。

トチノキ(*Aesculus turbinata* BLUME)—果実・種子・幼種子など多数。

ムクロジ(*Sapindus mukurossi* GAERTN)—種子1個。

センダン(*Melia Azedarach* L. var. *japonica* MAKINO)—種子1個。

モモ(*Prunus persica* BATSCH.)—核9個。うち1個は縫線の反対側をけっ歯類によってかじられ孔をあけられている。

第Ⅱ調査区　D11

マツ属(*Pinus* SP)

スギ(*Cryptomeria japonica* D. Don)—球果軸1個。

カヤ(*Torreya nucifera* S. et Z.)—種子3個。長さ・巾が1.5×1.2㎝のずんぐり形。

イヌガヤ—種子2個。

スダジイ(*Castanopsis cuspidata* SCHOTT. *var. sieboldii* MAK.)—堅果2個。

イチイガシ(*Quercus gilva* BLUME) —堅果14個（頂部に綿毛が残こっている)。殻斗10個。幼果多数。

---

* 大阪市立大学理学部

アカガシ(*Quercus acuta* THUNB.)—堅果破片1個。幼堅果1個。殻斗つき幼果11個。殻斗1個。

ナラガシワ(*Quercus aliena* BLUME)—堅果小破片1個。殻斗破片1個。幼果4個。

オニグルミ—核総数23個。そのうち完全なものは大小3個。かじられているもの2個(縫合線の両側よりと、4ケ所に孔をあけられているものとあり)、他は不規則不自然な破片。

ヤマモモ—核2個。

ハンノキ(*Alnus japonica* S. et Z.)—集合果の上部1個。

イヌシデ(*Carpinus tschonos kii* MAX.)—種子10個。

アサダ(*Ostrya japonica* SARG.)—堅果5個。

カナムグラ(*Humulus japonicus* S. et Z.)—保存の悪い種子3個。

ケヤキ(*Zelkova serrata* MAK.)—種子38個。

エノキ(*Celtis sinensis* PERS.)—外側のとけ去った種子2個。

ソバ?(*Fagopyrum* SP)—普通の品種よりやや小なるもの1個。

タデ属—(*Polygonum* sp.)—三角形のものと、扁平で黒色光沢のあるものと夫々1個ずつ。

マルミノヤマゴボウ—種子3個。

ムクロジ—種子1個。

イロハカエデ(*Acer palmatum* THUNB.)—果実4個。黒光りする鱗状の表面をもつ種子1個。

サクラ属(*Prunus* sp.)—核3個。

センダン—核42個。5稜のもの、6稜のものあり。夫々の長さはほぼ0.6cm、1.3cm。形も肩の張っているもの、丸いものなど種々様々である。

ウツギ属—(*Deutzia* sp.)—果実⅓

アカメガシワ—(*Mallotus japonicus* MUELL. —ARG)—種子2個。

サンショウ(*Zanthoxylum piperitum* DC.)—果実6個。

ヒシ属(*Trapa* SP)—太く短いとげ2個。

ノブドウ(*Ampelopsis brevipedunculata* TRAUTV.)—種子26個。

ブドウ属(*Vitis* sp.)—種子3個。

トチノキ—果皮、種皮破片、幼果など多数。

ヤブツバキ(*Camellia japonica* L.)—種子2個。大形の芽?5個。

サカキ(*Cleyera ochnacea* DC.)—種子1個。

タラノキ(*Aralia elata* SEEMANN)—種子2個。

クマノミズキ(*Cornus brachypoda* C. A. MEY.)—種子2個。

ニワトコ(*Sambucus sieboldiana* BLUME)—種子1個。

クサギ(*Clerodenclron trichotomum* THUNB.)—種子1個。

ゴマギ(*Viburnum sieboldii* MIQ.)—種子2個。

マクワウリの類(*Cucumis melo* L.)—種子1個。

エゴノキ(*Styrax japonica* S.etZ.) —外果皮のみならず萼まで保存した果実1個。種子35個(うち1個は歪形、2個は双核をなすもの)。

シソの類(*Labiatae* sp.)—種子2個。

オナモミ(*Xanthium strumarium* LINN.)—果胞3個。

ウキヤガラ?(*Scirpus fluviatilis* A. GRAY)—種子1個。

ヒルムシロ属(*Potamogeton distinctus* A. BENN.)—種子1個。

イネ(*Oryza sativa* L.)—炭化米1個。

この他、種類不明の越冬芽10個(数種あり)、木片1個、蛾の幼虫の糞1個、球形の虫瘻と見えるもの1個などがあった。またこの標本で注意されたのは、数個の著しくしぶ土臭のする標本があったことである。これについては後に述べる。

第Ⅲ調査区

カヤ—種子1個。

イヌガヤ—種子1個。

イチイガシ?—堅果1個。

オニグルミ—多数の核。うち3個はかじられている。

モモ—大形で近代的なタイプの核1個。小さく丸い古型のタイプ9個(うち1個が縫線側をかじられている)。

トチノキ—果実大小2個。果皮片12個。種皮片6個。

エゴノキ—種子2個。

サルノコシカケの類?—木材片についているもの1個。

第Ⅲ調査区 D13

カシの類(*Quercus* sp.)—果皮片1個。

カジノキ(*Broussonetia papyrifera* L' HERIT)—種子1個。

ヤマグワ(*Morus bombycis* KOIDZ.)—種子1個。

ムクノキ(*Aphananthe aspera* PLANCH.)—種子1個。

タデ属—2種。2個。

トチノキ—種皮破片2個。

サカキ—種皮破片2個。

ヒサカキ(*Eurya japonica* THUNB.)—種子1個。

アカメガシワ—種子1個。

キイチゴ属(*Rubus* sp.)—種子2個。

タラノキ(*Aralia elata* SEEMANN)—種子4個。

ニワトコ—種子5個。

エゴノキ—種子2個。

ナスビ属(*Solanum* sp.)—種子1個。

ホタルヰ属？(*Scirpus* sp.)—果皮1個。

ウキヤガラ—1個。

トリゲモ属(*Najas minor* ALL.)—2個。小形で2×0.8㎜。

ヒルムシロ属(*Potamogeton* sp.)—種子1個。

カワツルモ(*Ruppia rostellata* KOCH.)—種子18個。

最後のカワツルモは注目に値する。この他鞘翅目（甲虫）に属するとみられる昆虫の脚の破片1個。不明の種子数個がある。

第Ⅲ調査区　E10（木片集積層附近）

カヤ—種子1個。

イヌガヤ—種子1個。

イチイガシ—堅果2個。幼果8個。

オニグルミ—核5個。先端及び底部がこわれているものが多い。1個は先端も含め4ケ所をかじられ、孔をあけられている。

ヤマモモ—3個の核。多汁質の毛の着点が明瞭に残っている。

カナムグラ—種子3個。

サクラ属—赤褐色で新鮮にみえる核1個。

カラスザンショウ(*Fagara ailanthoides* ENGL.)—種子1個。

サンショウ—果皮つき1個。

センダン—核4個。

ゴンズイ(*Euscaphis japonica* PAX.)—種子1個。

トチノキ—やや若い果片5個。幼果2個。

アカメガシワ—種子7個。

ノブドウ—種子6個。

ブドウ属—種子2個。

クマノミズキ—種子5個。

キカラスウリ属(*Trichosanthes* sp.)—種子1個。

ヒョウタンの類(*Lagenaria* sp.)—種子1個。

エゴノキ—種子10個。

クサギ—種子1個。

イネ—炭化米3個。

この他不明の越冬芽1個。

第Ⅲ調査区　E11(木片集積層)

イヌガヤ—種子の半分1個。

オニグルミ—半分にわれ先端がとび、不規則にわれている核4個。うち1個は焼けこげている。

イチイガシ—堅果7個。殻斗はない。幼果1個。幼果は殆んど常に殻斗をもつ。

センダン—核1個。

ムクロジ—果実の基部の破片1個。これは不実のものの痕2つが明瞭である。種子1個。

トチノキ—果皮。⅓の大なるもの5個。幼果3個。種皮破片5個。種子1個。幼種子2個。

ヤブツバキ?—芽1個。

また、この標本中には、小木片2個、獣骨片1個が混入していた。

第Ⅲ調査区　F11

イヌガヤ—種子6個。

モミ(*Abies firma S. et. Z.*)—葉の先端部1片。

カナムグラ—種子1個。

オニグルミ—破片も含め核15個。縫線の上より、あるいは両側からかじられているもの2個。焼かれているものが1個ある。また、先端のとんでいるものが1個ある。

ヤマモモ—核7個。

アカガシ?—堅果1個。木炭化子葉1個半。殻斗1個。

イチイガシ？—堅果1個。堅果破片1個。幼果多数。不完全な殻斗の破片9個。

イヌシデ—種子4個。うち2個はやや疑問あり。

ケヤキ—種子8個。

イヌビユ？(*Amaranthus lividus* LINN.)—種子1個。

ミゾソバ？(*Polygonum thunbergii* S. et. Z.)—種子2個。

タデ属—4個。小形で3稜あり。

クス科？(*Lauraceae*)—幼果1個。杯状の萼が目立つ。

オニバス(*Euryale ferox* SALISB.)—種子1個。

フジ属？(*Wisteria Nutt* sp.)—越冬芽1個。

サクラ属—核6個。

スモモ(*Prunus salicina* LINDL.)—小形。長さ・巾・厚さは夫々、1.35×0.85×0.60*cm*

カタバミ(*Oxalis corniculata* LINN.)—種子1個。

センダン—核3個。

アカメガシワ—種子6個。

ムクロジ—種子2個。

イロハカエデ—果皮6個。

トチノキ—果皮片12個。幼果13個。種皮片8個。幼種子3個。

ノブドウ—種子16個。

ブドウ属—種皮破片4個。

マタタビ(*Actinidia polygama* MIQ.)—種子1個。

サカキ(*Cleyera ochnacea* DC.)—種子1個。

ヤブツバキ—果実1個。

マクワウリの類—小形の種子1個。

エゴノキ—種子25個。一方が平面の双核のもの2個あり。

ガマズミ(*Viburnum dilatatum* THUNB.)—種子3個。

ゴマギ(*Viburnum siebolclii* MIQ.) —種子2個。

シソの類—種子2個。

ニワトコ—種子1個。

クサギ—種子1個。

イネ—炭化米4個。

ホタルヰ属—4個。

カワツルモ―種子9個。1個は果柄も保存している。

この他、不明の芽3個。小木片・小木炭片夫々1個。球状の虫瘻？3個。不明の種子9個。甲虫の脚1片があった。

第Ⅲ調査区　F12―4

カヤ―孔ある種皮片1個。内側にしぶ皮も保存している。

ヤマグワ(*Morus bombycis* KOIDZ.)―種子1個。

カシ属―臍点の部分のみ1個。

タデ属―大形扁平のもの1個。

サカキ―種子1個。

タラノキ―種子1個。長さ約1.9㎜。

ホタルヰ属―1個。

トリゲモ属―5個。

カワツルモ―種子8個。

この他、樹皮とみえるもの1個。不明の断片4個がある。

第Ⅳ調査区　G14

イヌガヤ―種子2個。

ムクノキ―種子1個。

イチイガシ？―幼果1個。

タデ属―1個。

モモ―完全な核1個。

サクラ属―核1個。

アカメガシワ―種子1個。

ヤブツバキ？―果皮破片1個。

クマノミズキ―種子1個。

エゴノキ―種子1個。

ホタルヰ属―種子3個。

カワツルモ―種子1個。

この他、木材小片1個。

以上の他、土壌サンプルと記した試料が12瓶ある。これは、大阪市立大学の山尾正之君の調査によると次のようである。

トチノキ―果皮片39個。幼果及び幼種子11個。

ヤブツバキ—種子2個。

以上の結果を分類群に表示すると次のように約70種となる（アンダーラインの種は多産したもの)。

裸子植物—クロマツ・マツ属・モミ・イヌガヤ・カヤ・スギ

被子植物、双子葉類、離弁花類—スダジイ・イチイガシ・アカガシ？・ナラガシワ？・オニグルミ・ヤマモモ・ハンノキ・イヌシデ・アサダ・カヂノキ・ヤマグワ・カナムグラ・ケヤキ・エノキ・ムクノキ・イヌビユ？・ソバ？・タデ属（2種以上)・ミゾソバ・マルミノヤマゴボウ・オニバス・クス科？・フジ属？・ウツギ属・キイチゴ属・モモ・スモモ・サクラ属・センダン・サンショウ・カラスザンショウ・アカメガシワ・カタバミ・ムクロジ・トチノキ・イロハカエデ・ゴンズイ・ノブドウ・ブドウ属・キカラスウリ属・マクワウリ類・ヒョウタン類・ヤブツバキ・サカキ・ヒサカキ・マタタビ・ヒシ属・タラノキ・クマノミズキ

被子植物、双子葉類、合弁花類—エゴノキ・クサギ・ナスビ属・シソ類・ニワトコ・ゴマギ・ガマズミ・オナモミ

被子植物、単子葉類—トリゲモ属？・ヒルムシロ属・カワツルモ・ホタルヰ属・ウキヤガラ？・イネ

以上のうち、良好な食料となるものは、カヤ・スダジイ・イチイガシ・オニグルミ・ヤマモモ・カヂノキ・ヤマグワ・ムクノキ・ソバ？・オニバス・キイチゴ属・モモ・スモモ・トチノキ・マクワウリ類・ヒョウタン類・ヒシ属・ガマズミ・イネ。このうち、栽培種は、ソバ？・モモ・マクワウリ類・ヒョウタン類・イネなどである。オニグルミの核には人間によってたたき割られたらしい形跡を示すものが多い。不自然な割れ方をした破片や、上下両端のつぶれたもの、焼けこげたものなどもみられる。文献にみられるモモの仁（植物形態学上は種子）の利用は、今まで筆者の調査した例では、証明できなかった。同じくサンショウの利用も証明できなかった。

植物の分布上興味あるのは、イチイガシで、現在では日本海側には自然分布がみられないとされている。オニバス、ヒシ属、ヒルムシロ属、トリゲモなどは淡水の池沼に生ずる水草であるが、カワツルモは、河口や海岸に近い汽水性の池沼に沈水する水草であるので、海の影響のあったことを示している。これは、第Ⅱ調査区D11の試料の若干にみられた、しぶ土臭（海成粘土層などが硫酸臭を発すること）の存在とも符合する事実であり、かつて海が近くまで来ていたことを物語っている。それは中海から宍道湖へと東西に海でつなげた縄文海侵によるものかもしれない。地形からみてもこの事はうなづける。

2　花　粉　の　分　析

大　西　郁　夫*

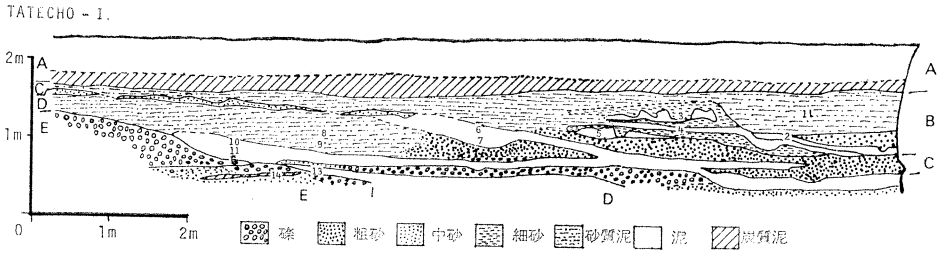
1　は　じ　め　に

タテチョウ遺跡の1977～78年の調査における第Ⅱ調査区および第Ⅲ調査区から採取した37試料について、花粉分析を行なった。その結果を報告し、若干の考察を加える。

2　試　　料

イ）第Ⅲ調査区（地点番号Ⅰ）

ピットの北壁から14試料を採取した。ここでは、朝酌川の旧川谷のあとと考えられる〝けずり込み〟が数層準に認められる（第79図）。このけずり込みによって、上位からA～E層が区別される。



第79図　第Ⅲ調査区北壁のスケッチ

A層：現在の水田の耕土を含む泥層で、上部には多くのクラックが入り、褐鉄鉱で汚染されている。最下部には厚さ約10cmの黒灰色泥層が認められる。

B層：北壁の右端部でみられる。主に砂質泥層（試料番号Ⅰ－1，以下Ⅰ－1と略する）で、下部は粗砂および泥層（Ⅰ－2）となる。

C層：B層にけずり込まれた粗砂～砂質泥の互層（Ⅰ－3～5）である。

D層：礫～泥の互層で、側方変化が著しい（Ⅰ－6～13)。

E層：主に砂礫からなり、泥炭層（Ⅰ－14）をはさむ。

上記の各層は第79図にみられるように、けずり込みや側方変化がはげしく、1本の柱状

* 島根大学理学部

図に示すのは困難であるが、試料採取位置付近の各層の最大層厚を順に並べて表10の柱状図とした。

ロ）第Ⅱ調査区（地点番号Ⅱ）

ピットの西壁と底を掘り下げた試掘溝から23試料を採取した。

地層はほぼ水平に重なっている。海水準から十1 *m*強の地表（水田）面から厚さ約50*cm*の泥層（Ⅱ—1、2）および約10*cm*の黒灰色泥層（Ⅱ—3）がみられる。これらは第Ⅲ調査区のA層に対応する。

その下位の泥層（厚さ約75*cm*）には、不規則な形の砂のレンズが入り、単子葉植物の茎が直立して含まれている（Ⅱ—4～10)。堆積物の特徴からみて、この泥層は第Ⅲ調査区のB層に対応する。さらに下位には砂礫層*（厚さ約75*cm*）がみられる。この砂礫層には、泥炭層や泥層がはさまれ、第Ⅲ調査区のE層に連続するものと考えられる（Ⅱ—11～16)。

その下位には、暗灰色泥～砂質泥層がつづき、海水準下140～160*cm*にはヤマトシジミの貝殻の密集帯がみとめられる。この泥～砂質泥層をF層と呼ぶ（Ⅱ—17～23)

3　花粉分析結果

上記の各試料を $ZnCl_2$ —アセトリシス法（中村、1967）で処理し、グリセリンゼリーで封入後、カバーグラスの四周をマニキュアでシールした。検鏡は主に400倍で行ない、木本種花粉の総計が200個をこえるように数えた。結果は、木本種については木本種花粉総計に対する百分比で、草本種については全花粉総計（不明種を含む）に対する百分比で表わした。また、木本種、不明花粉、草本種および胞子の比率も求めた。結果は表9および表10に示した。

イ）花粉組成の特徴

今回のダイヤグラムからは次の4時代が識別できる。

イヌマキ**—モミ**時代：F層の大部分（Ⅱ—19～23）では、カシ***、ナラ***、モミ、イヌマキ、クマシデ属、ケヤキ・ニレ属、ムクノキ・エノキ属が多く、草本花粉は少ない。

スギ—シイ***時代：F層最上部とE層（Ⅱ—11～18、Ⅰ—14）では、スギ、シイ、ケヤキ・ニレ属が増加する。イネ科花粉も前の時代にくらべてやや増加する。

---

*　タテチョウ遺跡の遺物は、主にこの砂礫層から出土する

**　正しくはマキ属、モミ属であるが現在の分布からみて、イヌマキ、モミと考えられる。

***　正しくは、カシ類、ナラ類、シイ類、を使用すべきであるが、ここでは総称として、カシ、ナラ、シイを使用する。

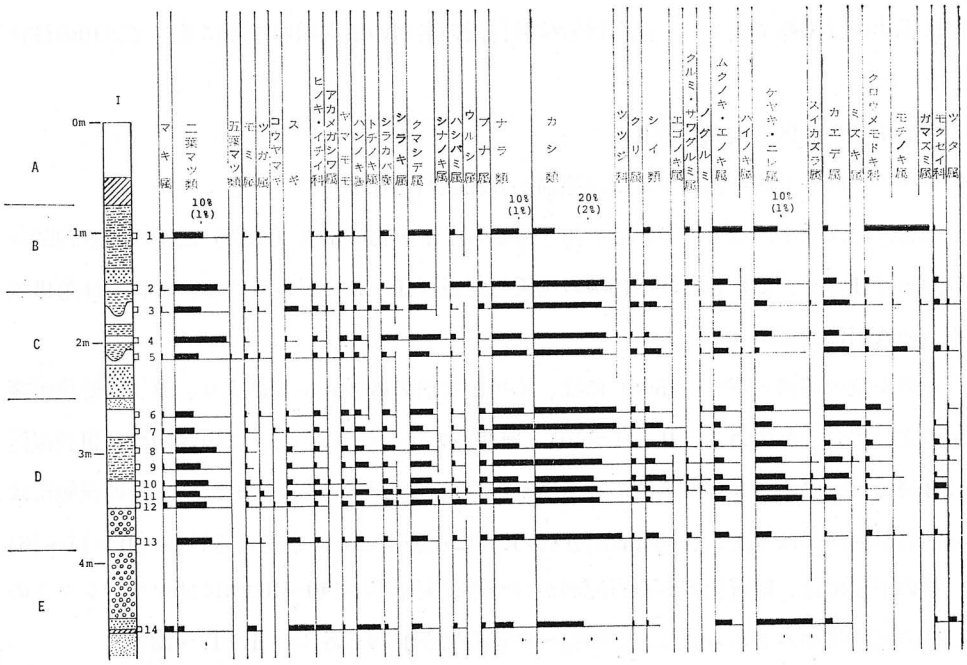


表9　第Ⅲ調査区北壁の花粉ダイヤグラム

シイ—イネ科時代：D層およびC層（Ⅰ—3～13）では、前の時代にくらべ、イヌマキ、モミ、スギが急減し、イネ科が急増する。カシ、ナラ、シイおよびイネ科で代表される。

マツ*—イネ科時代：B層およびA層（Ⅱ—1～10、Ⅰ—1、2）ではマツが急増する。

---

* 正しくは二葉マツ類を使用すべきであるが、ここでは総称としてマツを使用する。

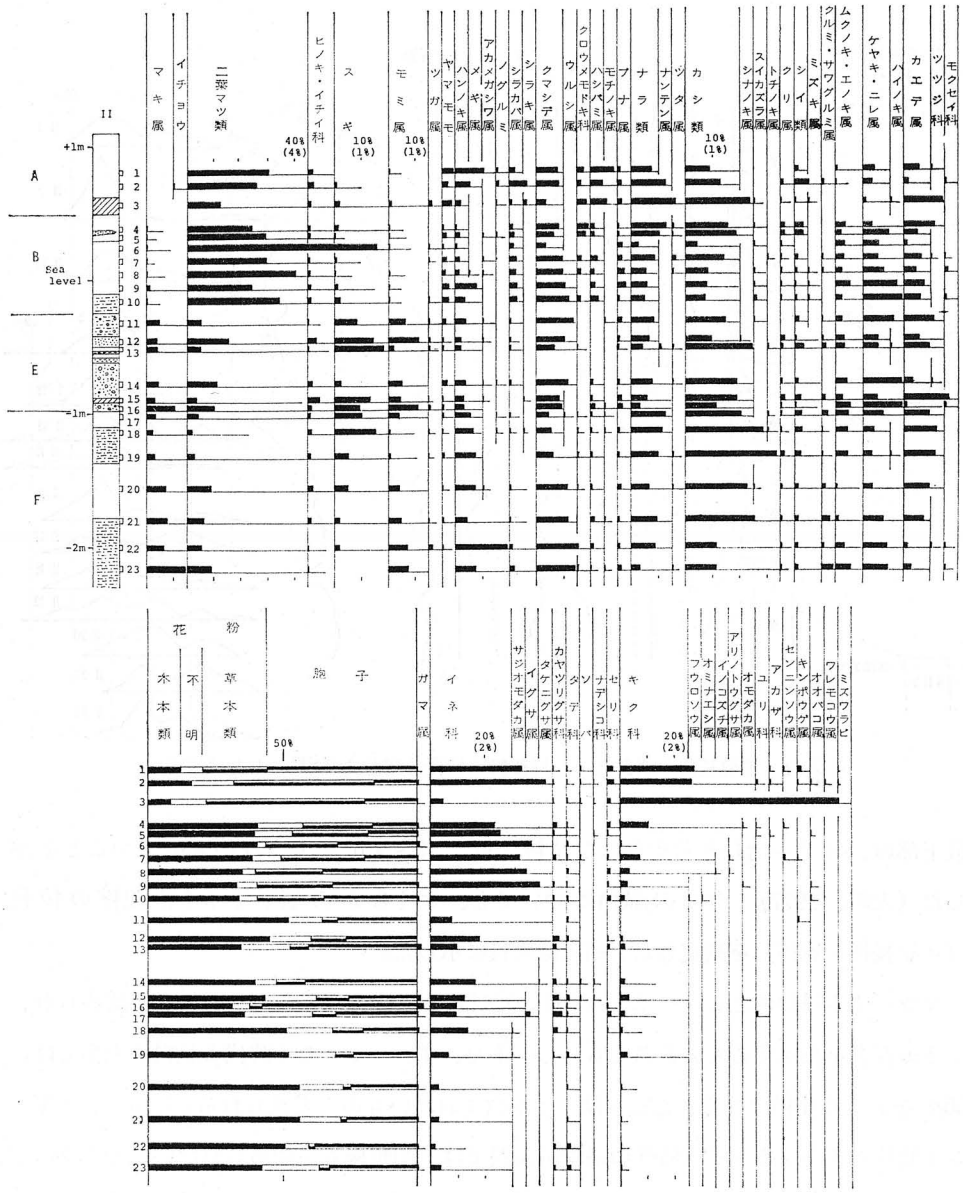


表10　第Ⅱ調査区西壁の花粉ダイヤグラム

この時代は、マツ、イネ科、ナラ、カシで特徴づけられる。またこの時代の後半では、キク科花粉（ヨモギ属を主体とする）が急増する。

ロ）イネ科花粉の粒径分布

稲作の起源との関係でイネ（*Oryza*）を識別することは重要である。しかし、イネ科花粉は、構造が単純なため、属、種の同定は一般に困難であり、イネ花粉を粒径のみで、他から区別することはほとんど不可能である（中村、1974）。筆者は、宍道湖底ボーリングコア（ＳＢＩ）の花粉分析において、イネ科花粉の粒径分布を調べ、沖積層（中海層）

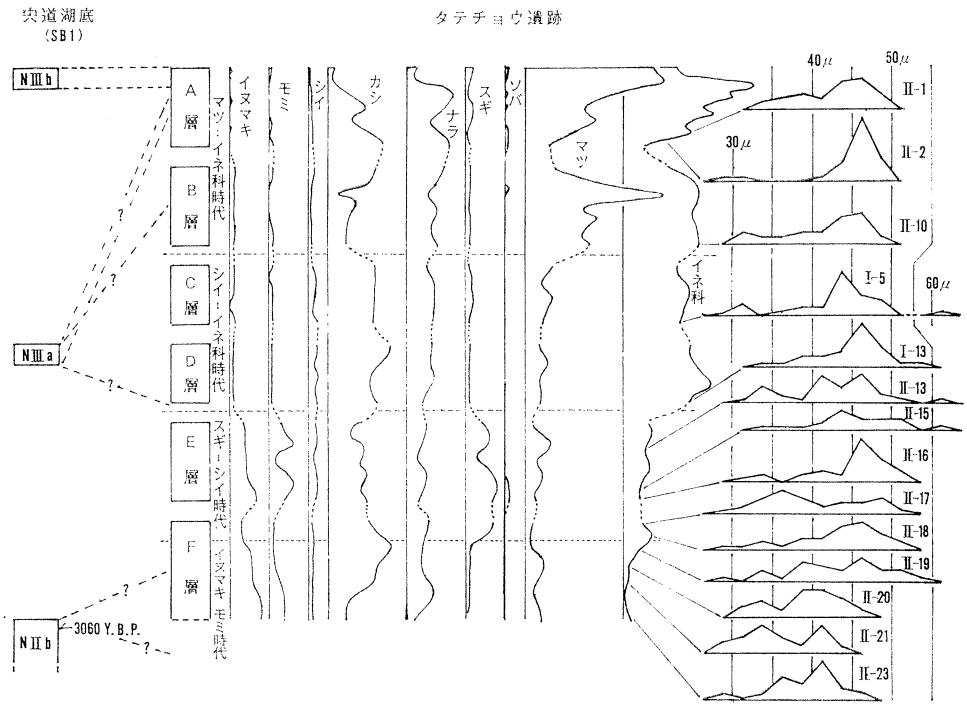


表11　主要花粉の消長とイネ科花粉の粒径分布およびSB—1との対応

最上部の、イネを含むと考えられる試料では、45〜50μに1つの極大をもつことを示した（大西、1977）。今回の試料についても、いくらかの層準でイネ科花粉の粒径（$=\sqrt{長径\times短径}$）を測定した。結果は表11に示した。

マツ—イネ科時代とシイ—イネ科時代の試料では45μ前後の明瞭な極大が認められ、イネの存在を指示するものと考えられる。また、イヌマキ—モミ時代の試料の大半では、50μをこえる花粉はなく、ここではイネが含まれないものと考えられる。しかし、スギ—シイ時代とイヌマキ—モミ時代の最新の試料では、明瞭極大が認められないこともあるが、45μ以上の花粉も多く、イネの花粉が存在する可能性が強い。

4　考　　察

イヌマキ—モミ時代においては、カシ、ナラ、イヌマキ、モミのほかに、クマシデ属、ケヤキ・ニレ属、ムクノキ・エノキ属も伴われ、宍道湖ボーリングSB—1のNIIb花粉帯（大西、1977）の時代に対応する。SB—1において、NIIb帯とNIIIa帯の境は、ほぼ3000年前とされている。しかしSB—1では、今回のスギ—シイ時代に対応する層準を欠いているので、NIIb帯とNIIIの帯の間に時間間隙が考えられる。このことから、イヌマキ—モミ時代とスギ—シイ時代の境は約3000年前、又はそれより新しいといえる。イ

ヌマキ—モミ時代の遺跡周辺は、まだ宍道湖の一部であり、ヤマトシジミが生育する湖底であった。湖のまわりには、カシを主体に、イヌマキ、モミ、ナラを伴う自然林（原生林）が湖岸までせまっていたものと考えられる。

イヌマキ—モミ時代の最新の試料（Ⅱ—19）ではイネ科花粉の粒径分布からみて、イネの存在の可能性がある。松江市でも、縄文晩期の稲作が推定されている（山本ほか、1978）ことや、E層出土の遺物に弥生前期前半の土器が多数みられ、弥生時代の初めには、すでに上流部がかなり開けていたと考えられることなどから、F層最上部の時代を縄文晩期末～弥生時代初頭と推定される。

スギ—シイ時代後半に当るE層からは多数の遺物が出土している。地層の時代は、その中に含まれている遺物のうち最も新しいものの時代よりも新しくなるから、E層の堆積時期は古墳時代以後である。また奈良時代の遺物はE層よりも上位にかぎられることから、E層は古墳時代後半に堆積したものと推定される。

スギ—シイ時代（ほぼ弥生～古墳時代）には、上流地域では水田が開かれ稲作が行われていたと思われる。しかし、イヌマキ、モミなどもまだ多く、背後の山林には人手の入ることも少く、自然状態を残していたと考えられる。

シイ—イネ科時代にはイネを主体とすると考えられるイネ科花粉が急増する。このことは、上流部の開発がさらに進んだことを示すものであろう。また、イヌマキ、モミなどが急減することから山林には、かなり人手が入り、丘陵地はクヌギ—コナラ林などの二次林に替ったものと推定される。

マツ—イネ科時代に入るとマツが急増するこの時代の山林は、自然植生がほとんど失われ、アカマツ林やクヌギ—コナラ林などの二次林になったものと考えられる。川津周辺の開田は江戸時代に行なわれたといわれている。A層が、水田下にほぼ一様に分布することから、A層の堆積は開田以後現在までに行なわれたと思われる。マツ—イネ科時代の始まりはそれ以前であるが、その時代を決める資料はない。

参考文献

中村　純　1967　「花粉分析」　232P　古今書院

1974　イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza Sativa*）を中心として、第四紀研究、**13**（4）187—193P

大西郁夫　1977　出雲海岸平野下第四紀堆積物の花粉分析、地質学雑誌、**83**（10）603—616P

山本　清（監修）1978　「さんいん古代史の周辺」　242P　山陰中央新報社

3 脊椎動物遺体

金　子　浩　昌*

1 はじめに

本遺跡において出土した脊椎動物遺体は、第13表に示すように、魚類1種と哺乳類4種、ヒトを含めて6種類のものが含まれていた。これらの標本のうちイノシシ、シカは最も量が多かったので、別に表に示し、その他の標本については出土地点など本文中に記した。

記述にあたって最も興味がもたれたのは、やはりその所属する時期についてであったが、残念ながら本遺跡が低地性泥炭遺跡であることからこれを明らかにすることができなかった。最も多量に伴出した弥生時代土器をもって、やはりこれらの骨の多くもこの時期に属するものと考えることもある程度できるのであろうが、それも推測の域を出ないことはもちろんである。ここでは従って、時期的な問題、層位的な変化についてはふれずに、標本の記述にのみ止めたのもそのためである。

2 脊椎動物遺体種名表

脊椎動物　Vertebrata

a　硬骨魚網　Osteichthyes

　スズキ　*Lateolabrax japonius*

b　哺乳網　Mammalia

　マイルカ科の一種　Delphinidae gen. et sp. indet.

　ウマ　*Equus caballus*

　イノシシ　*Sus scrofa*

　シカ　*Cervus nippon*

以下にその概要をのべる。

a 魚類

スズキ（第Ⅱ調査区　D13　No.56）

左主鰓蓋骨1

スズキの骨とされたのはこの主鰓蓋骨唯一個である。極めて保存良好の骨でありながら下端に大きな欠損がある。発掘時の破損であるらしい。最大長（関節窩～後端突起間）72.0㎜。

b 哺乳類

* 早稲田大学考古学研究室

マイルカ科の一種（第Ⅱ調査区　E13―4　№48　砂礫層）

胸椎骨

一個の骨を採集しているのみである。椎体と椎弓の一部を残す破損品である。

ウ　マ

右上顎臼歯（第Ⅱ調査区　E13―2　№21）

左橈骨（第Ⅱ調査区　E11　　砂礫層最下）

ウマの遺体は上記の2点が出土している。いずれも破損もしくは不完全な標本であるために計測値をもとに遺体の特徴を記し得ないのが残念である。ウマは古墳時代以降は問題ないとして、それ以前の時代の存在については確かな資料が少ない。今回のウマの出土は、そうしたなかにあって注目されるのであるが、ここでもなおその所属する時代が明らかにできないことは既述の通りである。

なお、橈骨の推定最大長（遠位端がはずれている）315.0㎜、近位巾73.5㎜で、 現存する日本の中型在来馬とほぼ同じ位の大きさの個体であったらしい。

イノシシとニホンジカ

本遺跡出土の獣骨の大部分は、イノシシとニホンジカであった。それらの骨角は第Ⅰ～第Ⅳ調査区のすべてにわたって出土したが、量的には第Ⅲ調査区が最も多く、第Ⅰ、第Ⅱの各調査区がこれに次ぐ量であったようである。

出土した骨の総量は別表に記した通りであるが、両種を比較してシカの方が目立ち、特に第1調査区でそうした傾向がみられた。

本遺跡でのイノシシとシカにみる保存の状況は比較的良好で、頭蓋などにその切断状況をよく示す標本などもみられた。ただ、出土する骨はその部位によってかなり片寄るように思われ、上腕、橈、大腿、脛骨などの主要四肢骨に比べて、顎骨、椎骨などが極めて少なかった。貝塚などでもこうした骨の部位による片寄りがないわけではないが、ここではそうした傾向がさらに強く、これは骨にしばしばみられた水磨の痕跡と無関係ではないと思うのである。いわゆる小骨片の類も少ない。多くの骨が流されているのであろうか。

頭蓋骨

イノシシでは頭蓋を縦に割ったものが2点出土している。第Ⅲ調査区E11の出土品はその好例で、前頭から頭頂の部分を正中線に沿って（後頭部をはずしているが）割っている。脳髄の摘出のためであるが最も効果的な方法であったと思われる。

シカでは、第Ⅱ調査区F11―3の出土例がある。これは後頭部と頭蓋底部を残しているもので、これは頭蓋を横に切断し、頭頂部を切り取っている。雄のものであり、角を角坐

骨から切断する際、頭頂部もいっしょにはずれたのであろう。同様な頭蓋片を他の貝塚などで見ることができる。

下顎骨

四肢骨の出土数に比べて極めて少なかったが、イノシシでは上下顎骨７点と歯が１点あり、そのうち４点がM_2、M_3の未萠出、１個のM_3は萠出不完全のものであった。

シカの下顎骨は僅かに１点があったのみである（歯牙はすべて脱落していた）。

四肢骨その他

既述したように残存していた骨の部位は限られていた。例えば、上腕骨の遠位端部は骨が割られた（骨髄食のために）場合でも原形がよく残されていた。おそらく、それは骨自身骨質が頑丈で重みがあり、埋没し易かったからではなかろうか。脛骨や大腿骨についても同様のことがいえると思われる。

なお、出土したイノシシとシカの主要骨総数は、シカの上腕骨右11（中～遠位端部を含めて）、左６、橈骨右４、左１（近位端部）、大腿骨４（中～遠位端部）、脛骨右１、左２（遠位端部）、踵骨右３、左１、距骨右２、左３であった。

イノシシは、肩甲骨右２、左２、上腕骨右２、左２（遠位端部）、大腿骨右３、左１（遠位端部）、脛骨右２、左３（不明１）（遠位端部）。

下顎骨および遊離歯牙で右３、左４個の個体があるが、それぞれの歯牙萠出と咬耗の状況をみるとすべて異個体のものと思われる。

ヒト

本遺跡からは、別に記したような数多くの獣骨にまじって人骨が出土している。それは下記のような骨である。

左上腕骨片（第Ⅰ調査区　D11―３　№187）

大腿骨片（出土地点不明　№7）

寛骨片（第Ⅲ調査区　D14　砂礫層）

右脛骨片（第Ⅰ調査区　D12―２）

これらの骨はすべて成人のものではあったが、破損の著しいもので、全体の⅓あるいは¼の部分しか残さないものであった。ただ、上腕骨や大腿骨にみる骨の破損部は明らかに新しい割れ口を示しており、埋存時にはほぼ完全な形であったのかもしれない。しかし、これらの骨の残存部分には水磨による磨滅、あるいは自然の破壊と考えられる部分もあり、この位置に埋葬遺体があったとは考え難いようである。この点については遺跡全体の上からさらに考えてみなければならないことであろう。

3 まとめ

以上がタテチョウ遺跡出土の骨のすべてである。

まず、魚骨については全く僅かな骨しか検出されていない。この遺跡の面していた現在の宍道湖は広い入江となっていたであろうから魚類は豊富であったと思うのである。この地域に知られる縄文時代の貝塚からはクロダイ、スズキの骨が多く、漁撈はさかんに行なわれていたものと思われる。タテチョウ遺跡と関連ある人々の生活においても同様であったろう。従って、本遺跡で乏しい魚骨の出土は、何か埋没時の特殊な条件を考えなくてはならないのではないかと思われる。

獣骨では、イノシシ、シカの多かったことを述べた。本遺跡におけるこうした骨の出土が、この地域の縄文から弥生時代に至る遺跡での出土例のなかでどのような特徴をもつかに興味が引かれるのである。この場合も、筆者がこれまでにみた貝塚、洞穴例では比較し得る程の資料が報告されていないようである。しかし、この点に関しては最近の調査によって得られた資料が現地に保管されており、筆者も1950年代に山本清先生、大谷従二氏の御厚意でその一部を調査したことがある。それらと、その他の新旧の資料をまとめることによって、この地域での遺跡の動物相を明らかにすることができると考えている。

タテチョウ遺跡の資料についても、こうした資料との比較の上で改めて考えたいと思っている。

表12 出土獣骨のグリッド別出土量表

pro：近位端，s：骨幹，dis：遠位端，ep：骨端部をそれぞれもつ標本（完存品はそれを記す）

第 1 調 査 区

D11—3	イノシシ 左上顎骨 (P4M12〈M3〉) 〈 〉は未萌出
D13—2 D13—4	イノシシ 左下顎骨 (M23) 左大腿骨 (ep欠) dis
D14—1	ニホンジカ 左前頭＋角座 落萌 細い角2片
D14—2	左距骨 左上腕骨 (ep欠) dis 鹿角片1 左肩甲肩片1 右大腿骨中間部 右落角 (角幹・枝切断)
D14—4	右下顎骨 (dm4)

E12—1	イノシシ 左側頭骨片 (裂いたもの)
E12—4	左橈骨 pro ニホンジカ 左脛骨 dis
E13—1 E13—3	ニホンジカ 右大腿骨 pro 右踵骨

F11—1	ニホンジカ 左角座骨(水磨著) 右中足骨 pro
F13—1	右上腕骨 dis
F13—3	右橈骨 pro
F14—4	左上腕骨 dis
F14—2	右大腿骨 dis (ep欠)
F14—3	左上腕骨 dis

G11	ニホンジカ 左橈骨 dis
G12—1	右角座骨＋角座 (切断)
G13—2	右踵骨 左角座骨＋角座 (切断) 中足骨片 右上腕骨 dis (ep欠)
G14	左中手骨pro イノシシ 左肩甲骨

第 2 調 査 区

D11	ニホンジカ ？肩甲骨片 左上腕骨 dis
D12	イノシシ 左大腿骨 dis (ep欠) 左上腕骨 dis
D13	右寛骨(上部嚙痕) 左橈骨 dis 左側～後頭部
D13	ニホンジカ 右寛骨 左上腕骨 dis 左上腕骨(ep欠) 縦にさけたもの

E11 砂礫層最下	ウ マ 左橈骨
E13—4	イノシシ 左前頭部 縦に割ったもの ニホンジカ 右中手骨 pro 左寛骨

F11—3	ニホンジカ 側～後頭部 頭頂部破壊
F11—4	イノシシ 左寛骨 左脛骨 dis ニホンジカ 右橈骨 前面にたたき痕あり
F12—3	左中手足 完存 イノシシ？
F12	左脛骨dis(ep欠)

第 3 調 査 区

D11	イノシシ 右尺骨 pro 嚙痕 左大腿骨 dis (op欠)
D12	左脛骨 dis
D13	左下顎骨片♂？
D13	ニホンジカ 右上腕骨片 dis
D13—2	右落角 他に角冠部1
D14	右中足骨 pro 他に破片3（うち2個は脛骨片） 右大腿骨 dis 骨端は切断される 左肋骨 イノシシ 右肩甲骨・左肩甲骨

E10	イノシシ 左下顎骨 (M3)
E11	ニホンジカ 左距骨 ？
E12	脛骨片
E13	イノシシ 右脛骨 dis
E14	ニホンジカ 右距骨

F10—1	ニホンジカ 左寛骨♂
F11	右寛骨 dis
F12	左上腕骨 dis イノシシ 右橈骨 pro

G11—3	イノシシ 左下顎骨 (P4M1 2〈3〉) 左脛骨 dis
G12	ニホンジカ 臼歯破片 左寛骨♀？

第 3 調 査 区　拡 張 区							
C13	イノシシ 右上腕骨 dis 左上腕骨 dis （若い個体） ニホンジカ 右中足骨 dis 右中足骨 （縦に裂けている） 中手 or 足骨 dis 骨端片 右踵骨 右距骨	H11 H11	イノシシ 右大腿骨 dis （ep 欠・噛痕） ニホンジカ 左脛骨 dis	そ の 他	イノシシ 左下顎骨 (M_3^{+-}) 右上腕骨 dis （若獣） 右第 3 中骨		ニホンジカ 右焼骨 pro 破片 1 左角座骨 （切断角？） 角冠部（縦に割られている） 角座部破片 右上腕骨（ep欠） 右脛骨
第 4 調 査 区							
F13・14 G11	ニホンジカ 左踵骨片 左橈骨 s 基節骨 1 左角座骨と角 （第一頭と幹） 右角座骨と角座 切断されている	そ の 他	イノシシ 下顎角部片		ニホンジカ 右大腿骨 （上下 ep 欠） 左肩甲骨		
そ の 他							
イノシシ 右下顎骨 $(dm_3^{++}\cdot{}_4\cdot M_1^{+}\langle 2\rangle)$ 右前頭～頭頂部 （縦に割ったもの） 軸椎 1		右大腿骨dis（ep欠） 右肩甲骨 左 M_3^{+-}		ニホンジカ 角冠部・左落角 左・右橈骨pro各 1 右上腕骨pro(ep欠) 2	左・右上腕骨dis各 1 右上腕骨dis （ep欠）2 左脛骨dis	左脛骨 S 左距骨 右下顎骨 （歯は脱落）	

Ⅶ 総　　括

以上、昭和52年度朝酌川の河川改修工事に伴い実施した松江市西川津町所在のタテチョウ遺跡の発掘調査について、その概要を記してきた。冒頭にも述べたように本遺跡は、県下では経験したことのない稀にみる大規模な低湿地性遺跡で、縄文時代から奈良・平安時代にわたる各時代の各種厖大な量の遺物が出土し、かつ十分な調査体制がとれない上、湧水と調査が劣悪な冬季にかかったこともあって、あらゆる面で難渋をきわめる調査であった。そして厖大な量の各種遺物について十分な整理・検討ができぬまま、いそぎ一連の整理作業を終え、印刷に付さなければならなかったこともあって、内容的に不備な点の目立つものとなってしまった。特に出土遺物については質量にみあう十分な整理と考古学的な観察を行わなければならぬところであるが、上述の諸事情からそれもあたわず、記述法なども統一性を欠きがちで万般にわたって不備な点の多いことを、重ねておことわりした上以下にこのたびの調査で得られた成果について要約的にとりまとめを行ない、結びにかえたい。

まず、昭和49年と50年に行われた松江市教育委員会による試掘調査の結果などによると、本遺跡は、朝酌川が大橋川沿いの河口沖積地へ流れ出るあたりの水田一帯、現河川敷と両岸周辺を中心に少なくとも遺物を包含する範囲は東西南北500 mの広域にわたるものと推定される。そしてこのたびの調査結果から知られるように現水田面下約1.0～1.8mの砂礫層中に各時代の各種遺物が混在した状態で含まれ、その様相は、遺跡の東北近傍山麓にあたる橋本部落などに相当規模の歴代遺跡群があり、それが朝酌川の氾濫等によりたびたび流失し、その中で各種の遺品がこのあたり一帯に集積し、堆積をくりかえしていったことを思わしめる。この場合、特に遺物の密度が高かった第1、第Ⅲ調査区あたりは、第Ⅲ調査区の南半部に広がっていたイヌカヤを主体とする植物遺体のよどんだ堆積状態などによって示されるように周囲より低い河川沿いの凹地で、沼状地形をなしていたところであったことを推定させる。検出された各種厖大な量の遺物が近傍より流失し、堆積したものであることは大半が小さな破片の状態で出土し、かつ破面等に摩滅痕のみられるものが目立つこと、また200 mも離れた第Ⅰ調査区と第Ⅲ調査区出土の弥生式土器片が接合し同一個体であったことなどからもうかがえる。このあたりが沼状地形であったことは、植物遺体の中に淡水の池沼に生ずる水草や、河口や海岸に近い汽水性の池沼に沈水する水草などがみられることからもうかがえる。

ただし、第Ⅲ調査区の西側で検出されたしがらみ状の杭列は、遺物包含層の最上層にあ

たる層から打ち込まれており、遺構付近には奈良・平安時代の須恵器、土師器がややまとまって出土し、かつそれらには完形を保つものが多かった。長い間の沼状地形があったところが堆積作用により次第に安定し、奈良時代からは、第Ⅱ調査の東側で検出された朝酌川の旧河道沿いの地として何らかの形で人間の営みの場となっていたことを物語るもののようである。

次に出土遺物については、第Ⅰ、第Ⅲ調査区を中心にそれこそ足の踏み場もないほどの状態で縄文時代から奈良、平安時代にわたる各時代の各種遺物が検出され、くりかえし述べてきたところであるが、殊に弥生時代の遺物には陶塤などをはじめ全国的にも稀な注目すべき遺品が含まれ、また土器類も前期から中期の新資料が相当量得られたことは特記すべき成果の一つにあげられる。

ただし、既述したとおりこれらの遺物は各時代のものが混在した状態で集積し、堆積土層との層位的な関係は無秩序のものが大半であった。だが、それにしてもこのたび得られた出土遺物は、県下はもとより山陰でも他に比肩するものがない質量をほこり、それぞれに多大な資料的価値を有するものである。

以下、それらの諸点について縄文式土器から順次、要約的に成果の主なものを摘記してみたい。

まず縄文式土器は全部で370点出土しているが、調査区別では第Ⅱ調査区が最も多く、第Ⅰ区・Ⅲ区となっている。時期的には晩期のものが最も多く、全体の66%を占めている。ついで後期、前期、早期の順で出土しているが、中期に該当するものは見当らない。

これらに関する成果として、早期では従来菱根式と称されていた繊維土器とはやや趣を異にする繊維土器が確認され、またこの種の土器には刻目凸帯の伴うことが明らかになったことがあげられる。前期では、前期前半に位置付けられる、押し引き文・刺突文がまとまって出土し、また後期では初頭から終末にいたる全時期の土器がほぼ検出できた。晩期では後半期の粗製土器が3類に分類でき、これが時期的な新旧関係として把え得る可能性のあるとともに、これらの土器には弥生式土器の影響を受けたと考えられるようなものもあり、山陰での弥生式土器の出現をめぐる問題と関連して今後注目すべき資料となるものといえる。

弥生式土器はこのたび得られた遺物の中心をなすもので特に前期の資料が多量に出土したことが注目される。そして新知見として前期土器のなかに畿内地方に多い削り出し突帯や木ノ葉文を持つものが認められた。従来この手法の土器は県下ではほとんどみかけられなかったものである。前期をどのように細分していくか今後の検討課題であるが、かな

り早い時期から畿内方面とかかわりがあったことが認められる。

中期の土器としては、出雲市天神遺跡出土土器群に類似した中期中葉のものと考えられるものがかなり多数出土し、天神遺跡の資料とともに当該時期の土器様相をかなり明確に把握することができるようになった。

次に土師器については「く」の字状屈折単純口縁の甕形土器で口唇部が内側に張り出す形態と口唇部端に凹線のみられる一群の土器が注目される。今のところ県内には類例が少ないが隣県の鳥取県では出土例が多く知られ、鳥取県東部の鳥取市秋里遺跡では高坏や器台等と一括出土し、また西部の米子市青木遺跡では青木Ⅶ式とされる時期に同様のものが見うけられる。この類は畿内の布留式の影響をうけたものと考えられ、古墳時代前期末より中期頃に位置づけられるものである。このほか第Ⅰ調査区より出土した小型の壺は完形品が多く祭祀性の強い土器と考えられるものである。

同様に祭祀にかかわると見られる遺物として土馬が出土している。これは水霊祭祀と深い関りをもつ遺物とされているもので、Ⅲ区の東側、朝酌川の旧河道から出土し、意図的に前肢の一部が欠かれていることから、『出雲国風土記』にいう水草川に手向けたものとみられる。このことは周辺から手捏土器が発見されていることとも無関係ではないと見られる。

須恵器では歴史時代のものにいくつかの興味深い特徴が指摘できる。すなわち手法では切離しについて回転糸切りと静止糸切りの2手法、底部調整については全面ヘラ削り、周辺ヘラ削り、回転ナデの三つの手法がみられること、また器形の上でこれまで県内の他遺跡ではほとんど例をみなかった鉄鉢形や椀形などの器形の含まれていることなどがそれである。

このうち手法の多様性については仮に切離しや調整手法の相異が生産地の違いを意味するものとするが、従来知られている『出雲国風土記』の意宇郡の条に「大井浜、陶器造也」とある、出雲地方最大の松江市大井、大海崎町所在の朝酌郷古窯跡群出土の須恵器に対する検討いかんによっては、今後大井浜以外にも須恵器の供給地を求める必要が生じてこよう。

これに関連して、須恵器の生産地と消費地との関係についても今後検討すべき重要な問題となろう。

弥生式土器についで注目すべき遺物に木製品があげられる。県下では従来、低湿地性遺跡に関する調査例が皆無に近いことから、このたび得られた木製品は、各種のものを含み、土器などとの伴出関係が無秩序で明確な所属時期の知れぬのが惜しまれるものの資料的に

は山陰でも圧巻というべきものといえる。明確さを欠くが、時期的な問題として一つには特定の時代を上限とし、以後継続して使用されているものといま一つ他の類例から推して特定の時代より古くさかのぼり得る可能性の少ないものの二種がみられることから、いくつかの木製品について大まかな時代が知れたのも一つの成果といえる。漆器類の中に布着せ技法をもつ黒漆塗皿が認められるが、これは、一般日常的というより特別な使用目的をそなえた遺品というべきもので、出土須恵器の中に「驛」と墨書のある坏のみられることとも関連して、歴史時代に入ってからの本遺跡及び近辺の遺跡としての性格の一端をものがたるものとして、興味がもたれるところである。

なお、今後の課題として木製品については樹種未鑑定のものの検討や類例の増加をまって、明確な時期判定、具体的な用途の究明を行なう必要があろう。

つぎに骨角器では鹿角製釣針で、いわゆる「結合式」のものが検出されたが、これは山陰では初見のものである。

また、特殊遺物としてとりあげたもののうち、中空有孔の土製品2個は、ともに中国古代の陶塤の遺制をひく土笛と推定されるものとして貴重な資料である。全国的にきわめて類例の稀少なもので、下関市稜羅木郷台地遺跡の2例のあとを受け、京都府峰山町扇谷遺跡の1例、同途中ケ丘遺跡の1例に次ぐ発見例となるものである。

完形を保つ本遺跡の第1陶塤は、吹口の大きさと指孔の位置を除くと稜羅木郷台地遺跡の第1陶塤と類似するが、郷台地のものは薄い作りとなっている。タテチョウの第2陶塤は、郷台地の第1陶塤に一層近い器形をそなえている。ただし、郷台地など既出の4資料に比べるとタテチョウの2個は、いずれも吹口が広く後面の2孔が吹口に著しく接近していることなどから、土笛としては、機能的にもっとも形骸化が進んだものといえる。郷台地の第1陶塤が弥生前期前葉に比定されることからするとタテチョウの陶塤2個は共にそれ以降のものとされよう。

陶塤は中国古代では確かに楽器として使われているが、わが国では農耕生活を体験しはじめてまもない弥生時代のきびしい生活状況を思いうかべる時、これを楽器として吹奏を楽しむ生活はうかべがたい。銅鐸などについて説かれているように、陶塤は農耕祭祀とそれに伴う神聖な祭儀に用いられたものではなかろうか。

本遺跡では、そうした祭祀、儀礼にかかわる遺品として他に鉄剣型の磨製石剣、石戈の鋒部とみられる大型磨製石器の刃部、それに銅鐸につるす銅舌に酷似した、一端に小孔を有する棒状石製品が検出されている。これらの儀器は、そうとう広い地域における集落が共有し、共同して使用したと考えられ、タテチョウの弥生集落は、近隣の朝酌川沿いの川

津・持田平野を基盤とする農耕集落の盟主的な役割を果し、その頂点に立ってリーダーシップを握り農耕祭祀をはじめさまざまな儀式を主宰しこの地域一帯の安らかな繁栄を神々に祈ったものと憶測される。

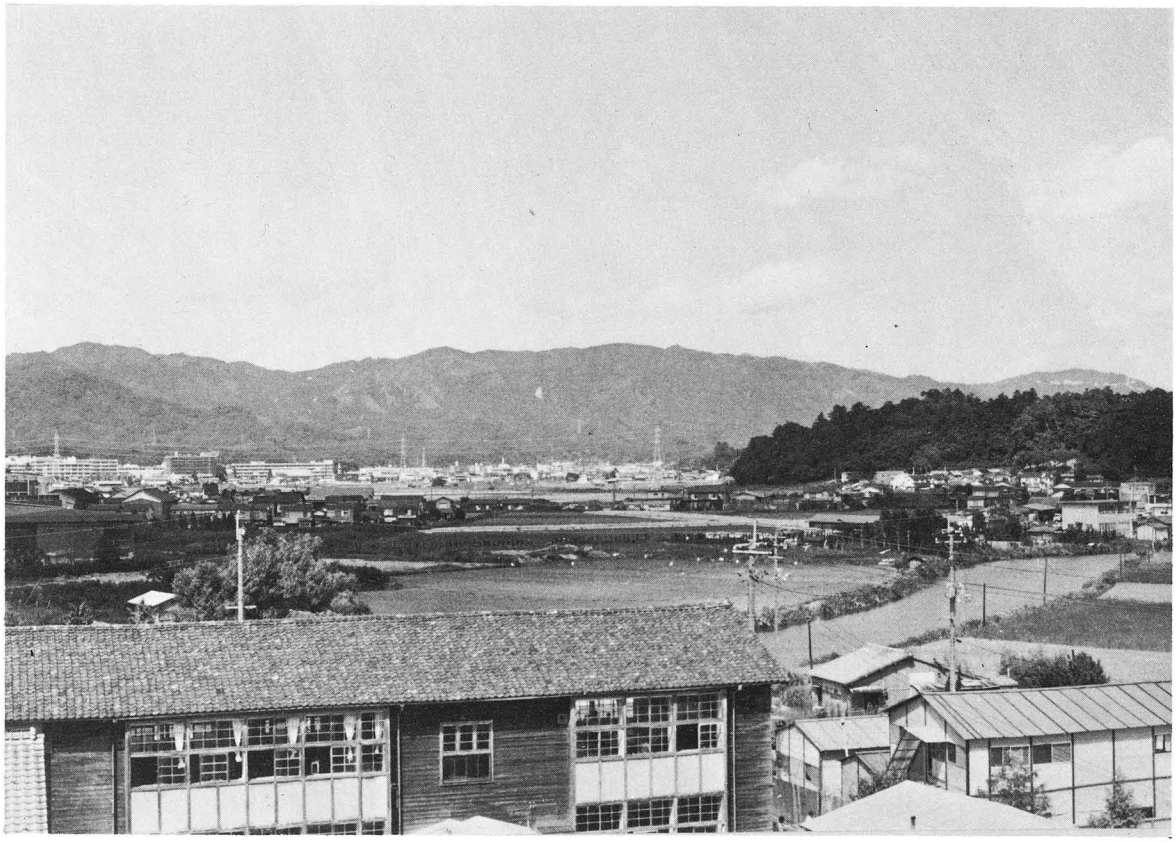
最後にこのたびの調査でタテチョウ遺跡は少なくとも東西南北400～500mに及ぶ県下では屈指の大低湿地性遺跡であることが判明した。このうち朝酌川の河川改修工事に関連する区域は計9000平方メートルであるが、このたびの工事に先立ち行なった調査面積は全体の約19%にあたるわずか1700平方メートルにすぎなかった。いわば九牛の一毛を検索をしたにとどまったというのが実状である。幸い関係者の協力により河川改修工事は未調査地区の調査が終了するまで工期を延長するなどの設計変更を行う協議が進められている。今次調査で痛感された調査に対する取組みと体制の立ち遅れなどを十分反省したうえ今後の調査に臨みたいと考えている次第である。

なお、出土遺物が厖大な量に達したこともあって管理が十分ゆきとどかず、不幸にして整理中に磨製石剣と鹿角製釣針を紛失してしまったことをおわりにお詫びする次第である。

（前島　己基）

図　　版

1. 遺跡遠望（北西から）



2. 遺跡遠望（南から）

1. 第 I 調査区発掘前の状況（南から）

2. 第 I 調査区の発掘